

# 山下遺跡Ⅱ 米山(2)遺跡

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う青森市宮田地区の遺跡発掘調査報告—

2000年3月

青森県教育委員会



## 序

青森平野を囲む丘陵部には、縄文時代から平安時代・中世までの遺跡が多数あります。このなかで、国史跡三内丸山遺跡や小牧野遺跡などのある青森市西部・南部地域は、東北縦貫自動車道建設や工業団地造成などの開発事業に伴い、大規模な調査がたびたび行われてきました。これに対して東部地域では、これまで比較的大きな開発事業が少なかったのですが、青森県新総合運動公園が東部地域の宮田地区に建設されることに伴い、平成7年度に当該地区の分布調査が、平成8年度に試掘調査が行われた結果、東部地域にも、縄文時代・平安時代などの遺跡が多数埋もれていることがわかりました。これらの遺跡の本格的な発掘調査は平成9年度から行われ、平成9年度調査の成果については、『山下・上野尻遺跡』(平成11年3月青森県埋蔵文化財調査報告第255集)で明らかにしましたところです。

今回、調査成果を報告する山下、米山(2)遺跡は、いずれも平成10年度に発掘調査したものですが、山下遺跡からは中世のものとみられるカマド状遺構が多数発見され、米山(2)遺跡からは縄文時代後期の集落跡が発見されました。いずれも、青森市東部地域では初めての発見になります。

この報告書で明らかにされた事実をもとに今後更に多くの事実が明らかにされ、この地域の歴史の解明が進むことを期待しております。

終わりに今回の発掘調査の実施、報告書の作成にあたって、ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

青森県教育委員会

教育長 佐藤 正昭

# 例　　言

1. 本報告書は、青森県新総合運動公園建設に伴い、平成10年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した青森市宮田地区所在の山下遺跡・米山(2)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆者は、依頼原稿については文頭に、その他は末尾に記した。ただし、石器・鉄製品については当センターの畠山昇が、土器については永鶴豊が執筆した。遺構に関するその他の記載は末尾の執筆者名による。
3. 出土した資料の自然科学的同定・分析等は下記の諸氏に依頼した。

石器の石質鑑定	松山 力 (八戸市文化財審議委員)
放射性炭素年代測定	木越 邦彦 (学習院大学教授)
4. 本報告書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図の「浅虫」・「青森東部」・「青森西部」・「油川」である。
5. 採図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。
6. 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準によった。
  - (1) 遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原: 1994)を用いた。
  - (2) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は石器類はcm、重量はgである。
  - (3) 図中で使用したスクリントーンの表示は次のとおりである。

7. 引用・参考文献については本文末に納めた。
8. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、当センターで保管している。
9. 発掘調査および本報告書作成にあたって、下記の諸氏からご協力・ご助言を得た(順不同、敬称略)  
秋元 信夫、井上 正孝、宇部則保、越田賢一郎、北林八洲晴、酒井 宗孝、桜田 隆、鈴鹿 良一、瀬川 激、仙庭 伸久、高木 真、高橋 潤、高野 晋司、高橋与右衛門、田中 寿明、長尾 正義、新岡 嶽、羽柴 直人、藤井 安正、古屋敷則夫、本堂 寿一、室野 秀文、八木 光則

# 目 次

## 序

### 例言

第1編 調査の概要	1
第1章 調査要項	2
第2章 調査の方法	5
第3章 調査の経過	6
第4章 遺跡の地理的環境	7
第1節 地形・地質	7
第2節 基本層序	8
第2編 山下遺跡	11
第1章 試掘調査の成果	13
第1節 検出遺構	13
第2節 出土遺物	13
第3節 まとめ	19
第2章 発掘調査の成果	20
第1節 検出遺構と出土遺物	20
1 繩文時代の遺構	20
(1) 土坑	20
(2) 土器埋設遺構	24
2 時期不明の遺構	25
(1) 土坑	25
(2) 井戸跡	27
(3) カマド状遺構	29
(4) 溝跡	40
(5) 小ピット群	40
第2節 遺構外出土遺物	42
1 繩文時代の遺物	42
(1) 土器	42
(2) 石器	55
(3) 石製品	56
2 繩文時代以外の遺物	56
第3章 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	60
第4章 まとめ	61
第3編 米山（2）遺跡	63
第1章 検出遺構と出土遺物	66
第1節 壴穴住居跡	66
第2節 土坑	81
第3節 溝状土坑	84
第2章 出土遺物	88
第1節 土器	88
第2節 石器	102
第3節 古銭	105

第3章 まとめ	111
第1節 検出遺構	111
第2節 各時期の概観	116
山下・米山(2)遺跡参考文献	120
土器・石器觀察表	122
写真図版	
抄録	

## 挿 図 目 次

### 第1編 調査の概要

図1 遺跡位置図	3
図2 調査対象区域図	4
図3 遺跡の基本層序	9
第2編 山下遺跡	
図4 山下遺跡試掘・発掘調査区域図	12
図5 試掘調査で検出した遺構	14
図6 試掘調査出土土器	16
図7 古錢	17
図8 山下遺跡C区遺構配置図	18
図9 山下遺跡D区遺構配置図	21
図10 山下遺跡D区遺構配置図	22
図11 縄文時代の上坑	23
図12 上器埋設遺構	24
図13 時期不明の上坑	26
図14 井戸跡	28
図15 第1号～第5号カマド状遺構	36
図16 第6号～第10号カマド状遺構	37
図17 第11号～第15号カマド状遺構	38
図18 第16号～第19号カマド状遺構	39
図19 清跡と小ビット群	41
図20 山下遺跡C区遺物出土状況	46
図21 山下遺跡C区出土土器1	47
図22 山下遺跡C区出土土器2	48
図23 山下遺跡C区出土土器3	49
図24 山下遺跡C区出土土器4	50
図25 山下遺跡C区出土土器5	51
図26 山下遺跡C区出土土器6	52
図27 山下遺跡C区出土土器7	53
図28 山下遺跡D区出土土器	54
図29 山下遺跡出土珠網焼	56
図30 山下遺跡C区出土土器1. 石製品	57
図31 山下遺跡C区出土土器2	58
図32 山下遺跡C区・D区出土土器	59
第3編 米山(2)遺跡	
図33 米山(2)遺跡A区遺構配置図	64
図34 米山(2)遺跡B区遺構配置図	65
図35 第1号住居跡1	68
図36 第1号住居跡2	69
図37 第2号住居跡	70
図38 第3号住居跡1 遺物の出土状況	73
図39 第3号住居跡2	74
図40 第3号住居跡3	75
図41 第3号住居跡4	76
図42 第4号住居跡1	77
図43 第4号住居跡2	78
図44 第5号住居跡1	79
図45 第5号住居跡2	80
図46 第1号～第3号上坑	85
図47 第4号～第12号土坑	86
図48 濃状土坑	87
図49 米山(2)遺跡A区遺構外土器1	91
図50 米山(2)遺跡A区遺構外土器2	92
図51 米山(2)遺跡B区遺構外土器1	93
図52 米山(2)遺跡B区遺構外土器2	94
図53 米山(2)遺跡B区遺構外土器3	95
図54 米山(2)遺跡B区遺構外土器4	96
図55 米山(2)遺跡B区遺構外土器5	97
図56 米山(2)遺跡B区遺構外土器6	98
図57 米山(2)遺跡B区遺構外土器7	99
図58 米山(2)遺跡B区遺構外土器8	100
図59 米山(2)遺跡B区遺構外土器9	101
図60 古錢	105
図61 米山(2)遺跡A区出土石器	106
図62 米山(2)遺跡B区出土石器1	107
図63 米山(2)遺跡B区出土石器2	108
図64 米山(2)遺跡B区出土石器3	109
図65 米山(2)遺跡B区出土石器4	110
図66 東北地方北部出入口施設を有する 堅穴住居跡①(縄文時代後期中心)	114
図67 東北地方北部出入口施設を有する 堅穴住居跡②(縄文時代後期中心)	115
図68 山下遺跡出土土器集成図	118
図69 米山(2)遺跡出土土器集成図	119

# 第1編 調査の概要



## 第1章 調査要項

### 1 調査目的

青森県新総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市宮田地区遺跡の試掘・発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 調査期間

平成10年4月23日から7月31日まで

### 3 遺跡名および所在地

(1) 山下遺跡 (青森県遺跡台帳番号 01-277)

青森市大字宮田字山下108・109外

(2) 米山(2)遺跡 (青森県遺跡台帳番号 01-276)

青森市大字宮田字米山130外

### 4 発掘調査面積

(1) 山下遺跡 調査対象面積 35,000m<sup>2</sup>

発掘調査面積 4,100m<sup>2</sup>

(2) 米山(2)遺跡 発掘調査面積 1,800m<sup>2</sup>

### 5 調査委託者

青森県土木部都市計画課

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

青森市教育委員会

### 9 調査体制

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長 (考古学)

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員 (地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫

調査第二課長 福田 友之

文化財保護主幹 畠山 昇

文化財保護主事 水嶋 豊

調査補助員 藤谷 麻美、長谷川 浩平、本荘 瑞穂、佐藤 淑

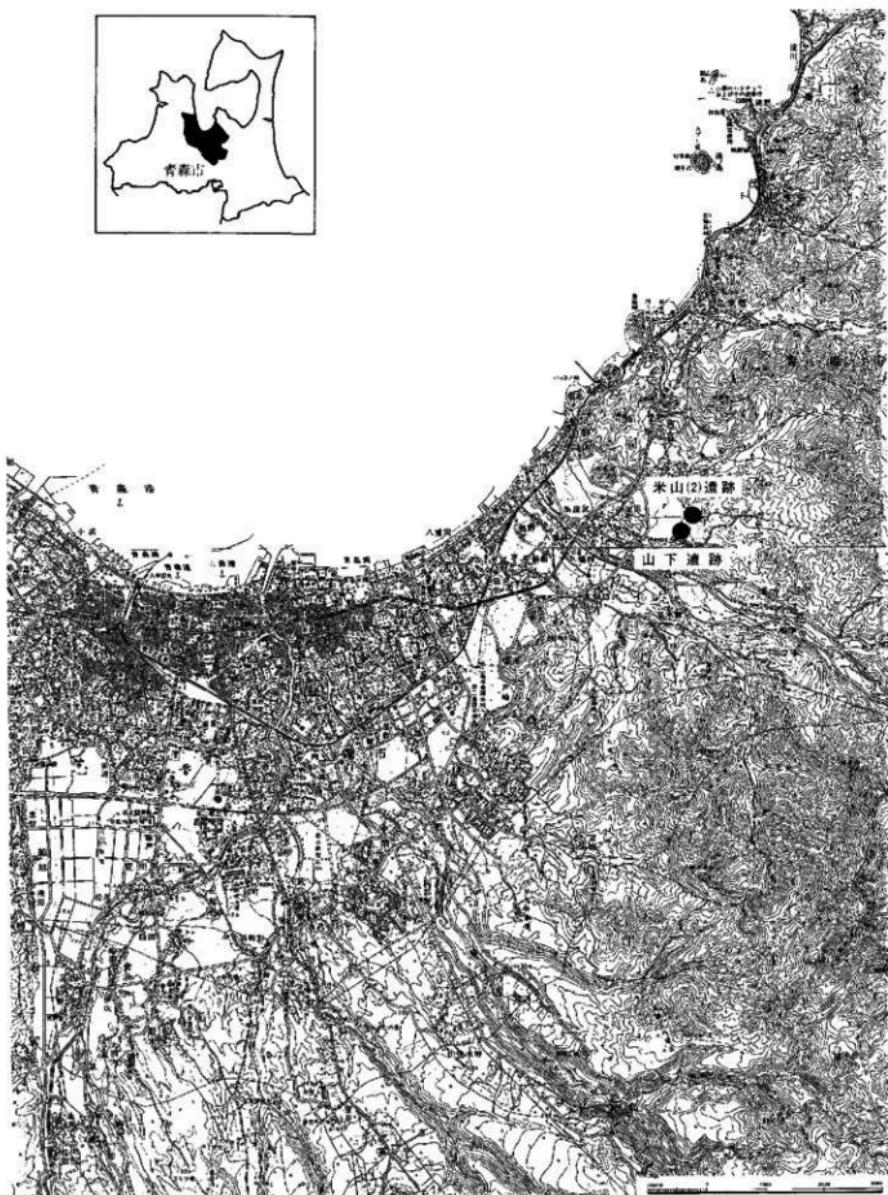


図1 遺跡位置図

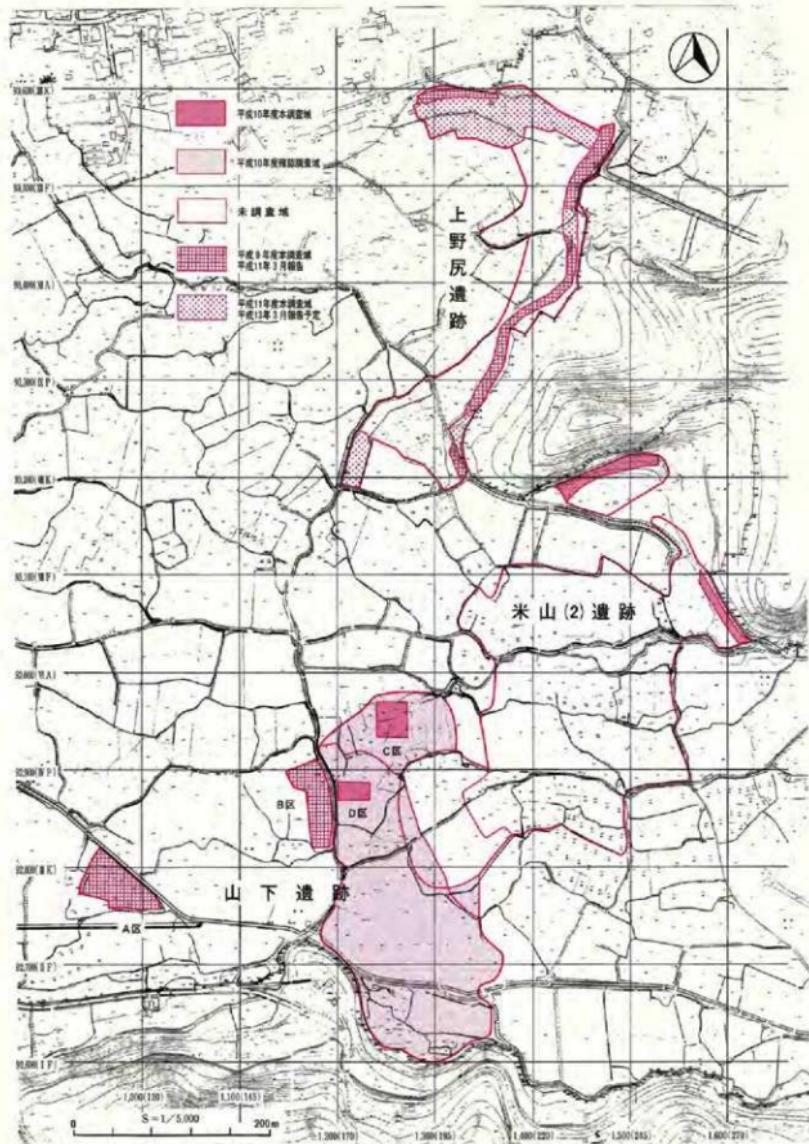


図2 調査対象区域図

## 第2章 調査の方法

### 1 発掘区グリッドの設定

グリッド番号の呼称には、新総合運動公園用地内の平成8・9年の試掘調査(遺物・遺構の内容、本調査面積を確認するための調査)・本調査のものを踏襲している。平成8年11月の新総合運動公園用地の試掘調査開始時に、公共座標軸を利用しグリッド設定を行い、座標X=92,680 Y=644を、ⅡA-30と呼称することに決定した。X軸の南北ラインをローマ数字とアルファベットA～Tの組み合わせで呼称し、Y軸の東西ラインを算用数字で呼称した。1グリッドを4m四方に決め、X軸正方向に4m北進するたびに、アルファベットがA～Tまで進み、その後、新たなローマ数字との組み合わせで呼称し、またY軸正方向に4m東進するたびに、算用数字が1ずつ増えていくこととなる。そのため、仮想原点ⅠA-0は、X=92,600 Y=520となる。「ローマ数字とアルファベット-算用数字」の組み合わせ(南西隅の交点)で4×4mの各グリッドを表した。

平成8年の新総合運動公園用地内の試掘調査、平成9年の山下遺跡の調査・上野尻遺跡の試掘調査と本調査・米山(2)遺跡の試掘調査、平成10年の山下遺跡の試掘調査と本調査・米山(2)遺跡の本調査、平成11年度の上野尻遺跡の本調査においても、同様のグリッド呼称法を用いており、互いの位置関係が座標で容易に確認できるように配慮した。

### 2 発掘調査の手順

今回の山下遺跡試掘調査では、基本的に東西2m×南北20mのトレーナーを設け、調査対象地域の南側から着手し、北上していく。この遺跡は、前年の調査において、表土中から遺物が出土することが判明していたため、試掘調査においては人力による表土除去を基本とした。ただし山下遺跡本調査、米山(2)遺跡本調査の際には、作業の効率を考慮し、表土の厚さを手掘りによって確認した後に重機による表土除去を行った。表土除去の後、遺物包含層と遺構の確認を行い、本調査では、上層より順次遺構の精査・遺物包含層の掘り下げを、地山と考えられる無遺物層まで行った。試掘調査では、遺構確認状態で終了し、精査は今後の本調査に委ねることとなる。遺物の取り上げは、基本層序に従い、上層よりローマ数字でⅠ層(表土・耕作土)、Ⅱ層……を用い、基本的にグリッド単位・層単位で種類別に一括して行った。しかし、狭い範囲でまとまりを持つなど、遺物群全体の時期限定が可能であるといった、良好な出土状況を示す遺物の中には、出土状況の実測や出土地点・標高の記録を行ったものもある。

### 3 遺構の調査

遺構は、調査時には青森県埋蔵文化財調査センターで定めた略号により呼称したが、本書では通常の呼称で表現し、原則として検出順に略号を付けた。遺構の形態・規模・確認面下の遺構の残存状況に応じ、基本的に土坑は2分割、住居跡は4分割、カマド状遺構は4～6分割で、セクションベルトを設定し覆土の除去を行った。遺構内覆土は算用数字で表記し、遺物の取り上げは遺構内覆土層ごとに行ったが、遺構埋没開始時期を示す底面や床面付近出土のものや人為的な埋設物などは、出土状況を実測したり、出土地点・レベルの記録を行った。出土層位不明のものは、遺構内覆土として取り

上げた。

#### 4 実測図の作成

遺構の実測は簡易造り方法で行った。縮尺は1/20を基本としたが、対象規模に応じて適宜対応した。

#### 5 写真撮影

35mmモノクロ(ISO400)とカラーリバーサル(ISO400)とカラーネガ(ISO100K)の3種類のフィルムを使用し、作業状況、土層堆積状態、遺構検出状況、セクションベルト、完掘状況、遺物出土状態等について撮影した。

### 第3章 調査経過

平成10年4月23日、調査機材等を現地に搬入し、環境整備後に山下遺跡の試掘調査に着手した。基本的に、調査対象域の南側から北側へと、トレンチ調査を進め、主に対象域の北半部において縄文時代および時期不明の遺構・遺物を確認した。

5月末、山下遺跡の遺構の分布と広がりが概ね把握できたため、試掘調査を一時中断し、6月1日、米山(2)遺跡の付け替え道路部分の本調査を開始した。主にA区西半とB区南東において縄文時代の堅穴住居跡5軒・土坑12基・溝状土坑2基を検出し、遺構精査と遺物包含層の掘り下げを行った。

7月上旬より、米山(2)遺跡の本調査と並行して、4・5月の試掘調査で、遺構が集中した山下遺跡の北側のC区・D区の本調査を行うこととした。両区において縄文時代の土器埋設遺構・土坑のほか、時期不明の土坑・カマド状遺構・井戸跡・溝跡・小ピット群を検出し、遺構精査と遺物包含層の掘り下げを行った。7月30日に、山下遺跡・米山(2)遺跡ともに本調査をほぼ終了し、翌31日に調査器材、出土遺物等を搬出し、予定どおり調査を終了した。

(永嶋 豊)

## 第4章 遺跡の地理的環境

### 第1節 地形・地質

遺跡の所在する宮田地区は、青森市中心街より東北東へおよそ8～9km、現在の青森湾の海岸部野内地区よりおよそ南東1.5～2kmに位置する。集落の北北東2kmには、久栗坂トンネルが浅虫温泉・平内町・野辺地町方面へと続き、さらに青森市一上北郡天間林村間のみちのく有料道路の開通後は上北・八戸地方と青森市を結ぶ玄関口ともなっている。

山下・米山(2)両遺跡は、宮田集落の東端部より東へおよそ0.4～1kmの範囲にあり、両遺跡の東方には東岳山塊(東岳標高684.0m)、北方には片越山山塊(片越山標高295m)が迫る。南側には、東岳山塊より西方に延びる山稜が迫り、北・東・南を急傾斜面で囲まれた洪積台地、沖積地上に位置している。両遺跡より南方向約20kmには八甲田山系大岳(標高1584m)が、西南西約50kmには岩木山(標高1625m)がそびえる。遺跡地内からは東岳山塊より延びる山稜によって、近くに位置する八甲田山系をのぞむことはできないが、米山(2)・上野尻両遺跡からは岩木山を確認することができる。

平成10年度の調査対象となった山下遺跡は、南の山稜裾部より北方に広がり、米山(2)遺跡は北の山稜裾部から南へと広がり、互いの北東側と南西側では接している。

山下・米山(2)・上野尻遺跡の他に、玉水(2)遺跡が位置する新総合運動公園用地は、青森湾の南岸に広がる東西幅約15km、南北幅約9kmの沖積平野である青森平野の東北端部に位置し、その後背地は野内川流域とその北方の小河川流域山地となっている。松山 力はこの青森平野東端部の沖積地を下位面・中位面・上位面に3分し、洪積台地を下位面・上位面に2分している。沖積地は、礫・砂・泥などの未固結堆積物が主体であり、洪積台地は礫・砂などで構成される土石流を主とする地層で、粘土質褐色風化火山灰層(いわゆるローム)が被覆し、地表面下には黒色土が発達している。

沖積下位面は、海拔10m以下の「野内低地帯」とこれに続く河川・沢沿いの低地帯、沖積上位面は、沖積中位面から洪積下位面との間に位置し、海拔15～30mとやや大きな勾配を有しており、北を貴船川、南を野内川で挟まれた小規模な複合扇状地性地形となっている。また洪積上位面は、山地の急斜面下に続く谷底の緩斜面を含めた部分となる。

遺跡付近の地形区分図(松山 1999, 図3)によれば、山下遺跡はその西側や南側が沖積中位面・上位面で、北側と東側は洪積下位面で構成されており、標高およそ20～25m、調査前までは水田として利用されていた。米山(2)遺跡は、僅かに沖積面も認められるが、大半が洪積下位面で構成されており、標高20～40m、水田・畑地・植林地として利用してきた。山下遺跡は比較的平坦部にあり、米山(2)遺跡は、山稜裾部から平坦部にかけての標高差を有する遺跡と考えられる。

なお、標高10m以下の低地帯は、縄文海進時に海面下にあったことが想定されており、両遺跡で、生活跡がみられる縄文時代後期の小海進時にも、若干の「海岸線の後退」(註1)がみられた可能性がある。(当節は『山下・上野尻遺跡』所収「地形・地質の概要と土層序」(松山 力1999)に依拠するところが大きい)

(註1)松本秀明は、海岸線の内陸側への移動と沖合側への移動は、単に海面の上昇・低下に対応するだけでは、ないことを示している(松本1999)。海岸線の内陸側への移動を「海岸線の後退」、沖合側への移動を「海岸線の前進」と表現し、一般に海面上昇は「海岸線の後退」を、海面低下は「海岸線の前進」をもたらすが、縄文時代早期中頃に海面上昇にもかかわらず、「海辺線の前進」の事例が仙台湾で多数見出されることをあげている。そしてこうした現象を、河川の堆積作用速度と海面上昇速度のバランスによって説明しており、海面上昇中であっても、それを上回る河川による多量の土砂供給があれば「海岸線は前進」現象は生じ得るし、河川の土砂供給が多量であれば、海面低下なしに「海岸線の前進」現象によって沖

稍低地が形成されるとしている。松本の「海岸線の後退」現象と「海岸線の前進」現象の表現は、我々の使用的する「海退」と「海進」の言葉とは、対応しないことに注意すべきであり、我々がイメージする、海岸線が戻ったり戻ったたりするという、一連的な現象ではないことを示している。

松山 力 1999 「地形・地質の観察と土層作」『山下遺跡・上野尻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第258集

松本 秀明 1999 「縄文時代の環境－海岸線と地形の変化－」『仙台市史 通史編Ⅰ 原始』

## 第2節 基本層序

### 1 山下遺跡

調査対象域の大部分を占める沖積中位面は、南の山稜と北の洪積下位面の間に位置する浅い谷状地形である。今回、検出された遺構は、北側と北東側に集中し、谷状地形より高い地形、洪積下位面とされた部分に認められる。沖積面では、遺物は断片的に出土するものの、遺構は確認されていない。試掘調査で、広い範囲を掘ったため、全域で各層の対応関係をすべて明らかにできたわけではないが、各地点の層位の相対的な新旧関係が把握された。表土下に若干の縄文時代の遺物を含む黒褐色のⅡ層があり、その下位には限定される分布であるがⅢ層よりプライマリーな状態を示す、縄文時代後期前葉の遺物を包含する黒褐色のⅢ層がみられ、それ以下では、無遺物の、土石流起源と考えられる混疊土層・砂層や粘土質のいわゆるローム層がみられる。

山下遺跡基本層序

層名	色相	土色	土性	しまり	粘性	混入物・その他
I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	中	中	耕作土。下部には、所々に鉄分・マンガンがベルト状に堆積する部分がある。
II	7.5YR3/1	黒褐色	シルト	中	中	上層より、鉄分の混じる部分がある。縄文土器はまばらに出土する。
III	10YH3/1	黒褐色	シルト	弱	中	φ5mm以下の黄褐色粒子を含む。C区に顕著であり、縄文時代後期前葉の遺物を多く包含する。97山下B区のⅣa・Ⅳb層に対応するものか?
IV	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	弱	乾燥すると表面が白っぽくなる。無遺物層。97山下A地区Ⅳb層に対応か?
V	10YR3/2	黒褐色	泥炭シルト	弱	弱	φ2~10cm程の礫が非常に多く含まれる。土石流起源の羅層である。
VI a	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質砂	弱	弱	IV-H-195で、カミド状遺構の確認面となった層である。
VI b	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	強	中	IV-H-193~IV-H-195などに分厚する。
VII a	10YH4/1	褐色	粘土質シルト	中	中	調査区南半部で見られ、青味が強い。
VII b	7.5G4/1	暗緑灰色	シルト質砂	弱	弱	調査区南半部で見られる。

所々に、土石流起源と考えられる直径10~20cm程の砂疊層が確認された。1997年調査の山下遺跡A区・B区共に、松山 力によって最下層に砂疊層が確認されている。本年の調査では旧河川跡と考えられる部分には、均一な黒色土が堆積しており、遺物出土を期待したが、無遺物であった。II P-188グリッド付近では、旧河川を検出し、その底面より若干上で、厚さ5cm程の黄褐色砂質シルト(2.5Y R5/3)を確認したが、白頭山-苦小牧火山灰(B-T m)の可能性も考えられる。

### 2 米山(2)遺跡

縄文時代後期の遺構が多く検出されたA区の基本層序について述べる。表土であるI層は、耕作・植林による影響が大きく、II層からは主に縄文時代後期の遺物が出土した。無遺物層であるIV層以下を検出した段階で、遺構確認が可能となった。当遺跡は洪積下位面によって構成され、青森西部から

浪岡付近に分布する「女鹿沢火山灰」、上北の「千曳浮石層」に比定される土層が確認されたことが、当地区土層の特徴となる。(永嶋 盛)

## 米山(2)遺跡 A区基本層序

層名	色相	土色	土性	しまり	新性	混入物・その他
I	10YR2/2	黒褐色	シルト	弱	弱	表土。草や杉の根の影響が大きい。
II	10YR2/1	黒色	シルト	弱	中	約2mm程度のにぶい赤褐色粒子を多く、約10mm程度の炭化物を含む。当地区での遺物包含層であり、A区西半の穴穴住居跡周辺から縄文時代後期中葉から後葉の出土。
III	10YR2/1	黒色	シルト	弱	中	II層とV層の漸移層。明褐色(7.5YR5/6)のローム層が混じる。
IV	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	中	中	約5mmの黄褐色粒子や黒色火山灰が混入している。隣接する上野が遺跡でも確認され、岩山力によって、岩森山西側から浪岡付近に分布する「女鹿沢火山灰」や上北の「千曳浮石層」に比定されている。(1号・2号・3号住居跡の床面や壁面の一跡(南北部)を構成する)。
V	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	中	強	いわゆるローム層。A区西端部では厚さ30cm以上。
VI	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	弱	約5mm程度の緑褐色の小礫を非常に多く含む。(1号・2号・3号住居跡の床面・壁面の一跡(主に北半部)を構成する)。

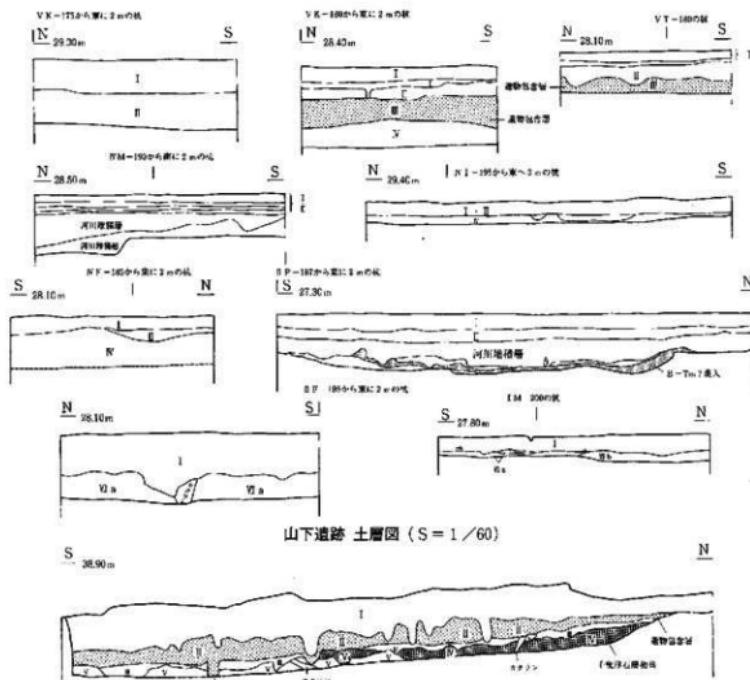
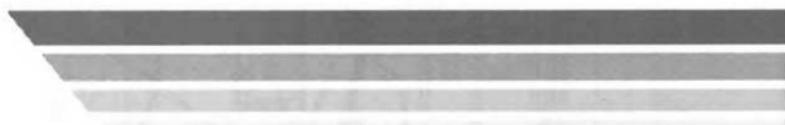


図3 遺跡の基本層序



## 第2編 山下遺跡



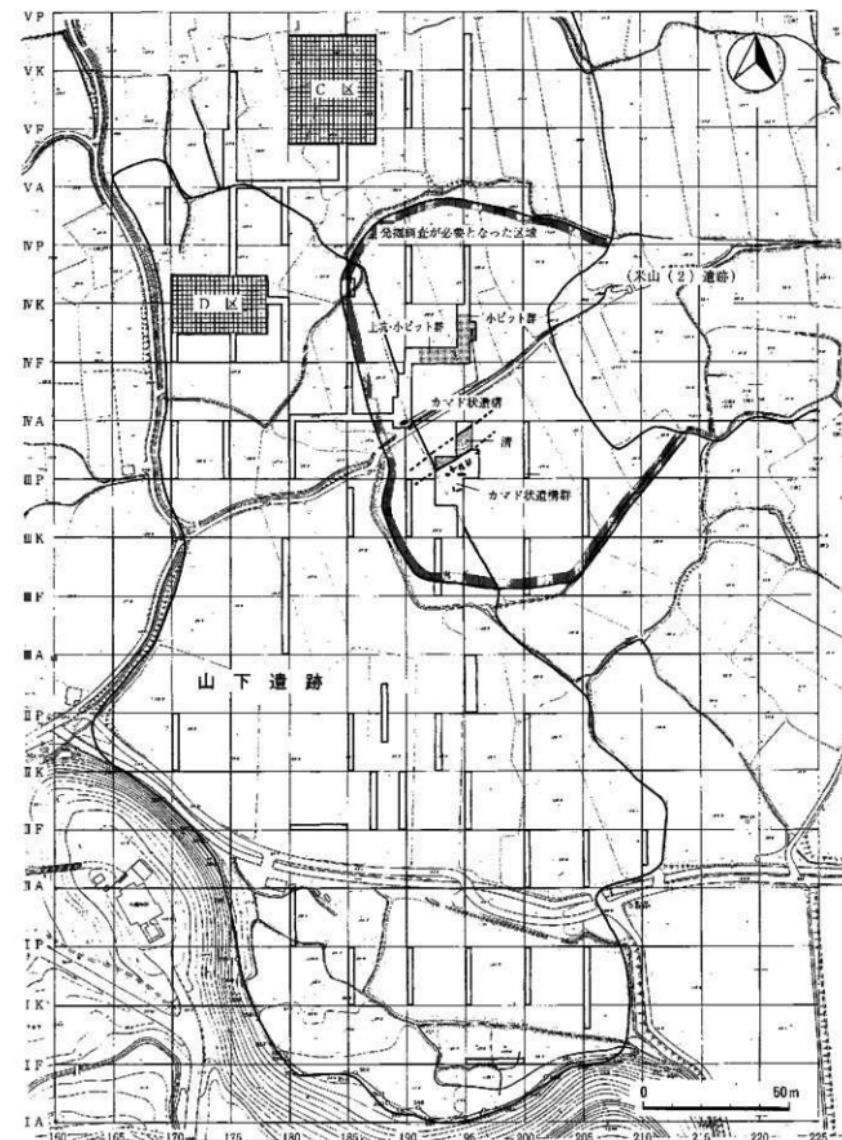


図4 山下遺跡試掘・発掘調査区域図

## 第1章 試掘調査の成果

本遺跡は、青森市東部に広がる水田地帯に位置している。現在は開田によって平坦な水田面となっているが、当時は貴船川に注ぐ小河川が宮田地区一帯を巡り、その間に小規模な扇状地が広がっていた地形と見られている。本遺跡はこの扇状地の標高20~25mの沖積台地上に立地している。平成9年度には本遺跡の西側区域が調査の対象になっており、試掘調査と発掘調査が行われている（A区、B区）。今回の調査は、平成9年度調査区域の東側に広がる水田地帯が対象であり、調査の進展によって、一部本調査を行った区域もある。

### 第1節 検出遺構

試掘調査によって確認した遺構は、以下の通りである（図5）。

#### 1 カマド状遺構

15基確認した。北東部に集中している。IV H・IV I-195グリッドで1基、IV A-189グリッドで1基、III O~III R-193~196グリッドで11基の遺構を確認した。後者の11基を確認した場所では、5基の遺構がほぼ同じ方向を向いて列状に並んでおり、周辺にも多数存在していることがうかがわれた。また、平面プランで確認できなかったが、IV H~IV K-175ラインの壁際にカマド状遺構に伴う焼土を2基確認した。

#### 2 土 坑

2基確認した。北東部のIV F-194グリッドで1基、北西部のIV J-175グリッドで1基である。前者は1辺が80cm前後の方形を呈する。後者は、調査の結果第3号井戸跡となった。

#### 3 小ピット群

三ヵ所確認した。IV F-192~194グリッドとIV H~IV K-195グリッド及びIV J-175グリッド付近の試掘トレンチで確認した。

#### 4 溝 跡

III P~III T-193~195グリッドで検出した。幅6~7m前後、深さ1m以上のもので、北東から南西方向に延びている。  
(畠山 昇)

### 第2節 出土遺物

試掘調査では、南北最大幅約360m、東西最大幅約180m中の調査対象面積35,000m<sup>2</sup>中に、2×20mを基本としたトレンチを計2,400m<sup>2</sup>分設定し、遺構・遺物の分布の確認作業を行った。その結果、対象範囲の南半部に分布密度が薄く、北半部で部分的に縄文時代後期を中心に、時期不明の遺構・遺物の集中域を確認した。そのうち、VE-180杭を基準に東へ28m・北へ36mの1,008m<sup>2</sup>（山下遺跡C区）、IV H-170杭を基準にして東へ32m・北へ24mの768m<sup>2</sup>（山下遺跡D区）を発掘調査の対象とした。ここでは、発掘調査対象区外の試掘調査で出土した縄文土器、石器、近世貨幣等、細片を除き図示できたものを報告する。なお中世の須恵器片がIV F-175グリッド、第1層より3点出土しているが、発掘調査D区においても同様の須恵器片が遺構外より確認されており、「第2章 第2節2 珠洲焼」の項においてまとめて掲載している。また十腰内I式期の説明については、文様モチーフをうまく言葉で説明

第2標 山下遺跡

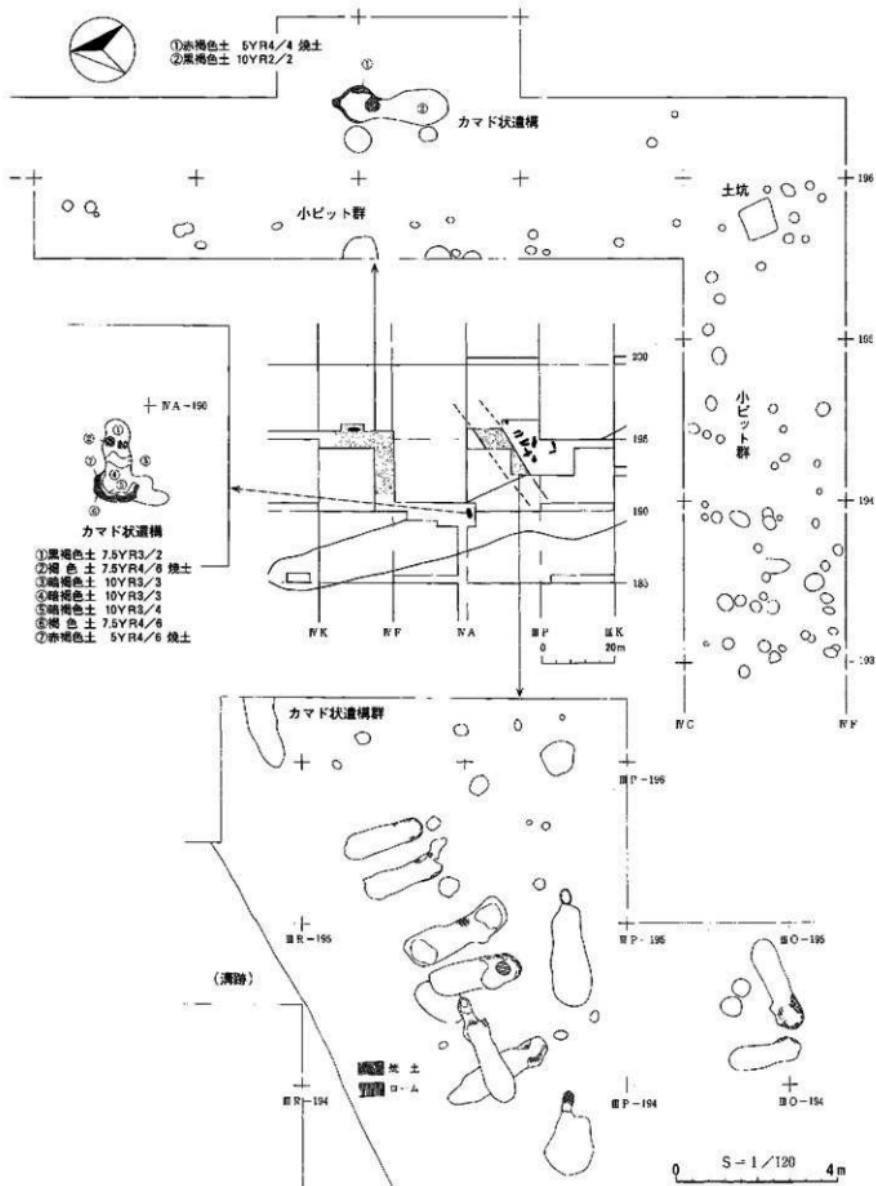


図5 試掘調査で検出した遺構

できないものが多く見られたため、主に一筆で完結する楕円形・円形・方形・三角形を呈する文様については、すべて『楕円文』という言葉を用いた。該期の土器は、全体が異なる形態の『楕円文』で構成されるものも少なくないが、非常に解りにくい説明になってしまった。

## 1 土 器

縄文時代前期・中期・後期・弥生時代前期の土器が出土している。中でも、VA～E-174グリッドⅢ層で出土した縄文時代後期前葉の土器群が中心となる。観察表において、各属性については記載しているが、ここでは簡単に述べる。

### (1) 縄文時代の底部片

遺物出土の、ほとんど見られなかった試掘調査南半部において、時期不明の縄文土器底部3点が出土している。1と2は器表面が強く流水の影響と考えられる摩滅が顕著である。

### (2) 縄文時代前期・中期の土器

4は円筒下層d2式、6は円筒上層a式と考えられる。5も含めて3点出土した円筒土器はすべて口縁部に縄文原体の側面圧痕が見られる。7は胎土に石英粒を非常に多く含み、RL縄文施文後に平行沈線を施している。

### (3) 縄文時代後期前葉の土器群

VA～E-174グリッドを中心に縄文時代後期前葉の遺物が出土した。該期の遺物は、発掘調査C区において数多く出土している。

十腰内I式の古い段階と考えられるもので、平坦口縁のものと大きく山形を呈する波状口縁の深鉢と橋状把手が付された壺形土器が出土している。8～13は平坦口縁の深鉢で、8～11は横位に連続する楕円文又は長方形文が施されている。8・9は器厚6～7mmと厚く沈線幅も4mm程度と太い。対して10・11は器厚4mm程度の薄い作りで、沈線幅も2mm程度の細くシャープなものである。11は粘土縫幅が1.5cm程度である。12は文様中にLR縄文が施されるが、文様構成は不明である。13は横歯状工具によつて横方向の条線が施される。12・13共に文様からは帰属時期は不明であったが、口頭部の傾きや沈線の様子から十腰内I式期の深鉢と考えた。14～18は大きな波状口縁の深鉢であり、18以外は楕円文が施される。16は内面が肥厚する複合口縁となっており、沈線は粗雑である。19～24は同一個体と考えられる壺の破片である。19と20は口縁部破片で、口唇部に断続沈線とその途切れた部分に径4mm深さ5mm程の刺突が2個一単位で施されている。22と24は横型の橋状把手と考えられ、21と23の上部に付されるものである。25は深鉢の体部であるが、波状文風のモチーフ中にRL縄文が充填されている。

### (4) 時期不明の土器

26は無文の深鉢である。27は器厚3～4mmの薄手の土器で、口縁部直下に凹線状の沈線、口頭部が無文、頭部に2条の平行沈線、体部にRLの縦走縄文が施される。器形・RL縦走縄文等から弥生時代前期の二枚橋式期の台付鉢の可能性が考えられるが、口縁部直下の凹線状沈線の類例を見ない。

(永嶋 豊)

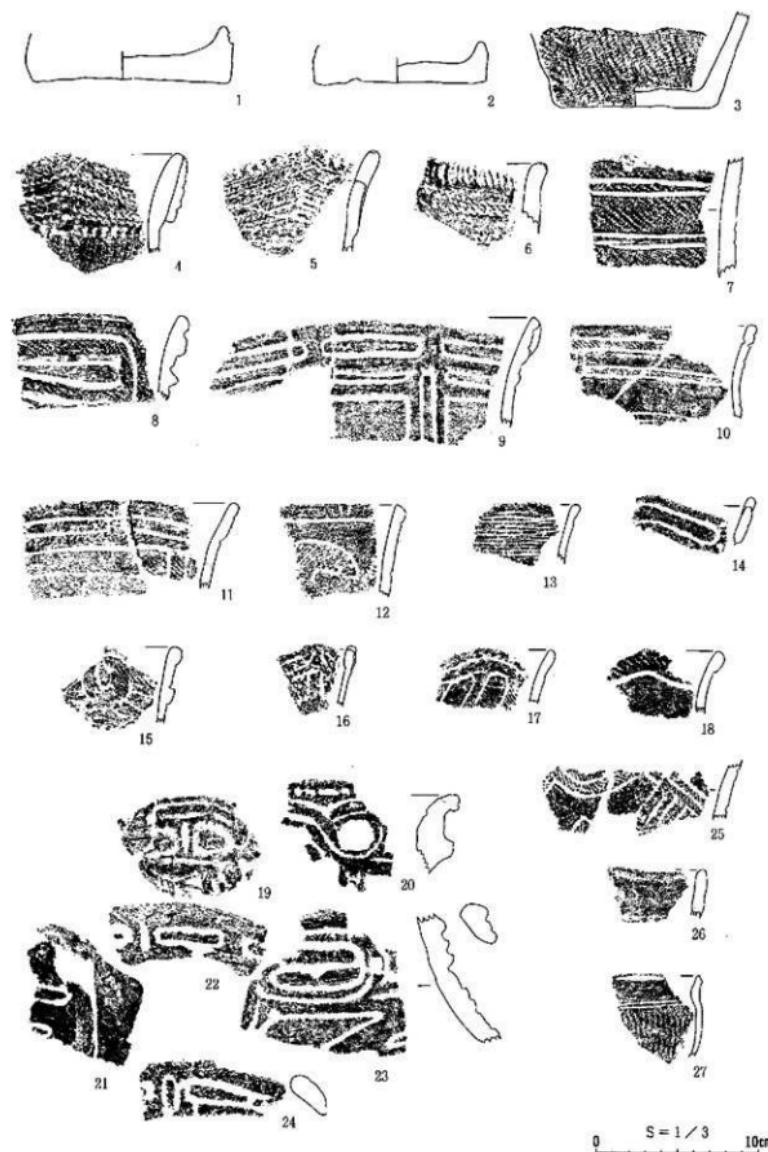


図 6 試掘調査出土土器

## 2 石器(図8)

試掘調査で出土した石器は、石鎌1点、石匙1点、石箋1点、スクレイパー7点、Rフレイク10点、Uフレイク7点、フレイク60点、敲磨器3点、石皿・台石2点である。

石鎌(1) 凹基無茎鎌が1点である。正面の中央付近の剥離が不十分であるため、やや厚くなっている。尖頭部先端が欠けている。

石匙(5) 緩型で、バルブ付近を両面から調整を加えてつまみ部を作出している。体部は片面加工で、急斜度の浅い調整を加えている。

石箋(2) 両面加工であるが、全体の調整は粗雑である。その中でも、基部付近及び裏面左側縁は、比較的丁寧な押圧剥離が施されている。

スクレイパー(3・4・6・7) 6は両面に粗く大きな剥離が施されていて、全体に粗雑である。本類に含めたが、器体整形も不十分であることから、加工途中のものである可能性が高い。

4は、両極打法によって得られた半割剥片を素材としたものと思われ、一部に調整を施した小型のものである。3も小形の石器で、周縁の一部に急斜度の浅い調整が施されている。

敲磨器(8・9) 敲石1点、凹石2点がある。8は扁平な梢円形の礫の両面に凹孔が見られるもので、片方の面には凹孔が3個見られる。平坦面には磨痕(線条痕)が見られるが、とくにR面に顕著である。9は棒状礫を利用したもので、一端に敲打痕が見られる。器面の全体に整形痕が見られる。

石皿・台石(10・11) 10は石皿、11は台石であるが、特に加工した痕跡は見られない。

(島山界)

表1 山下遺跡試掘調査区出土石器一覧表

品種	石鎌	石匙	石箋	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	敲磨器	石皿・台石	計
出土数	1	1	1	7	10	7	60	3	2	93点

## 3 古銭

寛永通宝が2点出土している。1点はIII T-195グリッド、もう1点はIV O-175グリッドからの出土である。銭貨の大きさや、「寛永通宝」の字体にも若干の違いが認められる。

(島山界)

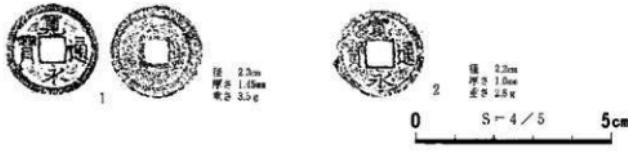


図7 古銭

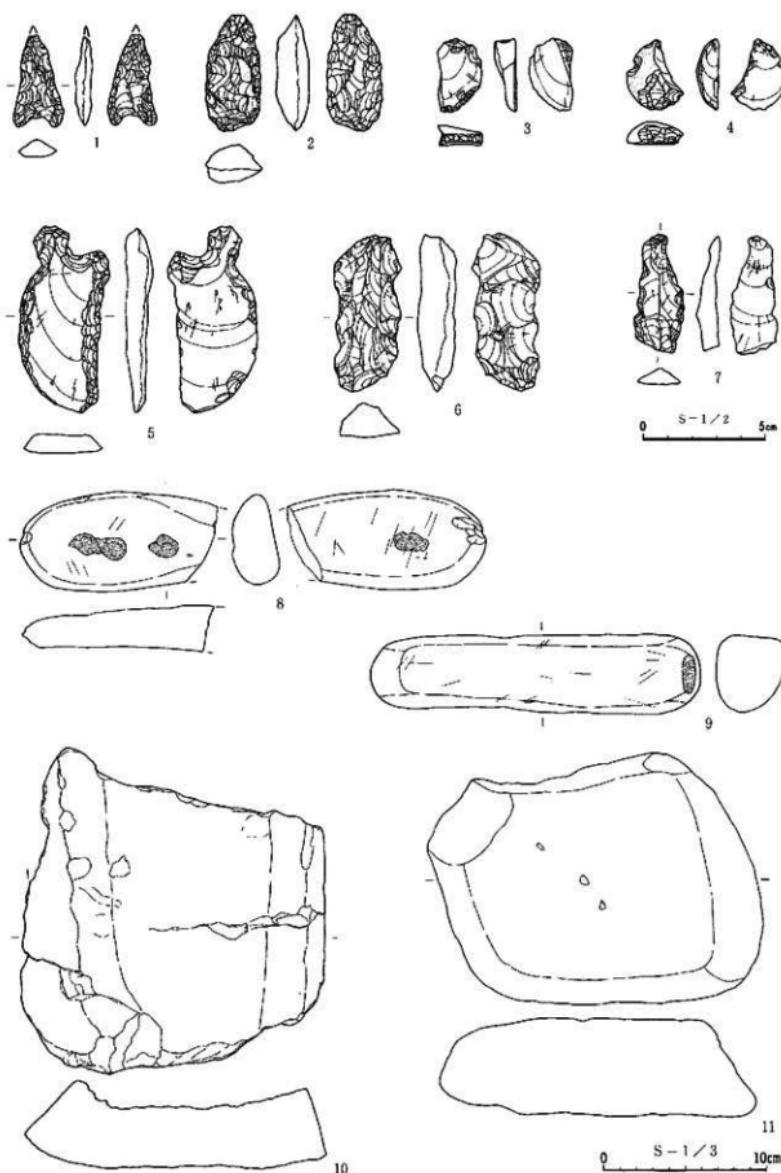


図8 山下遺跡試掘調査区出土石器

### 第3節 まとめ

発見された遺構・遺物の多くは、調査対象区域の北部及び北東部に見られたが、これ以外の区域では少量の遺物が出土したものの、遺構は検出されなかった。試掘調査の結果、本調査の必要があると考えられた区域は、以下の三カ所である。

- 1 北東部のⅢK～ⅣK-190～195グリッドの付近。カマド状遺構や、土坑、小ピット群、溝跡などが検出され、地形から見ても、周辺には多数の遺構の存在がうかがわれた。
- 2 北部のⅣI・J-184・185グリッドで、縄文時代後期の土器が若干出土した。拡張したところ、多量の遺物が出土した（C区）。
- 3 北西部のⅣJ・K-175グリッドで、土坑1基とトレンチの西壁にカマド状遺構に由来する焼土を確認した。また、少量ではあるが、縄文時代の土器片も出土した（D区）。

以上のうち、「1」の区域については試掘調査にとどめ、後日の本調査に委ねることにした。その面積は、約9,000m<sup>2</sup>である。また、この区域の大半は山下遺跡の範囲外にあることや地形上の特徴から、米山(2)遺跡に含めることにした。

「2」及び「3」の区域については、周辺を拡張して発掘調査を実施した。この成果については、次章で記述する。

上記以外の区域については、遺構が検出されなかったことや遺物の出土が散発的なことに加え、開墾と耕作のために大部分がすでに削平されてしまっていると考えられたことから、発掘調査の必要性がないと判断された。

（畠山 昇）

## 第2章 発掘調査の成果

試掘調査の結果を受けて、二カ所で発掘調査を行った。すなわち、縄文時代後期の土器が出土したIV J・J-184・185グリッド周辺のC区、土坑1基とトレンチ西壁にカマド状遺構と思われる焼土を確認したIV J・K-175グリッド周辺のD区である。(注: 平成9年度の調査において、すでにA区、B区の調査区域が存在するため、今回の調査ではC区、D区とした。)

C区で検出した遺構は、縄文時代の土器埋設遺構1基と土坑2基のほか、時期不明の土坑2基、カマド状遺構12基、井戸跡1基であり、出土遺物は縄文時代の土器・石器等段ボール箱で18箱分である。

また、D区で検出した遺構は、時期不明のカマド状遺構7基、土坑5基、井戸跡5基、溝跡2条、小ビット群2カ所である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器が少量あるほか、時期不明の鉄器1点である。以下、時代別、遺構別に記述する。

表2 地区別遺構一覧表

	縄文時代		時期不明(中世以降)					小計
	土器埋設遺構	土坑	土坑	カマド状遺構	井戸跡	溝跡	小ビット群	
C区	1基	2基	2基	12基	3基			18
D区			5基	7基	5基	2条	2カ所	21

## 第1節 検出遺構と出土遺物

### 1 縄文時代の遺構

#### (1) 土坑

第6号土坑(SK-6)(図11)

位置: C区VK-182・183グリッドに位置する。

重複: なし。

平面形・規模: 直径60cmほどの円形で、深さ12cmと浅い。壁は外側に向かって緩く立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土: シルト質のしまりのない黒褐色土の堆積が見られた。

出土遺物: 頭部でやや外反し、口縁部に最大径を有する縄文時代後期前葉の有文深鉢の上半部(28)が、底面付近からまとまって出土した。上半部はほぼ全ての破片が存在し接合率も高く、性格不明であるが、人為的に当土坑内に残されたものと考えられる。残存部全面に幅2~3mmの細い沈線によって、文様が描かれ、口縁部には横長の楕円文が横方向に6単位施される。また体部の三角形状のモチーフは3単位となる。沈線間には1mm程度の非常に小さな筋となるRL縄文が充填される。器表面の摩滅が著しいが、僅かに残る良好な器表面には丁寧なミガキとスス状炭化物の付着が確認できる。口径28.5cm・現存部高さは22cm。

時期: 出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

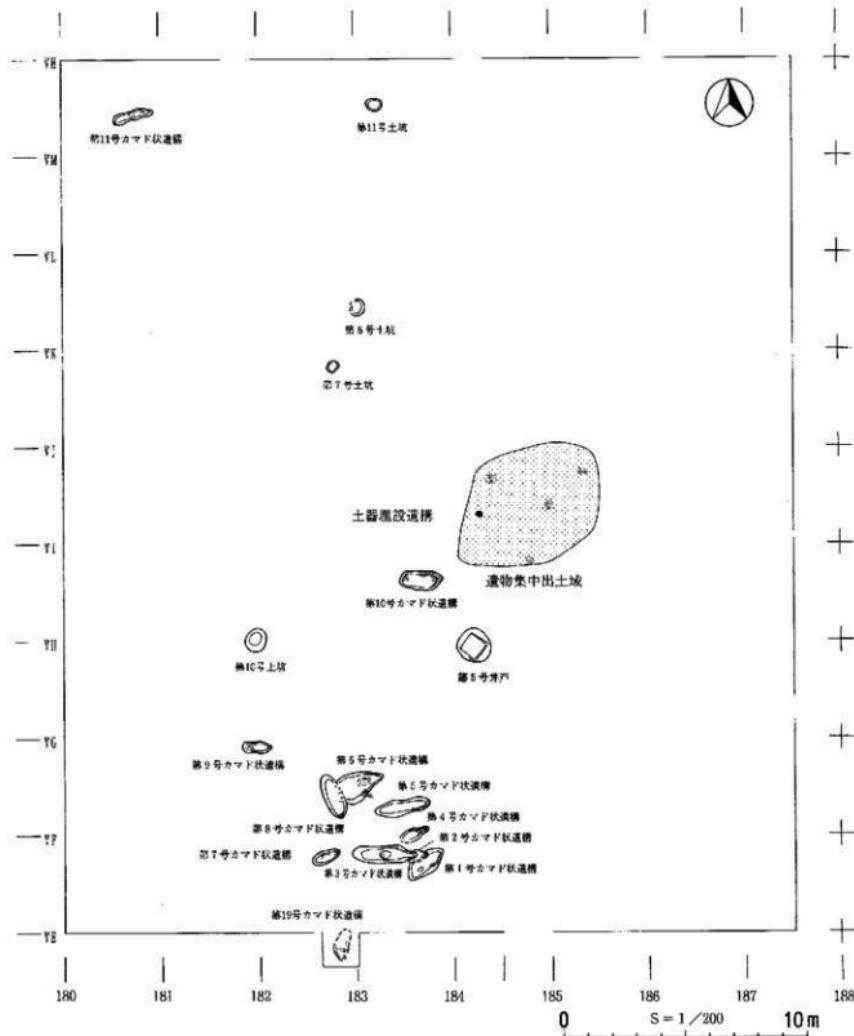


図9 山下遺跡C区遺構配置図

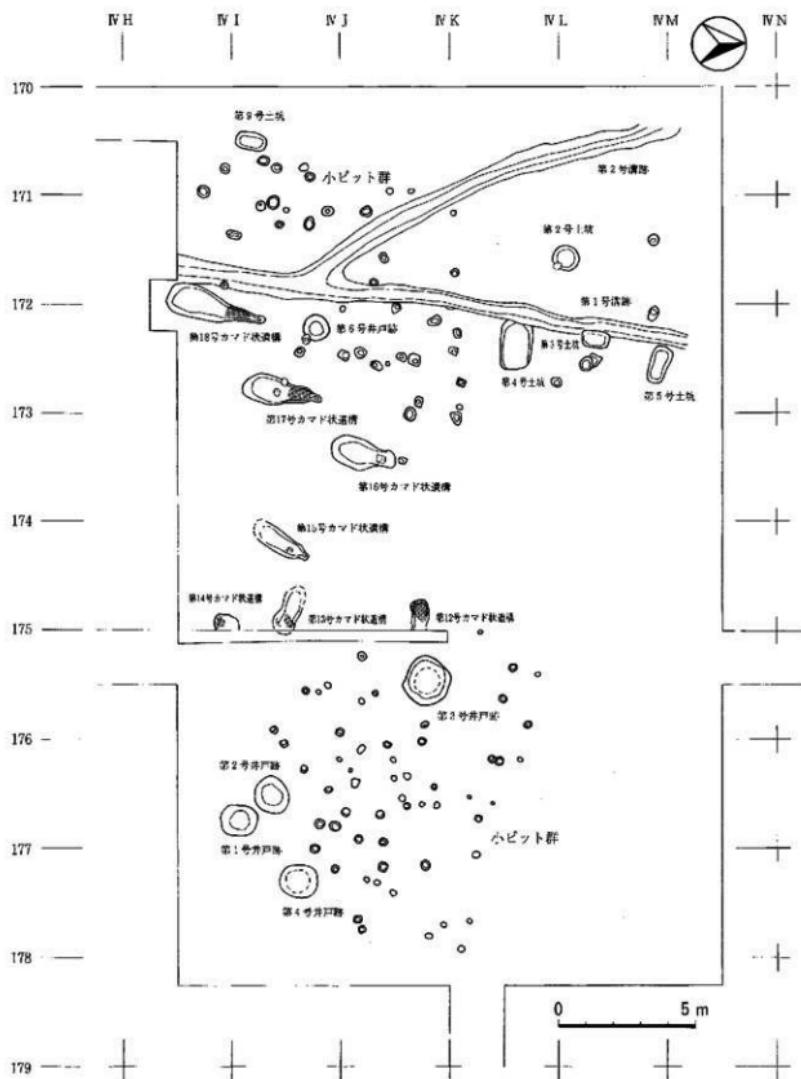


図10 山下遺跡D区遺構配置図

## 第7号土坑（SK-7）（図11）

位置：C区VJ-182グリッドに位置している。

重複：なし。

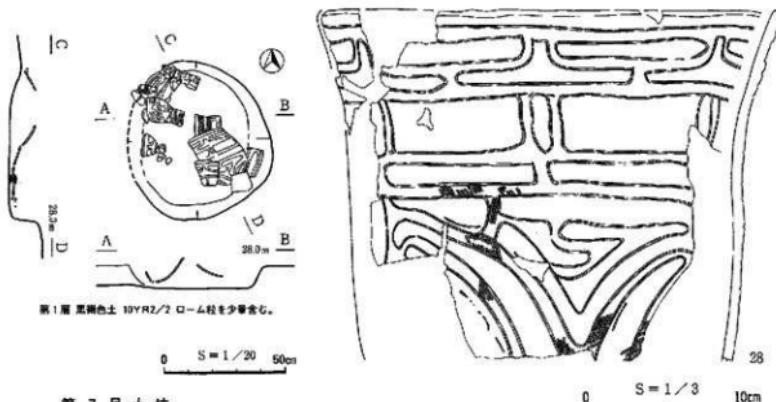
平面形・規模：短軸42cm、長軸49cmの隅丸方形で、深さ5cmと浅い。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：小石を多量に含んだ砂質シルトの褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：縄文時代後期前葉と思われる土器が出土した。31は網目状撚糸文（R）が施される深鉢の一部、32は多輪轍条体（R）が施される深鉢の体部下半から底部である。32は底部から6~7cmの高さまで無文となり、丁寧なミガキと横方向のナデ調整が施される。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。（遺物は永鶴 豊、他は畠山 異）

## 第6号土坑



## 第7号土坑

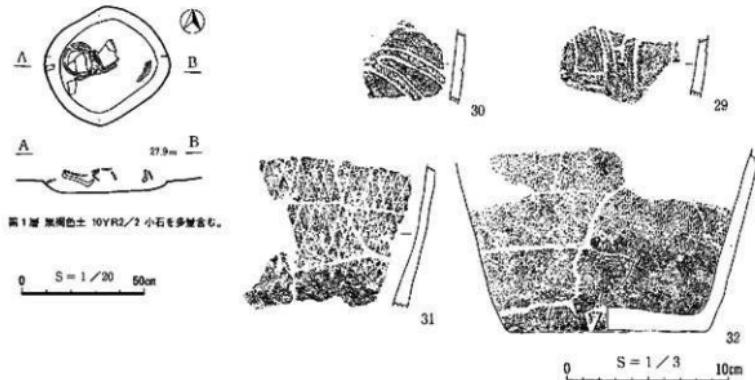


図11 縄文時代の土坑

## (2) 土器埋設遺構 (S R - 1) (図12)

V I - 184グリッドにおいて、Ⅲ層除去後、礫を多量に含むV層を検出した段階で、土器埋設遺構が検出された。当区からV I - 185グリッドにかけてのⅢ層では、縄文時代後期前葉の壺形土器片が散在し、接合作業の結果6個体以上が確認され、当遺構も同時期のものと考えられる(図20)。埋設土器は、確認面から30cm程度の深さで底部が検出され、深鉢形土器の下半部が、やや斜位に埋まっている。当土器埋設遺構には、土器中の底面から10~15cm程に、灰白色の粘土が明らかに人為的に納められていた。その粘土上面に封をするような状態で、埋設土器とは別個体の土器が数片見られた(図12-35~37)。土坑の掘り込みは確認できなかった。

埋設土器(33)は、推定口径22.5cm・推定胴部最大径20cm・器高30cm程の頸部で外反気味となる深鉢形土器である。口縁部は僅かに残存し、口縁部~体部下半までRL斜行繩文が施される。体部下半は2次焼成により器表面が脆弱化しており、地文等は確認できない。粘土帯は2~2.5cmであり、外傾接合となる。

埋設土器中の粘土上面で見られた土器は、2個体分が確認され4点を固化している。34は深鉢の頸部と考えられ、文様は見られない。35~37は同一個体と考えられる有文深鉢形土器である。35は大型山形波状口縁の谷間のL頸部に楕円文が見られる。胴部にも楕円文が施され細沈線間にLR繩文が充填されるが、器表面の摩滅のため詳細不明である。幅3mm程度の比較的深い沈線が口頸部に、1~2mmの細沈線が胴部文様に用いられる。細沈線は施工工具の鋭利な先端部を、土器面に垂直に当てて施されている。埋設土器(33)同様外傾接合である。

[小結] VI - 184グリッドの遺物集中区で確認された当遺構は、推定器高30cm・推定口径22.5cmの地文のみが施された深鉢形土器を用いた土器埋設遺構である。土器の器高の約半分以下に灰白色の粘土を充填し、その上面を別個体の有文土器片で封をしたような状態で検出された。他の類例等は検討していないが、周辺から縄文時代後期前葉の壺形土器片が多量に出上しており、埋設土器中の楕円文が施される有文深鉢から十腰内I式の古い段階のものと考えられる。

(水嶋 豊)

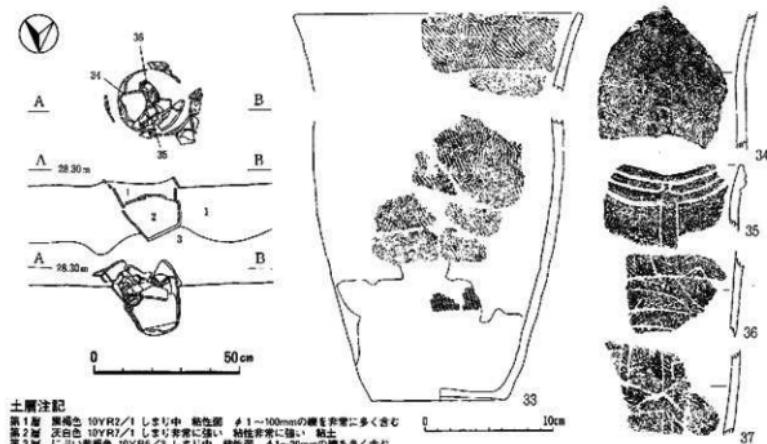


図12 土器埋設遺構

## 2 時期不明の造構

### (1) 土 坑 (図13)

#### 第2号土坑 (SK-2)

位置：D区IV L-171グリッドに位置している。

重複：小ピットと重複し、これよりも古い。

平面形・規模：直径90cmの円形で、深さ22cmである。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。

堆積土：黒褐色土の1層だけを確認した。

出土遺物：なし。

#### 第3号土坑 (SK-3)

位置：D区IV L-172グリッドに位置している。

重複：第1号溝跡と重複し、これよりも新しい。

平面形・規模：短軸56cm、長軸102cmの長方形で、深さ34cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：黄褐色土の混入が見られる黒褐色土1層のみを確認した。

出土遺物：なし。

#### 第4号土坑 (SK-4)

位置：D区IV K-172グリッドに位置している。

重複：第1号溝跡と重複し、これよりも古い。

平面形・規模：西壁の一部を破壊されているが、短軸110cm、長軸180cm（推定）の長方形を呈し、深さ58cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：4層に分けられたが、主体は暗褐色土である。また、第4層は灰黄褐色土であるが、水の影響によると思われる褐色に変色した部分が上部に薄く見られる。

出土遺物：なし。

#### 第5号土坑 (SK-5)

位置：D区IV L-172グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸72cm、長軸142cmの長方形で、深さ約10cmである。壁の立ち上がりはやや緩く、底面はほぼ平坦である。

堆積土：黄褐色土をまばらに含んだ黒褐色土の堆積が見られたのみである。

出土遺物：なし。

#### 第9号土坑 (SK-9)

位置：D区IV I-170グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸60cm、長軸107cmの長方形で、深さ32cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土：セクションは実測していないが、他の土坑と同じく黒褐色土のみの堆積が見られた。

出土遺物：なし。

#### 第10号土坑（SK-10）

位置：C区VG・H-181・182グリッドに位置する。

重複：なし。

平面形・規模：短軸83cm、長軸90cmの楕円形を呈し、深さ36cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦ではなく、幾分凹面となっている。

堆積土：ローム粒を含む締まりのない暗褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

#### 第11号土坑（SK-11）

位置：C区VM-183グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸50cm、長軸63cmの隅丸長方形を呈し、深さ25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：暗褐色土、黒褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

(嵐山 昇)

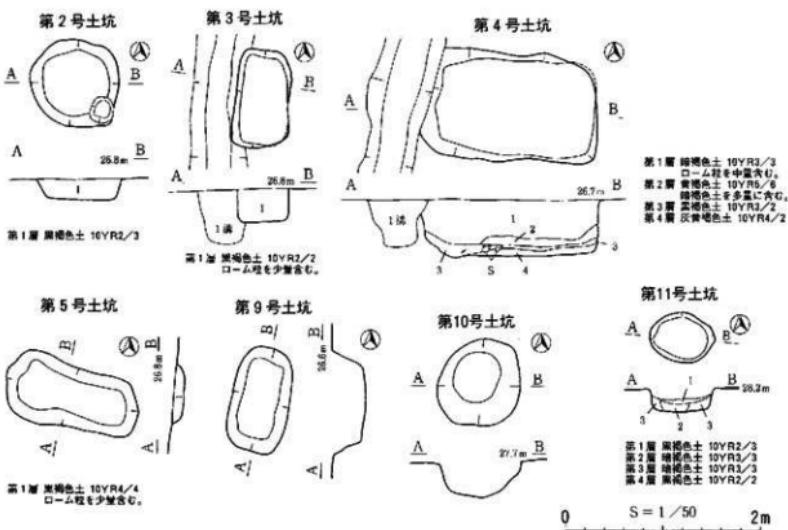


図13 時期不明の土坑

### （2）井戸跡（図14）

#### 第1号井戸跡（SE-1）

位置：D区IV H・I-176グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸112cm、長軸137cmの橢円形を呈し、深さ73cmである。壁はやや急傾斜で立ち上がりっている。底面には凹凸が見られた。

堆積土：湧水のために底面まで観察できなかったが、2層まで確認することができた。第1層は黒色土で上部に小砾を多数含んでおり、第2層はローム質の褐色土である。

出土遺物：なし。

#### 第2号井戸跡（SE-2）

位置：D区IV I-176グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：開口部は短軸122cm、長軸138cmの橢円形を呈し、深さ約70cmである。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。底面には凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。

堆積土：湧水のために底面まで観察できなかったが、3層まで確認することができた。底面近くの壁際にローム質の褐色土や締まりのない黒色土が見られるが、大半が第1層の黒褐色土で占められている。また、第1層上部には、焼土が見られる。

出土遺物：覆土上位から、やや大ぶりの刀子（小刀）<sup>ヒサギ</sup>が1点出土した。柄と刃部の一部が欠損している。折れた部分の観察からは3～4層の鋼の層離が見られ、平安時代のものとは異なった印象を受けた。

#### 第3号井戸跡（SE-3）

位置：D区IV J-175グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：開口部は短軸160cm、長軸173cmの橢円形を呈する。ここから、20cmほど下の部分では、隅丸方形状に見られるが、これが本来の形状を示しているものと思われる。開口部が崩落した結果、橢円形になったものと考えられる。なお、底面の平面形は直径90cmの円形を呈している。深さ108cmである。壁は急傾斜で立ち上がるが、幾分凹凸が見られる。また、底面にも凹凸が見られ、平坦ではない。

堆積土：9層に分けられたが、ほとんど黒色土と黒褐色土で占められている。自然堆積と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第4号井戸跡（SE-4）

位置：D区IV I-177グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸120cm、長軸135cmの梢円形を呈し、深さ約70cmである。壁は急傾斜で立ち上がっている。湧水のため、底部の状況は不明である。

堆積土：底部付近は不明であるが、4層まで確認した。黒褐色土と黄褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

(島山 昇)

#### 第5号井戸跡 (S E - 5)

位置：C区IV G～H184グリッドに位置している。

重複：なし

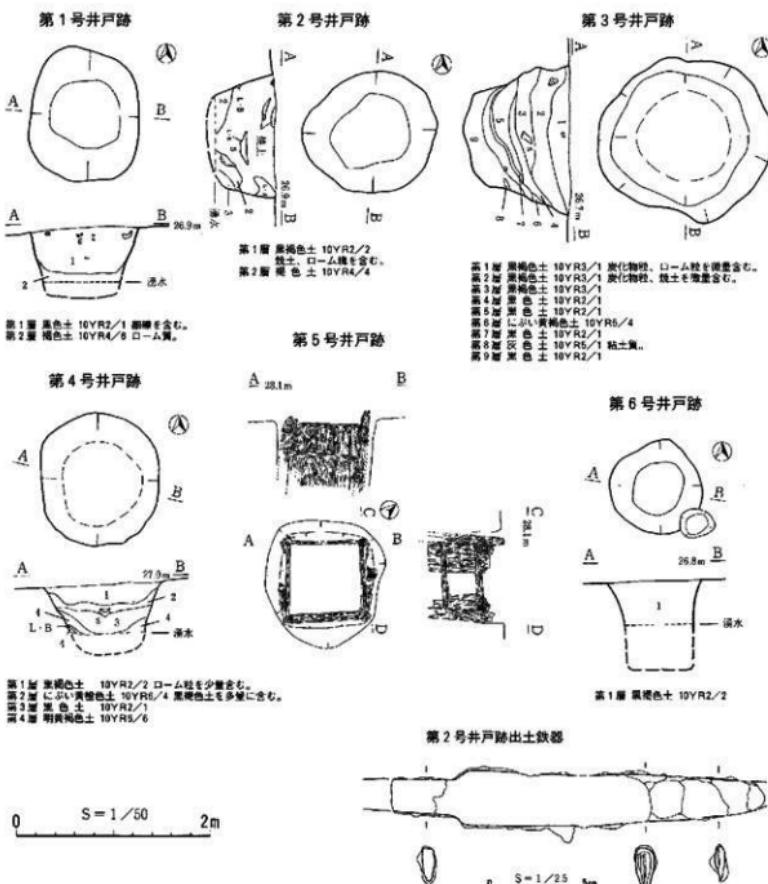


図14 井 戸 跡

平面形・規模：長軸140cm、短軸130cmの隅丸方形または不正円形を呈し、深さは約65cmである。底面はほぼ平坦で、一辺90~100cmの隅丸方形状と考えられる。掘り方は井戸枠付近で垂直に落ち込むが、開口部付近で外側に開く。

井戸枠：井戸枠は木組方形縦板組隅柱横棟型である。掘り方一杯に一辺80~90cmの方形井側を据える。井筒は無い。井側の四隅に径10~13cmの丸材を用いた柱を立て、一辺約5cmの角材・最上部では径約4cmの丸材を脇穴に差込んで固定している。横棟の外側に幅10~15cm・厚さ1~3cmの縦板を各辺5~7枚づつ2重にあてているが、釘は使用していない。脇穴は4×6、5×5、5×6cmの長方形・正方形となる。丸材・横棟にはチョウナと思われる加工痕が残る。

堆積土：粗砂を含んだ暗緑灰色粘質土。

出土遺物：なし。

(永鷲 豊)

#### 第6号井戸跡（SK-1）

位置：D区IV I-172グリッドに位置する。

重複：小ピットに切られている。

平面形・規模：平面形は直径98cmのほぼ円形を呈している。湧水のため底面まで調査できなかったが、ボーリング棒による探査では、深さ約90cmであった。壁は垂直に立ち上がり、開口部近くでやや広がる。底面の状況は不明である。

堆積土：確認面下50cmほどの深さまで調査し、この範囲では黒褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

(島山 昇)

#### (3) カマド状遺構

##### 第1号カマド状遺構（SN-1）(図15)

位置と確認：C区南側VE-183グリッドで、南北に連なった焼土を確認した。調査の結果、3基のカマド状遺構を検出し、東から順に第1号、2号、3号（SN-1~3）とした。

重複：第2号・第3号カマド状遺構と重複し、本遺構がもっとも古い。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸90cm、長軸1m80cm、深さ10cmである。残存状況は悪いが、確認時に見られた明褐色土や赤褐色土、黄褐色土等で構成される部分が燃焼部と思われる。また、この部分の南西側に直径20~25cm、深さ5cmの小ピットが付設されており、この辺りまでが燃焼部と考えられる。燃焼部の規模は、幅90cm、長さ1m30cm前後と推定される。主軸方位は、N-55°-E付近と思われる。

堆積土：底面直上に炭化物がレンズ状に見られ、上部に焼土粒や炭化物を含む黒色土、褐色土及び焼土層が見られた。

出土遺物：なし。

##### 第2号カマド状遺構（SN-2）(図15)

位置と確認：C区VE-183グリッドに位置している。

重複：第1号・第3号カマド状遺構と重複している。本遺構は、第1号カマド状遺構より新しく、第3号カマド状遺構より古い。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は、短軸60cm、長軸80cm、深さ10cm前後である。確認時に見られた焼土や明褐色土で構成される馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられ、中央に見られた炭化物の密集部分がその開口部と思われる。主軸方位は、N-90°-E付近であり、第3号カマド状遺構とほぼ同じ方向と推定される。

堆積土：褐色土、炭化物、明褐色土、黒色土の順に堆積した状況が見られた。褐色土及び明褐色土は本遺構の構築土である可能性があり、黒色土は崩落後の堆積である可能性が考えられる。

出土遺物：なし。

#### 第3号カマド状遺構（SN-3）（図15）

位置：C区VE-183グリッドに位置している。

重複：第1号・第2号カマド状遺構と重複し、本遺構がもっとも新しい。

平面形・規模：平面形は長円形を呈し、東端部が一段狭くなっている。この突き出た部分は煙道部で、東から煙道部、燃焼部、焚口部が一直線に並ぶ構造である。煙道部を含めた長軸は2m67cm、カマド本体の長軸は2m30cm、主軸方位は、N-91°-Eである。

本体中央の底面には短軸30cm、長軸50cm、深さ8cmの梢円形の小ピットが付設されているが、この辺りから東側の部分が燃焼部、西側が焚口部に相当すると考えられる。燃焼部は幅67cm、長さ1m20~30cm、深さ17cmである。確認時に見られた焼土は燃焼部の壁か崩落土、炭化物の密集した部分は開口部と思われる。焚口部は幅55cm、長さ約1m前後である。深さは5cm前後であるが、西側では底面から遺構確認面へと次第に高くなっている。壁と底面との境界は不明瞭である。底面は東・西端から燃焼部の小ピット付近に向けて傾斜しており、この部分でもっとも深くなっている。煙道部は幅22cm、長さ40cm前後で、底面は一段高くなっている。

堆積土：全体が黒褐色土で覆われているが、燃焼部の底面直上には、炭化物の層が数cmの厚さで見られ、その上に天井部崩落土の焼土層が見られた。

出土遺物：なし。

#### 第4号カマド状遺構（SN-4）（図15）

位置：C区の南側、VE・F-183グリッドで、不整形の焼土を確認した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部の一部と煙道部しか検出できなかったため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は、短軸48cm、長軸1m25cm、深さ7cmである。東端の一段狭くなっている部分が煙道部と考えられ、幅23cm、長さ35cmである。壁と底面との境界は不明瞭で、全体にやや深んだ状況である。主軸方位は、N-68°-Eと推定される。

堆積土：底面には炭化物の層が見られ、上部に焼土や明褐色土が堆積している。

出土遺物：なし。

## 第5号カマド状遺構（SN-5）（図15）

位置：C区南側のVF-183グリッドで、焼土と褐色土で構成される馬蹄形状の部分を確認した。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は長円形を呈し、短軸45~68cm、長軸2m20cm、深さ最大8cmである。確認状況及び堆積状況から東側が燃焼部、西側が焚口部と考えられる。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁、円形の部分が開口部と考えられる。燃焼部は幅45cm、長さ1mほどの規模である。焚口部は幅68cm、長さ1m20cmほどの規模である。壁は内湾気味に立ち上がる。底面は、中央やや東よりものところで段を持ち、燃焼部が一段低くなっている。煙道部は検出できなかったが、東端にあったものと推定される。主軸方位は、N-80°-Eである。

堆積土：燃焼部では、壁や天井部の崩落土や灰や炭化物の堆積が見られ、焚口部では黒褐色土や褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

## 第6号カマド状遺構（SN-6）（図16）

位置：C区南側のVF-182・183グリッドで焼土を確認し、2基のカマド状遺構を検出した。

重複：第8号カマド状遺構と重複し、これよりも古い。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸95cm、長軸1m80cm、深さ25cmの長円形を呈している。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられることから、東側が燃焼部、西側が焚口部と思われる。燃焼部は幅60cm、長さ1m前後の規模と思われる。燃焼部の断面はすり鉢状で、底面から外側に向かって内湾気味に立ち上がる。焚口部は幅95cm、長さは不明である。煙道部は東端に突き出た部分と思われ、底面が一段高くなっている。底面は焚口部から燃焼部に向かって傾斜し、燃焼部で最大20cmを計る。主軸方位は、N-68°-Eである。

堆積土：覆土の大半が暗褐色土であるが、燃焼部の底面直上には橙色の焼土と黒褐色土の混合土及び炭化物の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

## 第7号カマド状遺構（SN-7）（図16）

位置：C区VE-182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部付近のみの検出であるため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸50cm、長軸1m20cm、深さ8cmである。

堆積土：焼土や暗褐色土、褐色土、炭化物の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

## 第8号カマド状遺構（SN-8）（図16）

位置：C区南側のVF-182・183グリッドで焼土を確認し、2基のカマド状遺構を検出した。

重複：第6号カマド状遺構と重複し、これよりも新しい。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸76cm、長軸1m83cm、深さ25cmの長楕円形を呈している。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられることから、南側が燃焼部、北側が焚口部と思われる。燃焼部は幅60cm、長さ不明、焚口部は幅76cm、長さ1m前後である。燃焼部の断面はすり鉢状で、壁は内湾するよう立ち上がる。底面は焚口部でもっとも深くなっている、深さ25cmである。煙道部は検出されなかった。主軸方位は、N-156°-Eである。

堆積土：覆土の大半が暗褐色土、黒褐色土であり、直上には炭化物の堆積層が見られた。

出土遺物：なし。

#### 第9号カマド状遺構（SN-9）（図16）

位置：C区の南側VF-181・182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部のみの検出のため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸50cm、長軸1m10cm、深さ7cmである。主軸方位はN-93°-E付近と推定される。

堆積土：底面直上に炭化物、その上に黒褐色土、褐色土、焼土等が堆積している。

出土遺物：なし。

#### 第10号カマド状遺構（SN-10）（図16）

位置と確認：C区の中央付近、VH-183グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部のみの検出のため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸80cm、長軸1m70cm、深さ14cmである。確認状況及びセクション観察から、西側に焚口部、東側に煙道が付設されていたと考えられることから、主軸方位はN-93°-Eと推定される。

堆積土：底面直上に炭化物を多量に含む黒色土や焼土の層が見られるが、これは東側に顕著である。燃焼部の壁や天井部が崩落した状況と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第11号カマド状遺構（SN-11）（図17）

位置：C区の北西、VM-180グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：残存状況はあまり良くないが、燃焼部から焚口部にかけての部分と思われる。検出した部分は短軸40~43cm、長軸1m63cm、深さ12cmの長円形を呈している。また、中央からやや西よりの壁がやや狭まっている辺りから東側が燃焼部、西側が焚口部と考えられる。燃焼部の底面には直径15cm、深さ2cmの小ピットが掘り込まれ、炭化物を主体とした土が堆積していた。底面は西側から次第に低くなり、燃焼部のピットがある辺りでもっとも深くなっている。主軸方位はN-74°-Eである。

堆積土：黒褐色土が主体であるが、この中に含まれている焼土粒や炭化物は東側に顕著である。また、

底面や底面直上に見られる炭化物の堆積も東側に顕著である。

出土遺物：なし。

#### 第12号カマド状遺構（SN-12）（図17）

位置と確認：D区の中央IV J-174グリッドで、東側が開口した馬蹄形状の焼土を確認した。

平面形・規模：燃焼部から焚口部にかけての部分しか検出できなかったため、全体の平面形・規模は不明である。検出した部分は、短軸62cm、長軸116cm、深さ8cm前後で浅く溝状に掘られ、東西方向に延びている。壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸がある。焚口部は燃焼部の東側に付設されているが、大半が削平されている。主軸方位は、N-82°-Wである。

堆積土：上部と下部に焼土や焼上を含む黄褐色土や暗褐色土、黒褐色土が見られる。焼土は壁や天井部の崩落土と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第13号カマド状遺構（SN-13）（図17）

位置と確認：D区の南側IV I-174グリッドに位置している。試掘調査時に設けたトレンチの壁面に焼土を確認し、拡張したところ馬蹄形状の焼土と暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模：燃焼部から焚口部にかけての部分しか検出できなかったため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸60-82cm、長軸190cmで、中央付近がやや狭くくびれている。このくびれた辺りから東側が燃焼部、西側が焚口部である。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。深さは燃焼部で15cm、焚口部で10cmであり、燃焼部がやや深い。主軸方位はN-116°-Eである。

堆積土：焼土を含んだ暗褐色土や黒褐色土が見られる。遺構廃棄後の堆積と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第14号カマド状遺構（SN-14）（図17）

位置と確認：D区南側IV I-174グリッドに位置している。試掘調査時に設けたトレンチの壁面に焼土を確認し、拡張したところ本遺構を検出した。しかし、大部分が削平のため失われ、焼土のみが残されていた。

平面形・規模：確認面で検出した焼土は、燃焼部の部分と考えられる。上部がほとんど削平されていることから、全体の形状及び規模は不明である。

堆積土：確認調査時のトレンチでの確認では、焼土を含んだ褐色土が見られた。

出土遺物：なし。

#### 第15号カマド状遺構（SN-15）（図17）

位置と確認：D区南側IV I-174グリッドで、南西部が開口した馬蹄形状の焼土と黒褐色土の落ち込みを検出した。

平面形・規模：平面形は長円形を呈し、北東から南西にかけて、溝状に掘り込まれている。北東側から煙道部、燃焼部、焚口部が一直線に並ぶ構造であり、煙道部を含めた長軸は2m30cm、カマド本体

の長軸は2m5cm、主軸方位はN-30°-Eである。

燃焼部は幅65cm、長さ70cm、深さ14cm前後である。壁は外傾して急に立ち上がるが、一部袋状に掘り込まれている部分がある。焚口部は幅70cm、長さ140cm、深さ10cm前後である。壁は外傾して緩く立ち上がるが、南西部の末端では確認面へ向かってなだらかに立ち上がり、壁と底面との境界は不明瞭である。底面は、焚口部から燃焼部に向かってだいに深くなり、火床面で最大の深さとなる。煙道部は幅22cm、長さ25cm前後の小さな造りとなっている。

堆積土：燃焼部付近では焼土を含んだ黒褐色土や褐色土がみられ、壁の崩落と思われるものもある。

廃棄後の堆積と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第16号カマド状遺構（SN-16）（図18）

位置：D区IV J-173グリッドで、馬蹄形状の焼土と黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模：平面形はヒョウタンに似た形状で、北寄りの部分がくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部であり、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれらの施設が一直線に並ぶ構造であり、煙道部を含めた全体の長軸は2m83cm、カマド本体の長軸は2m40cm、主軸方位はN-12°-Eである。

燃焼部は幅60cm、長さ70cmの楕円形を呈し、深さ約20cmである。壁は袋状に内湾してつくられている。確認時に検出した馬蹄形状の焼土は壁の中程の部分と考えられ、南側の開口部分の直下には、板状の大礫と柱状礫が出土している。このうち板状礫はカマド本体の構成材か、支脚として利用された可能性が考えられる。なお、この上部には天井部と考えられる焼土の堆積が見られ、下部は焼けて火床面を形成している。大礫の出土した部分の壁は幅が狭くなっていて、この辺りから南側の部分が焚口部である。焚口部は幅1m12cm、長さ1m70cmの楕円形を呈し、深さ15cm前後である。東西の壁は、緩く外傾して立ち上がるが、南壁では底面との境が不明瞭である。底面は焚口部から燃焼部に向かって傾斜し、火床面の辺りでもっとも深くなる。燃焼の北側には幅20cm、長さ31cmの小さな突出孔がつくなっている。

堆積土：暗褐色土や黒褐色土が主体であり、燃焼部付近には炭化物が多い。廃棄後の堆積と思われる。

出土遺物：板状の大礫と柱状節理をもった礫（流紋岩）が出土している。

#### 第17号カマド状遺構（SN-17）（図18）

位置と確認：D区南側のIV I-172グリッドで、半円状の焼土と暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複：西壁の中央で、柱穴状の小ピットと重複しているが、これよりも古い。

平面形・規模：平面形はヒョウタンに似た形状で、北寄りの部分がややくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部で、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれらの施設がほぼ一直線に並ぶ構造で、煙道部を含めた長軸は2m95cm、カマド本体の長軸は2m55cm、主軸方位はN-12°-Eである。

燃焼部は幅55cm、長さ85cm前後の楕円形を呈し、深さ25cmである。壁は袋状に内湾して掘り込まれている。確認面で検出した半円状の焼土は、底部近くの部分と考えられ、その直下に火床面が検出さ

れた。焚口部は幅98cm、長さ1m70cm前後の楕円形を呈し、深さ10~20cmである。東西の壁は緩く外傾するが、南側では底面がだいに高くなって確認面へ向かって延びており、壁と底面との境が不明瞭である。底面は焚口部から燃焼部へ向かって傾斜し、燃焼部と煙道部の境界付近でもっとも深くなる。燃焼部の北側には幅20cm、長さ32cmの小さな煙出孔がつくられている。

堆積土：焼土と黒褐色土が主体であり、廃棄後の堆積と思われる。火床面上部及び前庭部には炭化物の堆積が薄く見られた。

出土遺物：中央部の底面から、板状の礫が出土した。

#### 第18号カマド状遺構（SN-18）（図18）

位置と確認：D区の南西IVH・I-171・172グリッドで、焼土が混入した暗褐色土と黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模：平面形はヒヨウタンに似た形状で、北寄りの部分がややくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部で、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれら施設が一直線に並ぶ構造である。煙道部を含めた全体の長軸は3m60cm、カマド本体の長軸は約3m05cm、主軸方位はN-15°-Eである。

燃焼部は幅55cm、長さ約1mの楕円形で、深さ20cmである。壁は袋状に内湾して掘り込まれており、底面は火床面を形成している。焚口部は最大幅が1m20cm、長さ約2m15cmの台形状を呈し、深さ17cmである。壁は外傾して緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、焚口部から燃焼部へとわずかに傾斜している。燃焼部の北側には幅25cm、長さ40cmの小さな煙出孔がつくられている。

堆積土：3層に分けられたが、ほとんど暗褐色土が主体である。底面上には炭化物を多量に含んだ黒褐色土が広く見られた。

出土遺物：覆土から、縄文時代のUフレイクが1点出土した。

#### 第19号カマド状遺構（SN-19）（図18）

位置：C区VD-182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

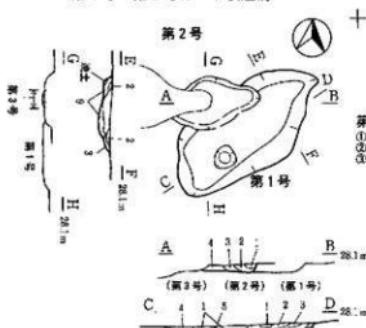
平面形・規模：部分的な確認のため、全体の規模は不明である。確認した部分は焼土のあり方から燃焼部付近と思われ、短軸が54cm、長軸が80cm以上である。ほぼ南北方向に主軸を持つものと思われる。

堆積土：焼土粒を含む黒褐色土と焼土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

（畠山 畿）

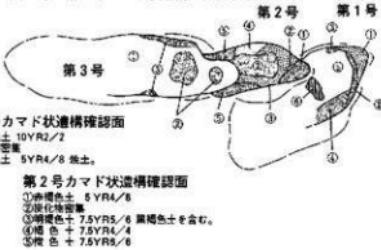
第1号・第2号カマド状造構



第2号カマド状造構

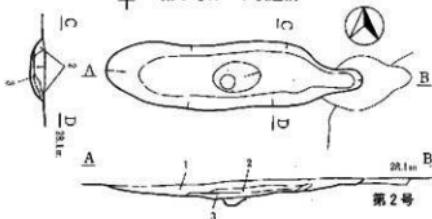
第1層 黒褐色土 10YR2/2 沢土を含む。  
第2層 明褐色土 7.5YR5/6  
第3層 泥化物層  
第4層 暗色土 7.5YR4/6

第1号～第3号カマド状造構の確認状況

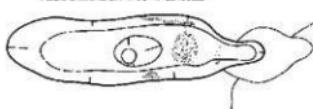


第1号カマド状造構確認面  
①黒褐色土 7.5YR2/8 沢土を含む。  
②黒褐色土 5YR4/8 沢土。炭化物を多量に含む。  
③泥化物層  
④赤褐色土 10YR4/2  
⑤赤褐色土 10YR4/4  
⑥赤褐色土 10YR2/1  
⑦泥化物層  
⑧赤褐色土 7.5YR2/4  
⑨泥化物層 10YR2/3 沢土を含む。  
⑩暗色土 7.5YR6/6

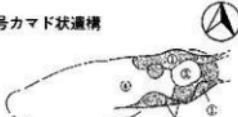
+ 第3号カマド状造構



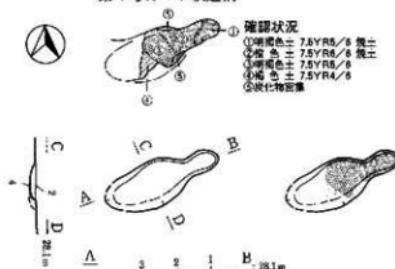
確認状況と掘り方の合成図



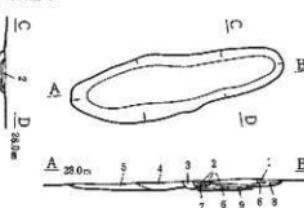
第5号カマド状造構



第4号カマド状造構



第1層 明褐色土 7.5YR5/6 沢土  
第2層 暗色土 7.5YR5/6 沢土  
第3層 明褐色土 7.5YR5/6  
第4層 泥化物層

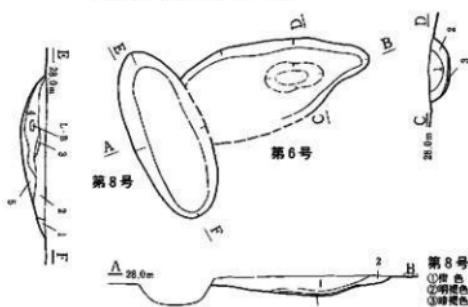


第5号カマド状造構

第1層 暗色土 7.5YR4/6 黒褐色土を多量に含む。  
第2層 黑褐色土 10YR3/2  
第3層 黑褐色土 10YR3/2 沢土を少量含む。  
第4層 黑褐色土 10YR3/2  
第5層 暗色土 10YR3/3  
第6層 暗色土 10YR4/2  
第7層 黑褐色土 7.5YR5/8  
第8層 暗色土 7.5YR4/6  
第9層 明褐色土 5YR4/8 泥化物を含む。  
第10層 暗色土 7.5YR4/8  
第11層 暗色土 10YR1/1 炭化物を多く含む。

図15 第1号～第5号カマド状造構

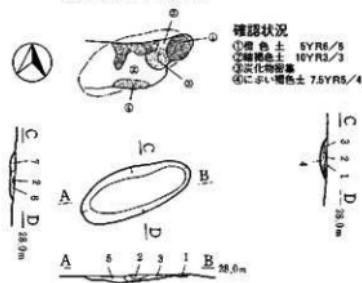
第6号・第8号カマド状遺構



第8号カマド状遺構

第1層 棕色土 7SYR8/8  
第2層 黄褐色土 10YR3/4  
第3層 黄褐色土 10YR3/2  
第4層 黄褐色土 10YR2/2  
第5層 黄褐色土 10YR2/3 岩化物を多量に含む。

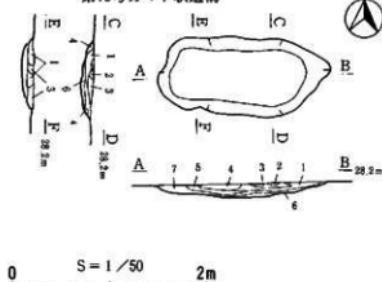
第7号カマド状遺構



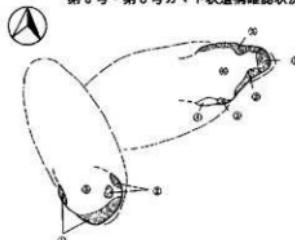
第7号カマド状遺構

第1層 棕色土 7SYR8/6  
第2層 黄褐色土 10YR3/3  
第3層 灰化物主体  
第4層 黄褐色土 10YR4/4  
第5層 棕色土 5YR8/6  
第6層 棕色土 7SYR8/4  
第7層 棕色土 7SYR8/4

第10号カマド状遺構



第6号・第8号カマド状遺構確認状況



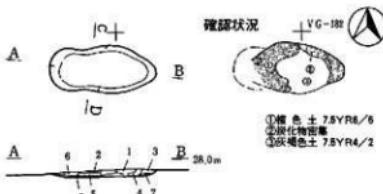
第6号カマド状遺構確認面

- ①棕色土 7SYR8/4
- ②灰化物主体 7SYR8/4
- ③黄褐色土 10YR3/4
- ④黄褐色土 7SYR8/6
- ⑤黄褐色土 7SYR3/2
- ⑥棕色土SYR8/6 + 黄褐色土10YR3/2
- ⑦黄褐色土 10YR3/4

第6号カマド状遺構

第1層 單褐色土 10YR3/4 灰土粒を多量含む。  
第2層 單褐色土SYR8/6 + 黄褐色土10YR3/2 灰土主体  
第3層 灰化物層

第9号カマド状遺構



第9号カマド状遺構

第1層 單褐色土 10YR2/3  
第2層 黄褐色土 10YR3/3  
第3層 單褐色土 10YR3/0 地上部を多量含むC。  
第4層 單褐色土 10YR3/4 灰化物を多量含むC。  
第5層 單褐色土 7SYR4/6 灰土を多量含むC。  
第6層 單褐色土 10YR1.7/  
第7層 灰化物層

確認状況

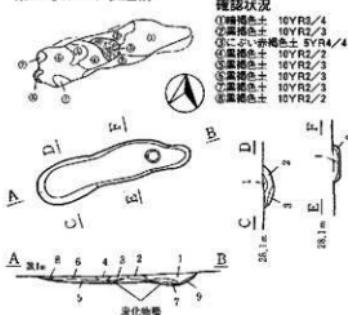
- ①單褐色土 7SYR8/6
- ②灰化物層
- ③黄褐色土 7SYR4/2

第10号カマド状遺構

第1層 明赤褐色土 SYR5/6 灰土  
第2層 に少し黃褐色土 10YR5/4  
第3層 黑褐色土 10YR2/2  
第4層 灰褐色土 10YR3/2  
第5層 黄褐色土 10YR4/4  
第6層 黄褐色土 10YR1.7/1 灰化物主体  
第7層 黑褐色土 10YR2/3

図16 第6号～第10号カマド状遺構

## 第11号 カマド状造構

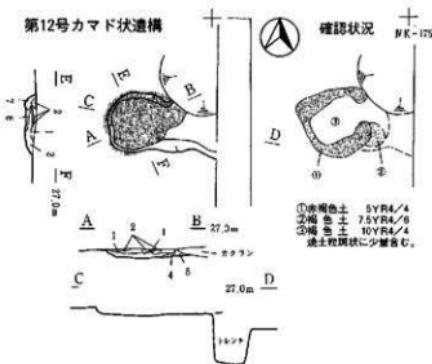


## 第11号 カマド状造構

- 第1層 褐褐色土 10YR2/4 泥炭含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 粘土、炭化物を含む。
- 第3層 にじいろ褐色土 5YRA/4 粘土、炭化物を含む。
- 第4層 黑褐色土 10YR2/2 粘土性、炭化物を含む。
- 第5層 黑褐色土 10YR2/3 粘土性、炭化物を含む。
- 第6層 褐褐色土 10YR2/3 粘土性、炭化物を含む。
- 第7層 褐褐色土 10YR2/4
- 第8層 黑褐色土 10YR2/2 炭化物を含む。
- 第9層 黑褐色土 10YR2/2

## 第12号 カマド状造構

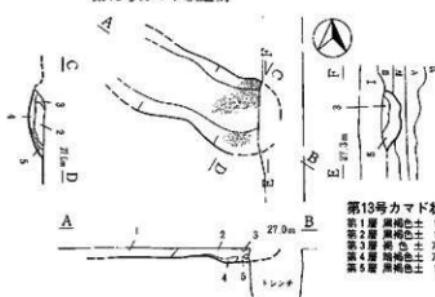
## 第12号 カマド状造構



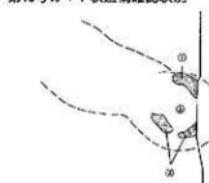
## 第12号 カマド状造構

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 泥炭化物性、粘土粒を少量含む。
- 第2層 黒褐色土 7.5YRA/3 粘土。
- 第3層 にじいろ褐色土 10YR4/3 粘土。
- 第4層 黑褐色土 10YR2/2 粘土。
- 第5層 黑褐色土 7.5YRA/4 粘土を中量含む。
- 第6層 黑褐色土 7.5YRA/4
- 第7層 黑褐色土 10YR2/3

## 第13号 カマド状造構



## 第13号 カマド状造構確認状況



## 第13号 カマド状造構

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2
- 第2層 黒褐色土 10YR2/1 泥土粒中量含む。
- 第3層 黑褐色土 7.5YR7/1 泥土。
- 第4層 黑褐色土 7.5YR4/4 粘土多量含む。
- 第5層 黑褐色土 10YR2/1

- ①緑褐色土 5YR2/4
- ②赤褐色土 5YR4/8
- ③黒褐色土 10YR2/4

## 第14号 カマド状造構



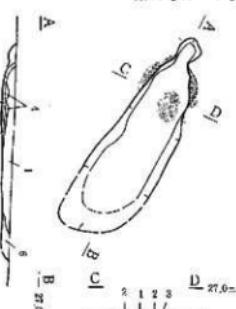
## 確認状況

- ①黒褐色土 5YR4/4 粘土薄い。
- ②赤褐色土 5YR4/8 粘土薄い。
- ③黒褐色土 10YR2/2

第1層 黑褐色土 10YR2/1 泥土を含む。

S = 1 / 50 2m

## 第15号 カマド状造構



## 確認状況

- ①赤褐色土 5YR4/6
- ②緑褐色土 10YR2/2
- ③黒褐色土 10YR2/2

## 第15号 カマド状造構

- 第1層 黑褐色土 10YR2/1 泥土粒中量含む。
- 第2層 にじいろ褐色土 10YR4/3 粘土粒中量含む。
- 第3層 黑褐色土 10YR2/1 泥土粒多量含む。
- 第4層 黑褐色土 10YR2/1 泥土粒少量含む。
- 第5層 黑褐色土 10YR4/3 泥土粒多量含む。
- 第6層 黑褐色土 10YR2/1
- 第7層 黑褐色土 10YR4/2 やや少量。

図17 第11号～第15号 カマド状造構

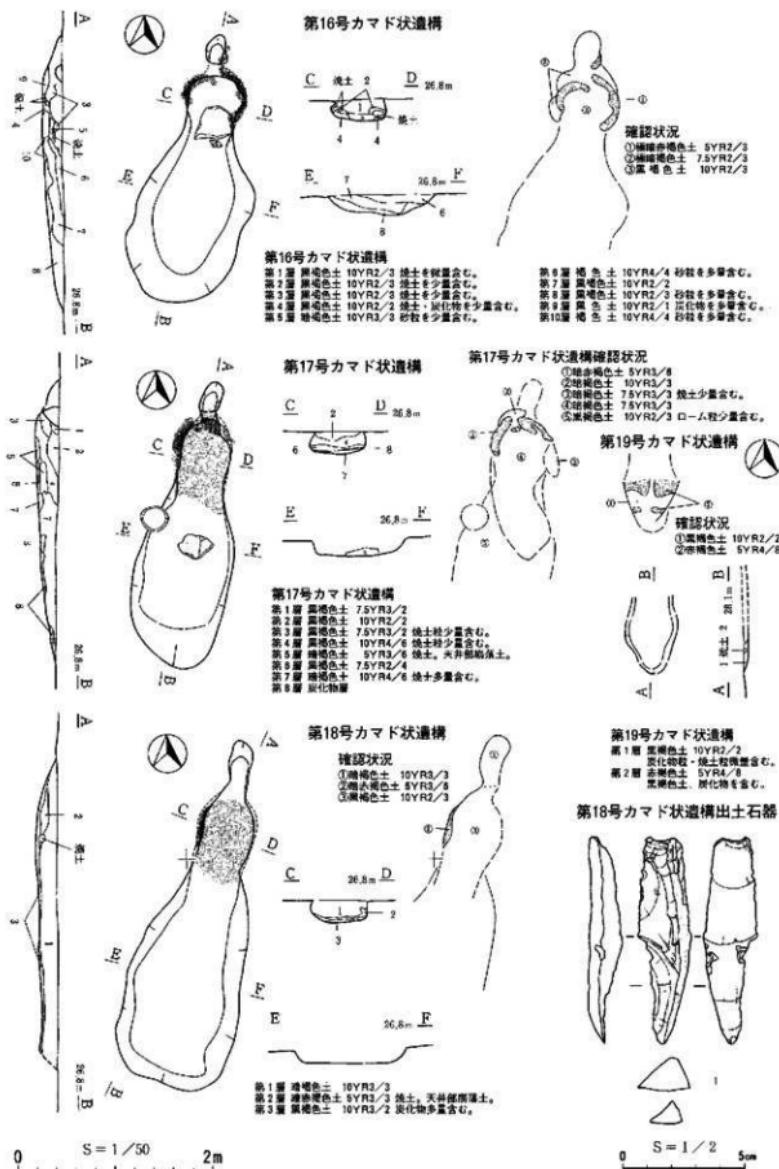


図18 第16号～第19号カマド状造構

#### (4) 溝 跡 (図19)

##### 第1号溝跡 (SD-1)

位置：D区の西側IV H～M-171～172グリッドに位置し、ほぼ南北に延びている。

重複：第2号土坑、第3号土坑及び周辺に検出した小ピットと重複している。本遺構は、第3号土坑より新しいが、第2号土坑と小ピットよりも古い。また、第2号溝跡とは同時存在であり、IV I-171グリッドで合流し、一条の溝となる。

規模：第2号溝との合流地点より北側では幅50cm前後、深さ55cmであるが、合流地点より南側では幅80cm、深さ70cmで、溝跡の短軸断面はU字状を呈している。長さ20m以上で、水は北から南に流れる。

堆積土：上から順に黒褐色土、暗褐色土、黒色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

##### 第2号溝跡 (SD-2)

位置：D区の西側IV J・K-170・171グリッドに位置し、北西から南東方向に延び、第1号溝跡に合流する。

規模：幅60～80cm、深さ40cmで、短軸断面は逆台形状を呈している。長さ15m以上で、水は北から南に流れ、第1号溝と合流する。

堆積土：黒褐色土の堆積が見られたが、下部には砂質ローム粒が含まれている。

出土遺物：なし。

(畠山 異)

##### (5) 小ピット群 (図19)

D区西側のIV H～L-170～173グリッドで46個、D区東側のIV I～K-175～177グリッドで57個の柱穴状の小ピットを密集して検出した。小ピットの平面形には、円形、楕円形、隅丸方形のものがあるが、楕円形のものが多く見られる。規模は直径20～40cm前後で、深さには15～50cmのものがあるが、30～40cm前後のものが多い。ピットからの出土遺物はない。

これら的小ピットには、規則的な配列が認められるものもなく、建物跡は確認できなかった。また、小ピット同士の重複が見られるものや、他の遺構と重複している小ピットもあり、後者には以下の例がある。

- ・ 第17号カマド状遺構と重複し、これよりも新しい。
- ・ 第6号井戸跡と重複し、これよりも新しい。
- ・ 第2号土坑と重複し、これよりも新しい。
- ・ 第1号溝跡と重複し、これよりも新しいものと古いものがある。

以上のことから、すべての小ピットが同一時期の所産ということは断定できず、また重複関係にある遺構の構築時期が不明であることからも、これらの小ピットの時期を特定することはできなかった。

(畠山 異)

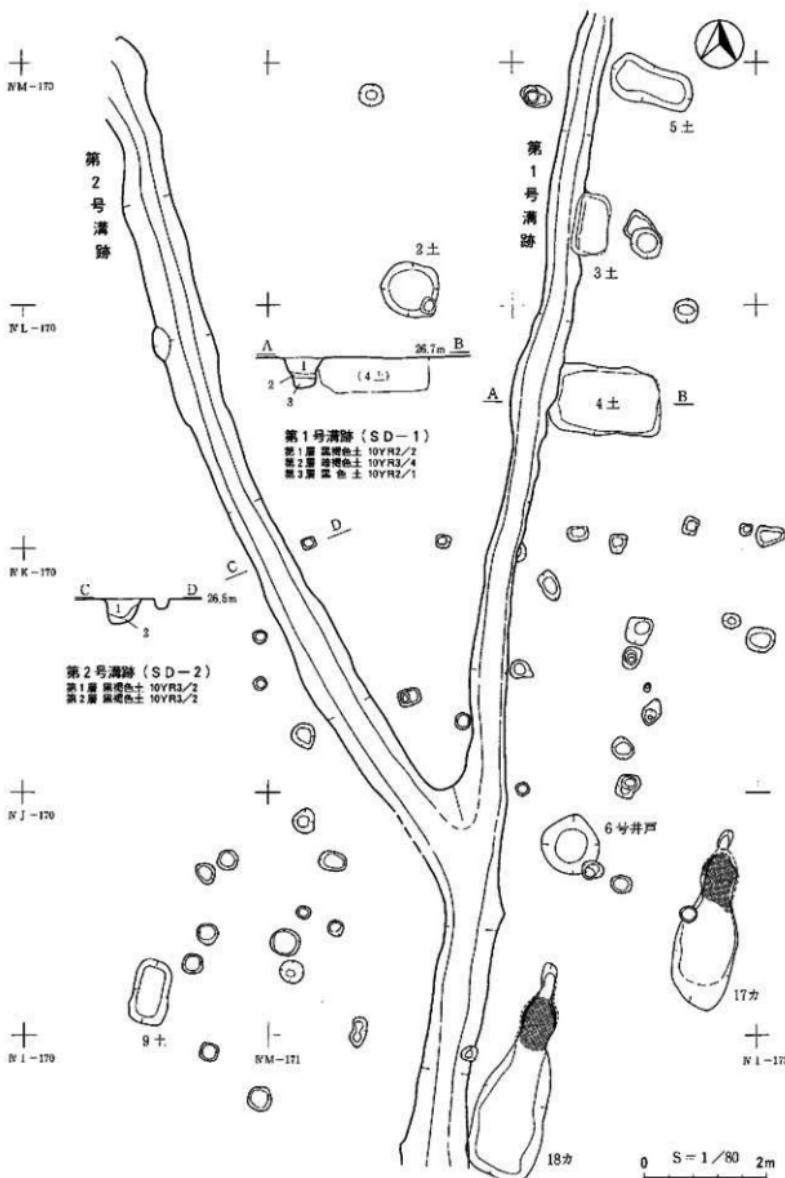


図19 溝跡と小ビット群

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1 繩文時代の遺物

#### (1) 土 器

C区からは、縄文時代後期前葉の遺物が多く出土しており、V I - 184~185グリッドにかけては、遺物集中域と粘土が下半分に充填された土器埋設遺構が検出されている。C区出土土器報告書掲載遺物は143の円筒土器1点を除き、すべて縄文時代後期前葉に用いられた土器である。大きく、平坦口縁の装飾深鉢、波状口縁の装飾深鉢、地文のみが施される深鉢、装飾壺、小型装飾壺が見られた。該期の土器は、輪積みの接合部で破損している破片が多く、外傾接合の個体が多い。

D区では、縄文時代中期の円筒土器・後期前葉の土器の出土が見られる他、中世の珠洲焼が出土しておりカマド状遺構等の時期不明とした遺構の帰属年代を示唆する可能性がある。

#### 「C区出土土器」

##### ア.土器集中域(V I - 184・185)[図20~23](38~50)

V I - 184~185グリッドを中心として、縄文時代後期前葉の土器群が散乱した状態で出土した。同区では土器埋設遺構も検出され、埋設土器中の有文土器片から縄文時代後期前葉であることが確認されている。

[壺形土器]38・39・40は同一個体となる大型の壺形土器で推定胴部最大径50cm・推定底部径26cmとなる。器表面外面にはぶい燈色をなし、文様は全体を横円文を用いて構成する。縦位・横位共に2列で構成される直線的な区画用横円文で器面を区画分割し、その区画帯中は横円文ベースの文様で充填する。区画用横円文をまたいで対応する半円モチーフを構成し、この半円モチーフが各区画帯内の上下左右に配置される。最上部と最下部を除き、半円モチーフはすべて対応する半円を有し、2個1セットで横円形を呈する。全体の構成が観察できる部分は少ないが、区画用横円文を左右にまたぐものと上下にまたぐ横円形モチーフ共に、上下の対称形ではなく左右の線対称の構成となるようである。4単位と考えられる橋状把手にはその形状に沿って、縦位の沈線が4本施される。沈線は2~3mm幅であるが、所々細く深くなる部分が存在し、同一施工工具の當て方による違いと考えられる。

41と42は、4単位の橋状把手を有する壺形土器で、口径21.5cm・現存部の最大径は36cm・現存部高さ29cmである。4単位を基本に文様が施されており、橋状把手から下方に2列一組の縦方向の区画用横円文が伸び、体部上半に一列の横方向の区画用横円文が施されている。全部で8区画の文様区画が考えられよう。上半部の文様区画内には渦巻状または入り組み状文様が施される区画と三角形状の文様が施される区画が交互に並ぶ。下半部の区画は、そのほとんどを欠損するが、僅かに残存する部位から推測すると、上半部同様に円と三角をイメージする文様が施されるようである。

橋状把手の剥落跡には、把手の取り付け位置を示すと思われる下描きの短沈線が認められる。

43と44は、おそらく5単位の橋状把手を有する同一個体の壺である。口縁部径30cm・頸部径23.4cmとなる。口縁部には横位の横円文が施されるが、一部上下の横円文同士が流水文化している部分も認められる。沈線幅5mm程度の深く太いものである。横線部の断面は半円形で、縦線部の断面は深くV字形と異なるが沈線内に途切れは見られず、同一施工工具を用いたものと思われる。C字形又はJ字形の入り組み状文様が橋状把手下の頸部に施される。橋状把手の上面にはこの入り組み状文が、下面に

は楕円文が施される。頸部の接合部は外傾接合となる。

45~50は集中区出土の壺形土器片である。47は横位の楕円文が連続する壺頭部である。

#### 【深鉢形土器】(図23 51~57)

51~57は有文深鉢の口縁部である。51は口縁部に横位の、頸部に斜位の楕円文が施される波状口縁となる。52・53は口縁部に横位の楕円文が施される。54は無文の深鉢であるが、器表面の摩滅が著しい。僅かに残る器表面からは内外面共にミガキが施されていることが解る。粘土帯の接合部からの割れが多く見られ、粘土帯上下幅は2cm以下となる。55・56は波状口縁であり、56と57は口縁形態に沿った沿口沈線+楕円文、55は口縁部に楕円文が施される。56は隆帯部にRL縦文が充填される。

#### イ. 土器集中域以外の土器

##### 【平坦口縁の有文深鉢形土器】(図23 58~62、67~68)

58~62は、口縁部またはそれ以下にも楕円文が施されるものである。すべて頸部で緩やかに外反し口縁部付近に最大径を有するものである。58は沈線幅4mm程の太い沈線によって、上下幅1.5cm程の狭い楕円文と上下幅3.5cm程の幅広の楕円文が施される。細い方は、楕円文間に一辺2cm程の隅丸方形の文様が配置される。沈線の断面形は半円形となる部分が多いが、縦方向の沈線には施文工具の細長い先端部を、工具長軸方向に動かして断面V字形となった部分もある。横縁部はすべて沈線断面形半円形となり、同一施文工具の持ち方・器面への当て方の違いによって断面形が異なるものと考えられる。内外面共に丁寧なミガキがなされ焼成も良いが、一部器表面が摩滅している部分が見られ砂粒を多く含む様子が確認される。器厚8mm程の厚手の土器である。59は口縁部から体部上半まで横長の4段の楕円文が約2mm幅の細い沈線で施されるが、体部下半は無文となり丁寧なミガキがなされる。口縁部は折返し状に肥厚しており、その幅に合わせて横幅5cmの楕円文が横位に一列巡るが、二つおきに直径1cmの円形文様が配置される。58同様に横線と縦線の沈線断面形が若干異なり、縦線の方がやや深くV字形となる。内外面とも丁寧なミガキがなされる。推定口径22cm、現存部高さ11cmである。60~62は楕円文外にLR斜行縦文が施される。

##### 【波状口縁の有文深鉢形土器】(図23・24 65~66、69~93)

波状口縁の有文深鉢を一括したが、波頂部は大型の丸みを持った山形状を呈するものが多い。波状口縁となる有文深鉢も、平坦口縁の有文深鉢同様に、頸部で緩やかに外反するものが多い。楕円文間に縦文が充填されるものと丁寧にミガキがなされるものがある。文様構成は、口縁部に沿った沈線や楕円文が施されるものがほとんどである。口縁波頂部直下の文様の配置で、口縁部の装飾がいくつか分けられる。

###### (1) 口縁波頂部直下に短楕円文が配置されるもの(69・70・71・72・84)

69は器厚は7mmであり、大型の深鉢の破片である。70は該期の当遺跡出土土器群に見られるよう、縦沈線には深く断面V字形のものが見られる。72・84は同一個体であり、器厚は4mm程であり推定される土器の大きさから考えると非常に薄いものである。器表面は摩滅部が多く見られ、口縁部に沿った楕円文が施される。

###### (2) 口縁波頂部直下で左右の楕円文が向かい合うもの(76・77・79~81)

###### (3) 波状の口縁部に沿った沈線が1~2条施されるもの(73・74・75・78・82・83・86・87・88・89)

73・74は同一個体であり、沿口沈線が2本施された下に異なる形の楕円文が横に並び、残存部だけ観

察するとあたかも口縁波頂部から右曲がりの沈線が垂下しているようにみえる。明褐色の薄い器表面が摩滅し、暗灰色の内部が外面でも内面でも見られる。断面の色調は所謂サンドイッチ状となる。75は沿口沈線下降線部にLR繩文が充填される。頭部の楕円文沈線幅は1~2mmであり、沿口沈線幅が5mmと大きく異なる。76~77・79~90は口縁部に口縁部に沿った沈線や楕円文が施されるものである。82・83は別個体であるが、その口縁部の文様構成は類似する。口縁波頂部下の1本の沿口沈線下に短楕円文が配置されるもので、(1)のタイプと類似する。

#### (4) その他(85・90・91・92・93)

その他としたものは、主に口縁波頂部が残存せず、分類不明であるものである。85は器面内外に丁寧なミガキがなされ、口縁直下の隆線部にRL繩文が施される、非常に丁寧なつくりの土器である。

#### [有文深鉢体部](94~103)

楕円文で、文様が構成される有文土器体部破片である。

#### [楕円文以外が施されるものやその他の深鉢形土器](図25 104~107)

104は、波状口縁の深鉢と考えられるが、口縁波頂部下に隆線が付され肥厚し、頭部で強く外反する。4mm幅ほどの沈線で、頭部に波状文が施されている。また頭部下の接合面の割れ口から外傾接合であることが観察される。105は、全体の文様構成は不明であるが、2mm程の細い沈線で左右対称の円形を中心とした文様が施される。やや内彎しながら口縁部が立ち上がる。107は、器表面外側が摩滅している無文の土器であり、内面に丁寧なミガキ調整がなされる。調整により目立たないが、割れ口から折返し口縁であることが観察でき、口縁部の調整によって折返し口縁下端部に明瞭な稜を有する。

#### [地文のみが施される深鉢形土器](図25 108~121)

縄文のみが施されるもの、縄文と網目状撲糸文が施されるもの、網目状撲糸文のみが施されるもの、撲糸文のみが施されるものがみられる。折返し口縁となるものも多い。111のみ折返し口縁部と体部の境に1本の横走沈線が施される。縄文のみが施されるもの(108~111)は、108~110が同一である。108も111も、LR斜行繩文を施すが、108・111ともに口縁部は原体横回転であるが、108の体部では縱回転、111の体部では頭部下の縄文施文幅2段目までは横回転であるが、それ以下では縱回転もしくは左上⇒右下の回転方向で施される。

網目状撲糸文のみが施されるもの(112~121)は、112~115はL、116~120はRが用いられる。115と119は口縁部が横方向の施文、体部が縱方向の施文となる。120は口縁部にLR繩文が、体部に網目状撲糸文が施される。

#### [壺形土器](図26・27 123~162)

123~125・148は4個の橋状把手が付される壺形土器の同一個体である。VK-180~181グリッドでまとめて出土した。口縁部・頭部・体部のそれぞれの復元となり、接合しない。口縁部から体部下半まで横位に連続する楕円文列が施される。頭部に橋状把手が4個付され、それに楕円文が施されるが、そのまま橋状把手以下の体部の縱方向の楕円文列に繋がり、それによって体部は4区画に分割され、さらにそれぞれ縱方向に2等分され、全部で縱方向に8単位の区画帯に分割される。その間を上下幅1cm程の狭い楕円文列と上下幅3~4cmの広い楕円文列が横位に交互に配置される。縱方向の楕円区画列と横方向の楕円文列の交点には、体部1周に4個の直径約1.5cmの円形文様が配される。橋状把手側面にも沈線が施されており、把手の上位と下位の楕円状文と繋がり、縱に連続する流水状の文様

を構成している。把手や隆線部の剥落跡には把手付設部や隆帶貼り付け部の割付用の下描き沈線が見られ、頭部(124)の実測図中に黒塗りの沈線部として表現している。粘土帯幅は約2cmであり、外傾接合となる。体部下半から底部にかけては無文になるものと思われる。

126~137も楕円文が施される壺形土器破片である。胎土・焼成とも共通するものが多く、ほぼ同一個体と考えられるが、131のみ斜線が施され別個体の可能性もある。

138~146は楕円文と三角形状文様と斜沈線が施される壺形土器の同一個体である。隆帶部または区画内部にはRL斜行縄文が施される。口径約15cm、頭部径約11.5cmとなり、最大径は体部下半に位置すると考えられる。口縁部に平行沈線と隆帶部にRL縄文を施し、頭部は無文となる。肩部に上下幅約1.5cmの楕円文列が3段、それ以下体部には3~4条の三角形状文、体部下半付近では再び上下幅約1.5cmの楕円文列が3段以上施されるものと考えた。肩部の楕円文列では楕円文外の隆帶部にRL縄文が施されるのに対し、体部下半と考えた楕円文列では楕円文内にRL縄文が施されるので、別の部位と考えたい。

147は器表面の摩滅が著しい口縁部破片で、123同様に横方向の楕円文列が施される。149~152は厚手の口縁破片である。153は器厚約5mmの薄手の壺口頭部である。口縁部に施される2本の沈線は、幅3mm程度で深く施され、断面はV字形となる。

154~162は壺形土器の体部破片である。154~113は比較的厚手の破片であるが、158~162は薄手の土器であり、沈線も繊細なもので小型壺と考えられる。157は楕円文が施文される橋状把手である。155は楕円文間の隆帶部にRL縄文が施され、その後に直径5mm程度の刺突が加えられる頭部破片である。158は隆線部に径1~2mmの刺突が横位に連続し、その隆線下の横走沈線から沈線文が垂下する。

#### 【鉢・浅鉢形土器】(図23 63~64、図27 163~164)

63~64は非常に薄手の土器で、63は上部の平行沈線と下部の斜線を、3本一単位の弧状の沈線で結び弧状沈線間に楕円文が残る。64は口縁部に楕円文、体部上半部に渦巻状の沈線文が施される。共に沈線幅は2mmと非常に細い土器である。

164は器厚の薄さや胎土・焼成ともに当遺跡出土の縄文時代後期前葉の土器群と共通する鉢形土器である。163は器厚15mm程度の非常に厚い浅鉢形土器と考えられ、内外面とも丁寧なミガキがなされる。口縁部からほぼ底部付近までの破片と思われるが、この器壁の厚さは、当土器群とは異質である。

#### 【縄文時代中期の土器】

122は口頭部にLR原体の側面圧痕、体部にLR斜行縄文が施される円筒上層a式と考えられる破片であり、繊維を含む。円筒土器は、当遺跡の試掘調査域・D区で少数ではあるが確認されている。C区では1点のみの出土である。

#### 『D区出土土器』

当区では、縄文時代中期円筒上層d式・縄文時代後期初頭・前葉の土器・中世の珠洲焼が出土している。165~172までは縄文時代中期の土器であり、165は人面状装飾と幅5~6mmの隆線と沈線文が施される。概ね他の破片も隆線も細い。165と167は中央部がやや窪む径1.2cm程のボタン状貼瘤・突起が付される。173~177は、後期初頭の土器で173~175が同一個体で、楕円文中に平行沈線や楕円文が多重化している。178~183は縄文時代後期前葉の土器である。

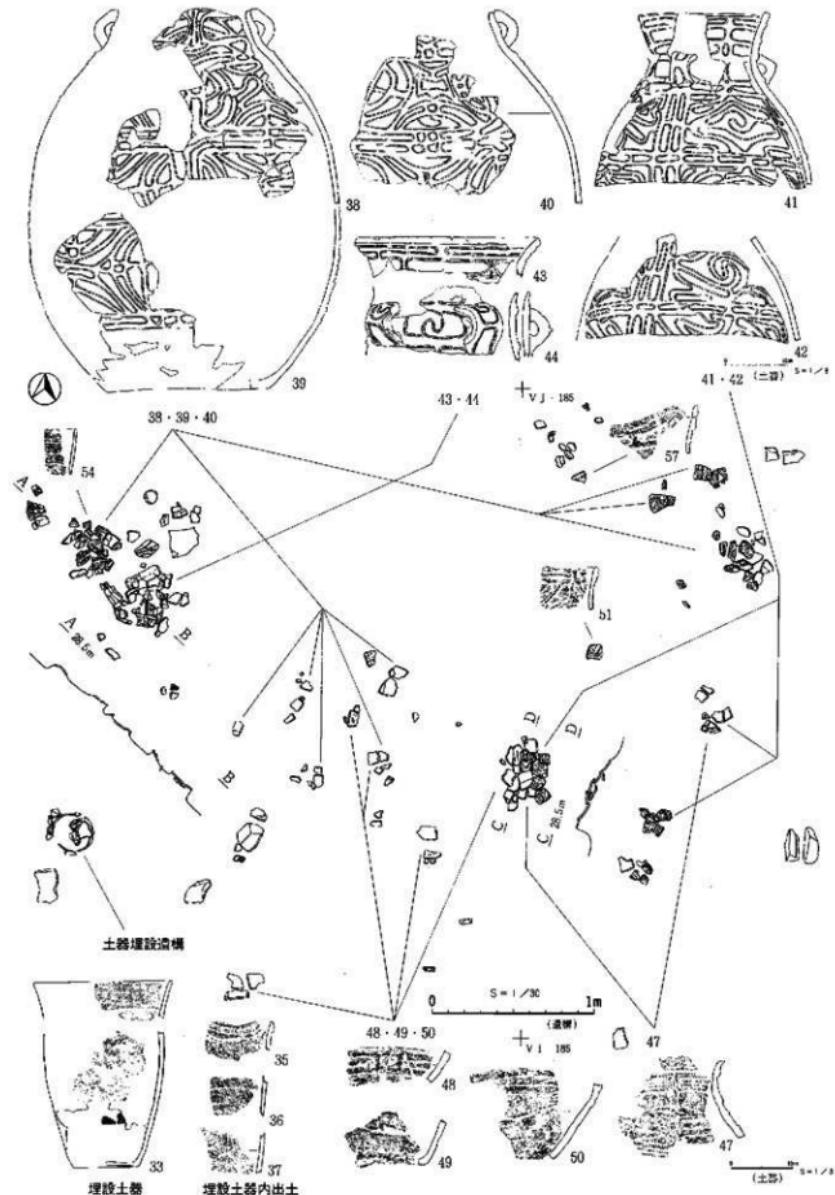


図20 山下遺跡C区遺物出土状況

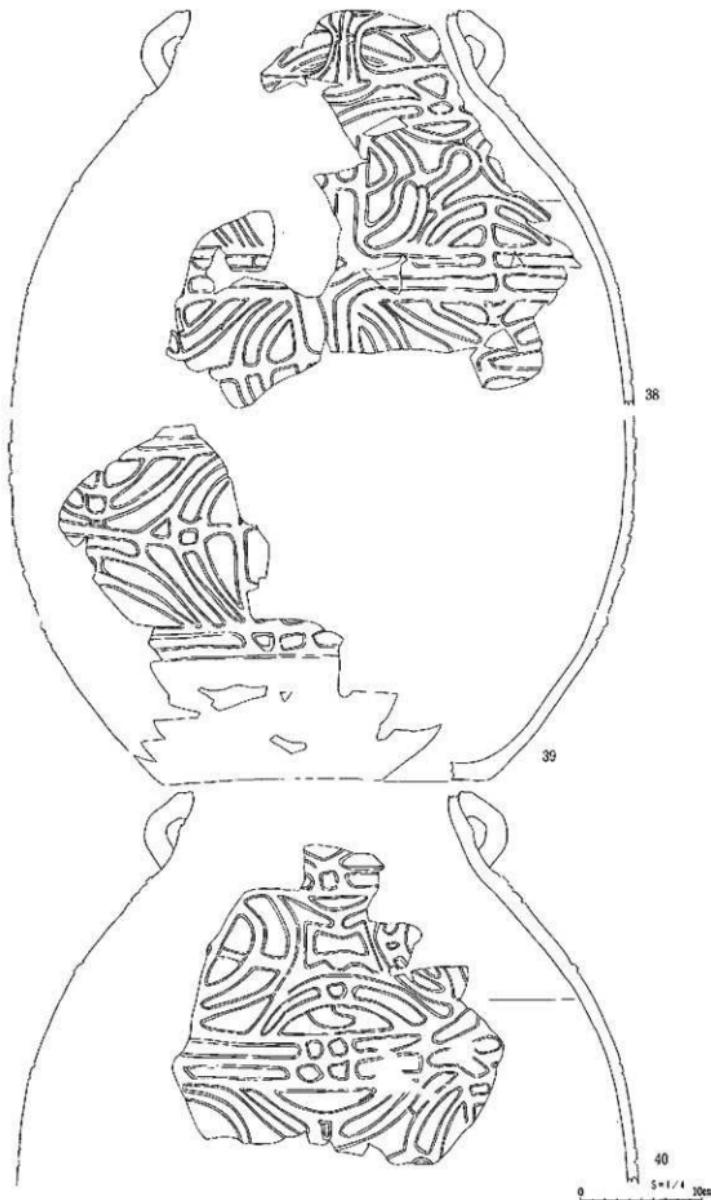
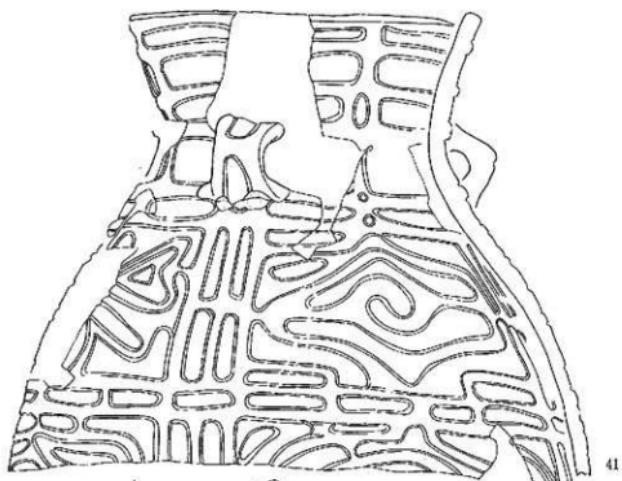
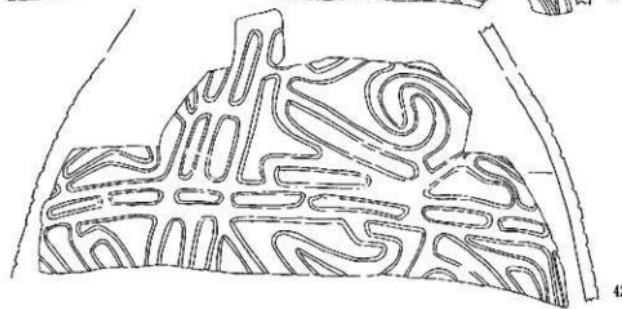


図21 山下遺跡C区出土土器1



41

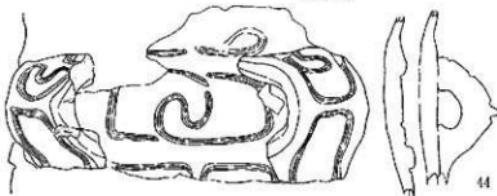


42



43

スクリーントーンは剥落部、  
トレンチ地露出



44

0 5 - 1 / 3 10cm

図22 山下遺跡C区出土土器2

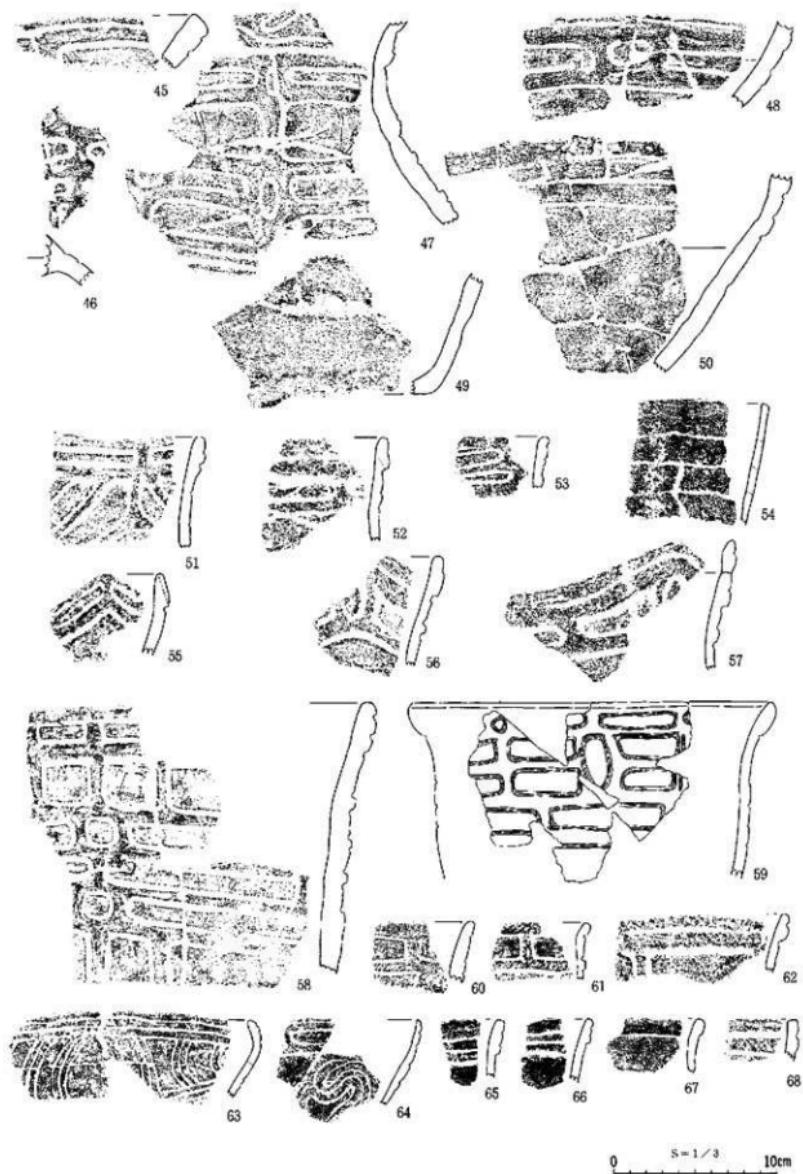
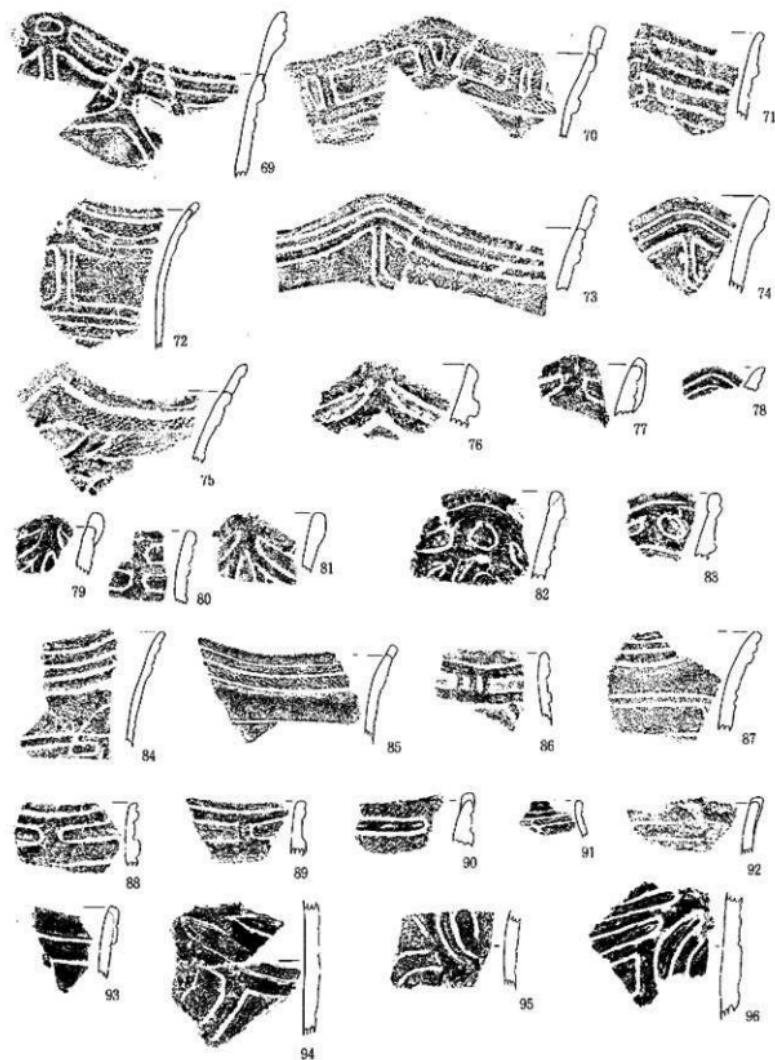


図23 山下遺跡C区出土土器3



0 S = 1 / 3 10cm

図24 山下遺跡C区出土土器 4

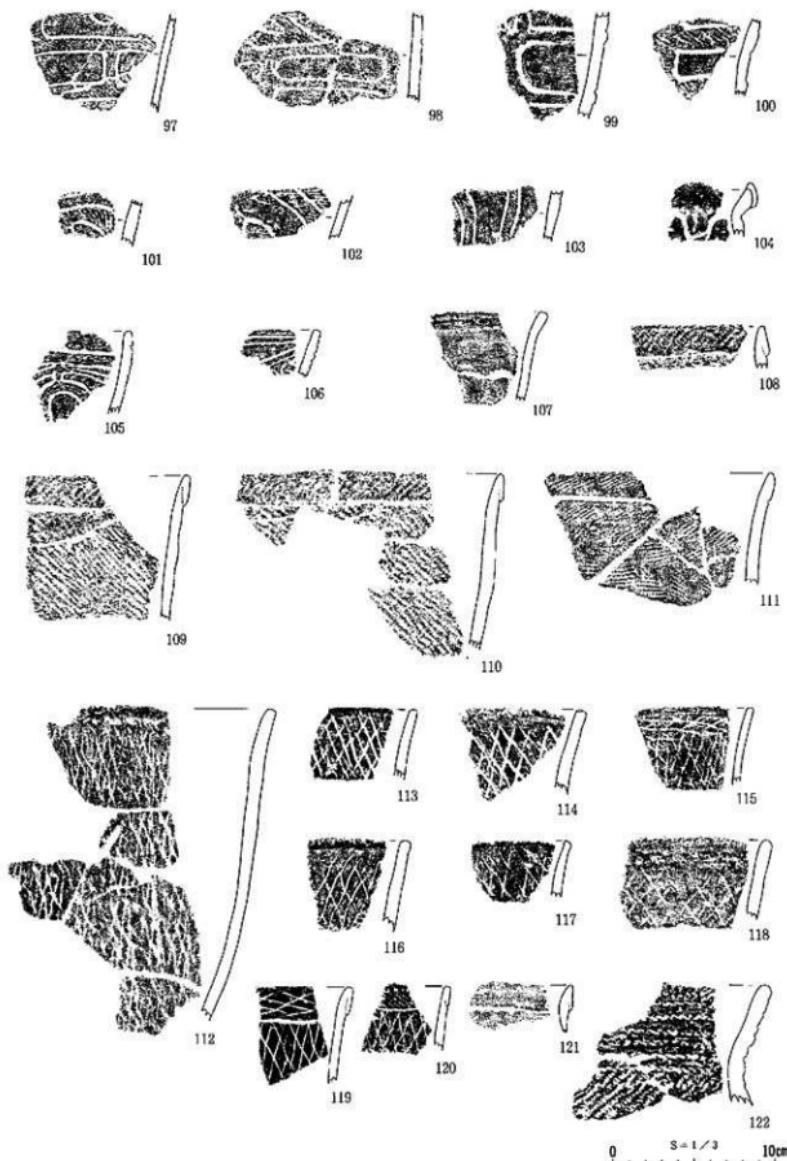


図25 山下遺跡C区出土土器 5

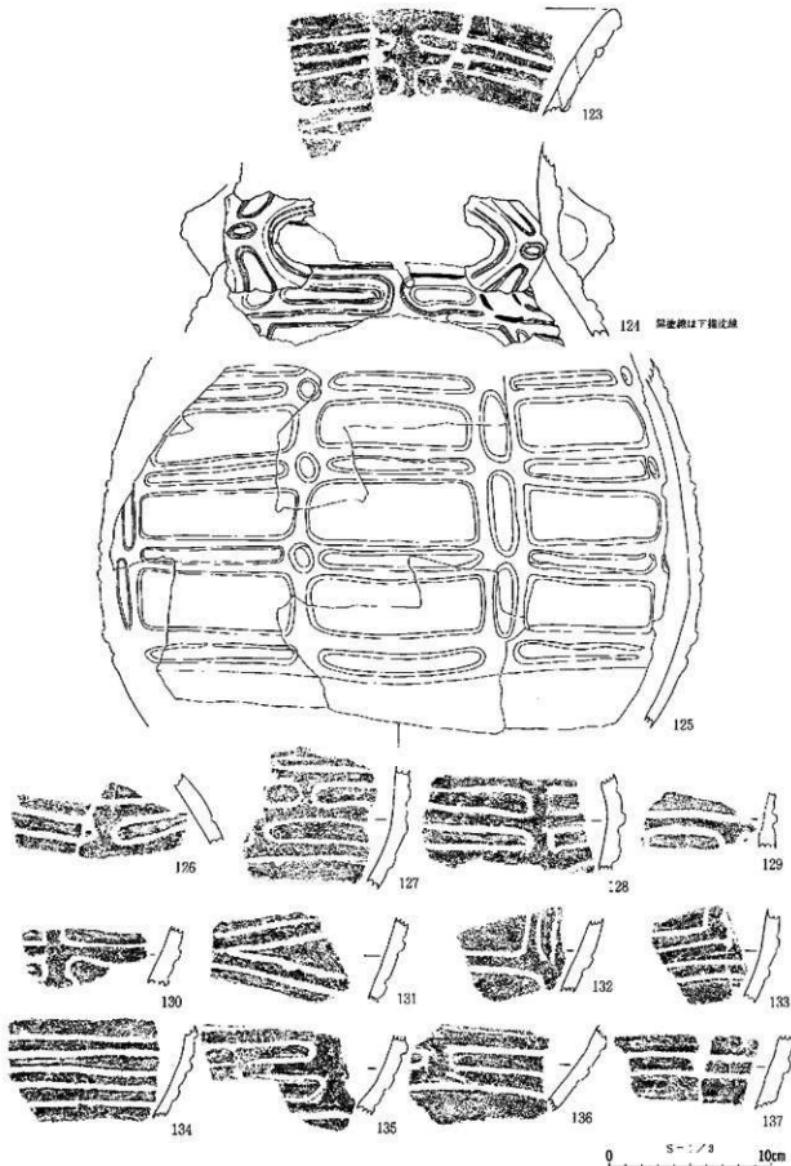


図26 山下遺跡C区出土土器 6

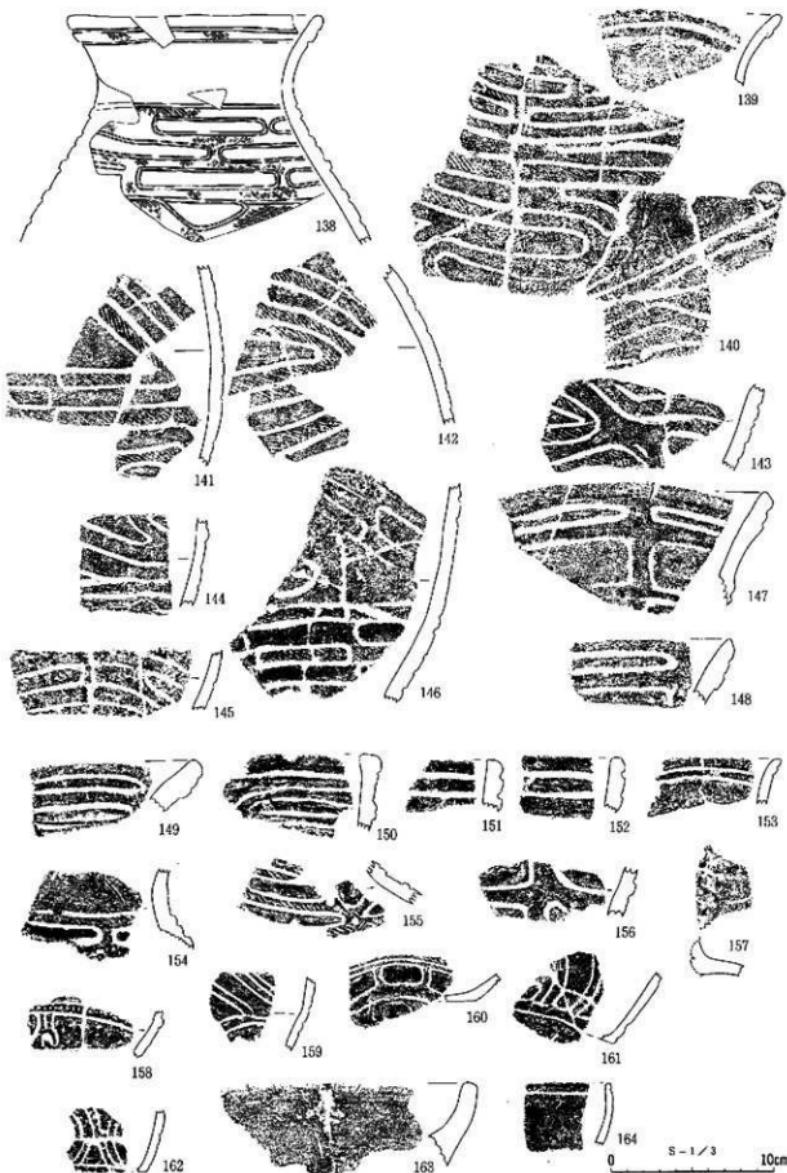


図27 山下遺跡C区出土土器7

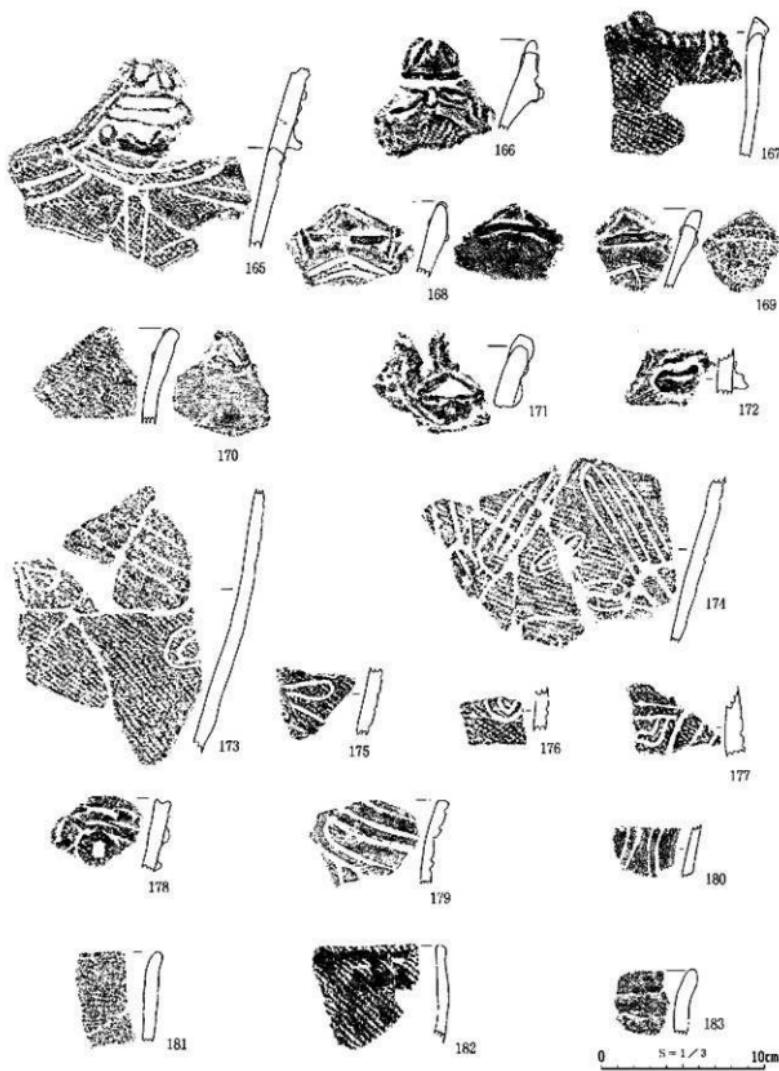


圖28 山下遺跡D區出土土器

## (2) 石 器

### C区出土の石器

C区からは、石錐1点、石匙1点、石箋1点、スクレイバー7点、Uフレイク3点、フレイク31点、磨製石斧1点、敲磨器8点、台石2点、その他1点出土した。

石錐（図30-1）棒状錐であり、薄く作出されている。

石匙（図30-2）やや幅広である。両面に主要剥離面を広く残し、特に裏面の周縁に集中して加工を施している。

石箋（図30-4）基部を欠損している。両面加工で、刃部の一部に摩耗痕が見られる。

スクレイバー（図30-3、5～8）端部に急斜度調整が施されているものが3点ある。3は弧刃であり、丁寧な調整が施されている。7は、一見粗雑に見えるが、末端には丁寧な調整が施されている。8は左右と末端に調整が施されているが、特に末端の刃部調整は直角に近く、直刃である。5は大型剥片の片側縁に連続した調整が施されている。6は剥片の周縁に小さな調整が連続して施されている。

Uフレイク（図30-9）綫長剥片の側縁の一部に、微細剥離痕が見られる。

磨製石斧（図31-1）乳棒状の石斧で、刃部は蛤刃である。石質は砂岩である。

敲磨器（図31-2～7）敲石1点、磨石2点、凹石5点がある。3は、磨製石斧の基部片を敲石に転用したもので、割れ面を利用している。表面には被熱による火ハジケが見られる。2は球状磨石で、器面全体が滑らかに整形されている。4は、扁平磨石の平坦面に複数の深い凹みが見られるものである。両側面に幅広の機能面を持ち、そこには敲打痕が見られる。また、両端部にも敲打痕が見られる。

凹石には、棒状縦を利用したもの（6）や扁平な棒円縦を利用したもの（5、7）とがある。5には両平坦面と片側面に複数の深い凹みが連なっている。凹みは敲打によるものが主体であるが、スリによるものも見られ、部分的に溝状を呈しているところやすり鉢状を呈しているところも見られる。

台石（図31-8）扁平な縦を利用したもので、器面は平滑である。

その他（図32-8）流紋岩の角柱状の縦を素材としたものである。全体に丁寧に整形され、丸みを帯びている。器面には、線条痕が見られる。

### D区出土の石器

D区からは、石匙1点、Rフレイク2点、Uフレイク2点、フレイク37点、磨製石斧1点、敲磨器6点、台石1点出土した。

石匙（図32-1）横型で、背面の末端に調整を加え、刃部を作出している。また、バルブのある厚い部分につまみ部を作出しており、一部にアスファルト状の物質が付着している。

Uフレイク（図19-1）遺構外から1点、第18号カマド状遺構覆土から1点出土している。

磨製石斧（図32-2）基部を欠損している。両刃で刃部に対し斜めに線条痕が観察される。緑色細粒凝灰岩製。

敲磨器（図32-3～7）磨石が6点出土し、球状磨石1点と扁平磨石5点がある。3はやや棒円縦を素材とした磨石で、器面全体が滑らかである。4～7は扁平磨石で、片側面に機能面を持つものである。機能面には程度の差はあるもののおおむね敲打痕が観察されている。また、7の両端部には敲打痕も見られる。

（畠山 昇）

表3 山下遺跡出土石器一覧表

	石斧	石鎌	石臼	石刃	スクレーパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	磨製 石斧	製造器	石皿・ 台石	その他	計
試掘区	1		1	1	7	10	7	60		3	2		92
C 区		1	1	1	7		3	31	1	8	2	1	56
D 区			1			2	2	37	1	6	1		50
計	1	1	3	2	14	12	12	128	2	17	5	1	198

## (3) 石製品(図30-10)

C区VI-181グリッドから、大型の三角型岩版が1点出土した。角を欠いているが、全体が丁寧に整形されている。無文である。

(畠山 界)

## 2 繩文時代以外の遺物

## 珠洲焼(図29 183~189)

D区において珠洲焼の破片が数片出土した。184と185は擂鉢の破片であり、ともにろくろ使用である。鉢口は184が約6本/cmの細いもの、185が3本/cmの太いものとなる。186もろくろ使用であるが、器種は不明である。187~189は壺の体部破片であり、外面に叩き目痕、内面に指や手による押さえ痕が残る。

(永嶋 豊)

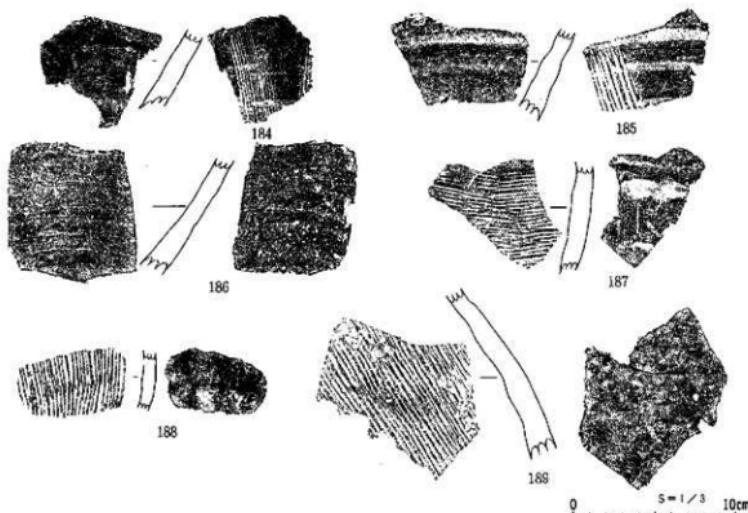


図29 山下遺跡出土珠洲焼

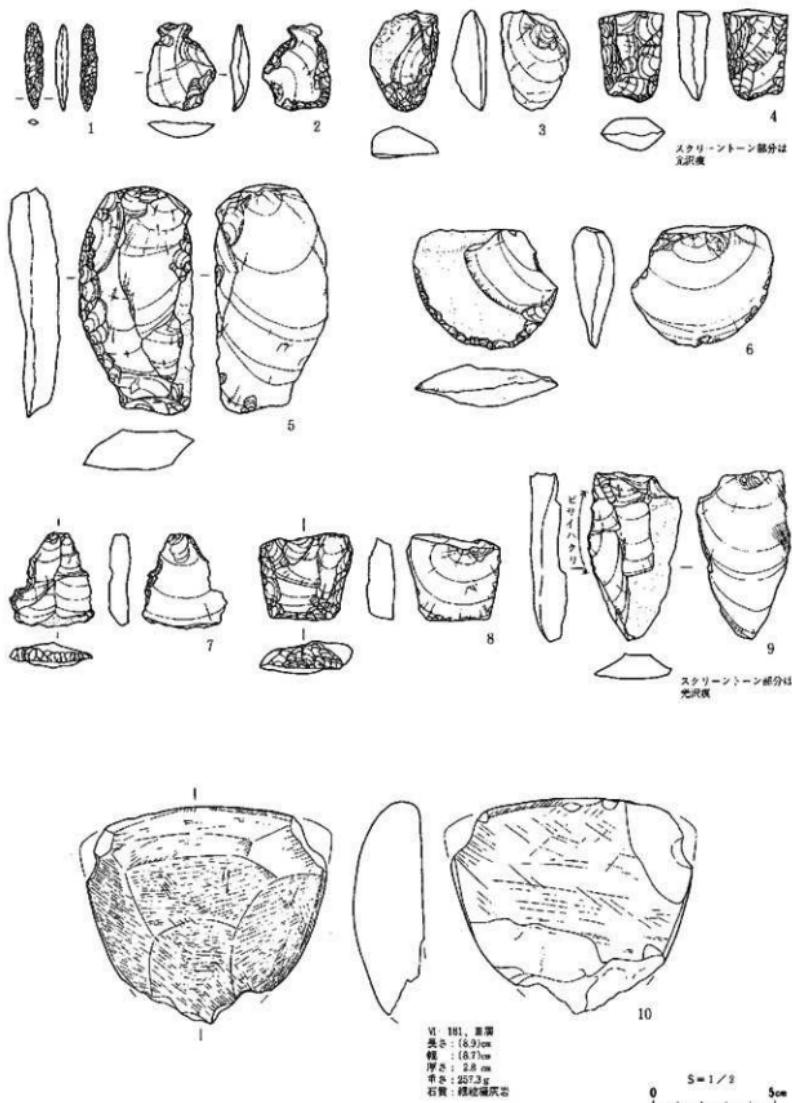


図30 山下遺跡C区出土石器1、石製品

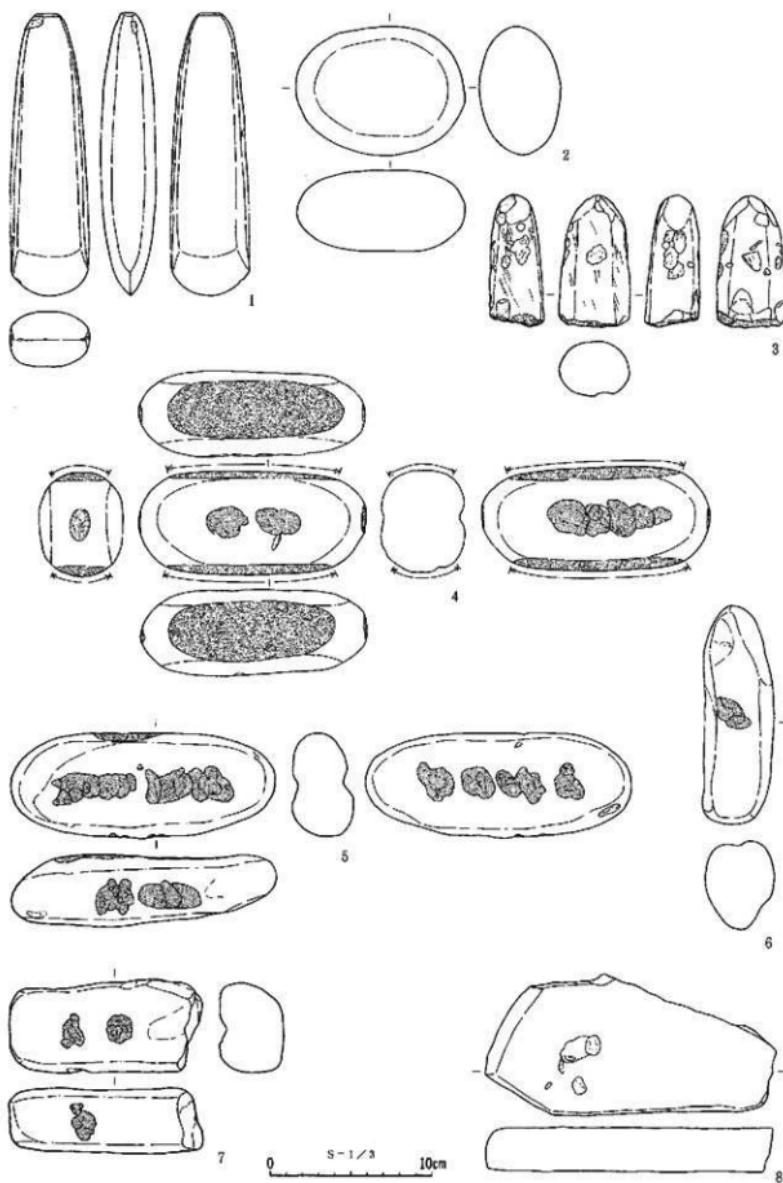


図31 山下遺跡C区出土石器2

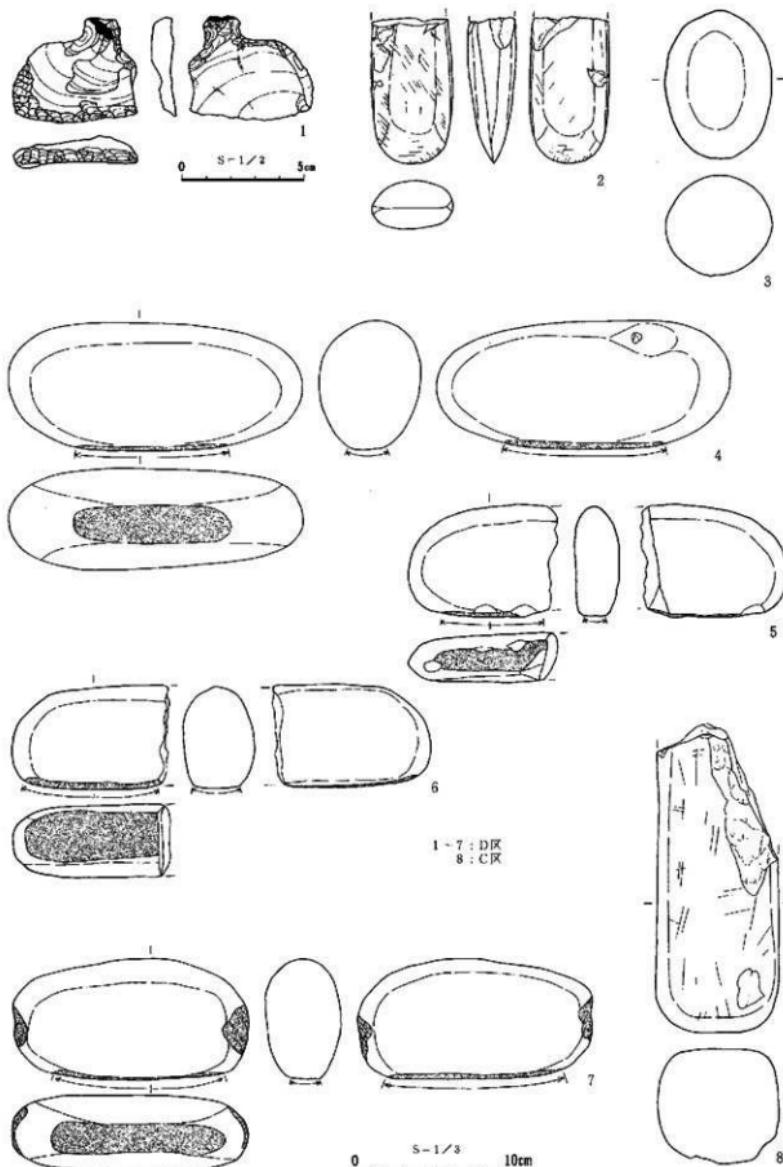


図32 山下遺跡C区・D区出土石器

## 第3章 學習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

2000年 3月 1日

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫 殿

1999年12月2日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

表示したB P年代は、1950年から何年前かの年数で、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(記号<)として表示してあります。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が $2\sigma$ 以下の時には、Modernと表示してあります。

表示した同位体比は標準値からのずれをパーミルで表した値です。 $\delta^{14}\text{C}$ の値は、放射線の測定で求めた試料炭素中の $^{14}\text{C}$ 濃度Aと現在の炭素の標準の濃度A'(std)を用いて、

$\delta^{14}\text{C} = [(A - A(\text{std})) / A(\text{std})] \times 1000$  によって算出された値です。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値です。

$\Delta^{14}\text{C}$ は試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ パーミルであったときの $^{14}\text{C}$ 濃度を計算した値です。この濃度を用いて表記のB P年代値が算出されています。したがって、表記の年代値は同位体効果による測定誤差を補正した年代値となっています。

## 記

Code No.	試料	B P年代と炭素の同位体比
GaK-20455	炭化材 from 山下遺跡	1040 ± 60
	第5号井戸跡(遺構確認面より30cm 下部)	$\delta^{14}\text{C} = -124.6 \pm 6.5$
		$\delta^{13}\text{C} = -26.7$
		$\Delta^{14}\text{C} = -121.6 \pm 6.5$
		以上

木越 邦彦

## 第4章 まとめ

今回の調査において、縄文時代の土器埋設遺構1基、土坑2基のほか、時期不明の土坑7基、カマド状遺構19基、井戸跡6基、溝跡2条、小ビット群2カ所が検出された。

時期不明な遺構の中では、C区で検出した第10・11号土坑の2基は縄文時代の可能性もあるが、他はすべて中世以降と考えられる。そのうち、もっとも多く検出されたカマド状遺構は、弘前市境開館遺跡から多数の検出例が報告され、三浦圭介氏により「中世型かまと」(三浦:1986)とされたものである。このような屋外に厨房施設としてのカマド状遺構がつくられるのは、中世に入ってからの現象と見られている。今回の調査では、出土遺物や年代のわかる遺構との重複している遺構がないため、構築時期を特定することが出来なかつたが、周辺から中世の珠洲焼破片が出土していることから、これに近い年代が考えられるかもしれない。

なお、カマド状遺構は平成9年度の調査でもA区で3基検出されているほか、今回の確認調査や米山(2)遺跡の確認調査でも多数確認されている。したがって、周辺には、まだかなりの数の遺構が広範囲に存在しているものと想定され、後日の発掘調査によって、その構築時期や構造上の特徴など、より具体的な事実が得られるものと期待される。

C区で検出された第5号井戸跡は木組方形縦板組隅柱横棟型の井戸枠を有し、浪岡町波岡城(波岡町教育委員会 1982他)、川内町高野川(2)遺跡(青森県教育委員会 1992)で、同様の形態の井戸枠が検出されている。当第5号井戸跡は放射性炭素年代測定法( $\rightarrow$ p60)により、 $1040 \pm 60$ 年BP値が得られているが、その諸特徴により周辺に多数確認されたカマド状遺構同様に中世の遺構と考えられ、当第5号井戸跡は、井戸枠の構造において高野川(2)遺跡例との類似性が認められるが、異なる点は、高野川(2)遺跡例では隅柱・横棟ともに加工された角材を用い、当第5号井戸跡では隅柱と横棟の一部に丸材が用いられることである。高野川(2)遺跡例は、隣接して掘建柱建物跡やカマド状遺構が検出されており、井戸内からは曲げ物、箸、15世紀後半とされる珠洲焼片が出土している。井戸枠材はヒノキアスナロと同定され、井戸は年輪年代法より1325年以降の室町時代の構築と説明されている。

(畠山、永嶋)



## 第3編 米山(2)遺跡

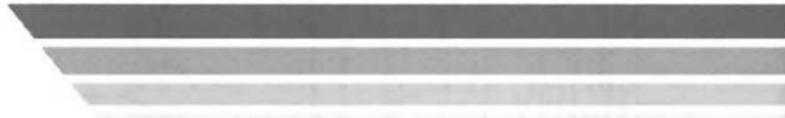


図33 米山(2)遺跡A区遺構配置図

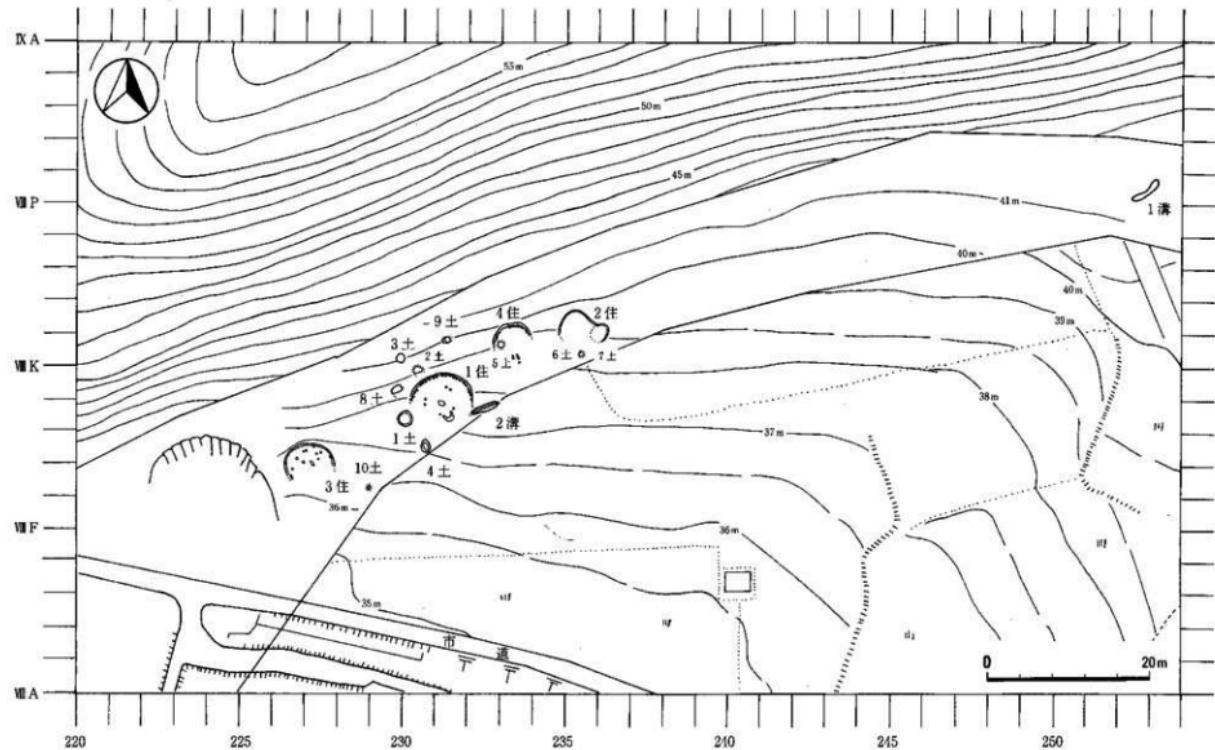


図33 米山(2)遺跡A区遺構配置図

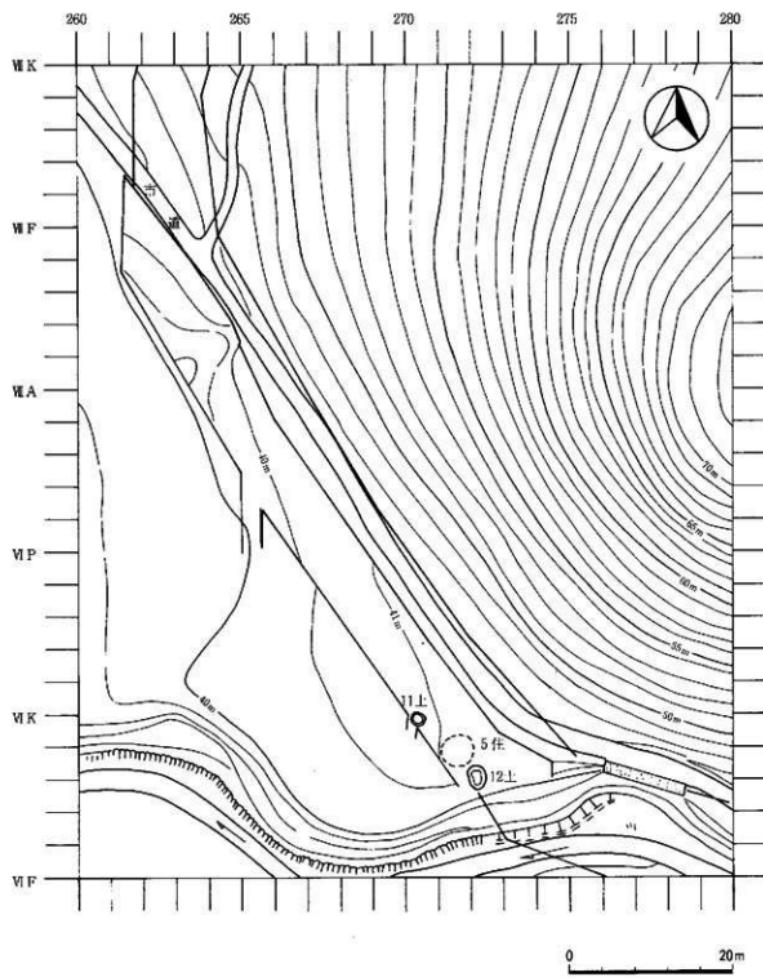


図34 米山(2)遺跡B区遺構配置図

## 第1章 検出遺構と出土遺物

米山(2)遺跡は、標高20~25mの水田地帯から遺跡北側に突き出た舌状丘陵裾部までの広大な遺跡である。今回の調査は、遺跡北側の標高35~40mの丘陵裾部の東西に離れた場所が調査対象となり、西側をA区、東側をB区と呼称して調査した。

検出した遺構は、A区で竪穴住居跡4軒、土坑9基、溝状土坑2基、B区で竪穴住居跡1軒、土坑2基である。以下、遺構ごとに記述する。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 第1号住居跡(SI-1) (図35、36)

位置：A区Ⅶ-I-230~Ⅶ-J-232グリッドにおいて、第1号土坑および第2号溝状土坑に隣接する。尾根状地形の南側裾部の斜面と平坦地との傾斜の変換部に位置するが、近年の耕作の為、斜面下側の削平によって平坦面が確保されたものと考えられ、住居構築時には現状よりはやや緩やかな傾斜地を選択し、住居を構築をしたものと考えられる。隣接する他のA地区内住居跡(SI-2・SI-3・SI-4)も同様の選地が行われている。

確認：第Ⅱ・Ⅲ層除去後に第Ⅳ層上面において黒色または黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認した。

重複：東南部床面が一部第2号溝状土坑と重複する可能性あるが、当住居跡の南半部消滅のため、不明である。

平面形・規模：斜面下側(南側)の壁・床面が残存しない楕円形の竪穴住居跡であり、出入り口部と考えられる施設と炉跡を結んだ線を主軸(短軸)とし、その中軸と炉跡で直角に交わる線を長軸とした。その場合主軸長約6.8m、直交軸長約8mの横長の楕円形となる。直交軸長は、ほぼ実際の数値に近いと考えられるが、主軸長は出入り口側の壁の推定位置によって異なってくる。主軸方向はN-28°~Wとなり、第4号住居跡の主軸方向と類似する。

堆積土：黒色または暗褐色のシルト層が多く、11層に分層した。北側斜面上方からの土流入による自然堆積と考えられる。

壁：北壁・東壁のみ壁の立ち上がりを確認できた。北～北東側部分は、基本層序Ⅵ層が壁面となり、東側では基本層序Ⅳ層(千曳浮石層)が壁面となる。壁面は、北側の最も残りの良いところで80cm程度、東側では40cm程度残存し、ほぼ直角に立ち上がる。

床面：住居跡の南側が残存しない状態であり、床面と考えられる硬化面は、炉跡以南では確認不能であった。総じて平坦な床面であるが、南側ほど床面レベルが下がる傾向にある。壁面と同じく、北～北東側は基本層序Ⅵ層が床面となり、一部しか残存していないが南側半分では、基本層序Ⅳ層(千曳浮石層)が床面となっている。また住居内東南部に床面のように硬化した千曳浮石層が2×4m程の範囲で凹凸状に堆積していたが、他の床面との比高差が最も高い部分で20cm程度と大きい。除去後に出入り口施設と小ピットが検出されたため、住居廃絶後の堆積土と考えた。

炉：住居内には中央に、90cm×60cmの規模の地床炉が確認された。楕円形を呈し、深さは10cm程度である。①～③層に分層でき、③層は焼土層となる。

柱穴：主柱穴6本、壁柱穴21本を検出した。主柱穴はpit1～6と考えられ、ほぼ台形状に配され、pit3・4は出入り口施設の住居跡中央部寄りに配置されている。pit1と2、pit5と6は近接しており、この主柱穴の配置は、岩手県二戸郡一戸町柵の木遺跡SI04住居跡の柱穴配置に類似している。主柱穴のpit1・2・5・6は底面径約30cm弱で一致し、出入り口施設付近のpit3・4は底面径約25cmとやや細くなっている。なおpit3・4は出入り口施設に伴う可能性もある。壁柱穴は直径約8cm～20cm程のものが見られるが、10～15cmのものが多く、ほぼ40～50cm間隔で壁際に並ぶ。住居の1/4にあたる床面北東部には10個ほどの壁柱穴が見られる。

施設：住居内南側部分に「コ」字状の出入り口施設と考えられる溝跡が検出された。溝は、住居跡中心(炉)方向に向けて開口する形となり、幅30～40cmであり、当遺構の左右(直交軸平行)幅・前後(主軸平行)幅共に約120cm、溝の深さは約30cmとなる。出入り口方向はS-28°～Eを向き、第4号住居跡例と類似する。

出土遺物：遺物出土は非常に少なく、土器も時期不明の小破片が数点出土したのみで、図示できたものは、土器3点、石器1点のみであった。

土器：1は十腰内I式期の鉢または浅鉢形土器の台部破片である。幅2mm程の沈線で横位の楕円文列が施され、台部外面と下面には丁寧なミガキがなされる。2層から出土しているが、当遺構が形態により縄文時代後期中葉～後葉の住居跡と考えられるため、この台部破片は住居廃絶後の埋没過程において入り込んだものと考えられる。2も1と同様で、後期前葉の破片の流れ込みと考えられる。3も同様の胎土・焼成を示し、流れ込みと考えられる。

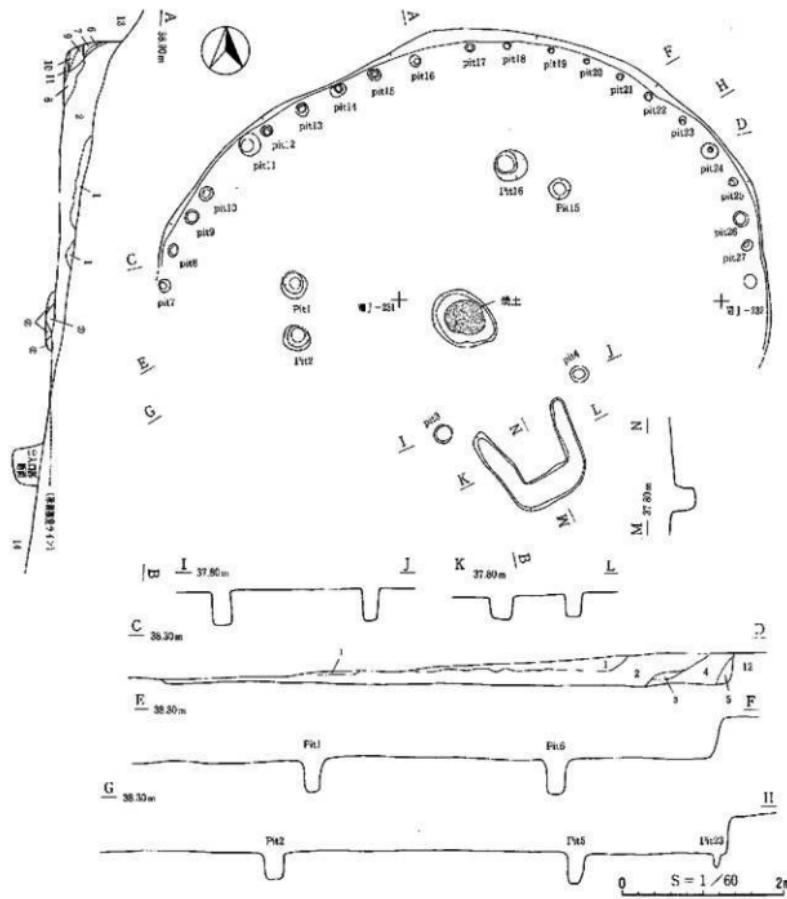
石器はスクレイパーが1点、石皿または台石の小破片1点が出土している。

小結：縄文時代後期中葉～後葉の住居跡の検出は、津軽地方では金木町神明町遺跡があげられるが、青森県八戸地方、岩手県北部に検出例が多く、炉を住居跡の中心または出入口寄りに据えて、円形または楕円形となるものが多い。炉を住居跡の中心として推定した場合は、出入り口は住居跡内に入り込む形となる。他遺跡の住居跡では、出入り口の多くは壁面に接した状態で検出されているため、当住居跡も同様である可能性は高い。また少数ではあるが、出入り口部付近の壁が内側に彎曲する例が、八戸市風張(1)遺跡第4号・第6号住居跡、柵の木遺跡SI01・SI04住居跡、軽米町大日向II遺跡SA63-64住居跡等でみられる。風張(1)遺跡第6号住居跡・柵の木遺跡SI04住居跡は、出入り口近くに小ピットが位置することも類似している。

柱穴の配置・出入り口施設を有すること等の遺構形態の特徴や隣接する第3号住居跡が縄文時代後期後葉十腰内V式期のものであることから、当住居跡も縄文時代後期後葉に属するものと考えられる。北東に位置する第4号住居跡とは主軸・出入り口の方向が類似し、第1・3・4号住居跡は同時期と考えられる。また平坦面西隣には第1号土坑、北側斜面には第2・3・8・9号土坑が位置するが、第1・3号土坑は、ほぼ完形の縄文時代晩期の土器を出土しており、これらの土坑群と住居跡群は若干時期を異にするものと考えられる。

(遺構・土器は永嶋、石器は畠山)

第3図 木山(2)道路



No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	%	深さ
pit 1	44.4cm	pit 8	45.8cm	pit 11	25.6cm	pit 18	25.8cm	pit 21	13.5cm	pit 26	25.6cm		
pit 2	32.8cm	pit 7	17.0cm	pit 12	24.6cm	pit 17	20.8cm	pit 22	18.8cm	pit 27	19.6cm		
pit 3	38.6cm	pit 8	21.0cm	pit 13	28.6cm	pit 18	18.5cm	pit 23	15.8cm				
pit 4	40.2cm	pit 9	17.1cm	pit 14	25.0cm	pit 19	18.5cm	pit 24	19.5cm				
pit 5	38.3cm	pit 10	20.7cm	pit 15	24.7cm	pit 20	14.1cm	pit 25	18.1cm				

層	色	土色	LH	特徴	層	色	土色	士性	LH	特	層	入仕作など
1	10YR21/7/1	土色	シルト	中	2	4.2m						
2	10YR21/1	黄褐色	シルト	中	3	4.2m						
3	10YR21/1	黄褐色	シルト	弱	4	4.2m						
4	10YR2/2	黄褐色	シルト	中	5	4.2m						
5	10YR2/2	黄褐色	シルト	中	6	4.2m						
6	10YR2/2	黄褐色	シルト	中	7	4.2m						
7	10YR2/3	暗褐色	シルト	中	8	4.2m						
8	10YR4/4	褐	シルト	中	9	4.2m						
9	10YR5/4	暗褐色	シルト	中	10	4.2m						
10	10YR6/4	明褐色	シルト	中	11	4.2m						
11	10YR6/4	明褐色	シルト	中	12	4.2m						
12	7.5YR6/4	明褐色	シルト	中	13	4.2m						
13	10YR6/4	暗褐色	シルト	中	14	4.2m						
14	10YR6/6	黃褐色	シルト	中								

図35 第1号住居跡1

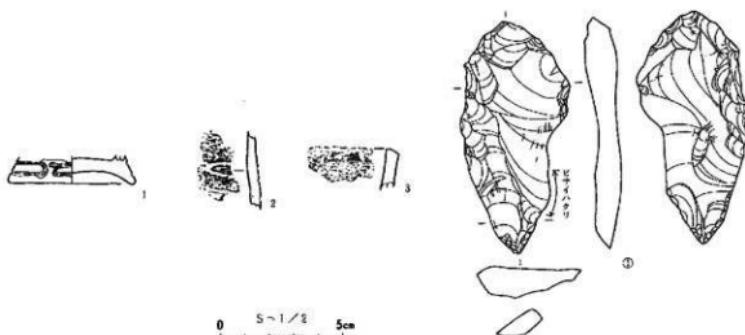


図36 第1号住居跡2

## 第2号住居跡 (S I - 2) (図37)

位置: A区画K-234~235・W-L-234~235グリッドに位置し、第7号土坑の西側・第6号土坑の北側に隣接する。選地は他の第1・3・4号住居跡と共通する。

確認: 第II・III層除去後に、第IV・VI層上面において黒色・黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認。

重複: 第7号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形・規模: 斜面下側(南側)が残存しない円形または楕円形の堅穴住居跡である。東西幅4.50mで、南北幅は不明である。

堆積土: 14層に分層された。北側斜面上方からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。

壁: 北側・東側・西側で壁の立ち上がりを確認した。最も残りの良い北側で約45cmの高さとなり、にはほぼ垂直に立ち上がる。東側では約20cm外側に開きながら、西側ではほとんど残っていない。基本層序VI層で構成される。

床面: 床面は北側を基本層序VI層、南側を基本層序IV層で構成する。

炉: 検出されなかった

柱穴: 検出されなかった

施設: 検出されなかった

出土遺物: 床面南側に、縄文時代後期後葉の注口形土器または壺形土器の体部破片が散在していた。球状の体部と考えられ、上下に幅2~3mmの浅い沈線を引くことで生じる1.5mm程の細隆線(微隆起線)を用いて文様を描いている。全体の文様モチーフの詳細は不明であるが、左上がりの入組み文が上下2段に展開するものと考えられる。繩文は施されず、体部外面には丁寧なミガキが施され、その上に鮮やかな赤色(10R5/8)顔料が塗布されている。体部下半内面には横方向の丁寧なナデ痕が見られる。また5はRL繩文を上下方向に施す深鉢形土器の口縁部破片である。同一個体の体部破片も覆土1層から出土しているが、流れ込みによるものと考えられる。

石器は石匙1点、スクレイパー(石鎌?)1点、Uフレイク2点、大型の台石1点が出土した。

時期: 床面出土の細隆線で入組み文を施す注口(壺)形土器は、縄文時代後期後葉・腰内V式期上器と考える。  
(遺構・土器は水鳥、石器は嵐山)

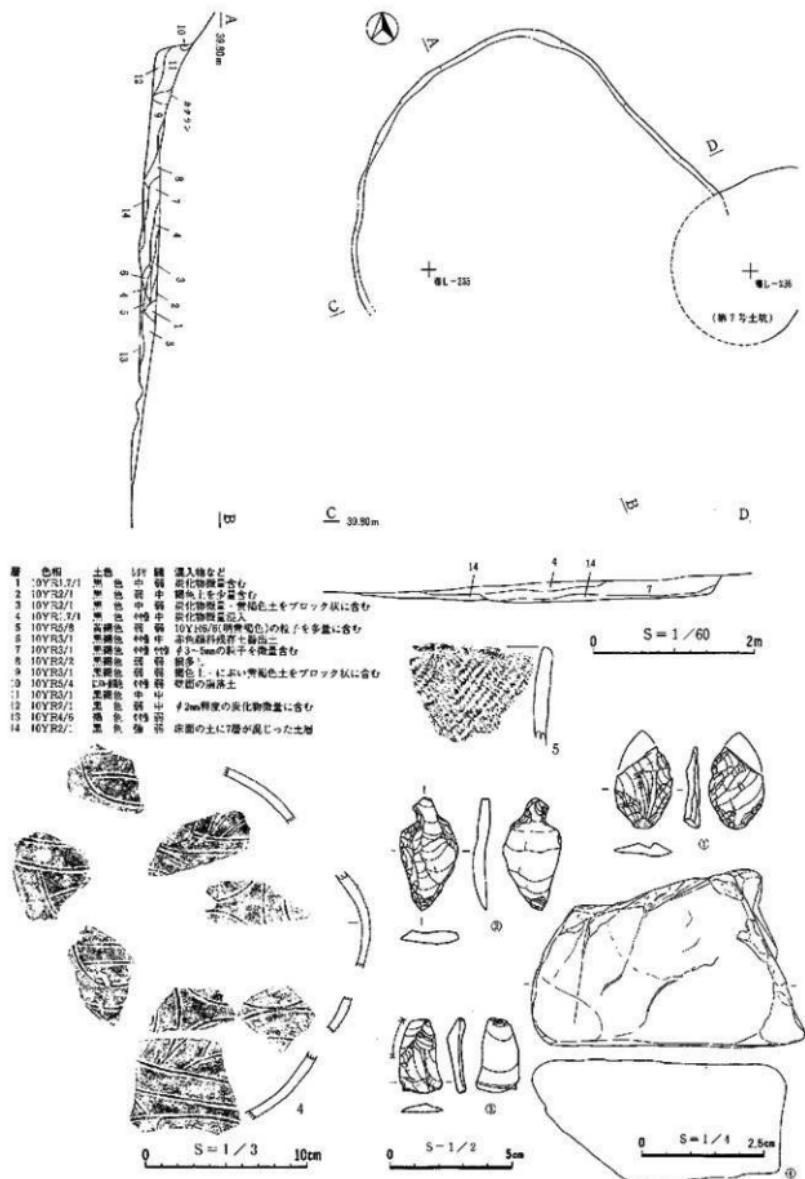


図37 第2号住居跡

## 第3号住居跡(S I - 3) (図38~41)

位置: A区ⅢG-226~227・ⅢH-226~227グリッドに位置する。

確認: 第Ⅱ・Ⅲ層除去後、第Ⅳ・Ⅵ層上面において黒色・黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認した。

重複: なし。床面南東部において一部風倒木による搅乱がみられる。

平面形・規模: 斜面下側(南側)の壁・床面が残存していない豎穴住居跡であり、南北幅は不明、東西幅は5.9mの円形の豎穴住居跡と考えられる。床の硬化面は北壁から南へ3.8m付近までである。

堆積土: 覆土は11層に分層した。炭化物や焼土粒を含む層が多いことが特徴である。北壁近くの床面に深鉢・鉢形土器が2点倒立状態で設置されており、またもう1点完形に復元できる鉢形土器も近くにみられ、床面に設置後に人為的に住居跡が埋め戻された可能性が非常に高い。

壁: 北側で45cm、西側と東側で30cmやや外側に傾斜しながら立ち上がる。

床面: 南側を風倒木や後世の削平で失い、北半に硬化面が良好に残存する。東西方向はほぼ平坦であるが、南北方向では南側ほど床面レベルが下がる傾向にある。北側の一部は基本層序Ⅵ層であるが、大部分が基本層序Ⅳ層である。

炉: 住居跡中央付近で20×30cmの楕円形の赤褐色(7.5YR4/6)焼土ブロックを検出した。付近にも小さな焼土ブロックがみられ、明確な地床炉は検出されなかったが、焼土から北西約80cmに位置するpit3としたものは、深さ5cm程と柱穴にしては浅く地床炉であった可能性も考えられる。

柱穴: 主柱穴と考えられるものは2箇検出した。pit1は深さ40cm、pit2は深さ20cmとなる。壁柱穴は第1・4号住居跡のように縄文時代後期中葉～後葉の住居跡に多く見られるが、検出した3箇の小pitは、木の根の穴等の誤認の可能性もある。また図示していないが9の土器の下には直径30cmの円形で深さ10cm程の落込みが確認された。住居内南側には主柱穴、壁柱穴とともに検出されなかった。

施設: 確認できなかった。またpit1とpit3の間を通る浅い溝状の塗みが見られたが性格不明である。

また住居内東側に東西幅約2.5mの広く浅い塗みを検出したが性格不明である。

出土遺物: 床面に倒立状態で1点の鉢・1点の有文の深鉢形土器が設置されていた。またその近くにもう1点設置後に土圧で潰れたと考えられる復元可能な鉢形土器が1点見られた。北～北西側の壁面から15～30cm程離れたところに、100cm弱の間隔で西から無文の鉢(8)、縄文のみ施された鉢(9)、羽状の縄文帯で入組み文が構成される有文の深鉢形土器(10)と並ぶ。8は口径20cm・底径6.7cm・高さ16.7cmの上げ底となる無文の鉢形土器である。口縁部は僅かに内側に肥厚する部分も見られるが顕著ではない。外面全面には幅4mmの工具痕を残す雑な範ミガキが施され、器表面には凹凸が多く見られる。外面のミガキは、口縁部付近では横方向、体部上半では左上⇒右下方向、体部下半では上⇒下方に向施される。口唇部は雑なミガキによって波状気味になる部分もある。内面にも4mm幅の工具痕を残す範ミガキが口縁部～体部上半までは横方向、体部下半では左下⇒右上方向に施される。外面に炭化物の付着が著しく、外面は体部下半に光沢を有するタール状の炭化物、内面は体部上半に焦げ付しが明瞭に残る。体部下半は炭化物が全く付着せず、それより上位と明瞭に区別できる。炭化物の付着パターンは9の土器も同様であり、この法量をほぼ同じくする2点の鉢形土器は煮沸においても同様の使用であったと思われる。9は口径22cm・底径7.2mm・高さ16.5cmの0段多条の單節羽状縄文が横回転で施される鉢形土器である。縄文原体の長さは約1.3cm程で、口縁部～底部直上まで14～15段の横方向の施文がなされている。外面底部付近のみ無文となり、8と同様のミガキが施され、口唇部の

ミガキ調整も同様であり、製作技法において強い共通性を有する。口唇部内面側はやや肥厚する所も見られるが顕著ではない。

10の土器は口径29.5cm・胴部最大径25.5cm・底径7.5cm・器高約26cm。口縁部から頸部にかけて平行沈線によって上下を区画された縄文帯が3段施される。上位より、1・2段目までは0段多条のLR・RLの羽状縄文であるが、3段目は両原体を用いて、狭い文様帯を斜行縄文で充填する。底部から3~4cm上までは主に0段多条RL縄文が施される。頸部と底部付近の縄文帯の間には、羽状縄文が充填されるやや複雑化した入組み文が5単位施される。すべて沈線区画の縄文帯で文様が描かれるが、施文順位は①口縁~頸部・底部付近の縄文帯施文、②割付に応じて基本となる入組み文の左側部分を体部中位~底部付近縄文帯まで施文、③②と対応する入組み文右側部分を頸部縄文帯~体部中位まで施文、④⑤の入組み文左側部分から底部付近縄文帯に垂下する縦位の弧状縄文帯を施文、⑥⑦の弧状縄文帯から横位に伸びる弧状縄文帯で右隣の入組み文と接続する。しかし5単位中2単位においてこの横位の弧状縄文帯は見られない。縄文帯間の無文部には工具痕を明瞭に残すミガキを施す。口唇部には内面側に肥厚する8単位の山形突起が施される。内面は体部下半と口縁部付近に、外側は口縁部から体部上半にかけて炭化物が明瞭に付着する。8・9・10のいずれも明瞭に炭化物が内外面の一定の部位に明瞭に付着しており、被熱によって器面の赤化・焼けはじけが見られ、繰り返しの煮沸目的の使用が考えられる。生活用具として使用されていた土器が、住居を廃絶するときに意図的に北側壁付近に逆さに設置したものと考えるのが自然であろう。6は床面出土の大きな波状口縁を有する鉢形土器の口縁部破片である。口縁部には波頂部両端に向かい合う山形突起、谷部には内面側が肥厚する山形突起が付され、おそらく4単位の波状口縁となり、波状文となる沿口沈線2条間にキザミを充填する。波頂部直下には縄文帯が垂下し、その間の谷部を中心とした部分に木葉状の羽状縄文帯が配置される。内面は調整痕が明瞭なミガキが施される。10の土器よりやや古手の要素を有している。

石器はスクレイバー4点、Rフレイク3点、Uフレイク1点、磨石3点、凹石2点が出土している。

時期：床面設置の有文深鉢形土器のやや複雑化した入組み文から縄文時代後期後葉の竪穴住居跡である。

(遺構・土器は永嶋、石器は畠山)

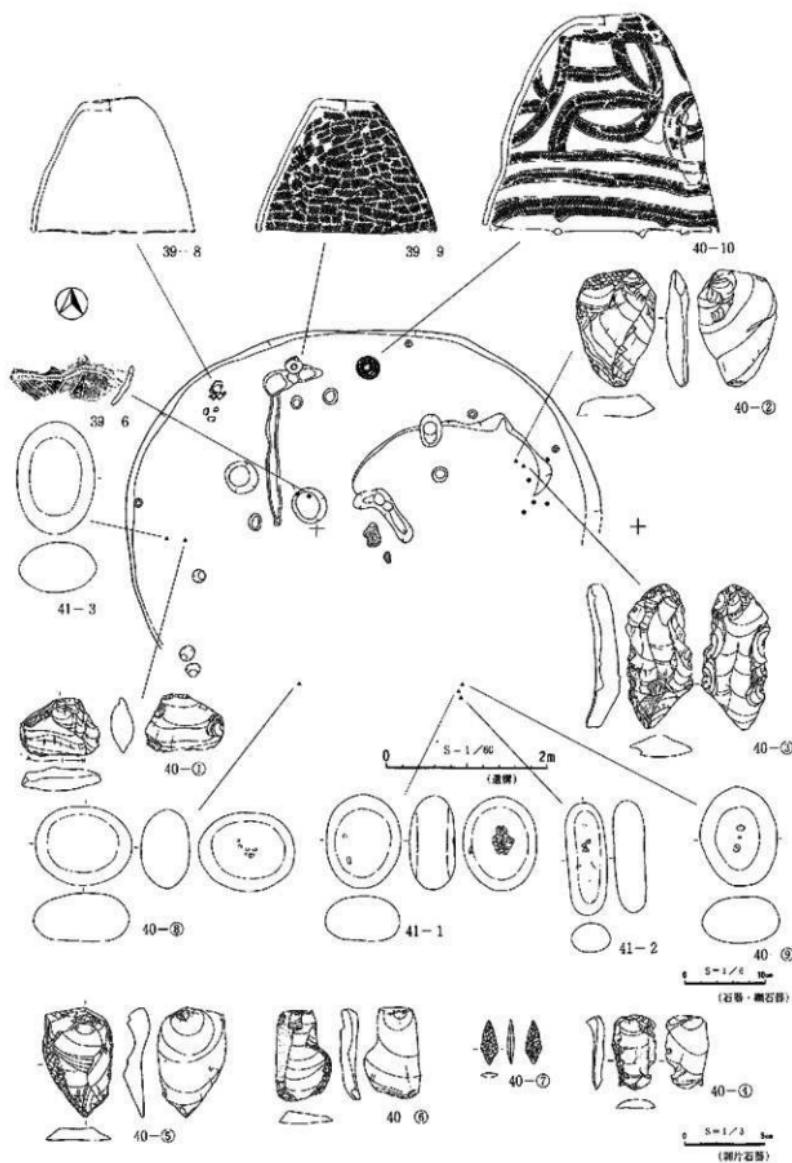


図38 第3号住居跡1 遺物の出土状況

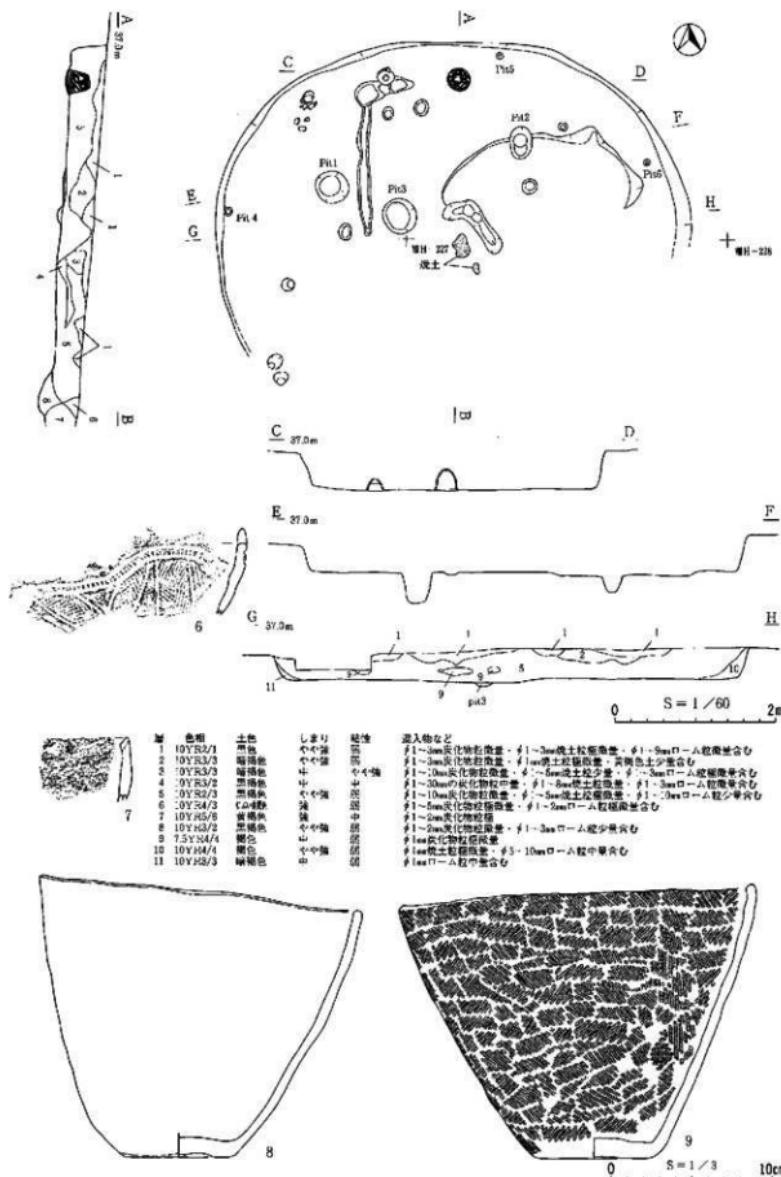


図39 第3号住居跡2

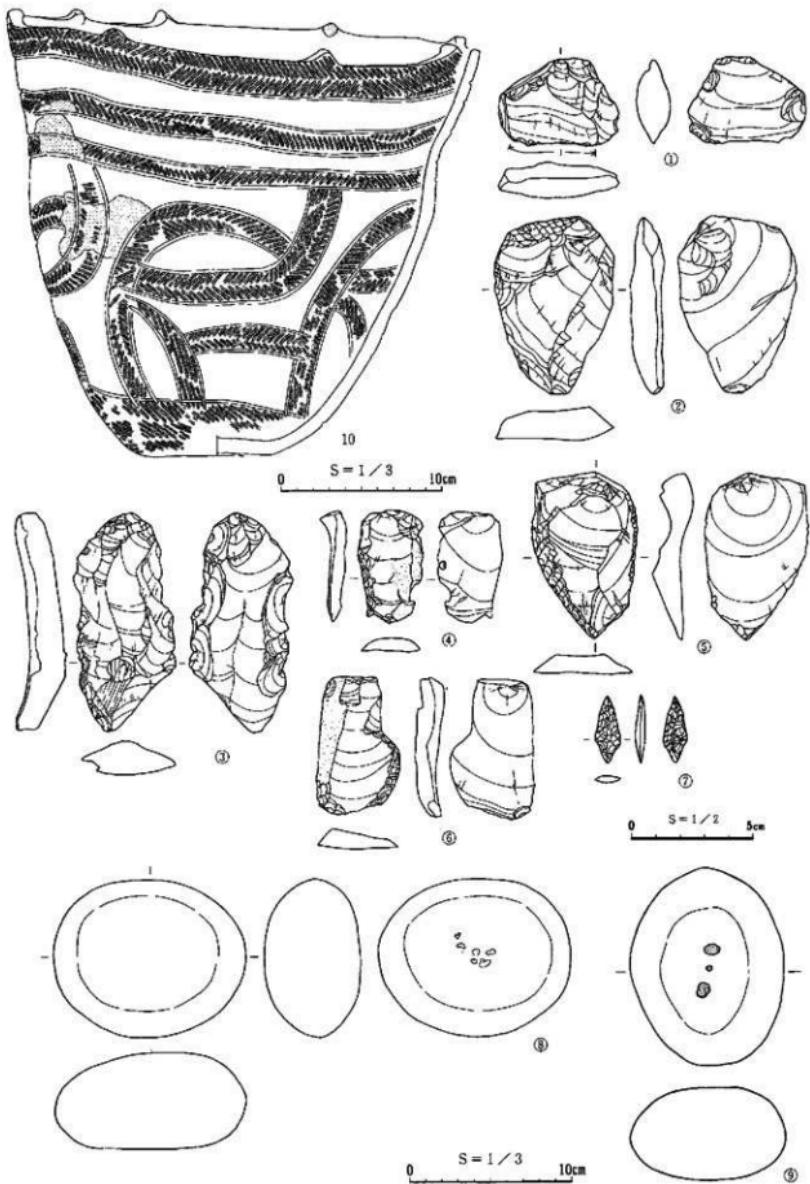


図40 第3号住居跡3

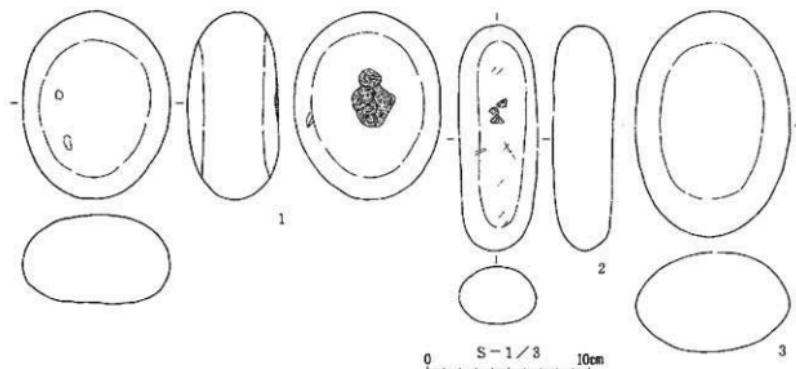


図41 第3号住居跡4

## 第4号住居跡(S I - 4) (図42・43)

位置: A区■K-232~233、■L-232~233グリッドに位置する。

確認: 第II層除去後、第IV・VI層上面において黒色・黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認。

重複: 住居内内壁寄りで第5号上坑と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形・規模: 斜面下側(南側)の壁・床面が残存しない竪穴住居跡である。平行する短溝として検出した出入り口跡中間を通る線を主軸と考えた。出入り口施設の外側を壁が周ると考えられる。主軸長4.2cm、直交長4.7cmの楕円形を呈すると推定される。主軸方向はN-28°-W向き、西南に位置する第1号住居跡例と類似する。

堆積土: 第5号土坑の覆土をあわせて12層に分層された。黒色・黒褐色の土が多く見られ、斜面上側からの土砂流入による自然堆積と考えられる。

壁: 北側斜面で60~80cm残り、やや外側に傾斜して立ち上がる。北側壁はすべて基本層序VI層で構成され、低い東西壁は基本層序IV層で構成される。

床面: 東西方向では平坦であるが、南北方向にやや傾斜し南側に下がる。

炉: 検出されなかった。

柱穴: 壁柱穴のみ15個確認された。深さはpit1(5.4cm)・pit2(5.6cm)・pit3(4.9cm)・pit4(8.0cm)・pit5(5.0cm)・pit6(4.5cm)・pit7(7.0cm)・pit8(7.7cm)・pit9(10.5cm)・pit10(17.7cm)・pit11(6.7cm)・pit12(9.5cm)・pit13(9.4cm)・pit14(7.7cm)・pit15(9.6cm)であり、平均約8cmである。

施設: 出入り口施設とされる長さ約45cm・底面幅約8cmの溝を2条平行する状態で検出した。深さは西側の溝が40cm・東側の溝が30cmとなる。出入り口方向はS-28°-E向き、第1号住居跡例と類似する。

出土遺物: 11は縄文時代後期初頭の深鉢形土器の破片と考えられ、5mm前後の隆帯に縄文が施される。12は無文のミニチュア土器の口縁部と考えられる。13は床面から出土した羽状縄文が施される鉢または深鉢形土器の体部下半であり、底径8cmの丸底氣味となる。底部の端部は調整によって丸みを帯び、工具痕を明瞭に残すミガキなど、第3号住居跡出土の3点の完形土器の底部端部のつくりと共通する。縄文原体の幅は1.3cm程度と9と共通する。接合面で割れ、上位の部位を欠する。

石器はスクレイパー2点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、凹石3点、台石1点が出土した。

時期：13の土器は第3号住居跡出土の3点の完形土器とその製作技法において共通し、ほぼ同時期の縄文時代後期後葉の住居跡と考えられる。また第1号住居跡と主軸・出入り口施設の方向が一致していることから、第1・3・4号住居跡はほぼ同時期と考えられる。（遺構・土器は永嶋、石器は畠山）

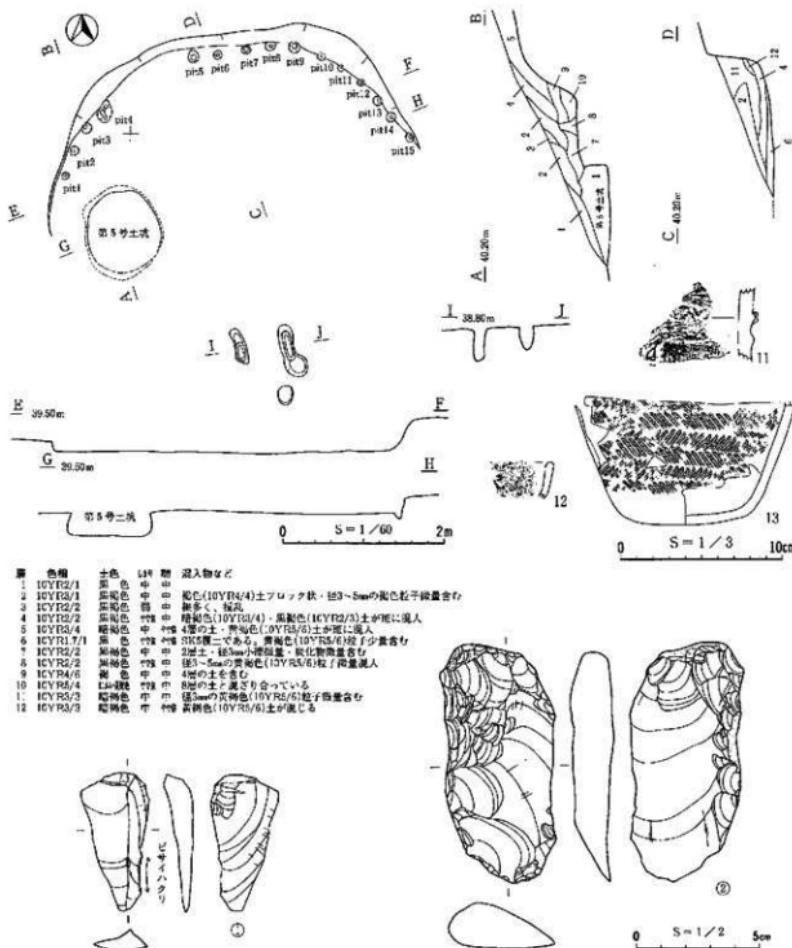


図42 第4号住居跡1

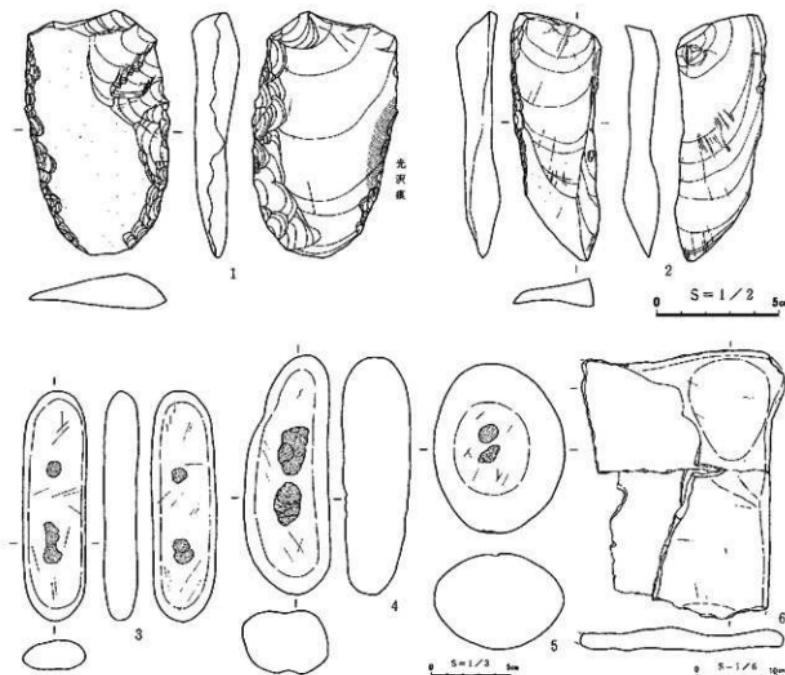


図43 第4号住居跡2

## 第5号住居跡 (S I - 5) (図44・45)

位置と確認：B区IV I・IV J-271グリッドに位置している。削平が激しく、床面の一部分と右開炉を確認しただけで、全容は不明である。なお、床面は石圓炉周辺まで連続していないため、これらが同時存在を示すものか時間差を示すものか断定できない。

平面形、規模：不明である。

壁・床面：壁は確認できなかった。床面は一部分を検出しただけである。

炉：南東部で石圓炉を検出した。かなり壊されているため全体の形状は不明であるが、原位置を保っている炉石から方形ないしは「コ」の字状を呈するものと思われる。なお、炉石が出土した辺りには、2個の浅い椭円形のpit (pit 6、7) を検出したが、これと炉の完形は不明である。なお、pit 6は55×70cm・深さ11cm、pit 7は75×90cm・深さ16cmの規模である。

周溝：検出できなかった。

柱穴：本住居跡に伴うと思われる柱穴を5個検出した。

堆積土：ほとんどが削平され、確認できなかった。

出土遺物：14~16は床面出土の土器である。14は4単位の波状口縁となる縄文時代中期末の有文深鉢である。全体をRLR複節縄文が縱走し、幅3cm程の無文帯で文様が構成される。無文帯部が文様を表

現しており、縄文部が文様を表現する段階よりは新しい大木10式期と考えられよう。土器のプロボーションも中期的器形を脱し、後期的器形を呈する。波頂部下に楕円形の文様が配され、それが無文帯で隣の楕円形文と連続し、無文帯で全ての波頂部下の楕円形文が横に繋がる。楕円形文頂部に1点、下部の無文帯との交差部に2点のヒレ状突起が付される。また波頂部内面には5mmほどの降帯が垂下し、二又に分かれて隣の波頂部の垂下降帯と繋がる。15は厚手の深鉢形土器であり、体部下半に焦げ付きと考えられる炭化物が付着する。16は1mm幅の細沈線間に凹部を有するボタン状貼瘤が付される。

17~21は炉覆上内から出土した。17は垂下した沈線が渦巻状を呈する。18は網代痕を有し、LR縄文が施される底部である。19~21は同一個体の大木10式期の平坦口縁の深鉢形土器である。

22~24はpit7内出土である。22~23は口縁部が無文となり、単節LR縄回転の深鉢形土器である。25~34は覆土内出土である。25は文様となる縄文帯中に刺突が施される深鉢であるが、内面に炭化物付着が著しい。26~28は後期初頭の深鉢形土器。29~31は縄文の単節RT左上⇒右下回転の深鉢形土器の口縁部同一個体である。32は網代痕とLR縄文が施される。33は単節LR縄文と結節文が縱方向に施される。34は無文の底部である。

石器は、床面から石皿、砥石、床面直上から磨製石斧、炉からスクレイパー、覆土からRフレイクが出土している。

時期：出土土器から、大木10式併行と考えられる。

(土器は永崎、遺構・石器は畠山)

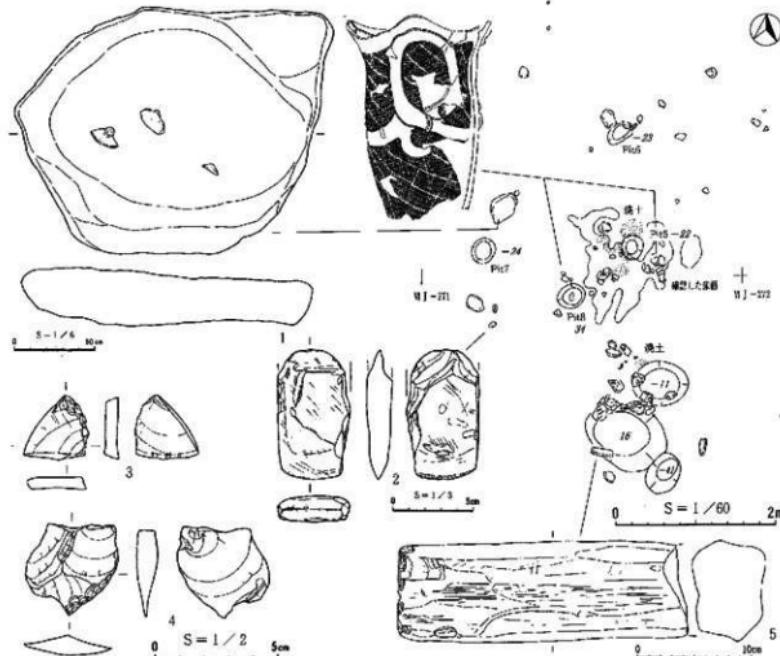


図44 第5号住居跡1

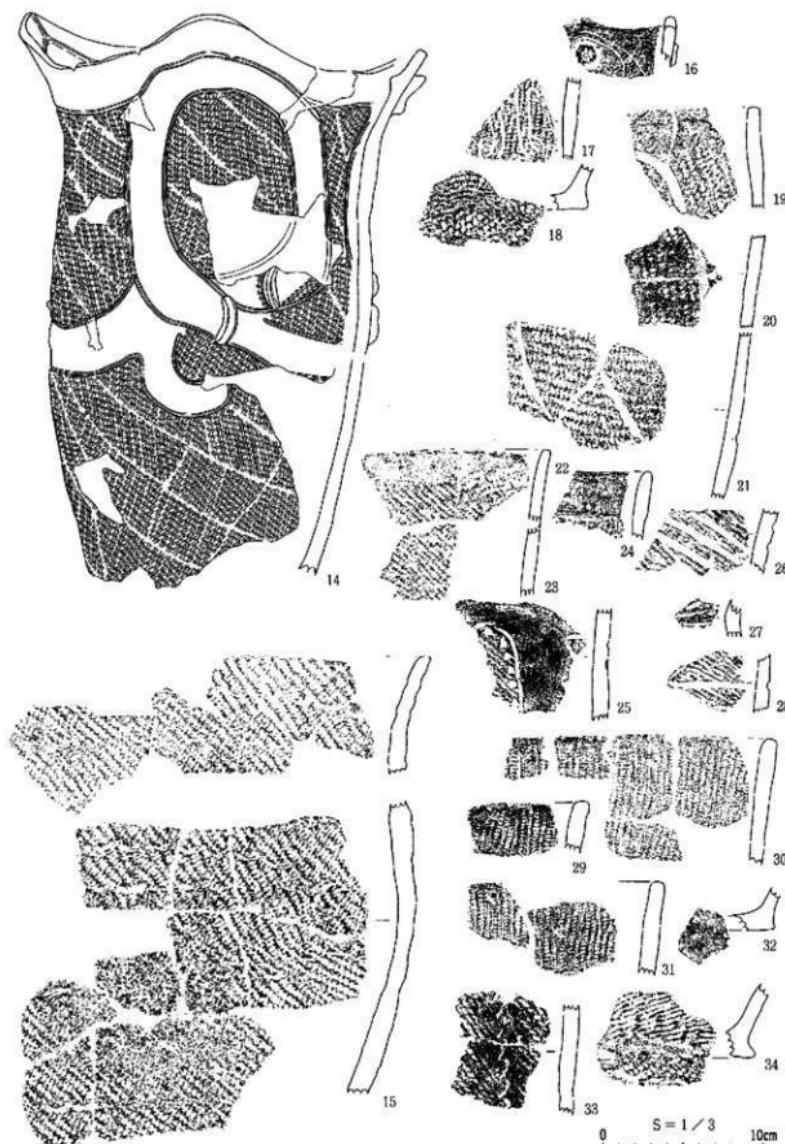


図45 第5号住居跡2

## 第2節 土 坑

### 第1号土坑（SK-1）（図46）

位置：A区■I-229・230グリッドの平坦地に位置する。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底面とも円形を呈している。確認面での規模は、直径1m80cm、深さ17cmの浅い土坑である。

壁・底面：壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土：縦まりのある黒褐色土のみが見られ、人為堆積と思われる。

出土遺物：北西壁の付近の底面から10cmほどの高さのところで、深鉢形土器と台付鉢形土器が出土した。

### 第2号土坑（SK-2）（図46）

位置：A区■J・K-230グリッドの斜面上に位置し、第1号住居跡の北側に隣接している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底面とも円形を呈している。規模は確認面で直径1m37cm、底面では直径1m47cmである。深さは、北壁で最大46cmである。

壁・底面：南壁は検出できなかったが、断面はフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

堆積土：3層に分けられ、黒褐色土と黄褐色土とに大別できるが、大半は黄褐色土である。

出土遺物：覆土から、縄文時代後期の土器片が1点出土した。

### 第3号土坑（SK-3）（図46）

位置：A区■K-229グリッドの斜面上に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底部とも直径92~97cm前後のほぼ円形を呈している。深さは、北壁で最大66cmである。

壁・底面：壁の上部は崩落しているものと思われるが、断面はフラスコ状である。また、土器が出土した部分の壁は、さらに外側へ掘り込まれ、オーバーハングの度合いが強い。底面には若干の凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。

堆積土：5層に分けられた。壁際に褐色土が見られるものの、大半は黒色土で占められている。

出土遺物：底面から、粗製の深鉢形土器と台石と思われる石器が出土した。深鉢形土器は、底面に密着して、倒立した状態で出土した。

### 第4号土坑（SK-4）（図47）

位置：A区■H-230グリッドの平坦地に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面・底面ともに梢円形を呈している。確認面における規模は短軸1m

11cm、長軸1m53cmで、深さ20cmである。

壁・底面：断面がすり鉢状で、底面から壁にかけて緩く立ち上がっている。そのため、壁と底面との境界がはっきりしない。底面には、やや凹凸が見られる。

堆積土：暗褐色土と黒褐色土の2層に分けられた。自然堆積と思われる。

出土遺物：なし。

#### 第5号土坑（SK-5）（図47）

位置：A区ⅦK-230グリッドの緩傾斜地にあり、第4号住居跡内の西壁寄りに位置している。

重複：第4号住居跡と重複し、本土坑の方が新しい。

平面形・規模：南側が不明であるが、確認面、底部ともに梢円形を呈している。規模は、確認面では短軸90cm、長軸1m、底部では短軸1m、長軸1m17cmである。深さは、北壁で最大30cmである。

壁・底面：底面は平坦である。

堆積土：締まりのある黒色土のみの堆積が見られた。

出土遺物：覆土から、フレイク1点が出土した。

#### 第6号土坑（SK-6）（図47）

位置：A区ⅦK-235グリッドの平坦地にあり、第2号住居跡の南側に隣接した場所に位置している。

重複：北側を柱穴状の小ピット（時期不明）に切られている。

平面形・規模：確認面、底部ともに梢円形を呈している。規模は、確認面で短軸73cm、長軸82cm、底部では短軸90cm、長軸110cmである。深さ45cmである。

壁・底面：底面は平坦である。

堆積土：締まりのある黒色土のみが見られた。人為堆積と考えられる。

出土遺物：なし。

#### 第7号土坑（SK-7）（図47）

位置：A区ⅦK・L-235・236グリッドの平坦地にあり、第2号住居跡東壁と重複した場所に位置している。

重複：第2号住居跡と重複している。新旧関係を把握できなかったが、本土坑の方が新しい可能性がある。

平面形・規模：西側の部分が不明であるが、短軸1m80cm前後、長軸2m40cm前後の不整な梢円形を呈すると思われる。深さは22cmである。

壁・底面：壁は垂直に近く外側へ立ち上がる。底面には凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。

堆積土：やや締まりのある黒色土や黒褐色土がほとんどで、底面近くに褐色土が見られるところもある。

出土遺物：なし。

## 第8号土坑（SK-8）（図47）

位置：A区ⅥJ-229グリッドの斜面上にあり、第1号住居跡の西側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：南側が検出できなかったが、平面形は、確認面、底面ともに円形を呈するものと考えられる。確認面における規模は、ほぼ直径1m40cmで、深さは、北壁で最大53cmである。

壁・底面：断面はフラスコ状を呈しているが、オーバーハングの度合いは弱い。底面は平坦である。

堆積土：3層に分けられたが、大半は黒褐色土で占められている。第1・2層は壁の崩落土であろう。

出土遺物：なし。

## 第9号土坑（SK-9）（図47）

位置：A区ⅦK-231グリッドの斜面上にあり、第1号住居跡の北側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面とも楕円形を呈している。確認面における規模は、短軸74cm、長軸95cmで、深さは、38cmである。

壁・底面：壁は垂直に近く外側へ向かって立ち上がるが、北東壁の一部がややオーバーハングしている。底面には、幾分凹凸が見られる。

堆積土：5層に分けられたが、大半が暗褐色土で占められている。

出土遺物：なし。

## 第10号土坑（SK-10）（図47）

位置：A区ⅧG-228グリッドの平坦地に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに円形を呈している。規模は、確認面で直径55cm、底部で直径90cmである。深さは、最大で67cmである。

壁・底面：壁の断面はフラスコ状を呈している。底面は平坦である。

堆積土：締まりのある黒色土が観察された。

出土遺物：覆土中央から、柳葉形石鐵が1点出土した。両面に丁寧な調整が施されており、薄く作出されている。

## 第11号土坑（SK-11）（図47）

位置：B区ⅥJ-270グリッドの平坦地にあり、第5号住居跡の北西に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに円形を呈している。確認面における規模は、直径が1m50cm～1m57cmであり、深さ15cmである。

壁・底面：壁は外側へ向かって急に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：3層に分けられたが、黒褐色土が主体である。

出土遺物：覆土から、縄文時代中期円筒上層b式の土器片が出土した。

#### 第12号土坑（S K-12）（図47）

位置：B区VIH・I-272グリッドの平坦地にあり、第5号住居跡の南側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに不整な梢円形を呈している。確認面における規模は短軸1m06cm、長軸1m37cmで、深さは27cmである。

壁・底面：壁は緩く外側へ向かって立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：4層に分けられたが、黒褐色土が主体である。

出土遺物：なし。

（畠山 畿）

### 第3節　溝状土坑

#### 第1号溝状土坑（S V-1）（図48）

位置：A区VII P-252・253グリッドに位置する。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は溝状を呈しているが、北側に向かって湾曲し、弧状を呈している。規模は確認面で短軸40~58cm、長軸3m90cm、底面では短軸15~20cm、長軸4m08cmである。深さは、最大65cmである。

壁・底面：壁は、短軸では垂直に近い立ち上がりで、長軸の両端では袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であるが、西から東側にかけて若干傾斜している。

堆積土：5層に分けられたが、締まりのない黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土等の堆積が見られた。人為堆積と考えられる。

出土遺物：なし。

#### 第2号溝状土坑（S V-2）（図48）

位置：A区VII I-232グリッドに位置する。

重複：西端が第1号住居跡と重複しているように見える位置に検出したが、重複関係は確認できなかつた。

平面形・規模：確認面では短軸73cm、長軸3m28cm、底面では短軸15cm、長さ3m57cmの溝状を呈している。深さは、最大で1m28cmである。

壁・底面：短軸における壁は、底面から垂直に近い立ち上がりで、確認面から50cmほど下の辺りからラッパ状に外側へ広がり、全体にY字状の断面となっている。長軸の両端では袋状にオーバーハングして掘り込まれている。底面には凹凸が見られ、西側が浅く、東側に向けて徐々に深くなっている。

堆積土：9層に分けられたが、黒褐色土と黄褐色土とに大別でき、人為堆積の様相を見せている。

出土遺物：なし。

（畠山 畿）

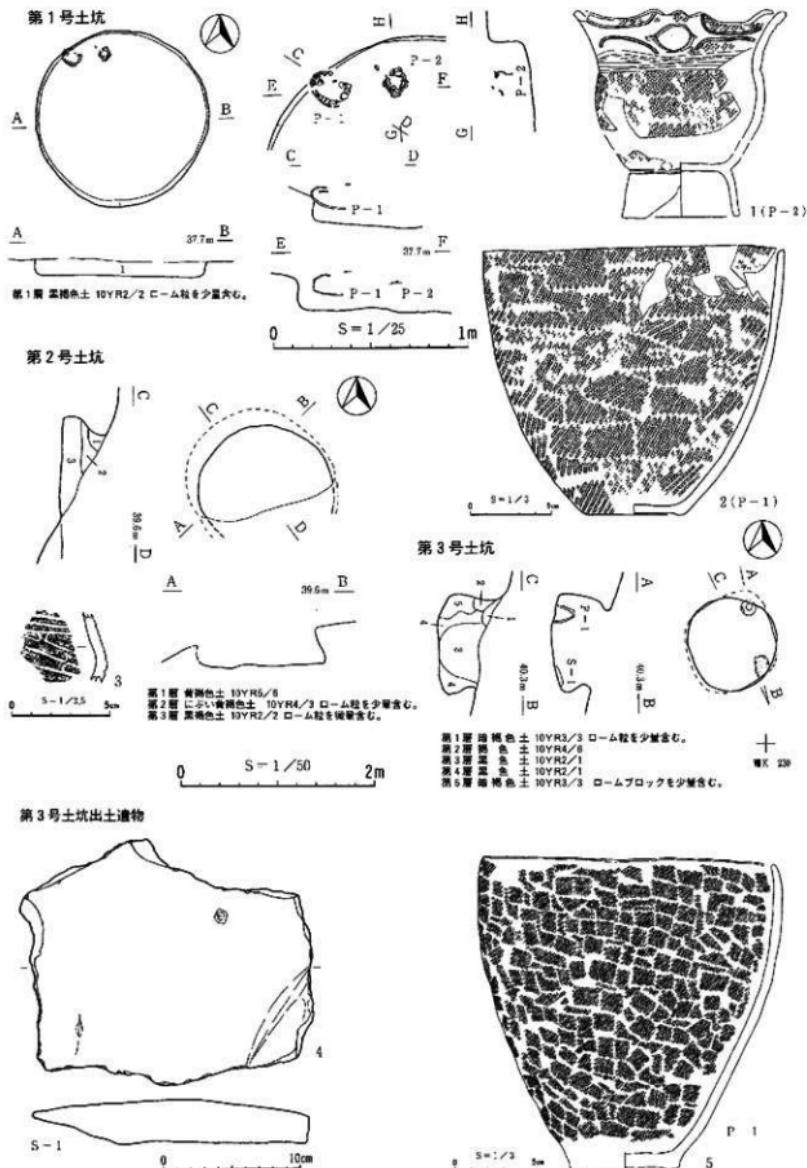


図46 第1号～第3号土坑

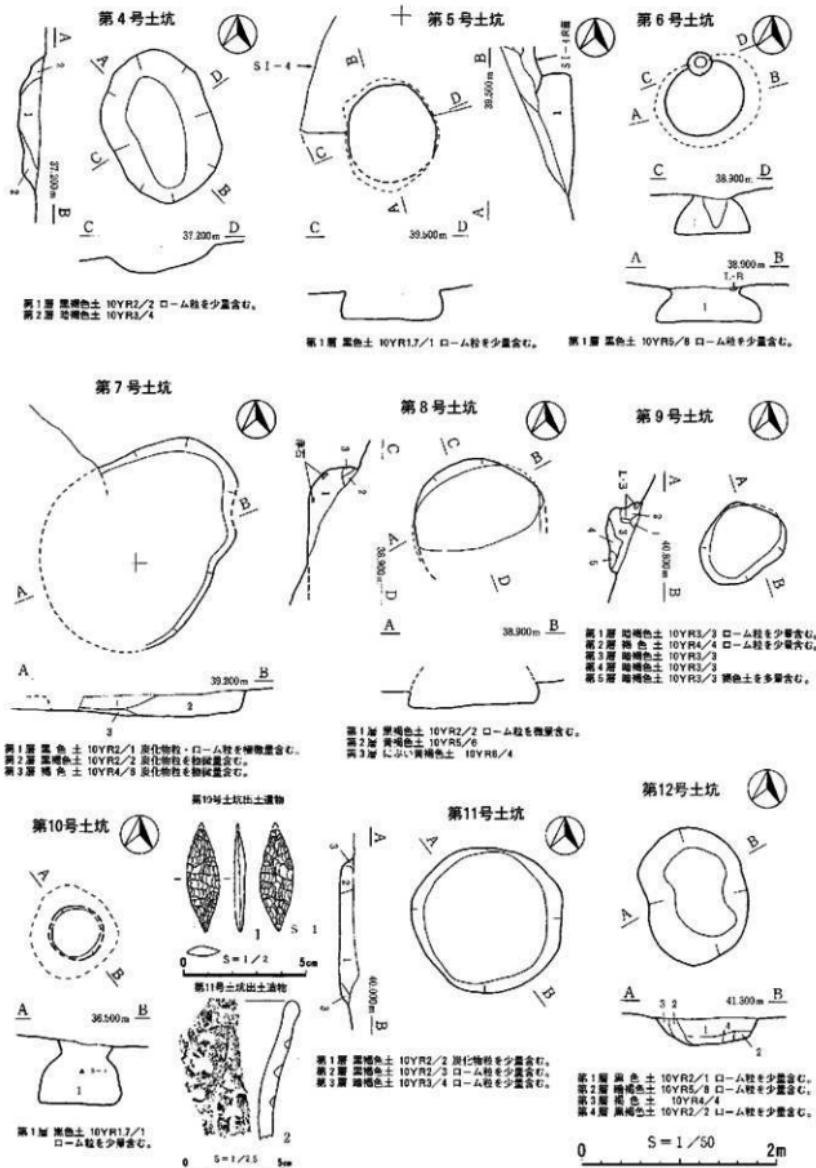


図47 第4号～第12号坑

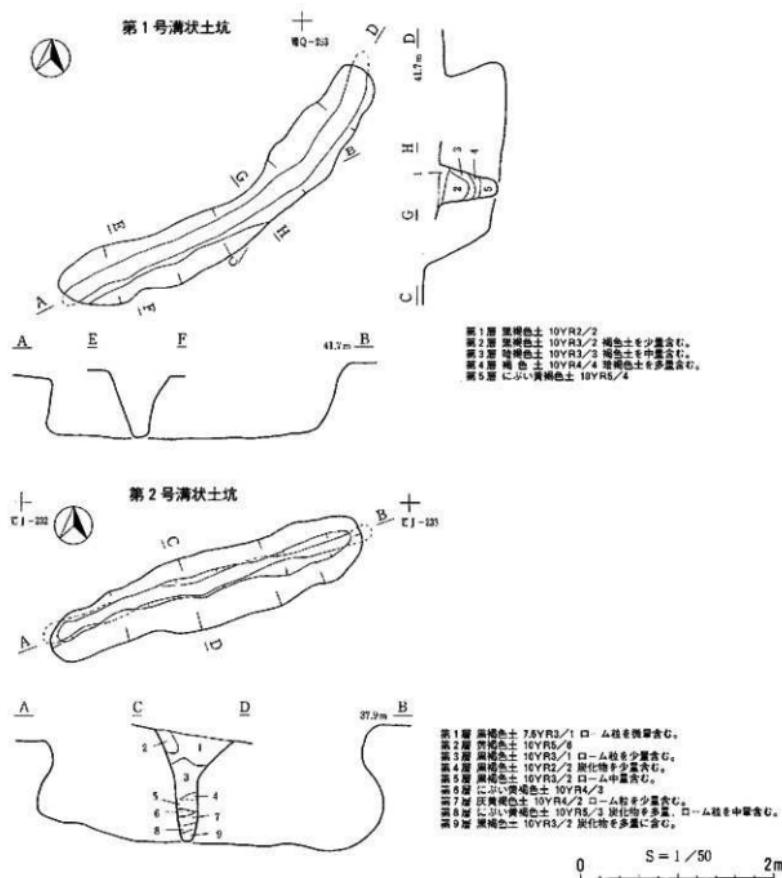


図48 溝状土坑

## 第2章 出土遺物

### 第1節 土 器

#### 1 A区出土土器

【縄文時代中期終末～後期初頭の土器群】(図49-35～42・44)

【地文のみが施される深鉢形土器】(図49-35～39・44)

35・36は、口頭部を緩やかに外反するものである。35・39・44は単節縄文または(網目状)撚糸文が施されるが、すべて地文原体は縦方向の回転による。39・44は底部に網代痕が認められる。10は口縁部押圧により波状気味の口縁となる。

【隆線上に縄文が施される深鉢形土器】(図49-40～42)

40は器表面に沈線文が施され、単節RL縄文が充填される。第4号住居跡出土の42-11と同一個体である。41は単節RLが施される隆線が上下対象のモチーフを構成する。42は(推定)口径7.0cm・(推定)底径4.0cm・器厚7.7cmの小型深鉢である。口頭部は無文で、幅7mmほどの頭部突帯には単節RL原体の側面压痕、体部には単節RLが縦回転によって施される。

【縄文時代後期中葉～後葉の土器群】(図49-50-43・45～61)

【地文のみが施されるものまたは無文の深鉢形土器】(図49-43・45～47)

45は底部の瘤部を丸みをもって作り出すことや底部内面中央がやや盛りあがる点に、第3・4号住居跡出土の8・9・10・13と共に見出せるために後期中～後葉と考えた。46は無文であり、第3号住居出土の8と内外面の粗雑な調整で類似している。

【地文のみが施されるものまたは無文の鉢形土器】(図49-50-48～49・59)

48も第3号出土土器群と同様に、内外面に粗雑なミガキが施される。59は口径8.8cm・頭部径6.4cm・底径3.0cm・器高7.2cm・頭屈曲部径3.5cmの口頭部が器高の約半分を占める袖珍土器と考えられる。胴部が上げて底の底部から丸みをもって立ち上がり稜を持って短く内傾し器高中位付近で外反する。

【有文の深鉢・鉢形土器】(図50-50～58・60～61、61は97年度試掘時出土の参考資料)

50・51は口縁部または頭部に刻目帶が施された鉢であり、第3号住居跡と同一または隣接グリッドからの出土である。50の器面調整は丁寧なミガキであり、内面に炭化物が付着している。54・55・56は同一個体であり、口縁部と体部下半のみの残存である。0段多条の異種の原体による羽状縄文帶で本葉文が施されるものと考えられる。61は97年度の試掘調査において、VIP-218 グリッドから出土したもので、0段多条異種原体の羽状縄文帶で口縁部にクランク状文、体部に鍵状入組文が施される。波状口縁の谷部と体部の鍵状入組文の交差部に瘤が貼付され、その頂部はキザミによって2分される。

【縄文時代晚期・時期不明の土器】(図50-62～63)

62は無文帶に幅2mm程の沈線で、体部上半に斜位の平行沈線または四角?のモチーフが施され、文様帶の下部に左右2条ずつの段違いの沈線が施される。外面に炭化物が付着しており、煮沸用の甕・深鉢と考えられるが、時期不明である。63は砲弾形を呈する晚期の深鉢形土器と考えられる。

## 2 B区出土土器

【縄文時代中期の土器群】(図51-52-64~89)

【円筒上層 b 式期の特徴を有する土器群】(図51-64~71)

64~70は口頸部に貼り付けられた隆帯間に、縄文原体を用いてC字形の圧痕を施した土器である。64・65は同一個体で、扁状突起の上部中央が径1cmの円形に貫通しており、その下に横長椭円に隆帯が貼付される。66は扁状突起部に縄文原体側面圧痕が見られる。70の縄文原体によるC字形圧痕は他に比べて浅く、また隆帯もやや細く、器厚もやや薄い。

【円筒上層 b ~ c 式期の特徴を有する土器群】(図51-72~77)

72・73は扁状突起に波状の隆線が貼付され、隆線間に無節L・Rの側面圧痕が施され、竹管状の工具で半月形の刺突列が施される。74~76も無節L・Rの側面圧痕が施されるが刺突は四角形である。

【円筒上層 c 式期の特徴を有する土器群】(図51-52-78~89)

78・79は隆帯間に四角形の刺突列が施される。78は器厚6mmと薄く比較的作りが良く、79は器厚・隆線幅も大きい。80は径5mmの丸形の刺突列が施される。82はボタン状の貼瘤が、扁形突起の中央部に貼付される。64・65の穿孔と対照的である。83~86は口縁部に波状を意識した隆線が貼付されるもので、85・86の隆線は幅3~5mmと薄く、隆線上には縄文は施されない。

【縄文時代中期末(大木10式期)の土器群】(図52-53-90~114)

【有文またはヒレ状突起が施される深鉢形土器】(図52-53-90~101)

90は口頸部と沈線区画内は丁寧なミガキが施されて無文部となる。93は沈線区画内に縄文施文後、幅5mmほどの四角形の刺突列が施される。94・95・98~100は、主に口縁部内上面端にヒレ状突起を有する深鉢である。

【地文のみが施される深鉢形土器】(図53-102~114)

102・107~112は同一個体であり、第5号住居跡出土土器にも同一個体片が見られるために大木10式期に含めているが、同住居跡には後期初頭の土器も見られ中期末~後期初頭に位置づけられる土器と考えたい。114は肩部で膨らみ、結束羽状縄文が施されるものである。

【縄文時代後期初頭の土器群】(図54-55-115~135)

【陸線で文様が構成される深鉢形土器】(図54-115~119)

115は緩杉状のモチーフが幅4~5mmの隆線で構成される。平行する縦隆線を軸に左右対称に斜位の隆線が貼付されている。所謂、狩獵文土器の1要素である「樹木文」(福田友之 1988)が施された深鉢である。隆線間はナテ”調整が施されるが工具痕が明瞭に残る。116・117は同一個体であり、これも他遺跡の狩獵文土器と同様に、横線と縦線が見られる。

【袖珍土器】(図54-120~121)

120は上下3条の連弧文が波底部下で横位に連続し、底部直上にも1条の横走沈線が施される小型の鉢形土器である。121は外面が無文、器高8.2cm程度の筒形の土器である。

【沈線により文様が施される深鉢形土器】(図54-55-122~135)

122~126は同一個体で、口頸部がキャリバー状を呈し、頸部~体部上半にかけて三角形状文・渦巻状文が施される。器表面に砂粒が目立つ。127~131は渦巻状文または円形文が施されるものである。

124は口縁部に単節LR、頸部に単節RLが施され、2条の平行沈線が施される。

【沈線内に線状痕が残る土器群】(図54・55-132~135)

133~135は、沿口沈線・三角形状文・渦巻状文が施される土器であるが、沈線内に施工具痕が平行線状に明瞭に残る。施工具は断面が丸い植物の茎状のものと考えられる。

【縄文時代後期中葉～後葉の土器群】(図56~58-136~174)

【地文のみが施される深鉢形土器】(図56-136~145)

口唇部が肥厚するもの(136・138・139・140・141)がみられ、縄文は0段多条RL・単節LR・異種原体による羽状縄文が施される。143は櫛歯状工具による条線が縱走し、144は無文である。

【地文のみが施される鉢形土器】(図56-146~148)

単節LR(146)・異種原体羽状(147)・同原体羽状(148)の縄文が施される。

【無文の鉢形土器】(図56-57-149~155)

149~151は同一個体で、波状口縁波頂部が内外面側に肥厚し、150のみ上位から梢円形の刺突が加えられる。152・153は無文の波状口縁が肥厚するものである。154は口縁部が肥厚し、内外面にミガキが施される。台形状器形を呈するものであろうか。

【有文の深鉢・鉢形土器】(図57-156・158~166)

口頭部に刻目帯(列)を有するものが多くみられ、158は上下の平行沈線を弧状の短沈線で結ぶもの、164は縄文帯による木葉文、166は口縁部の刻目列の下位に3本一単位の縱横の沈線で文様が構成される。概ね後期中葉のものと考えられる。

【壺形土器・注口土器】(図57-58-167~174)

壺は0段多条の縄文帯間に横位の無文帯がみられるものが多い(167~170)。172・173は頸部の縄文帯交差部・肩部の縫状入組文に瘤が貼付され、注口である可能性もある。

【縄文時代晚期の土器群】(図57~59-157・175~197)

【深鉢形土器】(図57・58-157・175~186)

178・179・182~186は頸部に3条の平行沈線が施されたもので、178は口唇部にB突起が付され、188は口縁部に結節沈線が見られる。157は魚眼状三叉文が施され晚期初頭の様相を示す。

【鉢・浅鉢形土器】(図58-59-187~189・192)

187は口唇部に刻みが頸部に3条の横走沈線が施される煮沸用の(深)鉢形土器である。188・189はいずれも口唇部にB突起が施され頸部は凹線または無文である。188は内面に炭化物が付着している。192は変形工字文が施されるもので晚期最終末大洞A'式古段階と考えられる。

【台付深鉢形土器】(図59-190~191)

190は刻みを有する突起が付され、頸部の横走沈線間に列点文が施され単節LR縄文が施される。台部が無文の大型のもので、台部・体部下半が被熱により赤化しており煮沸用と考えられる。

【壺形土器】(図59-193~197)

193・197は、隣接するグリッドから出土し、晚期後半段階のものと考えられる。193は肩部の上位と体部中位最大部に横位の工字状の文様、その中にZ字状の入組文が、横位に展開する。渡島半島南部の聖山式土器に特徴的な横位連続工字文と連繫入組文が一個体中に施されるものである。

【弥生時代前期の土器】(図59-198~199)

198は連結型変形工字文、199は波状工字文が施される煮沸用の鉢または台付鉢と考えられる。

(永鶴 豊)

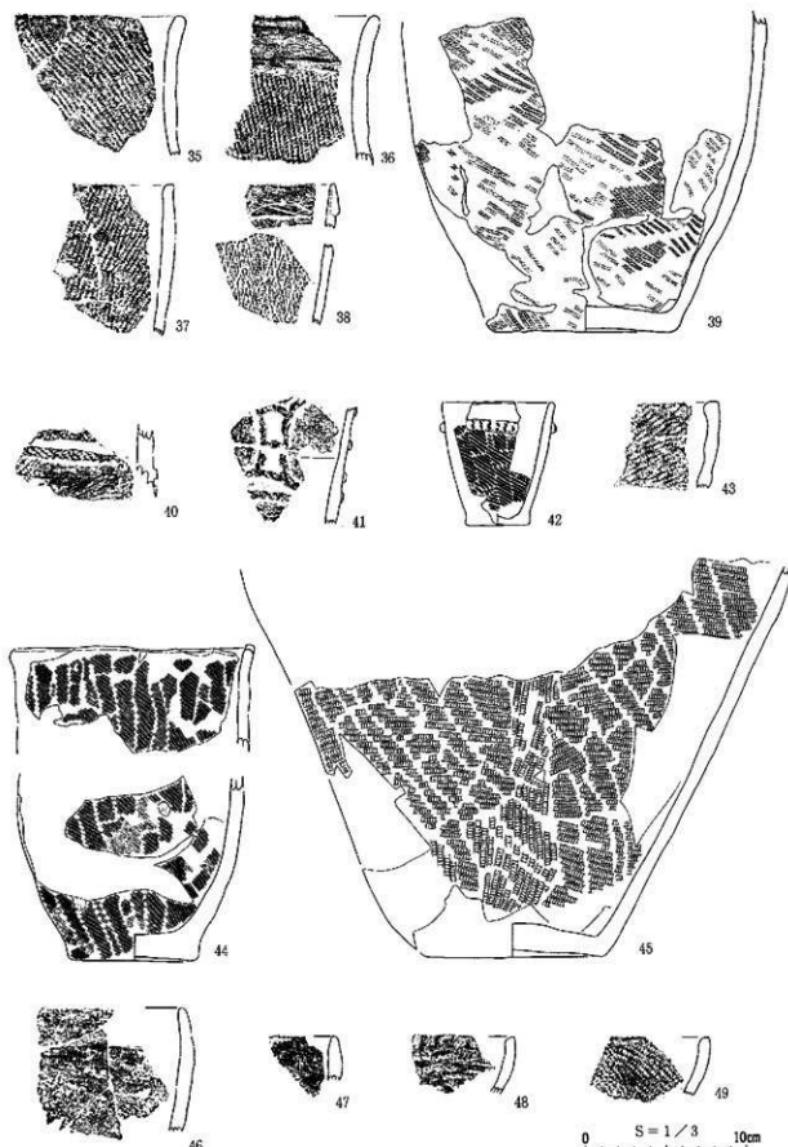


図49 米山(2)遺跡A区遺構外土器 1

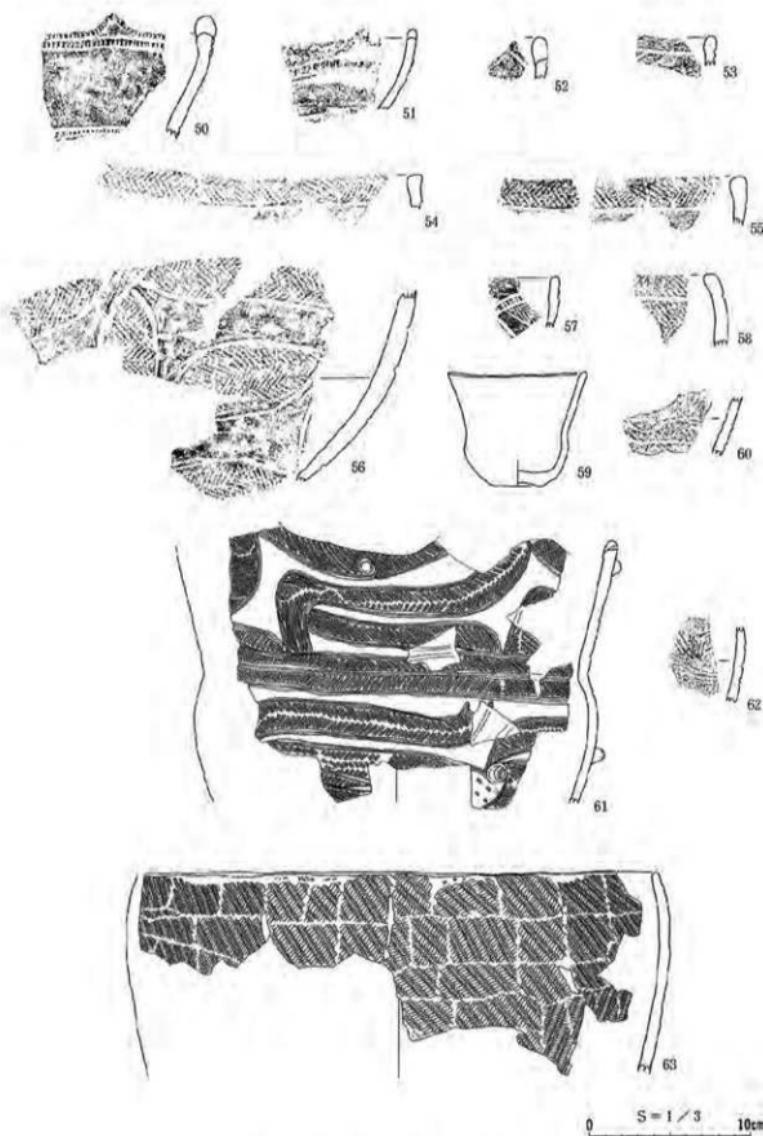


図50 米山2遺跡A区遺構外土器2

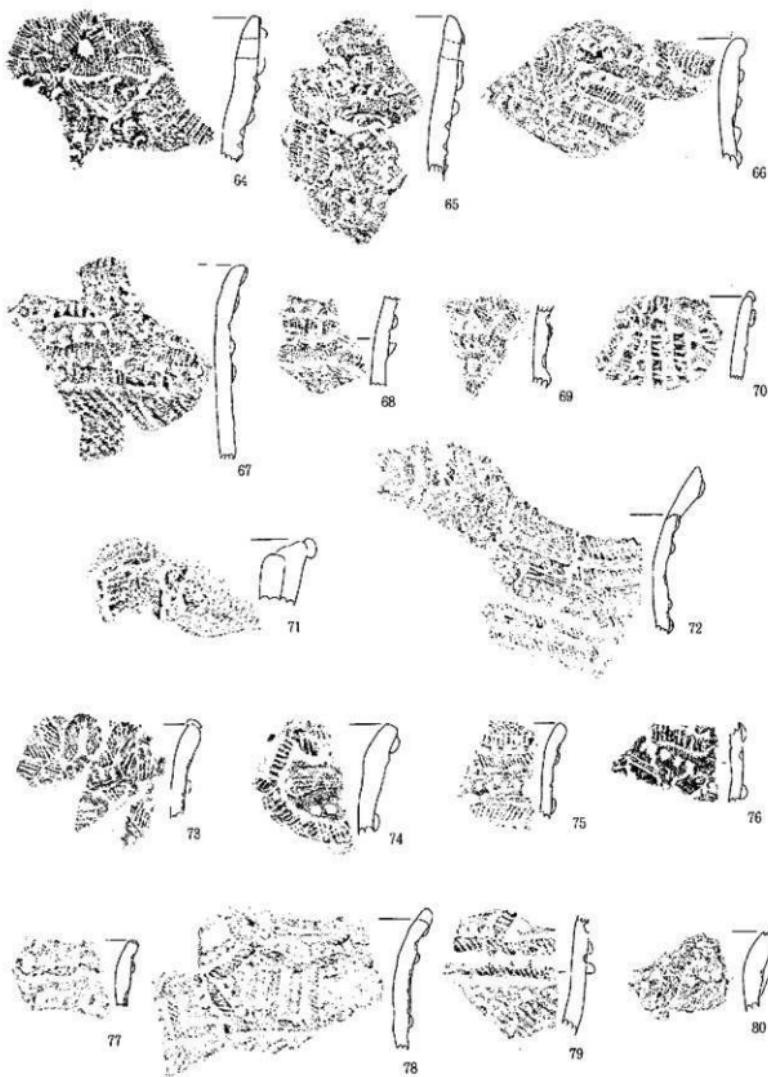


図51 米山(2)遺跡B区遺構外土器1

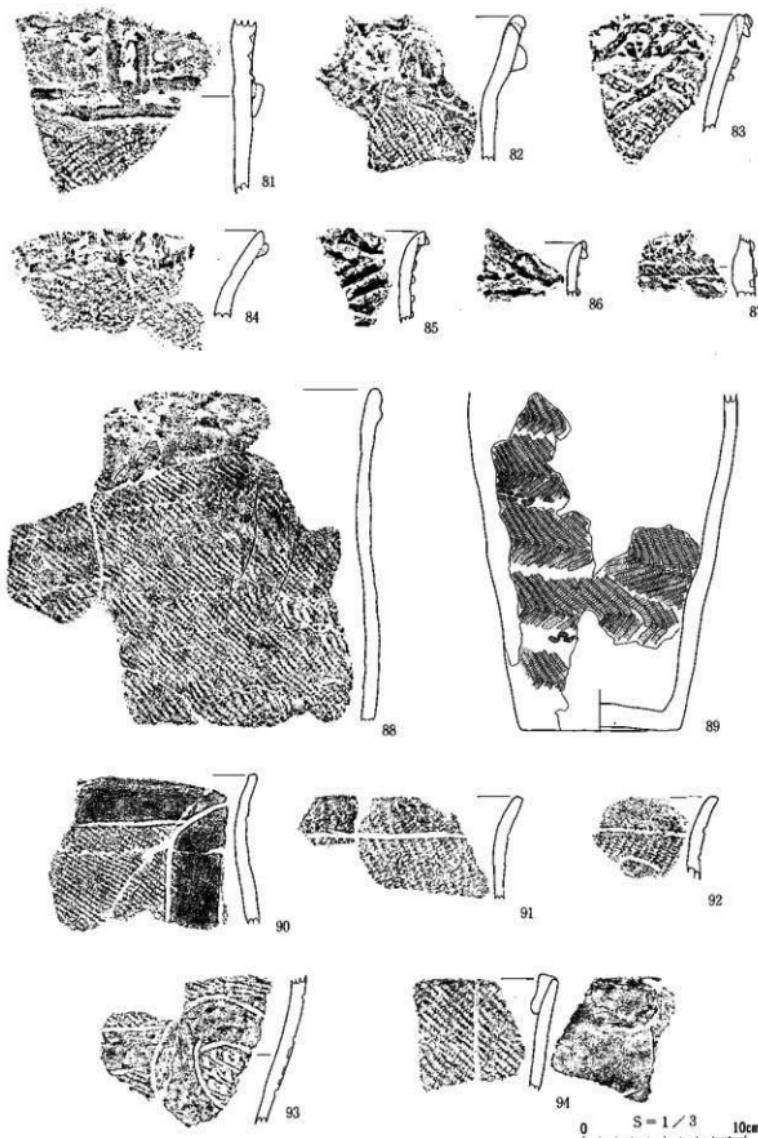


圖52 米山(2)遺跡B区遺構外土器2

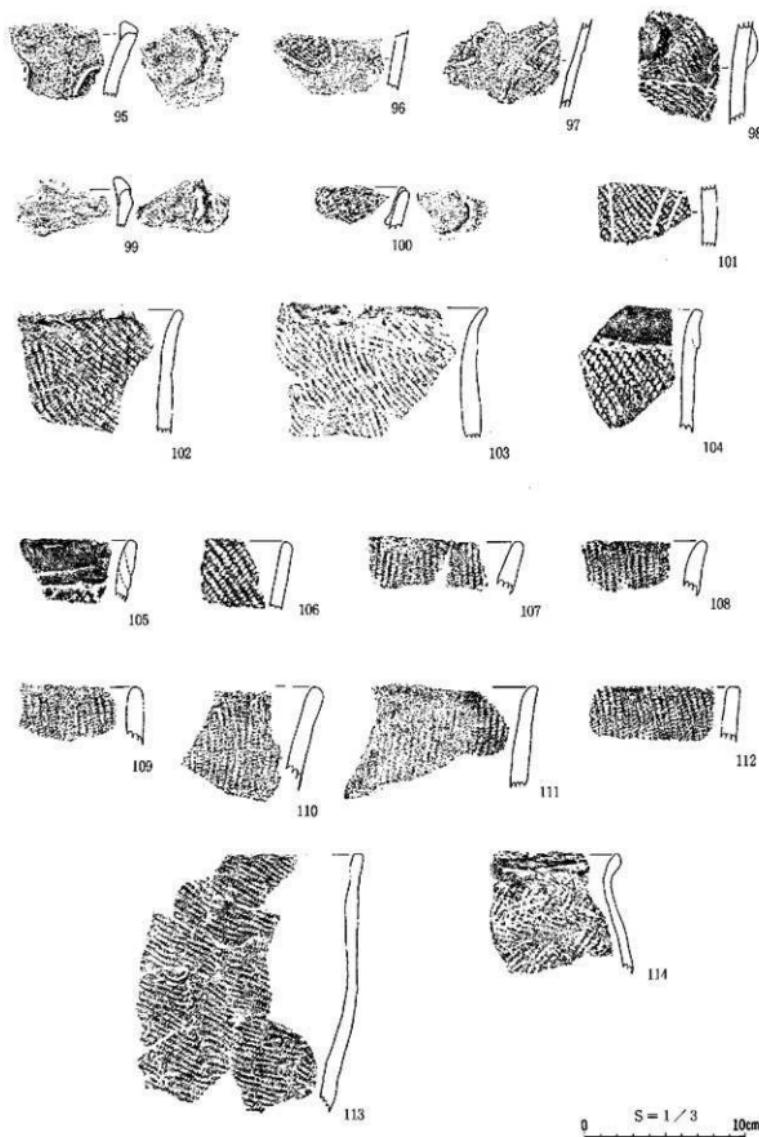


図53 米山(2)遺跡B区遺構外土器 3

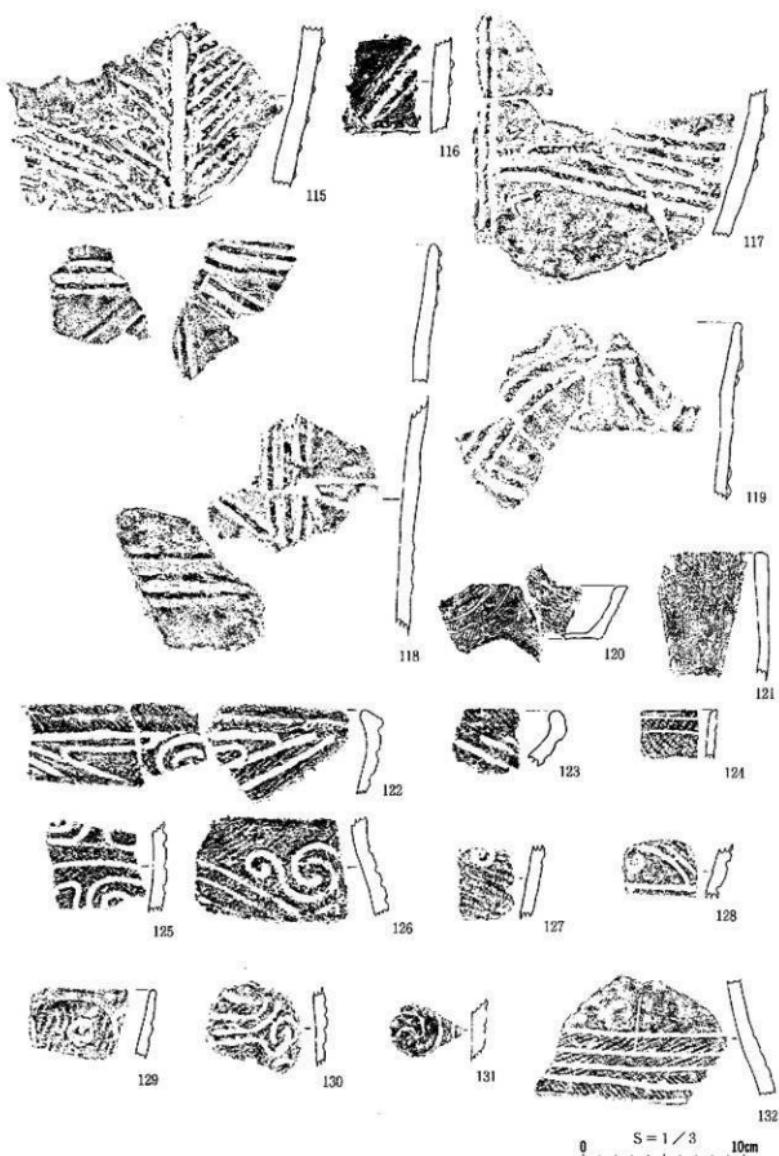


図54 米山(2)遺跡B区遺構外土器4

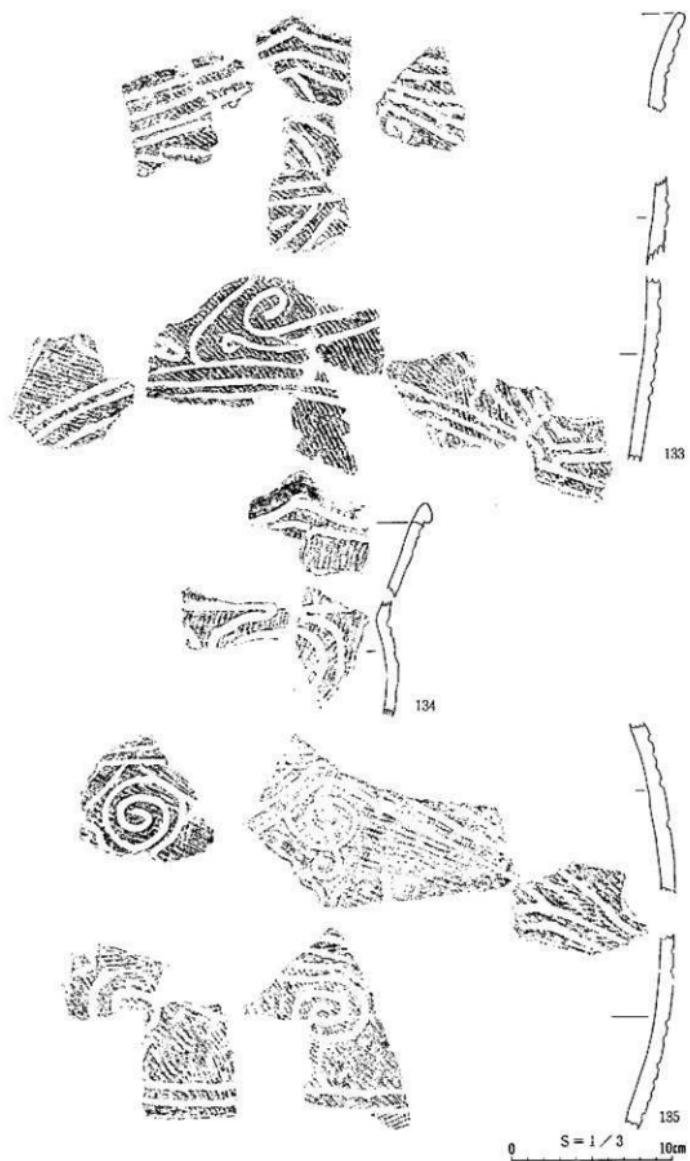


图55 米山(2)遺跡B区造構外土器5

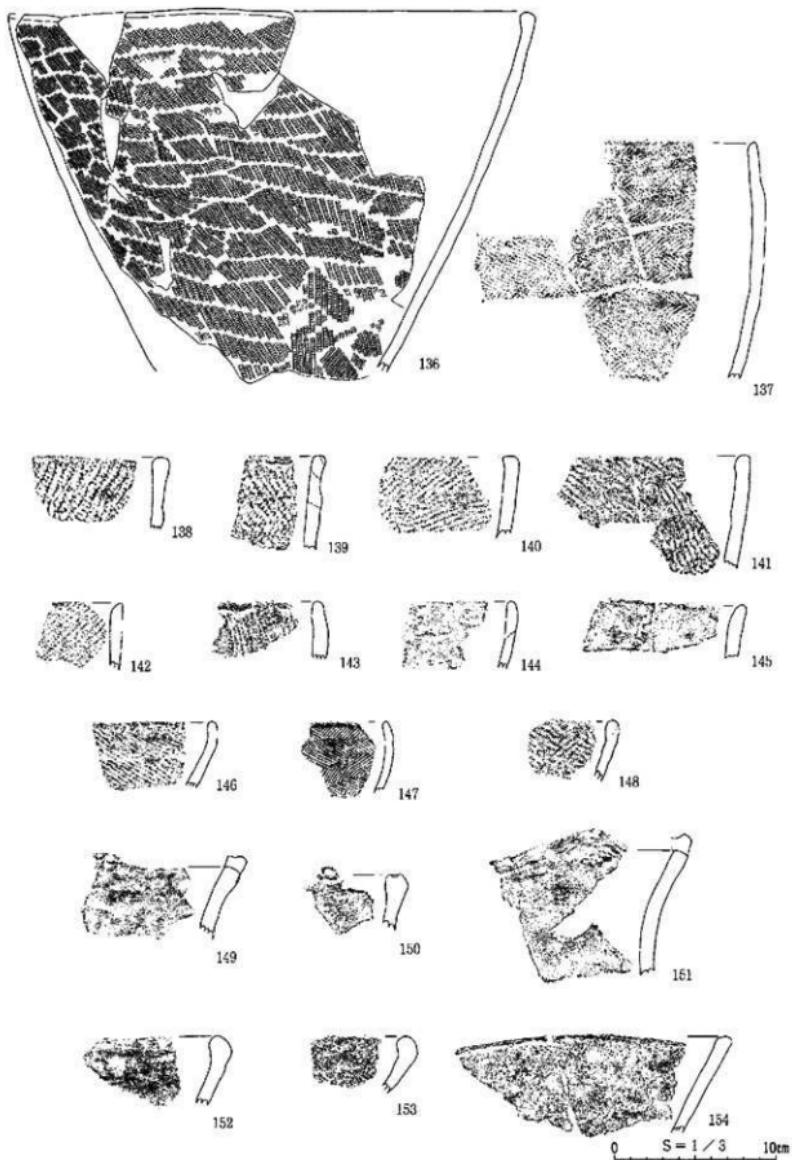


図56 米山(2)遺跡B区遺構外土器6

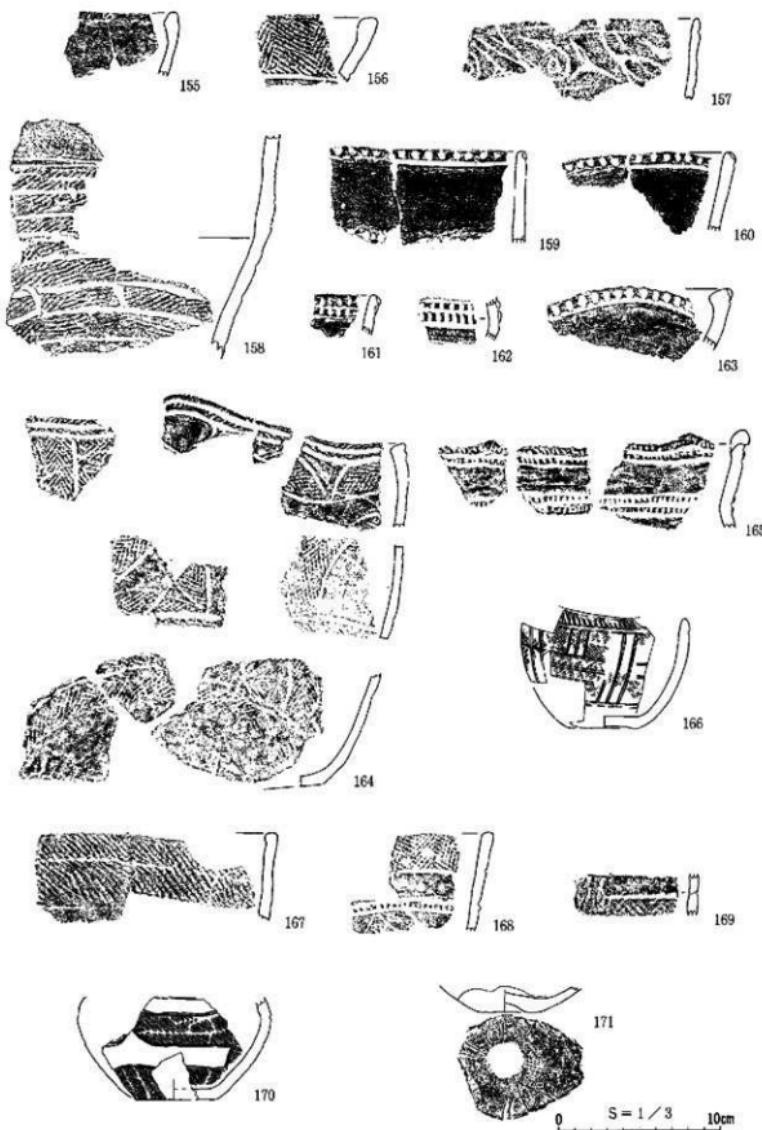


図57 米山(2)遺跡B区造構外土器7

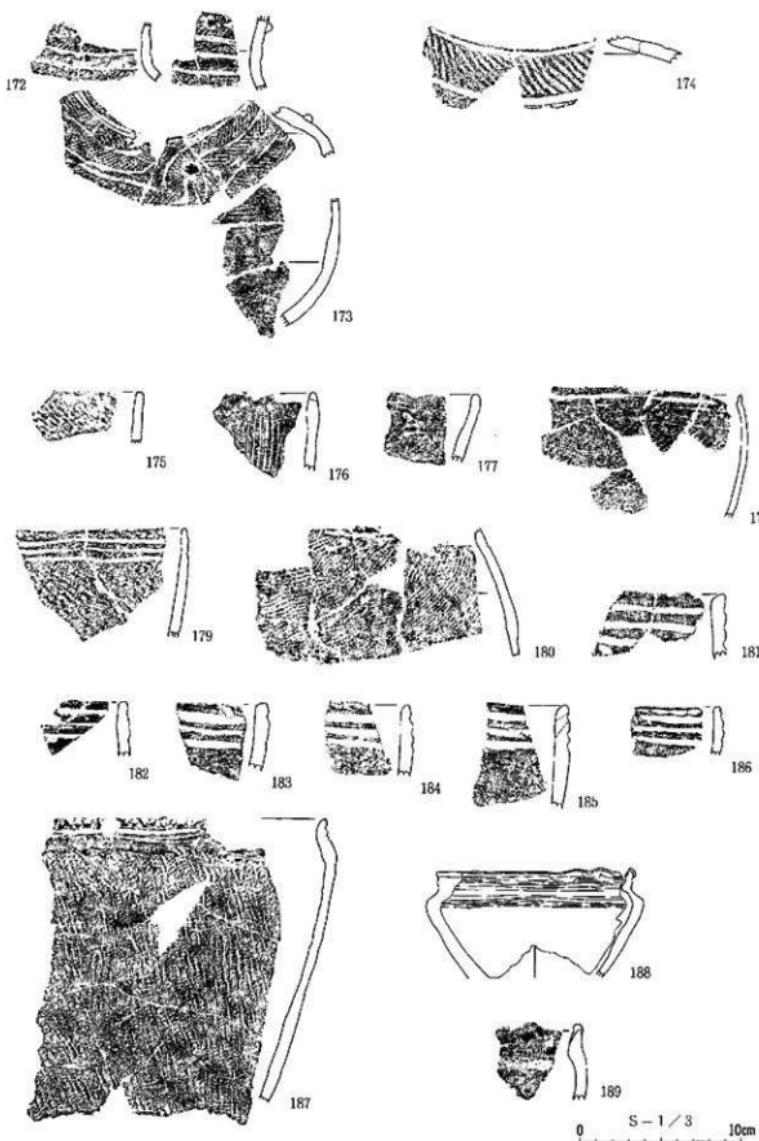


図58 米山(2)遺跡B区造構外土器8

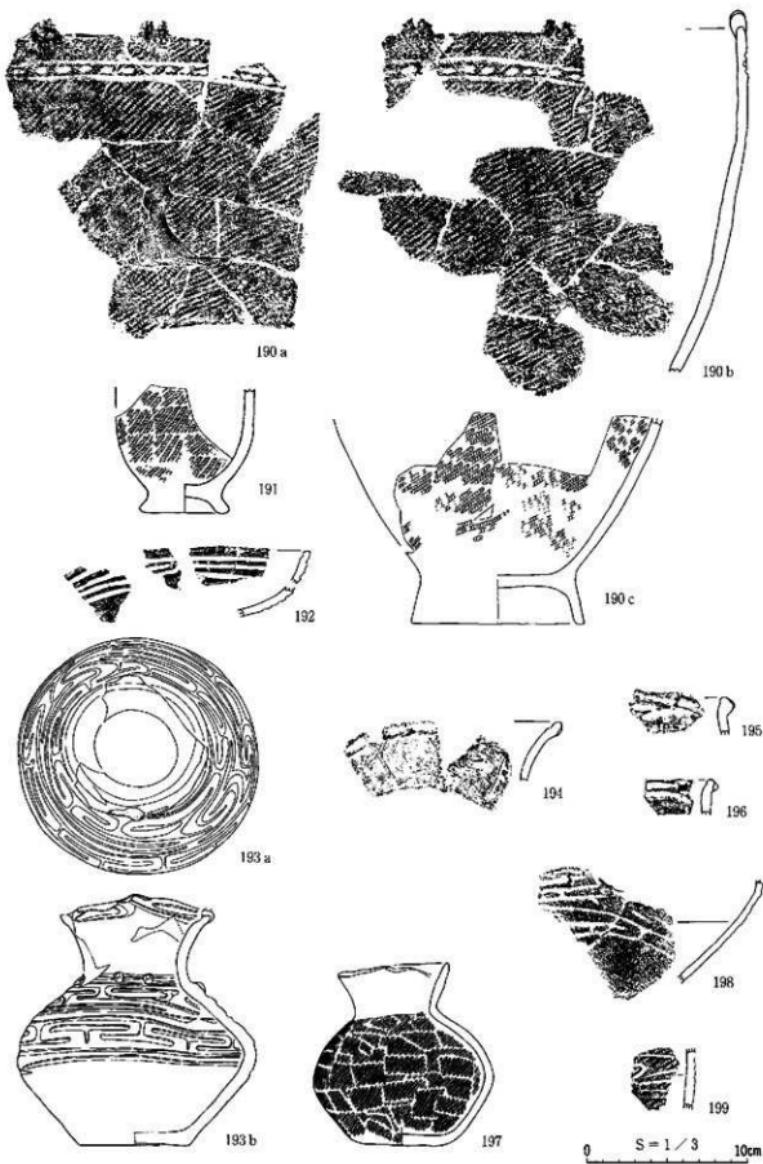


图59 米山(2)遺跡B区遺構外土器 9

## 第2節 石 器

ここでは遺構内外から出土した石器について記述する。また、平成9年度の試掘調査のうち今回の調査区の付近から出土した石器もここで取り扱った。

表4. 米山(2)遺跡出土石器一覧表

		石鏃	石鎌	石椎	石點	橢形 石器	スクレイ バー	Rフレ イク	Uフレ イク	フレイク ・コア	磨製 石斧	磨製 石器	石皿・ 台石	砥石	その他	小計
A区	遺構外			1	1	2	3	2	22	1	2	1				36
	遺構内	2		1			8	4	5	23		8	4			54
B区	遺構外	8	2	1		11	7	8	128	1	16	7	1	2	192	
	遺構内					1	1		5	1		3	1			5
小計		10	2	3	1	22	18	15	178	3	26	13	2	2	292	

### 1 A区出土の石器

A区では、遺構内から54点、遺構外から34点の石器が出土した。その内訳は、表4に示したとおりである。その中で、剥片を除いて最も多く出土したのは敲磨器とスクレイバーである。

#### 石鏃（図40-⑦、図47-1）

第3号住居跡から小型の凸基有茎鏃1点（図40-⑦）と第10号土坑から柳葉形石鏃が1点（図47-1）出土した。

#### 石匙（図37-②、図61-1）

第2号住居跡から1点（図37-②）、遺構外から1点（図61-1）出土した。2点とも、縦形の石匙である。図37-②は、先端部が尖頭状に作出されている。図61-1は先端部が厚く、調整も粗雑である。

#### 楔形石器（図61-4）

遺構外から1点出土した。平面形は台形状を呈し、右側面に表皮を残している。

#### スクレイバー（図36-①、図37-①、図40-③～⑥、図42-②、図43-1、図61-2・3）

第1号・第2号住居跡から各1点（図36-①、図37-①）、第3号住居跡から4点（図40-③～⑥）、第4号住居跡から2点（図42-②、図43-1）、遺構外から2点出土した。図36-①は刃部が尖頭状に作出されている。図40-③も刃部が尖頭状に作出されているが、この部分には急斜度調整が施されている。図43-1は剥片の縁辺部に調整を施しているもので、裏面の右側縁には光沢痕が観察される。図37-①は本類に含めたものの、石鏃の可能性も考えられる。

#### Rフレイク（図40-①・②、図43-2、図61-5）

第3号住居跡から3点（図40-①・②）、第4号住居跡から1点（図43-2）、遺構外から4点（図61-5）が出土した。

#### Uフレイク（図37-3、図42-1、図61-6）

第2号住居跡から2点（図37-3）、第3号住居跡から1点、第4号住居跡から1点（図42-1）、

遺構外から2点（図61-6）出土した。

#### 磨製石斧（図61-7）

遺構外から1点が出土した。刃部には潰れた痕跡が見られる。

#### 敲磨器（図40-⑧・⑨、図41-1～3、図43-3～5）

第3号住居跡から磨石3点（図40-⑧・⑨、図41-3）、凹石2点（図41-1・2）、第4号住居跡から凹石3点（図43-3～5）、遺構外から凹石1点、敲石1点が出土した。

第3号住居跡出土の磨石は、3点とも梢円球状のものである。図41-3は閃綠岩を石材とし、全体が滑らかでツルツルしている。図40-⑧・⑨もこれに似るが、安山岩を石材としているためかそれほどでもない。このうち⑨はやや扁平であるが、片面が滑らかで、その面には凹みに似た敲打痕が見られる。また、凹石とした図41-1も器面全体が滑らかであり、とくにL面に顕著である。また反対側の面には凹みが見られる。図41-2は小型の柱状礫を素材とし、全体に丸みを持つ。片面には浅い凹みが見られる。

第4号住居跡から出土した凹石は、3点とも器面は滑らかである。図43-5は梢円球状礫の片面に、図43-3・4は扁平な棒状礫の両面に凹みが見られる。

#### 石皿・台石（図37-④、図43-6、図46-4）

第1号住居跡から1点、第2号住居跡から1点（図37-④）、第4号住居跡から（図43-6）、第3号土坑から1点（図46-4）出土した。第1号住居跡から出土したものは、石皿か台石の小破片であるため掲載していない。第2号住居跡から出土したものは、やや大型の台石である。第4号住居跡と第3号土坑から出土したものは、板状の礫を素材とした台石である。

#### 有孔石製品（図61-8）

遺構外（WJ-232、I層）から出土した。多孔質の凝灰岩を石材としている。

## 2 B区出土の石器

B区では、遺構内から9点、遺構外から192点の石器が出土した。その内訳は、表4に示したとおりである。

#### 石鎚（図62-1～8）

遺構外から8点出土した。基部形態によって凸基有茎鎚5点、平基有茎鎚1点、円基鎚2点に分けられる。このうち凸基有茎鎚には、闊の形態によって平基に近いものや尖基に近い形状のものもある。8は石鎚に含めたが、幅広であるため尖頭器と分類されるものに近い。

#### 石錐（図62-9・10）

遺構外から2点出土した。2点とも剥片の一端に調整を加えたものである。

#### 石匙（図62-11）

遺構外から1点出土した。幅の広い縦形の石匙で、バルブの部分につまみ部を作出している。体部の刃部調整はあまり行われていない。

#### スクレイバー（図44-4、図62-12～16）

第5号住居跡から1点、遺構外から11点出土した。形状には様々なものがある。図62-14は、末端が尖頭状に作出され、急斜度の調整が施されている。図62-13は、周縁に微細な調整が連続して施さ

れているもので、裏面左側縁には光沢痕が見られる。

#### Rフレイク（図44-3、図62-18）

第5号住居跡から1点、遺構外から7点出土した。図62-18は、黒曜石を素材としたものである。

#### Uフレイク（図62-17）

遺構外から8点出土した。

#### 磨製石斧（図44-2、図62-19）

第5号住居跡から1点、遺構外から1点出土した。図44-2は基部を欠損している。刃部に見られる擦痕は研磨痕と思われ、石質は頁岩である。図62-19は刃部に対して直交する使用痕が見られるところから、横斧と考えられる。石質は、緑色細粒質凝灰岩である。

#### 敲磨器（図63-1～6、図64-1～7）

遺構外から磨石8点、凹石6点、敲石2点が出土した。図63-1は上下の両側面に磨痕が見られるが、上側面のそれは弱い。また、片方の端部には打痕が見られる。図63-2・5は楕円球状礫を素材としているもので、器面全体が滑らかである。特に2の片面はやや平坦気味となっており、ツルツルと滑らかになっている。3では下側面には敲打痕が見られる。4・6は磨石に凹みが見られるもので、ともにやや肉厚の楕円球を素材としている。4は片方の側面に弱い敲打痕が見られ、片面には浅い凹みが見られる。6も片側面には敲打痕が見られ、両方の平坦面に凹みが見られ、片方の平坦面（L面）は特に滑らかである。

図64-1・3～6は凹みのみが見られるものである。6は台石か石皿の破片を再利用したもので、両面に凹みが見られる。一方の面には敲打による凹みが、もう一方の面にはスリによる凹みと溝を形成した磨痕が見られる。3は三角柱状の礫を素材とし、三面に深い凹みが見られる。凹みのはほとんどは敲打によるものであるが、1個だけスリによるものと思われるものがある。5はやや扁平な棒状の礫を素材とし、両面に浅い凹みが見られる。1は両面に深い凹みが見られ、平坦面はやや平滑である。4は片面にスリによる凹みが見られ、平坦面は平滑である。

図64-2・7は敲石である。2は扁平な棒状礫の端部と両側面の一部に敲打痕が見られる。7は、拳大の礫の一端に敲打痕が見られる。

#### 石皿・台石（図44-1、図65-2～5）

第5号住居跡から1点、遺構外から7点出土した。図44-1は板状の無加工の大礫を利用したもので、中央部が若干窪んでいる。図65-3・5も両面が利用されており、両面とも若干窪んでいる。図65-4は、片面を利用したもので、表面は大きく窪んでいる。裏面は割れ面のままで加工されていない。図65-2は、周縁に高さ約3cmの縁を巡らしているもので、表面は多少ざらつくものの、滑らかである。

#### 砥石（図44-5、図65-1）

第5号住居跡から1点、遺構外から1点出土した。図44-5は流紋岩の角柱状の礫を素材としたもので、器面全体に擦痕が見られる。擦痕は器体の長軸方向に沿って見られるものが多く、一部浅い溝を形成している部分がある。図65-1は扁平礫を素材とし、台石とも思われるものである。擦痕は両面に見られる。器面は滑らかであり、特に表面が顕著である。

#### その他（図64-8・9）

遺構外から2点出土した。2点とも流紋岩の柱状礫を素材とするもので、8は小型、9は大型であ

り、器面全体が滑らかに整形されている。このうち、8と同様の素材、形状、大きさを持つ石器の中には、敲石や円石に利用されている場合が多いが、凹みが見られないことから、敲石の欠損品であるかもしれない。

#### 石器の石質について

剥片石器の石質は、大部分が珪質頁岩であり、わずかに玉髓質珪質頁岩、黒曜石（フレイクを含めても2点）がある。なお、黒曜石はその諸特徴から本県産のものではなく、他県域から当遺跡に持ち込まれたものである（未分析）。

磨製石斧の石質には、緑色細粒凝灰岩、頁岩、閃綠岩のものが、それぞれ1点ずつある。

礫石器の石質には、安山岩、流紋岩、凝灰岩、細粒凝灰岩、緑色細粒凝灰岩、閃綠岩、輝綠岩の種類がある。最も多いのが安山岩の24点（55.8%）で、次いで流紋岩8点（18.6%）と凝灰岩7点（16.3%）である。この三種類で、全体の9割を占め、敲磨器や石皿・台石など各種の石器に用いられている。（嵐山 畿）

### 第3節 古銭

B区から、寛永通宝が2枚出土している。錢貨の大きさや、「寛永通宝」のそれぞれの字体にも違いが認められる。1は古寛永と言われるものである。（嵐山 畿）

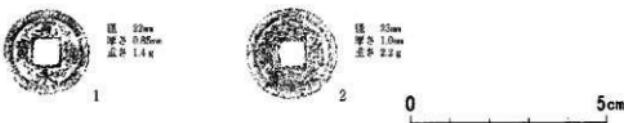


図60 古 銭

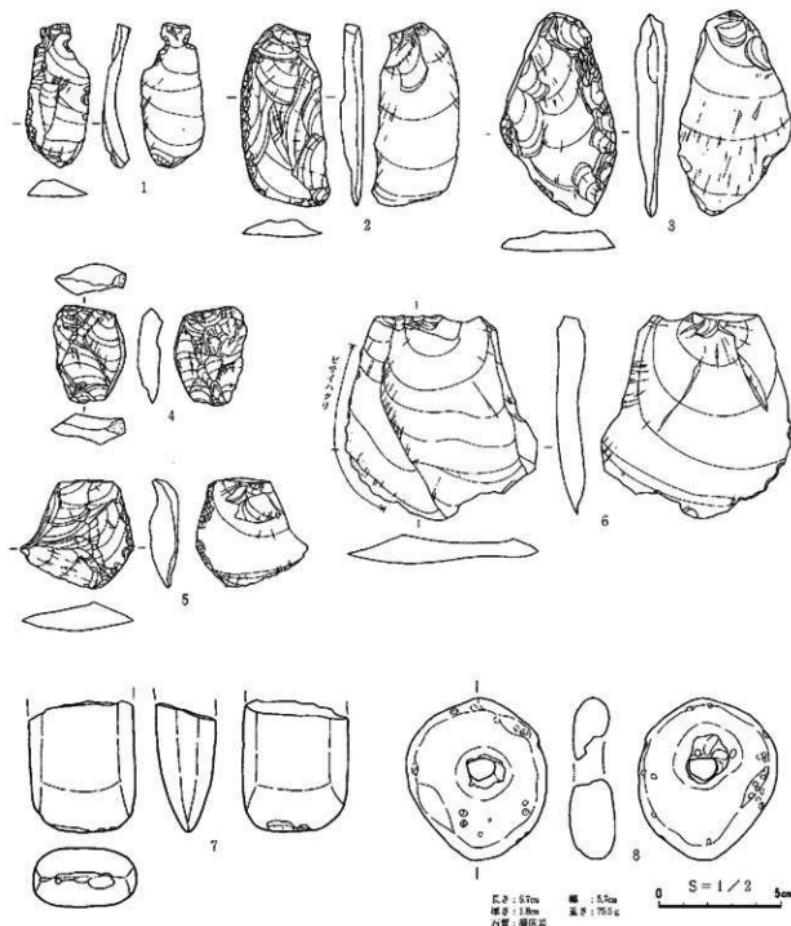


図61 米山(2)遺跡A区出土石器

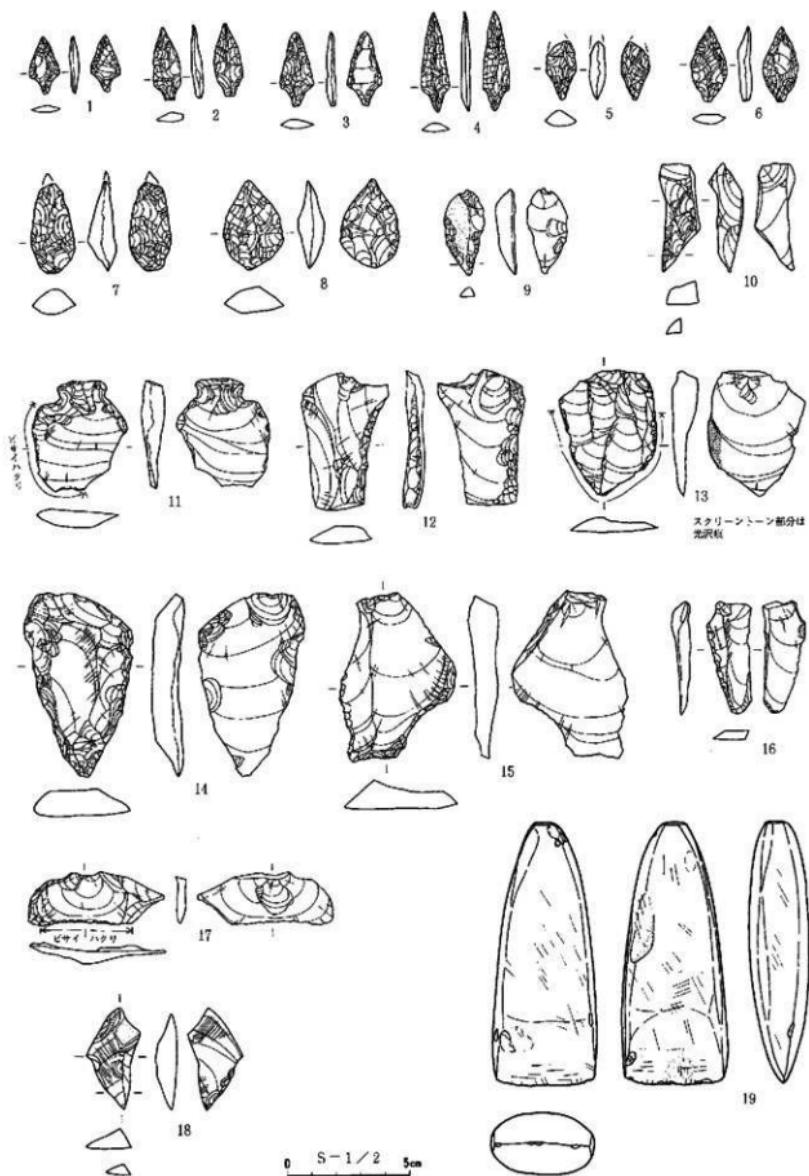


図62 米山(2)遺跡B区出土石器 1

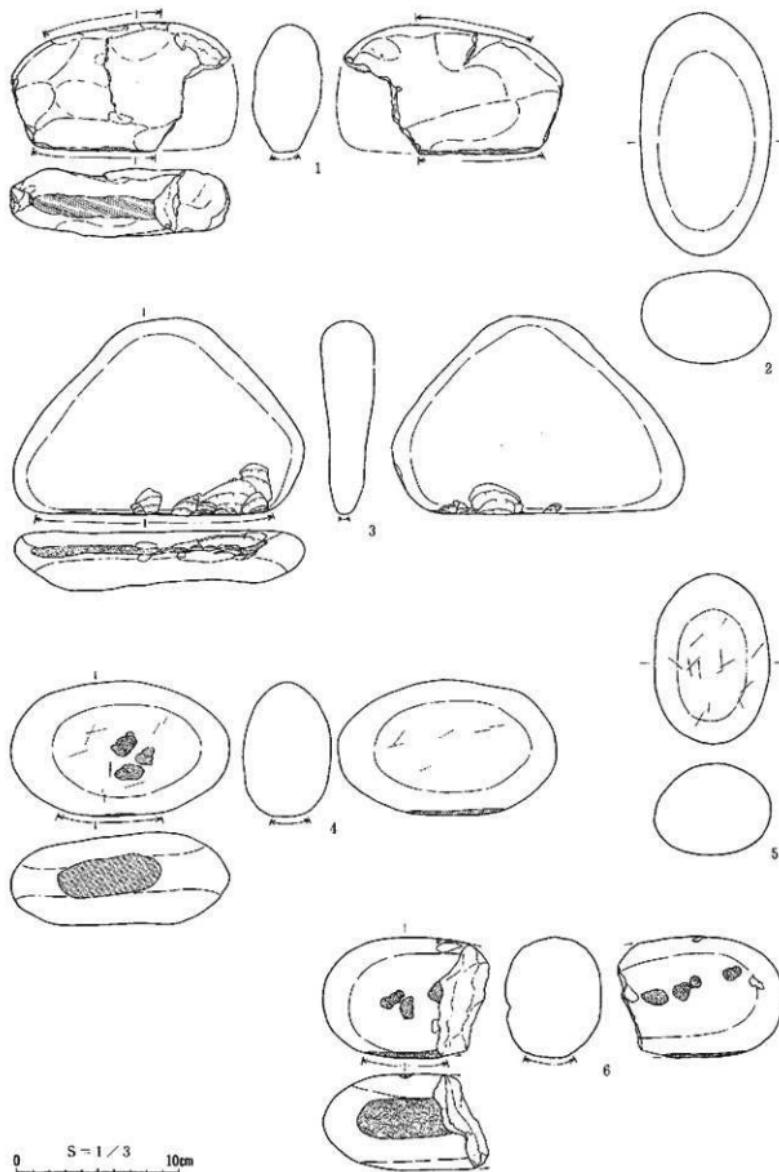


図63 米山(2)遺跡B区出土石器2

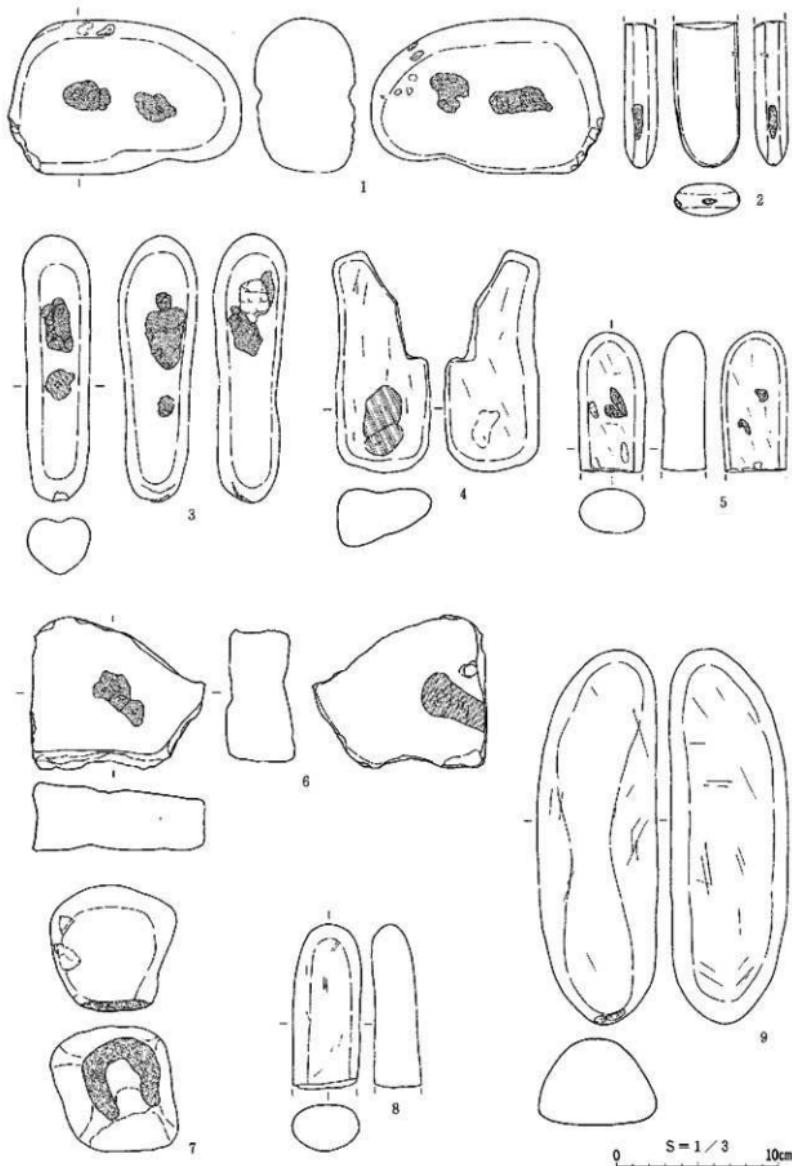


図64 米山(2)遺跡B区出土石器3

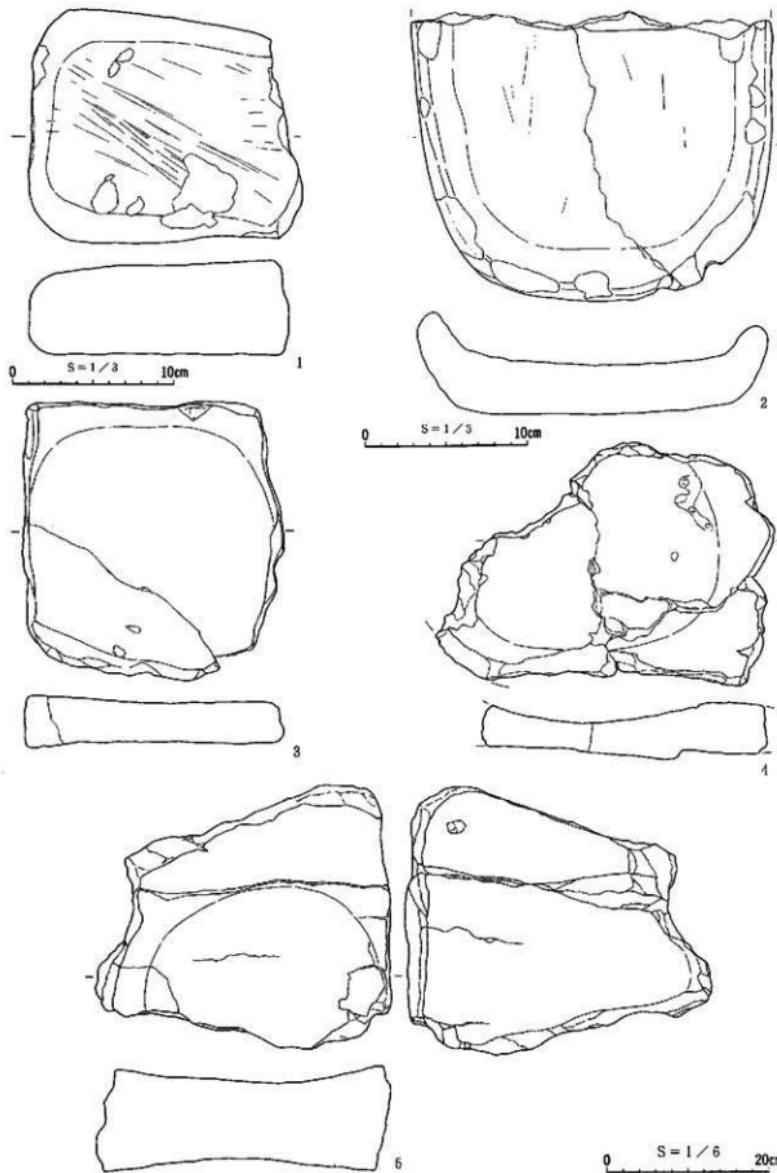


圖65 米山(2)遺跡B区出土石器4

## 第3章 まとめ

### 第1節 検出遺構

A区で堅穴住居跡4軒、土坑9基、溝状土坑2基、B区で堅穴住居跡1軒、土坑2基が検出されたが、ここではA区検出の縄文時代後期中葉～後葉と考えられる堅穴住居跡について考えてみたい。A区検出の4軒の堅穴住居跡は3号住居跡出土の床面倒立設置土器から縄文時代後期後葉段階の集落跡と捉えることができよう。該期の堅穴住居跡は、主に八戸地方から岩手県北部地方において数多く検出されており、出入口施設とされる対になる柱穴・平行する縦溝・「コ」字形をした溝が付設されるものが見られる。米山(2)遺跡A地区第1号住居と第4号住居跡にもそれぞれ「コ」字型と縦溝型の出入口施設が見られる。また小径の壁柱穴が密に見られる場合も多い。この出入口施設と炉を結んだ線を主軸としてその左右が線対称の構造をとるものが見られ、出入口の場所・方向が住居の構造や規模に影響する為に、住居跡構築における選地段階から主軸すなわち出入り口の方向を意識していたものと考えられる。

#### 1 岩手県・青森県の出入口施設検出例

東北地方北部の縄文時代後期の堅穴住居跡の出入口施設については、岩手県では三浦謙一が都南村湯沢遺跡の調査において炉跡に近い壁際に礫2個を平行させ埋置させたものなどを「出入口」状施設を呼称している(岩手埋文 1978)。同様の施設跡を二戸市寺久保遺跡で調査した金子昭彦は、礫を利用した施設を二戸市上村遺跡例もあわせて馬淵川中流域～北上川中流域に用いられた形態であるとし、蘿窟遺跡の15号・17号住居跡検出の対になる土坑を馬淵川下流域にみられる別系統の出入口施設で、後期中葉に盛行する出入口状施設に繋がるものであると述べている。後期初頭～前葉とされる安代町の扇畠II遺跡では、平行する縦溝に接して、住居外側に平石による敷石が検出されており、敷石部と床面がスロープ状をなし、関東地方に多い柄鏡型住居との共通性が指摘され、敷石部の出入口機能を想定している。後期前葉以降の出入口施設は滝沢村卯坂遺跡・岩手町川口II遺跡・西根村上斗内III遺跡・一戸町梶の木遺跡・輕米町馬場野II遺跡・大日向II遺跡・和当地I遺跡・吼屋敷Ia遺跡・北上市八天遺跡(文献未入手)でも検出されている。青森県では中期末とされるものが丹後谷地遺跡等で検出されている他、後期初頭とされるものが八戸市丹後平遺跡・蘿窟遺跡・牛ヶ窪遺跡から検出されている。後期前葉では六ヶ所村大石平遺跡・上尾駿(2)遺跡・八戸市丹後谷地遺跡等から、後期中葉以降は大畑町水木沢遺跡・八戸市丹後谷地遺跡・風張(1)遺跡・平館村尻高(4)遺跡・金木町神明町・弘前市砂沢遺跡等で検出されている。後期中葉以降になると類例も増加し、住居構造のひとつに出入口が明らかに組み込まれている。秋田県では鹿角市赤坂A遺跡(後期中葉)・B遺跡(晚期)・虫内I遺跡(晚期)等で検出例がみられる。

#### 2 出入口施設の形態別分類

縄文時代後期の出入口施設を①2本柱穴型、②平行する縦溝型、③横溝型、④「コ」字型、⑤逆「コ」字型、⑥「H」字型、⑦「八」字型、⑧向かい合うL字型、⑨その他の9類型に分類する。(註1)

【縄文時代中期末～後期初頭】縄文時代中期の出入口施設に関しては、その炉との位置関係より複式炉との関連が指摘されている(酒井 1987)。また青森県では明確な出入口施設の検出は乏しいが、壁

際の2本柱穴や柱穴が途切れる部分等に出入り口の存在を想定しているものが多い。丹後谷地42号住居跡は2本柱穴型または縦溝型が付設され、中期末に既に縦溝型が構築されている。丹後谷地30号住居跡では横溝型が検出されており、その両側が柱穴状となる。

【後期初頭】八戸地方では2本柱穴・縦溝型の他に牛ヶ窪遺跡で張出部に2個の礫が組み合わされるものも見られる。湯沢遺跡・寺久保遺跡の礫を利用したタイプとの関連が想定される。また安代町扇畠Ⅱ遺跡の出入口部敷石の住居はその系統が注目される。

【後期前葉】青森県での検出例が多いが2本柱穴型・縦溝型・横溝型に加え逆「コ」字型も現れ、上尾駿(2)遺跡では張出部に2本柱穴が組み合わされるもの、丹後谷地遺跡では横溝の4隅に柱穴が掘られたものが見られる。

【後期中葉～後葉】中葉以降には、「コ」字型と「H」字型も多く見られるようになり、壁柱穴も非常に密になり、主柱配置は4本柱を基本とする入り口側が狭くなる台形状を呈するものが多くみられるようになる。下北半島の大畑町水木沢遺跡だけは門道と考えられる張出部に2本の柱穴が組み合わされるものが検出されており、溝状の施設構造はみられない。

### 3 後期中後葉の出入口施設構造と上屋構造の復元の手掛かりについて

後期前葉段階の関東地方では住居外部にのびる溝状の施設が認められ、中期～後期にかけての柄鏡型住居址の張出部からの変化が、また後期中葉には出入口施設は東北地方同様に住居プラン内側に位置し対状の溝となることが説明されている(山本 1993)。

小宮恒雄は、縄文時代から平安時代までの住居跡の出入口構造について論じており、逆「コ」字型のものについて神奈川県三浦市赤坂遺跡の長軸15mの弥生時代中期の大型の住居例をあげ、住居内の「壁溝に接した平行する2本の溝を先端近くでつないだコの字形のもので、溝内にはさらにいくつかの小ビットが認められる。他に平行する2本の溝だけの例もあるが、いずれも中期の大型住居に限られる。これらはおそらく階段状の施設であろう。」と述べている(小宮 1990)。

溝状の出入口施設の構造復元については、いくつかの事例が手掛かりになるものと思われる所以列挙したい。縦溝型の溝内柱穴の位置が、壁際や住居中心側に偏る例が多く見られること。「コ」字型や「H」字型のものでは縦溝が横溝よりも深いこと。丹後谷地遺跡56号住居跡の縦溝中に河原石が据えられていること。数本の柱を並べて打ちつけた結果、溝状形態を呈すると考えられるものが存在すること。「コ」字型・「H」字型の場合、住居内側に出入口に付帯すると考えられる小柱穴や溝が見られること(風張(1)6住・米山(2)1住)。臼屋敷Ia遺跡では出入口施設に伴うスロープ<sup>6</sup>が検出されていること。丹後平遺跡5号住居跡の「H」字型出入口跡から板状の炭化材が検出されていること。出入口部外側が僅かであるが階段状をとどめているものがあること等である。これらの事例より、階段またはスロープ<sup>7</sup>から続くステップ<sup>8</sup>状の構造物の施設を想定したいが、梯子状施設の存在も考えられ東北地方北部のさらなる類例、北海道・東北地方南部・関東地方といった他地域の類例、研究結果を検討することによって明らかになるものと考えている。

東北地方北部の後期中後葉の竪穴住居跡の上屋構造は、出入口と炉跡を結んだ線を主軸とし主柱穴が線対称に配されること、入り口側が狭くなる台形状に主柱穴が配されるものが多いこと、小径の壁柱穴が密に配されること、炉跡が住居中心または出入口側によること、主軸上に炉跡を挟んで間隔120～150cmで深い柱穴が見られること(丹後平5住・8住、風張(1)9住・37住、砂沢1住)、主軸上の住居

## 東北地方北部 編文時代後期 出入口施設を有する住居跡属性表

編號	県名	町名	遺跡名	住居跡名	時期	出入口タイプ	中心間隔	方向	側柱	伊弉	形態	主軸	直交軸	備考
66-01	青森	八戸市	丹後谷地	25住	中期末 （太文9.7）	2本柱穴	90	南東	土留塀+石垣	円	T字	3.6	5.5多角形	印2点確認
66-02	青森	八戸市	丹後谷地	30住	中期末 （太文9.9）	横渠型	60	北西	板大門	円形	3.4	3.3	4本合方形	
66-03	青森	八戸市	丹後谷地	42住	中期末	継渠型	84	東	有	石園	楕円	4.9	5.6	2箇・対5箇の多角形
66-04	青森	八戸市	丹後谷地	56住	後期中葉 中期	複層型	50	南	有	石園	楕円	4.5	4.8	5本合角形
66-05	岩手	特木町	馬場野Ⅱ	LⅢ-03	後期中葉	複層+2本柱穴	60	南東	多	地床	楕円	3.8	4.1	4本合形
66-06	岩手	安比町	豊原城	I E c 6	後期中葉～ 前期	平行窓型+石塀	60	北	多	地床	円形	5.0m	4.8m	4本合形
66-07	岩手	二戸市	寺久保	9号住	後期中葉	縦溝2段平行していたもの	50	北		石園	円形?	3.5	3.5	
66-08	岩手	二戸市	寺久保	4号住	後期中葉	縦溝2段を平行して立てたものの	80	北西		石園?	円形?	4.4	4.4	
66-09	青森	六戸町	大石平	8住	前縫(+1)	追「コ」字型	60	南東	有		楕円			
66-10	青森	六ヶ所村	上尾崎(2)	CJ-100	前縫(+1)	複層型	60	南	有					主軸+側柱直用
66-11	青森	八戸市	丹後谷地	26住	後期中葉	複溝の周間に4本の柱穴	60	南東		地床	楕円	2.8	3.4	4本合形
66-12	青森	八戸市	丹後谷地	34住	中期	複層+單門口「日」字型	48	南東	多	地床	円形	3.9	3.7	4本
66-13	青森	八戸市	丹後谷地	28住	後期中葉 （太文9.9内）	複層+单門口「日」字型	54	東	有	地床	円形?			
66-14	青森	八戸市	丹後谷地	32住	後期中葉 以前	「日」字型	90	南東	多	地床	楕円	4.5	5.2	7本多角形
66-15	青森	八戸市	丹後谷地	24住	後期中葉	「日」字型	80~ 96	南東	多	地床	楕円	5.7	6.3	4本合形
66-16	青森	八戸市	丹後谷地	22住	後期中葉	「コ」字型	80	東	多	地床	円形	6.2	6.2	4本合形
66-17	青森	八戸市	丹後谷地	20住	後期中葉	変形追「コ」字型	120	南東	多	地床	小量円形	6.3	6.8	6本合形
66-18	青森	八戸市	丹後谷地	22住	後期中葉	変形「コ」字型	70	東	多	地床	円形	5.3	5.3	4本合形
66-19	青森	八戸市	丹後平	5住	後期中葉	「日」字型	70~ 90	南東	多	地床	楕円	4	4.3	4本合形
66-20	青森	八戸市	丹後谷地	49住	後期中葉	追「コ」字型	50	南	有	地床	楕円	2.4	2.7	4本合形
66-21	青森	八戸市	丹後谷地	48住	後期中葉	複層+側柱直用	90	東	多	地床	楕円	4.5	5.6	4本合形
66-22	青森	八戸市	丹後谷地	46住	後期中葉	複層型	70	東	多	地床	楕円	5.4	5.9	6本多角形
66-23	青森	八戸市	黒風(1)	6住	後期中葉～ 後縫	複層「日」字型	80	南西	多	地床	一筋内溝	5.8	7.2	4本合形
66-24	青森	八戸市	黒風(1)	4住	後縫～後	複層「日」字型	70	西	多	地床	一部内溝	6.1	5.5	4本合形
66-25	青森	八戸市	黒風(1)	50住	後縫後	「コ」の字型	80	南東	多	地床	円形	5	5.1	4本合形
66-26	青森	八戸市	黒風(1)	15住	後縫後	「日」字型	70~ 90	南	多	地床	楕円	4.9	6.2	4~5本合形
66-27	青森	南陽村	水吉	4住	後縫	張出部+經濟	70	南	有	石垣	楕円+大方形	3.3	3.2	4本合形
66-28	岩手	船引町	大口向Ⅲ	S A63住	後期中葉	複層型	70	南東	多	地床	一部内溝	4.6	5.6	主軸以降繋むる
66-29	岩手	船引町	大口向Ⅲ	H I-4住	後期後	複層型	70	東	多	地床	楕円	4.5	4.9	複合合形?
66-30	岩手	船引町	大口向Ⅲ	H I-1住	後期後	複層型+2本柱穴	70~ 80	東	多	地床	楕円	3.6	4.2	4本合形
66-31	岩手	船引町	大口向Ⅲ	S A64住	後期中葉	複層型	90	南	多	地床	一部内溝	4	4.7	主軸以降繋むる
66-32	岩手	一戸町	船の木	S I-04住	後期後	「コ」字型	70~ 80	南東	多	地床	一部内溝	4.8	5.5	6本又は8本の変則合形?
66-33	岩手	磐梯町	石川目	B D-2住	後期中葉	追「コ」字型	80	南	多	地床	楕円	4.8	5.4	
66-34	青森	大館市	本沢	5住	後期後	複層型	100	東		石園	不要椭圆	5.5	6.4	4本合形
66-35	青森	六ヶ所村	上尾崎(2)	1住	後期後	複層型	40	南	有	地床	円形	2.8	3.2	半柱+側柱直用
66-36	青森	十和町	尻高(4)	2住	(太文9.9内)	「コ」字型	60	南	多	地床	楕円	4.4	5.4	4本合形
66-37	青森	弘前市	沢沢	1住	後期後	「コ」字型	60	南東	多	地床		4.5		4本合形
66-38	青森	青森市	米山(2)	1住	後期後	「コ」字型	90~ 110	南東	多	地床	楕円	5.9	7.6	6本合方形
66-39	青森	青森市	米山(2)	4住	後期後	複層型	60	南東	多		円形	4.1	4.6	
66-40	青森	金木町	明神町	5住	後期中葉	「コ」の字型	80	東	多	地床	楕円	5.4	6.1	4本合形
66-41	秋田	鹿角町	赤坂A	100住	後期中葉	複層型	70	南		地床	円形	4.3		
66-42	秋田	小坂町	内長根T	S I-06住	後期中葉	複層型	60	北東	多	地床	円形	3.3	3.6	4本
66-43	岩手	経ヶ町	馬場野Ⅲ	M V-01	後期中葉	複層型(作り替えた者)	60	南東	多	地床	楕円	4.7	5.2	
66-44	岩手	経ヶ町	馬場野Ⅲ	LⅢ-01	後期後	複層型+「L」字型	80	南東	多	地床	楕円+ 円形	6	6.3	6本長方形?
66-45	青森	南陽村	石戸門沢	3住	後期中葉	複層型+「八」字型	60	南	多	地床	不要椭圆?	2.6	2.9	4本合形
66-46	秋田	鹿角町	赤坂B	100住	後期後	複層型+「八」字型	75	南	多	地床	圓形	6.4	5.4	住居跡基本的には60m四方の敷石な石が立ち込めている。

(注) 住居の主軸、直交軸、出入口の中心幅の計測には概略図中の面積（多くが1/60）を用いた。主軸、直交軸距離の計測には整穴下部の面積を用いた。

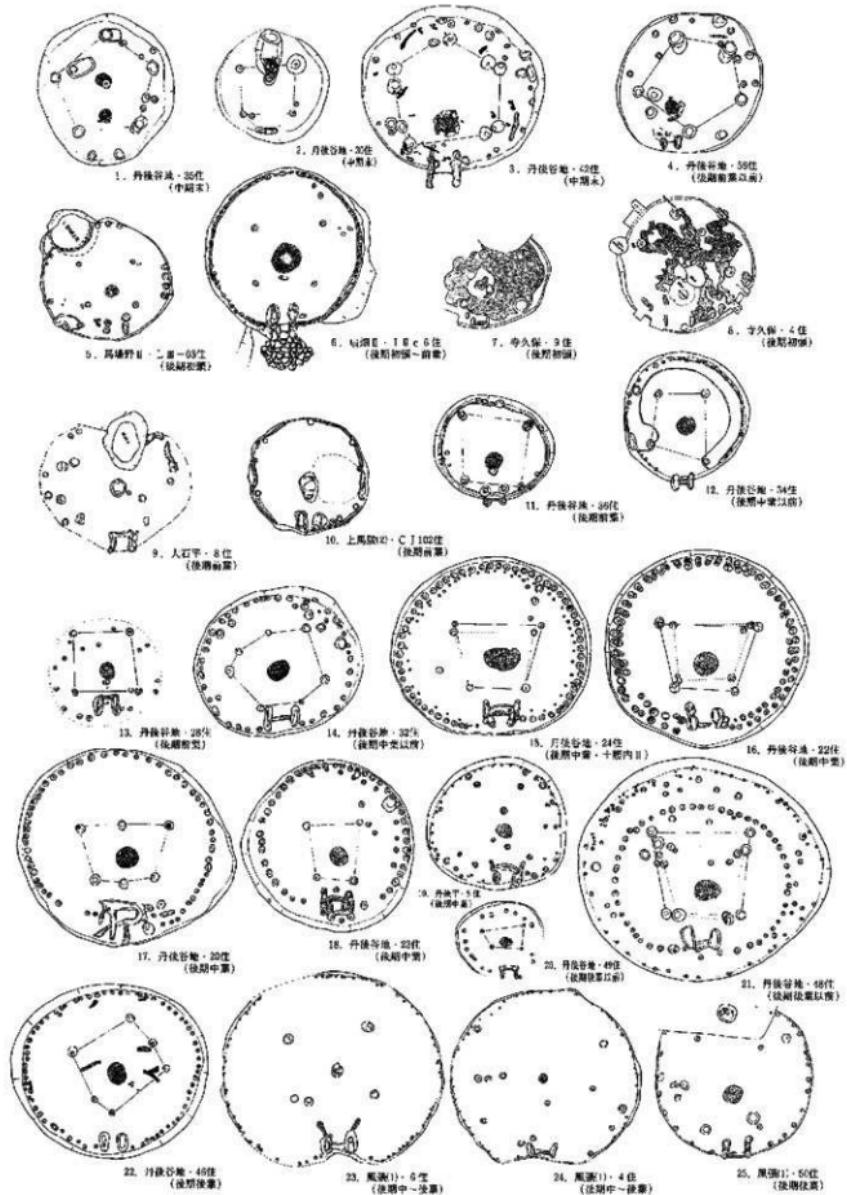


図66 東北地方北部出入口施設を有する竪穴住居跡①(縄文時代後期中心)(S=1/160)

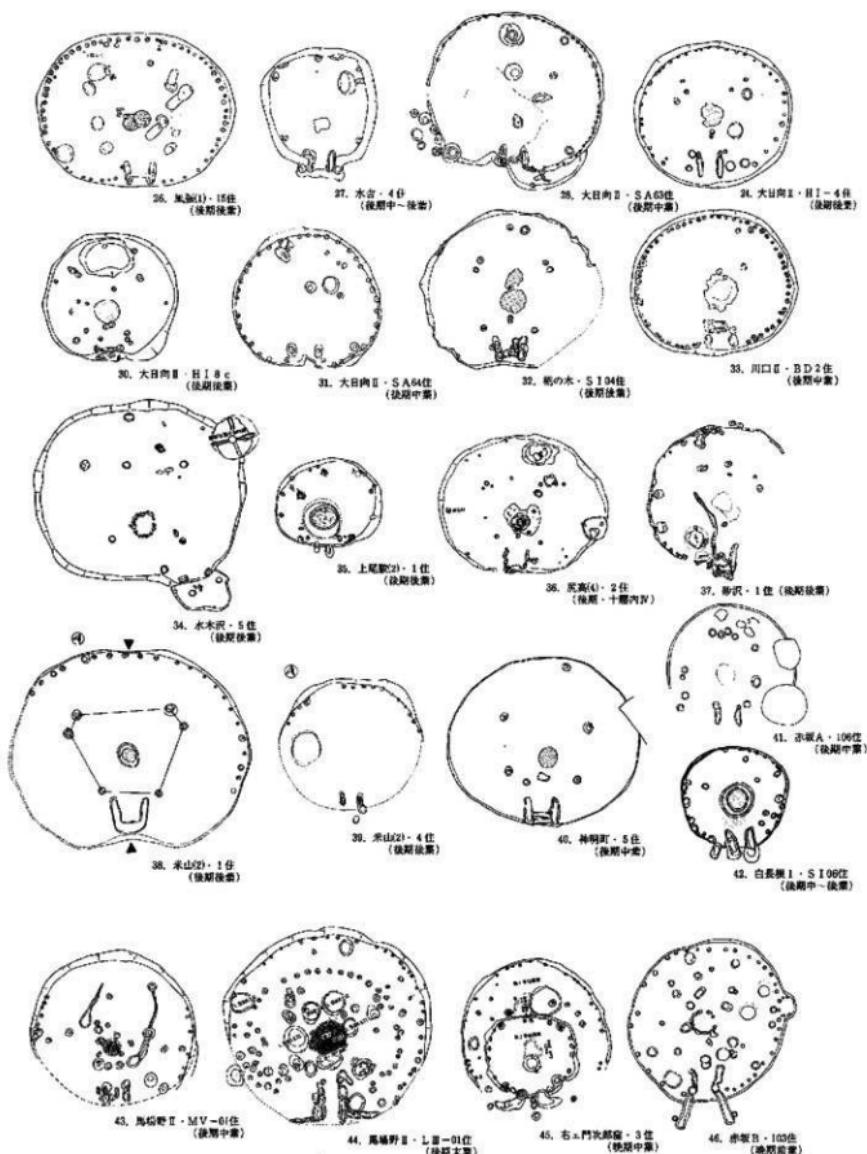


図67 東北地方北部出入口施設を有する竪穴住居跡(2)(縄文時代後期中心) (S=1/160)

奥側または住居外に柱穴をもつものが見られることなどが手掛かりとなろう。

(註)各類型の事例については住居跡属性表において記してある。

(註)米山(2)遺跡第1号住居跡の南側のプラン復元には、当住居跡の東側の壁柱穴の延長による推定を試みたが、その場合出入り口施設が大きく住居プランの内側に入り込むこととなり、建替えの跡も見られない事から、他遺跡の類例(鳳張(1)遺跡4住・6住、柵の木遺跡SI04住)を参考に出入り口部の壁面を内側に湾曲させる形態と考えた。

## 第2節 各時期の概観

### 1 繩文時代中期

円筒上層 b 式から円筒上層 c 式期の土器が、B区の北西部に集中して出土している。扇形突起に繩文圧痕が施される幅広の隆帯が付され、隆帯間に繩文原体側面圧痕によるC字形の押圧列が施されるものと四角形や円形の刺突が施されるもののがみられた。一般に「C字形押圧列」→「工具による刺突列」へと時間的に変化するものとされている。また円筒上層 b 式期にはC字形押圧列の他に隆帯間に繩文の側面圧痕が施されると理解されている。当遺跡ではこれらの特徴を有するものに他に、隆帯間の側面圧痕(b式的要素)と工具による刺突列(c式的要素)が組み合わせられるものが存在している(72~76)。

### 2 繩文時代中期末(大木10式期)

B地区南東部の尾根地形から沖積中位面への移行部に位置するVI I - 271グリッドにおいて、大木10式期の堅穴住居跡が確認されている。床面から出土した14の土器は文様帶が上半部に限られること・その為に文様が横方向に展開すること・無文部が文様を構成することから大木10式第二段階(丹羽1989、松本 1999)のものと考えられ、同様の土器は山崎遺跡・泉山遺跡でもみられる。同時期の遺物は第5号住居跡付近の他に、B区北西部でも出土している。

### 3 繩文時代後期初頭

大木10式と十腰内I式の間に位置する後期初頭には3段階程の時期の介在が想定されており、当遺跡の南西6.25kmに位置する養沢遺跡を標識遺跡とする「養沢式」の捉え方によって大きく異なる2つの縦年案が示されている(成田 1981・1989 本間 1985・1987・1988)。本間が「養沢式」にみられる方形区画文系統(養沢第3群)と三角形区画文系統(養沢第1群・第2群)の装飾を別系統同時存在ととらえるのに対し、成田は両者を時期差ととらえ、「養沢式」を「沖附(2)式」(養沢第3群)と「弥栄平(2)式」(養沢第1群・第2群)に細別し前者から後者への変遷を考えている。

養沢式期の土器がA区の南西部、B区の南半部主に第5号住居跡周辺で少量出土しており、B区のものは養沢第1群を主とし、磨消繩文を伴う第2群・第3群は見られない。ただ122~126は器面の磨耗が著しいため、判別が困難であるが磨消繩文が施される可能性もある。

当遺跡では、隆線により文様が構成される土器が少数であるが検出されており、VI I - 271出土の15は狩獵文土器の一要素である上方に向かって開く緩杉状の樹木様モチーフが断面三角形と台形の2種の隆線で構成されている。両者の使い分けは意図的のようで、樹木の幹にあたる部分には左右2本の隆線上面が狭い断面三角形のものを選択し、そこから斜め上方に伸びる枝と考えられる部分には台形状のものを選択し、またその上面に繩文を転がすことによって葉が生い茂る様を表現しているよう

にも思われる。縄文も絵画要素の一部であって、無意味に施文されているのではないと考えたい。土器片の左下に部分に、先端の尖った横向きのラグビーボール形の隆線内にさらに隆線が施されるモチーフがみられるが、これは樹木以外のものを表現しているために縄文を施す必要も無く、断面三角形の隆線が選択されている。螢沢式とほぼ同じ出土分布を示す。

#### 4 縄文時代後期中葉～後葉

A 区で後期中葉～後葉の堅穴住居跡が 4 軒検出されている。第 3 号住居跡からは意図的に設置されたまま埋納されたと考えられる、倒立状態の深鉢・鉢形土器が 3 点検出されている。B 区ではほぼ全域から土器片の出土がみられるが、主に後期中葉にあたるものが主体を占める。

#### 5 縄文時代晩期・弥生時代

A 地区で、後期中葉～後葉の住居跡近辺から土坑が検出されている。第 1 号土坑からは小型有文台付鉢(図46-1)と小型粗製深鉢(図46-2)が底面より 10cm 程上位で検出された。台付鉢は三又の突起が 4 単位付され、波頂部に円の両端が横に引っ張られたようなモチーフを配し、その間を上下の弧状沈線で埋めている。弧状沈線以下の頭部は横位の籠ナデによって無文となり、体部は単節 LR が斜行し、台部は無文となる。小型ではあるが、内面には炭化物の付着が見られる。この小型台付鉢の装飾は、口頸部文様は縄文時代後期終末に見られるような構成であり、玉抱き三叉文の組形またはバリエーションとも考えられよう。円の両端の引っ張りと上下の弧線が合体し三叉文化することによって玉抱き三叉文化する。上下の弧状沈線は後期後葉の(木葉状)縄文帯の区画線の名残とも考えられよう。また後期後葉にみられる肩部に貼瘤が付され、貼瘤間に弧状沈線で結ぶ小型壺・小型台付鉢や突起下に円形モチーフを配しその間を縄文帯の一部をなす上下の弧線が埋める有文深鉢の文様モチーフに系統が連れよう。突起部は後期後葉に盛行した内外面に肥厚するものとは異なり、器厚と同程度である。文様構成は後期的、突起は晚期的、器形は縄文時代晩期初頭に見られるものであり、縄年の位置付けに苦慮する。共伴した小型深鉢は単節 LR 斜行縄文が施され、底部は若干の上げ底となり、口縁部の肥厚は認められない。土器の諸特徴より、第 1 号土坑の帰属時期は、縄文時代後期終末～晩期初頭としておく。東北北部の後期後葉の土器群の実態と大洞 B 式期後半段階の土器群を明らかにすると共に、近年、須藤隆・関根達人らによって明らかにされつつある北上川流域の縄文時代後期終末～晩期初頭の土器型式変化の様相を踏まえた上で、津軽地方の後期末葉～大洞 B 式期前半の様相が追及されるべきである。第 3 号土坑でも底部の作りが第 1 号土坑出土土器と類似し、筋が非常に細かい単節 LR 斜行縄文が施される縄文時代晩期前葉と考えられる小型深鉢が出土している。B 区の VK-270・271 では、完形品の小型壺が 2 点(193・197)出土した。193 は胴部文様帶の上下に横位連続工字文風の文様を描き、その中間に Z 字型の構成をとる入組文が描かれる。その文様要素は渡島半島南部から青森県に分布するとされる晩期中葉後半～後葉前半段階の聖山式にみられるものである。

(永崎 盛)

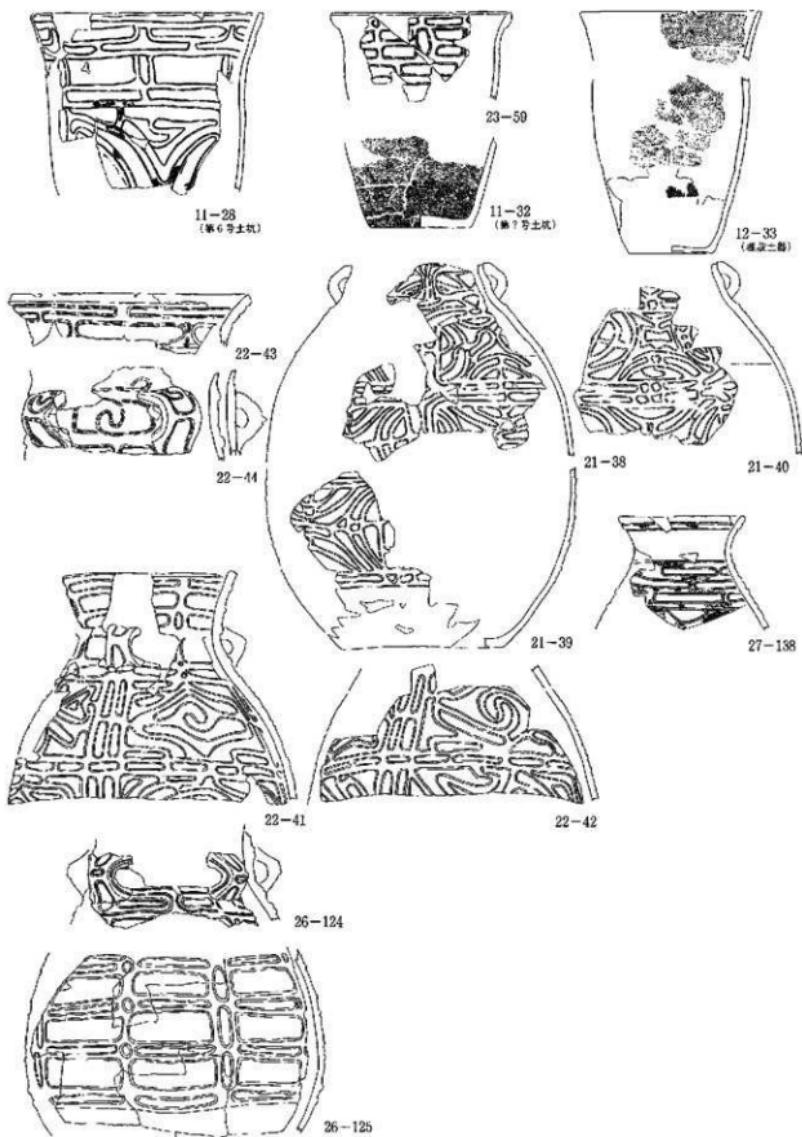


図68 山下遺跡出土土器集成図 (S=1/6)

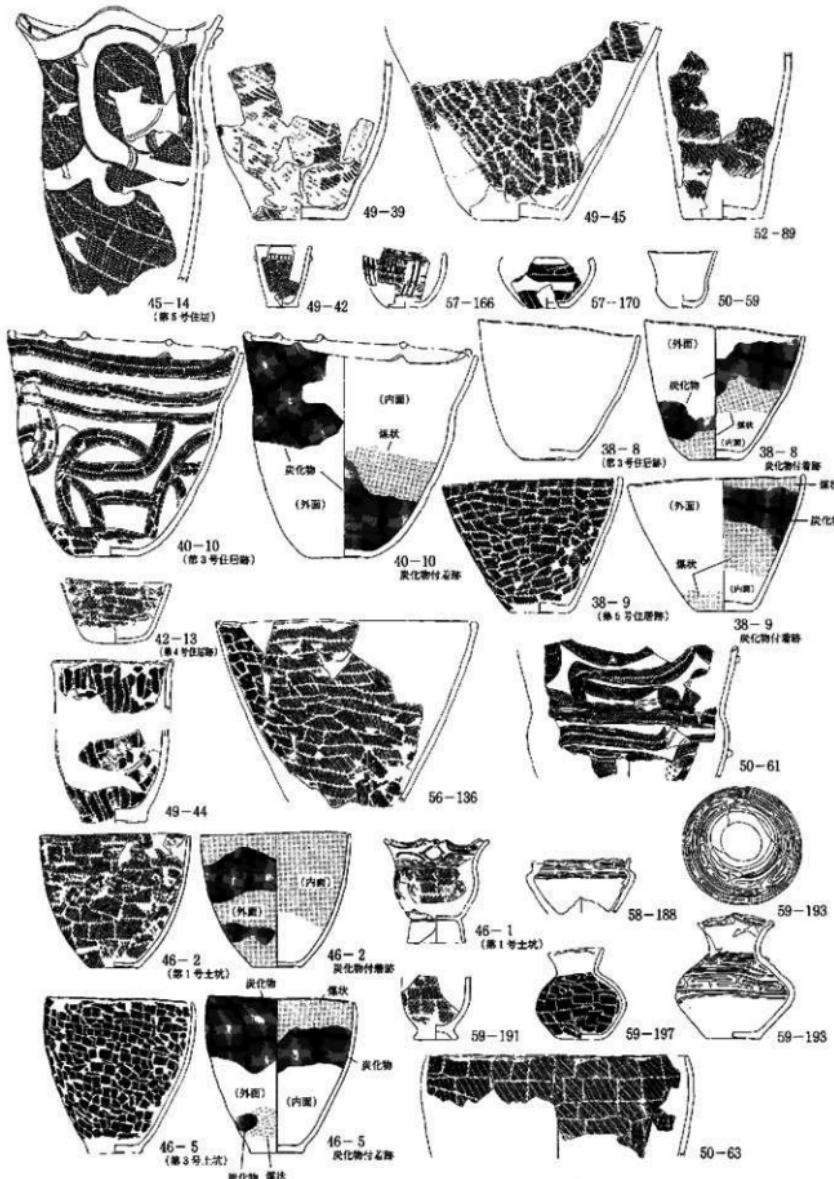


図69 米山(2)遺跡出土土器集成図 (S=1/6)

## 『山下・米山(2) 遺跡 参考文献』

- 青森県螢沢遺跡発掘調査団 1979 「螢沢遺跡」
- 青森県教育委員会 1977 「水木沢遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 青森県教育委員会 1980 「永野遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森県教育委員会 1980 「金木町 神明町遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
- 青森県教育委員会 1982 「馬場瀬遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
- 青森県教育委員会 1983 「鷹平(2)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
- 青森県教育委員会 1984 「弥宗平遺跡(2)」 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 「莊庭遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 「尻高(2)・(3)・(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
- 青森県教育委員会 1985 「大石平遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1986 「沖附(1)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第100集
- 青森県教育委員会 1986 「沖附(2)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会 1988 「上尾敷(2)遺跡(Ⅰ)」 青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 青森県教育委員会 1988 「上尾敷(2)遺跡(Ⅱ)」 青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 青森県教育委員会 1989 「二ッ石遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 青森県教育委員会 1989 「船野遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- 青森県教育委員会 1998 「水吉遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第245集
- 青森県教育委員会 1999 「山下遺跡・上野尻遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第258集
- 青森県教育委員会 1999 「十勝内(1)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 秋田県教育委員会 1988 「虫内I遺跡」 秋田県文化財調査報告書第274集
- 秋田県教育委員会 1984 「白長根館I遺跡」「東北竪貫自動車道発掘調査報告書XII」 秋田県文化財調査報告書120集
- 浅川滋男編 1998 「先史日本の住居とその周辺」 余良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「郡南村・湯沢遺跡」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第2集
- 岩手県教育委員会1979「卯達坂遺跡」「東北竪貫自動車道埋蔵文化財調査報告書I」岩手県文化財調査報告書31集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1982 「扇畑II遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第39集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1983 「弘風敷I・II・III・IV・V遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第61集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1984 「上斗内III・IV・V遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書71集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1986 「駒越遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第98集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 「馬場野II遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 「馬場野II遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 「大日向II遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第100集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994 「大日向II遺跡発掘調査報告書-第2次～第5次調査-」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第225集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 「守久保遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第239集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 「和当地I遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第259集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 「桃の木遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 「大日向II遺跡発掘調査報告書-第6次～第8次調査-」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第273集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 「大芦I遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第306集
- 鹿角市教育委員会 1993 「赤坂B遺跡」 鹿角市文化財調査資料 48
- 鹿角市教育委員会 1995 「赤坂A遺跡」 鹿角市文化財調査資料 53
- 金子昭彦 1994 「東北地方北半部における縄文時代後期中業の土器-新山椎現社遺跡Ⅲ群1~3期土器-」  
「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XIV」
- 金子昭彦 1994 「十勝内Ⅲ式とⅣ式の境界-東北地方北半部における縄文時代後期中業から後業への土器変遷-」  
『岩手考古学』第6号

- 金子昭彦 1995 「十腰内I式と大湯式における型式としての諸問題—細分、組成、併行型式の問題—」  
『岩手考古学』第7号
- 金子昭彦 1996 「十腰内I式の三細分についての考え方—新しい部分と最も新しい部分の分離」『岩手考古学』第8号
- 金子昭彦 1997 「十腰内I式と「大湯式」における座形土器の変遷」『岩手考古学』第9号
- 小宮恒雄 1990 「住まいの入口」『季刊 考古学』第32号
- 酒井宗之 1987 「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡」『岩手埋文センター紀要』
- 鶴森健一 1990 「住まいのかたち」『季刊 考古学』第32号
- 札幌市教育委員会 1995 『H317遺跡』札幌市文化財調査報告書46
- 札幌市教育委員会 1997 『K39遺跡 長谷工地点』札幌市文化財調査報告書55
- 鈴木克彦 1989 「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究4』
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)(下)・十腰内3, 4, 5式土器の研究—」  
『考古学雑誌』83-2・3
- 成田道彦 1981 「後期の土器 青森県の土器」『縄文文化の研究4』
- 成田道彦 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 縄織文』
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究4』
- 八戸市教育委員会 1984 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書—牛ヶ塹遺跡—』八戸埋文調査報告13集
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—後谷地遺跡』八戸埋文調査報告書15集
- 八戸市教育委員会 1988 『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書26集
- 八戸市教育委員会 1988 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書27集
- 八戸市教育委員会 1991 「風張(1)遺跡Ⅰ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 八戸市教育委員会 1991 「風張(1)遺跡Ⅱ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 八戸市教育委員会 1995 『八戸市内遺跡発掘調査報告書7—坂中遺跡—』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 弘前市教育委員会 1988・1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書—岡版編・本文編—』
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における縄文後期前葉上器群の実態」『よねしろ考古』第1号
- 本間 宏 1987・1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)(2)—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第3・4号
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書第111集
- 村田文夫 1985 『縄文集落』考古学ライブラリー36 ニュー・サイエンス社
- 山本暉久 1993 「住居論」『季刊 考古学』 第44号

山下跡出土土器観察表 1

No.	地区	出土地	遺構	形	器種	口縁	口	縁	部	底文	内面調整	北端縁	備考	同一
1	武蔵区	II J 187		Ⅲ						不明	ナデ*	底面に2mmの比較状の底疣有		
2	武蔵区	II N 167		I						ナデ	ナデ	斜面底疣有、斜疣多		
3	武蔵区	II Q 195		深鉢						不明+造文	ミシ銘行	底面底疣有		
4	武蔵区	V A 177		II 壺	平紐	原体正直（R）		原体正直（R）	R	不明		底面から1条の底疣有下する円筒下層d2式		
5	武蔵区	II N 104		I 深鉢	波状	原体正直（R）内面に幾擦有			R	ナデ				
6	武蔵区	V D 182		III 深鉢	波状	原体正直（L）		原体正直（L）	L	不明		口部外側にもしの側疣有		
7	武蔵区	N 186		II 深鉢				純円・平行化縁	ミシ銘行	不明	4			
8	武蔵区	N P 175		I 深鉢	平紐	梅円文			ミシ銘行	ミガキ	4			
9	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	平紐	梅円文		梅円文	無	不明	4			
10	武蔵区	V B 184		III 深鉢	平紐	梅円文・繩文			ミシ銘行	不明	2	此期既V字形でシャーペ有、内面底疣有		
11	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	平紐	梅円文		梅円文	ミシ銘行	不明	1～2	器底4～6cmと薄手		
12	武蔵区	V J 175		II 深鉢	平紐				沈梅文・圓文	ミシ銘行	不明	3	先端底文	
13	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	平紐	口唇底直下横走底疣1本、その下は被方向の条痕			無	ナデ	2	移位多		
14	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	波状	沿口沈痕+刺突				不明	3	刺突径3mm		
15	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	波状	梅円文			ミシ銘行	ミガキ	2			
16	武蔵区	V E 174～175		I 深鉢	直状	沿口沈痕			不明	ナデ	3	内面口唇底疣外側底疣粗粒		
17	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	波状	沿口沈痕		梅円文	ミシ銘行	ナデ	2			
18	武蔵区	V A～P 174～175		III 深鉢	波状	沿口沈痕			ミシ銘行	ミガキ	3	口唇底疣上に繩文底文		
19	武蔵区	V A～P 174～175		Ⅲ	壺	平紐	繩文	繩文	無	ナデ	4	口唇等に刺突		
20	武蔵区	V A～P 174～175		II 壺	平紐	梅円文		梅円文	無	ナデ	4		19-21-25 23-24	
21	武蔵区	V A～P 174～175		II 壺	平紐			梅円文	無	ナデ	4			
22	武蔵区	V A～P 174～175		II 壺				梅円文	無	ナデ	4	橢型横状把手に梅円文		
23	武蔵区	V A～P 174～175		III 壺				梅円文+三角状文	無	ナデ				
24	武蔵区	V A～P 174～175		III 壺				梅円文	無	ナデ	4	橢型横状把手に梅円文		
25	武蔵区	V E 174～175	7号土坑	深鉢		直状文及モチーフ・光沢陶文			ミシ銘行	ミガキ	3			
26	武蔵区	V D 165		III 深鉢	平紐	無文			ミシ銘行	ナデ		光沢陶文		
27	武蔵区	V C 174		III 深鉢	平紐	平行化縁			ミシ銘行	ナデ	1	内面底疣化物付着		
28	C 区	V K 183	6号土坑	深鉢	平紐	平行化縁・梅円文	上半梅円文・下半三角状モチーフ		ミシ銘行	ミガキ	2～3	体部外面上化物付着		
29	C 区	V K 183	6号土坑	寶土									26	
30	C 区	V K 183	6号土坑	寶土									28	
31	C 区	V K 183	7号土坑	寶土	深鉢		網状捺条文（R）	網状捺条文	ミシ銘行	ナデ				
32	C 区	V K 183	7号土坑	深鉢			底部から6～7cmの無釉部に丁字なみガキ	手縫目捺条文	ミガキ					
33	C 区	V I 184	7号土坑	深鉢	平紐	繩文			ミシ銘行	ミガキ				
34	C 区	V I 184	埋土器	深鉢	平紐	無文			ミシ銘行	ミガキ		埋土器器体		
35	C 区	V I 184	埋土器	1号土坑	深鉢	梅円文			ミシ銘行	ミガキ		埋土器器底上		
36	C 区	V I 184	埋土器	1号土坑	深鉢	梅円文			ミシ銘行	ミガキ	2～4	埋土器器底上		
37	C 区	V I 184	埋土器	1号土坑	深鉢	梅円文			ミシ銘行	ミガキ	34	埋土器器底上		
38	C 区	V I 184	埋土器	1号土坑	深鉢	横状把手	横状把手を構成する内円モチーフを構成する内円モチーフ		無	ミガキ	3	器底7mm	39-40	
39	C 区	V I 184	埋土器	III 壺					無	ミガキ	2～3		38	
40	C 区	V I 184・ V I 185	埋土器	III 壺			内円モチーフ周囲モチーフを他の文様で記述		無	ミガキ	2～3	外縁または本子の粘土等壁上げ	38	
41	C 区	V I 184	埋土器	III 壺	平紐	梅円文	梅円文内区間に三角状モチーフと三角状モチーフ		無	ミガキ	3			
42	C 区	V I 185	埋土器	III 壺	平紐	梅円文	梅円文内区間に三角状モチーフと三角状モチーフ		無	ミガキ	3		41	
43	C 区	V I 184	III 壺	平紐	梅円文・一部波状文化				無	ミガキ	4	底縁剥離部、下縁き沈撇出		
44	C 区	V I 184	III 壺	平紐	把手底疣は、上部側が人頭状況下部側が倒伏状モチーフ	梅円文+入組み状文			無	ミガキ	4	横状把手5単位		
45	C 区	V I 184	III 壺	平紐	梅円文				無	ナデ	4			
46	C 区	V I 184	III 壺	梅円文					無	ナデ	4	横状把手		
47	C 区	V I 185	III 壺	梅円文					無	ミガキ	3			
48	C 区	V I 184	III 壺	梅円文					無	ナデ	4			
49	C 区	V I 184	III 壺	梅円文					無	ナデ		底縁剥離部、下縁き沈撇出		
50	C 区	V I 184	III 壺	梅円文					無	ナデ	4			
51	C 区	V I 184	III 深鉢	平紐	沿口沈痕・梅円文	梅円文			無	不明	3	沈撇断面V字形		
52	C 区	V I 185	III 深鉢	平紐	梅円文				無	ナデ	4			
53	C 区	V I 184	III 深鉢	平紐	梅円文				無	ミガキ	3	沈撇断面V字形		
54	C 区	V I 184	III 深鉢	平紐	無文				無	ミガキ	3	粘土厚2mm以下		

山下遺跡出土土器観察表 2

No.	地名	出土場	地図	断面	口部	底部	側面	部	文	内面裏面	外側面	指 定	同一
55	C 区	V I 184		圓錐	直状	椭円文			無	不明	3		
56	C 区	V I 184		圓錐	直状	口沿浅・椭円文			無	3 寸半	3~4		
57	C 区	V I 185		圓錐	平底	椭円文			無	ナデ	4	部分圓底	
58	C 区	V K 181		圓錐	平底	椭円文			無	ミガキ			
59	C 区	V J 187		圓錐	平底	椭円文			無	ミガキ			
60	C 区	V K 180		圓錐	平底	椭円文			無	ナデ	2		
61	C 区	V M 185		圓錐	平底	椭円文		側面	椭円文	L R 斜行	ナデ	2	
62	C 区	V M 185		圓錐	平底	平行沈痕・椭円文		側面	椭円文	無	不明	4	
63	C 区	V L 185		圓錐	平底	平行沈痕		側面	椭円文	無	ミガキ	2	
64	C 区	V I 180		圓錐	平底	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	2	
65	C 区	V M 185		圓錐	平底	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	2~3	
66	C 区	V M 185		圓錐	平底	椭円文		側面	椭円文	L R 斜行	ミガキ	3	
67	C 区	V K 180		圓錐	平底	平行沈痕		側面	椭円文	無	ナデ	2	
68	C 区	V I 180		圓錐	平底	平行沈痕		側面	椭円文	無	ミガキ	5	
69	C 区	V K 184		圓錐	底狀	口沿沈痕・椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
70	C 区	V K 184		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
71	C 区	V H 181		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	不明	4	部分圓底
72	C 区	V K 184		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	5	
73	C 区	V I 180		圓錐	底狀	口沿沈痕		側面	椭円文	無	ミガキ	4	
74	C 区	V I 180		圓錐	底狀	口沿沈痕		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
75	C 区	V G 181		圓錐	底狀	口沿沈痕・椭円文		側面	椭円文	無	L R 斜行	ミガキ	2~3
76	C 区	V J 185		圓錐	底狀	口沿沈痕		側面	椭円文	無	不明	4	
77	C 区	V K 186		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	5	底部下に鉢の縁帯
78	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
79	C 区	V L 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
80	C 区	V L 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	79
81	C 区	V L 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	79
82	C 区	V F 182		圓錐	底狀	口沿沈痕・椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	前面沈痕
83	C 区	V G 182		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	前面部に口底部を通じ
84	C 区	V K 184		圓錐	底狀	口沿沈痕		側面	椭円文	無	不明	3	
85	C 区	V K 184		圓錐	底狀	口沿沈痕		側面	椭円文	無	ミガキ	3	外部工具なし
86	C 区	V K 184		圓錐	底狀	口沿沈痕・椭円文間に豊浜		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
87	C 区	V G 184		圓錐	底狀	口沿沈痕・工具による肩突起		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
88	C 区	V K 184		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
89	C 区	V K 184		圓錐	底狀	口沿沈痕・椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
90	C 区	V G 184		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	3	
91	C 区	V I 186		圓錐	底狀	4	口沿沈痕		椭円文	無	ナデ	2	
92	C 区	V F 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	2	
93	C 区	V I 186		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	不明	3	
94	C 区	V E 182		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
95	C 区	V E 182		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
96	C 区	V E 182		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
97	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
98	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
99	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	3	
100	C 区	V K 181		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
101	C 区	V H 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
102	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
103	C 区	V M 185		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
104	C 区	V K 184		圓錐	底狀	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
105	C 区	V F 184	丁	圓錐	半底	椭円文?		側面	椭円文	無	ミガキ	3	左右し象の文様
106	C 区	V M 185		圓錐	半底	双文		側面	椭円文	無	ナデ	2	
107	C 区	V K 186		圓錐	半底	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	2	口唇部點壓
108	C 区	V K 186		圓錐	半底	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	2	水文全体口唇部點壓
109	C 区	V K 184		圓錐	半底	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	108	
110	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文		側面	椭円文	無	ナデ	109	
111	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文		側面	椭円文	無	ミガキ	2	前面部斜面
112	C 区	V K 186		圓錐	半底	椭円文	(L)	側面	椭円文	無	ナデ	2	前面部斜面
113	C 区	V K 186		圓錐	半底	椭円文	(L)	側面	椭円文	無	ミガキ	2	口唇部平面
114	C 区	V I 180		圓錐	半底	椭円文	(L)	側面	椭円文	無	ミガキ	2	口唇部にも熟文
115	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文	(L)	側面	椭円文	無	ミガキ	2~3	熟文全体口唇部點壓
116	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文	(R)	側面	椭円文	無	ナデ	2	口唇部上端
117	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文	(R)	側面	椭円文	無	ナデ	2	口唇部上端
118	C 区	V L 185		圓錐	半底	椭円文	(R)	側面	椭円文	無	ナデ	2	口唇部上端
119	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文	(R)	側面	椭円文	無	ナデ	2	口唇部上端
120	C 区	V M 185		圓錐	半底	椭円文	(R)	側面	椭円文	無	ナデ	2	口唇部上端
121	C 区	V I 180	丁	圓錐	9	侧面压痕 (LR)		側面	椭円文	無	ナデ	2	斜面压痕
122	C 区	V K 184	丁	圓錐	9	侧面压痕 (LR)		側面	椭円文	無	ナデ	2	斜面压痕
123	C 区	V K 180	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	ナデ	2	椭円文
124	C 区	V K 181	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文 + 圆筒者と把手手筋部下端下括り注頭部	無	ミガキ	4	側次把手4単位
125	C 区	V K 181	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	ミガキ	4	
126	C 区	V K 183	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	不明	3~4	138
127	C 区	V L 183	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	不明	3~4	136
128	C 区	V K 183	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	ナデ	4	
129	C 区	V K 183	三	圓錐	椭円文			側面	椭円文	無	不明	3~4	136

山下遺跡出土土器観察表 3

No.	施区	出土地	遺構	層	部種	口	黒	部	網	部	地文	内面彌漫	北縫縫	備考	同一
130	C区	V L183		Ⅲ	甕				椎円文		無	ナゲ	3-1		136
131	C区	V K183		Ⅲ	甕				三角状モチーフ		無	不明	3-1		136
132	C区	V K183		Ⅲ	甕				椎円文		無	不明	3-1		
133	C区	V K183		Ⅲ	甕				椎円文		無	不明	3-1		136
134	C区	V L183		Ⅲ	甕				平行北縫		無	不明	3-1		136
135	C区	V K183		Ⅲ	甕				椎円文		無	不明	3-1		136
136	C区	V K183		Ⅲ	甕				椎円文		無	不明	3-1		
137	C区	V K188		Ⅲ	甕				平行北縫		無	不明	3-1		136
138	C区	V I184		Ⅲ	甕	平組	平行北縫・頭部飾文	上手筋文・下手三角状モチーフ	SL斜行	ミガキ	4				
139	C区	V I181		Ⅲ	甕	平組	平行北縫		SL斜行	ミガキ	5				
140	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状モチーフ	SL斜行	ミガキ	4-1			138
141	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状文	SL斜行	ナデ	3			138
142	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状文	SL斜行	ナデ	3			138
143	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状文	SL斜行	ナデ	3			138
144	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状文	SL斜行	ナデ	3			138
145	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文		ナデ	3			138
146	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文+三角状文	SL斜行	ナデ	3			138
147	C区	V K183		Ⅲ	甕	平組	椎円文		無	不明	4	部表記無			
148	C区	V K181		Ⅲ	甕				椎円文		無	ミガキ	3		
149	C区	V L183		Ⅲ	甕	平組	椎円文		無	ナデ	4				
150	C区	V L184		Ⅲ	甕	平組	不明		無	ミガキ	2-1	口沿平組			
151	C区	V K181		Ⅲ	甕	平組	椎円文		無	ミガキ	5				182
152	C区	V G184		Ⅲ	甕	平組	椎円文		無	ミガキ	5				
153	C区	V K186		Ⅲ	甕	平組	椎文		無	ナデ	3-2	沈面断面V字形			
154	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文		ナデ				沈面切れる
155	C区	V K184		Ⅲ	甕				椎円文+荆肉(径4mm)	L R斜行	不明	3			
156	C区	V K183		Ⅲ	甕				椎円文		無	ナデ	4		
157	C区	V K181		Ⅲ	甕				椎円文		無	2	撫拭把手		
158	C区	V I181		Ⅲ	甕				椎円文		無	ミガキ	2	沈面断面V字形	
159	C区	V K186		Ⅲ	甕				椎円文?		無	不明	3		
160	C区	V G184		Ⅲ	甕				椎円文		無	ナデ	2	底面にも沈痕有	
161	C区	V K186		Ⅲ	甕				椎円文?		無	ミガキ	2		
162	C区	V K186		Ⅲ	甕				椎円文?		L R斜行	ナデ	3	北縫縫	
163	C区	V L184		Ⅲ	陶鉢	散状	繩文		無	SL斜行	ミガキ	4	10mm		
164	C区	V L183		Ⅲ	陶鉢	平組	平行北縫	無文	無	SL斜行	ミガキ	2	10mm程度の薄手		
165	D区	W I173		II	深鉢	平組	液状後縫+円形+指壓形粘着	横方向の弧状+縦に底付する2本一本半の波状文	SL斜行	ナデ	3	円筒形尾端式	口唇に沿ってL R押圧		
166	D区	W J176	I	深鉢		波状	頂部二又の山形突起+原厚底(「L」)+後縫	繩文	L R斜行	ナデ	4	円筒上部と押圧	口唇に沿ってL R押圧		
167	D区	W J176	II	深鉢		波状	繩文		SL斜行	ナデ					口唇を有する円形突起
168	D区	W J176	I	深鉢		波状	底部・内面に施錐有	三角状文	SL斜行	ミガキ	4				
169	D区	W J176	I	深鉢		波状	旋錐	波状文	SL斜行	ナデ	4				168
170	D区	W J176	I	深鉢		波状	旋錐	繩文	SL斜行	ナデ					
171	D区	W J176	II	深鉢		波状	三角形の星雲				不明			窄部間に小穴孔。	その内面にL R押圧。
172	D区	W J176	II	深鉢		波状	平面浅内形の張錐+陰錐		SL斜行	ナデ					
173	D区	W K176	I	深鉢		波状		三角状文	SL斜行	ナデ	3	三角状モチーフと椎円文の内側に施錐北縫または椎円文が入る			
174	D区	W K176	II	深鉢		波状			SL斜行	ナデ	3				173
175	D区	W K176	II	深鉢					SL斜行	ナデ	3				173
176	D区	W J176	I	深鉢		波状	波状文		SL斜行	ナデ	3				
177	D区	W J176	II	深鉢		波状	波状文		SL斜行	ナデ	3				
178	D区	W J174	II	深鉢		波状	前口凹壠+内面隆起	無	SL斜行	ナデ	3	沈面断面四角形	口唇部に沈面		
179	D区	W J172	III	深鉢		波状	椎円文		SL斜行	ナデ	3				
180	D区	W H172	III	深鉢		波状	椎円文?		SL斜行	ミガキ	3				
181	D区	W J176	II	深鉢		波状	繩文		SL斜行	ナデ					
182	D区	W J176	II	深鉢		平組	繩文		SL斜行	ナデ				口唇部にも繩文施文	
183	D区	W J176	II	深鉢		平組	施錐	繩文	SL斜行	ナデ					
184	D区	W H172	III	深鉢			内面鋸J目(6mm/cm)							錐錐形・灰色	
185	D区	W J175	I	深鉢			内面鋸J目(3mm/cm)							錐錐形・褐灰色	
186	D区	W P176	I	深鉢										錐錐形・灰白色	
187	D区	W P176	I	深鉢			外周鋸J目(4mm/cm)							錐錐形・黄灰色	
188	D区	W P176	I	深鉢			外周鋸J目(4mm/cm)							錐錐形・黄白色	
189	D区	W P176	I	深鉢			外周鋸J目(4mm/cm)							錐錐形・浅褐色・白無地・暗褐色	

米山(2)遺跡出土土器観察表 1

No.	施区	出土地	遺構	層	部種	口	黒	部	網	部	地文	内面彌漫	北縫縫	備考	同一
1	A区		1往					椎円文		無	ミガキ	2			
2	A区		1往	2	不明			椎円文		無	ミガキ	1.5			
3	A区		1往	3	深鉢	無文				無	ミガキ				
4	A区	壁長235	2往	床底	口?			細網縫によって上がりの入組文が施される	無	丁字なナデ		2	赤色施錐付着		
5	A区	壁長235	2往	1	深鉢	繩文			SL斜行	ミガキ				口唇部削除	
6	A区	壁長236	3往	床底	床	沿口沈継間に板キザミ		木葉状縫文+L R構文	同反羽状	SL斜行	ミガキ	1-2	谷部崩れ。内面削除		

米山(2)遺跡出土土器觀察表 2

No.	施工作	出土地	施機	帶	標記	口 頭 部	側 部	地文	内部調整	式類別	備 考		同一	
											口部内傾する平坦 頂となる			
7	A区	3住	覆土	鉢	無文			無	ナデ					
8	A区	3住	床	深鉢	無文・縫なミガキ			無	ミガキ		床面に側立堆積			
9	A区	3住	床	深鉢	無文			無	ミガキ		床面に側立堆積			
10	A区	3住	床	深鉢	尖突7単位・3条の構文帯			無	ミガキ		床面に側立堆積			
11	A区	壁K233	4住	pit	深鉢			幅5~7mmの盛面上にU字斜行	無	ミガキ	3	床面に側立堆積		
12	A区	4住	床	深鉢	無文			無	ナデ					
13	A区	4住	床	深鉢	無文			0多底原羽状	—	ミガキ	丸底吹			
14	B区	5住	床	深鉢	大木10式系文様			大木10式系文様	R L R 規則	ナデ	3	ヒビ状突起を文様上 端と交差部に點付		
15	B区	5住	床	深鉢	縦文			縦文	R L R 規則	ナデ				
16	B区	5住	床	深鉢	指内底付。 ボタン状突起			無	ミガキ	2				
17	B区	5住	床	深鉢				底下して盛基になる	R L R 規則	ナデ	3			
18	B区	6住	炉	深鉢				無	ナデ		底部網代張			
19	B区	5住	炉	深鉢	大木10式系文様			大木10式系文様	R L R 規則	ナデ	7	指状L線		
20	A区	6住	炉	深鉢				大木10式系文様	R L R 規則	ナデ	7			
21	B区	5住	炉	深鉢				大木10式系文様	R L R 規則	ナデ	7			
22	B区	5住	pit7	1	深鉢	無文・横方向の明顯なナデ痕		縦文	R L R 規則	ミガキ		内面底付竹・L型斜行		
23	B区	5住	pit7	1	深鉢			縦文	R L R 規則	ミガキ		内面底付竹・L型斜行		
24	B区	5住	pit7	1	深鉢	無文+1条の横底比拵		縦文	R L R 規則	ミガキ	4	3ヒビ状突起		
25	B区	6住	床	深鉢				縦文帯中に割突	R L R 規則	ナデ	4			
26	B区	VJ 271	5住	1	深鉢			三角形状文	R L R 規則	ナデ	5	3ヒビ状突起	125	
27	B区	5住	深鉢			沈文		無	ミガキ	5				
28	B区	5住	深鉢			三角形状文		上と対応	ミガキ	5				
29	B区	5住	深鉢	縦文		縦文		R L R 規則	ミガキ			丸底吹		
30	B区	VJ 271	5住	深鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ミガキ			丸底吹 左上に右下		
31	B区	5住	深鉢	縦文		縦文		R L R 規則	ミガキ			丸底吹 左上に右下		
32	B区	5住	床	深鉢		無文		無	ナデ			底部網代張 4cm		
33	B区	5住	床	深鉢		無		R L R 規則+絶縁回転文	R L R 規則	ナデ		底部網代張に付番		
34	B区	5住	床	深鉢		縦文		R L R 規則	ナデ			底部網代張		
35	A区	VJ 271	5住	深鉢		縦文		R L R 規則	ナデ			底部網代張		
36	A区	VJ 246	I	深鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ナデ			底部網代張		
37	A区	VJ 229	II	深鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ナデ			口部肥厚 底部網代張		
38	A区	VJ 229	II	深鉢	網目状底吹文(縦回転)	網目状底吹文(縦回転)		網目状底吹文(縦回転)	網目状底吹文(縦回転)	ナデ		折れし口縫		
39	A区	VJ N341	II	深鉢				R L R 規則	ナデ			底部網代張		
40	A区	VJ L333	II	深鉢				R L R 規則	ミガキ	2			11	
41	A区	VJ L223	II	深鉢		幅5mmの後壁上にR L R 規則		R L R 規則	ナデ			網代張		
42	A区	VJ I 233	I	深鉢		無文下の7mmの後壁上に 横文網代張文又はキサギ		R L R 規則	ミガキ			ミヒタニア?		
43	A区	VJ G229	II	深鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ミガキ			網代張		
44	A区	VJ F 227	II	深鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ミガキ			底部網代張 網代張		
45	A区	VJ F 227	II	深鉢		L R 斜走であるが一部のみ幅 2.5cmにR L R規則帯存在		R L R 規則	ミガキ			底部網代張り上る		
46	A区	VJ G 227	I	鉢	無文	無文		無	ミガキ			外側ケメリ後ナデと ミガキ		
47	A区	VJ F 227	I	鉢	無文	無文		R L R 規則	ミガキ					
48	A区	VJ K 235	I	鉢	無文・縫なミガキ	無文・縫なミガキ		無	ミガキ			口部肥厚		
49	A区	VJ M 239	II	鉢	縦文	縦文		R L R 規則	ミガキ			口部内面肥厚		
50	A区	VJ G 227	II	鉢	2条の羽目帯 丁寧なミガキ	羽目帯		無	ミガキ			内面に無付さ虞有。 煮食用。		
51	A区	VJ G 228	II	鉢	削落の為不明。	1条の羽目帯。 沈文		無	ミガキ	2		若干肥厚		
52	A区	VJ K 235	I	鉢	内面に肥厚する突起。 折口底。			無	ナデ	3				
53	A区	VJ G 238	II	鉢	R L R規則+沈文			無	ナデ			口部肥厚		
54	A区	VJ F 227	II	深鉢	縦文			無	ナデ			口部内面に肥厚	55~56	
55	A区	VJ F 227	II	深鉢				無	ナデ				54~56	
56	A区	VJ F 227	II	深鉢		木葉状縦文帯		無	ナデ			内面に無付さ虞有。 煮食用。	54~58	
57	A区	VJ G 227	I	鉢	羽目帯・縦文帯			無	ミガキ					
58	A区	VJ F 227	II	鉢	異原羽状 底走沈文			0多底原羽状	ミガキ			口部肥厚		
59	A区	VJ L 238	I	鉢	無文	無文・丁寧なミガキ		無	ナデ			充填品・上げ底・口 筋やや肥厚		
60	A区	VJ I 233	I	深鉢	沈文	沈文・丁寧なミガキ		R L R 規則	ナデ	3				
61	試掘	VJ P 218	II	深鉢	縦文帯によるランク状文	縦文帯による縦状吹文		0多底原羽状	ミガキ	4	1cm~1.2cmの脇瘤の 頭部にキサギ			
62	A区	VJ L 237	I	鉢	左右段違いの直縫。モチフ 不規則の沈文帯			R L R 規則	ナデ	2		外側に化粧作業		
63	A区	VJ L 237	II	深鉢	縦文			R L R 規則	ナデ			縦文1条あたりに窓い。		
64	B区	VJ G 262	II	深鉢	口沿・陳善上・支脚正	原角C型		—	ミガキ			充填品に空孔文	65	
65	B区	VJ G 262	II	深鉢	陳善上・L R 剣正	原角C型		—	ミガキ			充填品に空孔文	64	
66	B区	VJ G 261	II	深鉢	隆帶上R規則	原角C字跡		—	ミガキ					

米山2遺跡出土土器観察表3

%	出土区	出土地	地塊	層	地層	口 窓 部	側 部	網 部	本文	内部調整	外縁部	標 号	同一
67	B区	ⅧG262		II	深鉢	口侈・隆底支脚圧	R L斜行		—			66	
68	B区	ⅧG262		II	深鉢	隆面土上L押圧。	R L斜上R押圧。		—	ナダ		67	
69	B区	ⅧG262		II	深鉢	原体上L圧。	R L押圧。原体C圧						
70	B区	ⅧG262		II	深鉢	隆面土上L押圧。			—	ナダ			
71	B区	ⅧG263		II	深鉢	隆面土上L押圧			L	ナダ			
72	B区	ⅧE261		II	深鉢	脇状突起。	L・R押圧。竹管状刺突		—	不明			
73	B区	ⅧF261		II	深鉢	脇状突起着L押圧	L・R押圧。竹管状刺突		—	ナダ		296	
74	B区	ⅧG261		II	深鉢	隆面土上L押圧。	L・R押圧			ナダ			
75	B区	ⅧE261		II	深鉢	隆面土上L押圧。	L・R押圧		—	ナダ			
76	B区	ⅧG260	風削木	II	深鉢	隆面土上L押圧。	L・R押圧		—	ナダ			
77	B区	ⅧD261		II	深鉢	口侈・隆面土上L押圧。本日目?剥落			—	ナダ			
78	B区	ⅧG261		II	深鉢	隆面土上L押圧。円又は角神文立	R L斜行横文		—	ナダ			
79	B区	ⅧG261	風削木	II	深鉢	隆面土上L押圧。角神文立	0多E L斜行・結節回転文		—	ナダ			
80	B区	ⅧG260	風削木	II	深鉢	隆面土上L押圧。円神文立	L押圧	L	ミガキ				
81	B区	ⅧG261	風削木	II	深鉢	脇状工具刺痕	魂文	R L斜行	ナダ				
82	B区	ⅧG260	風削木	II	深鉢	ボンク状突起	魂文	R L斜行	ミガキ	口唇部強帶貼付			
83	B区	ⅧE263		I	深鉢	メガネ状隆綫上S斜行	隆面土R L斜行。R L斜行	R L斜行	ナダ				
84	B区	ⅧF262	風削木	II	深鉢	脇状突起上S斜行	魂文	R L斜行	ナダ				
85	B区	ⅧF263	I	深鉢	幅4~5mmの崩壊	魂文	R L斜行	ナダ					
86	B区	ⅧG260		II	深鉢	幅4~6mmの崩壊	魂文	R L斜行	ナダ				
87	B区	ⅧG260	風削木	II	深鉢	脇状工具刺痕。	魂文	R L斜行	ナダ				
88	B区	ⅧE263		II	深鉢	傾倒直底の剥落痕	結束纏文・細節回転文	R L斜行	ナダ				
89	B区	ⅧH261		II	深鉢	0多E直底I種横回転・細節回転	0多E直底I種横回転・細節回転	—	ナダ	此物付着明瞭			
90	B区	ⅧG262		I	深鉢	無文・拂走沈痕。	拂内状文・L R斜行	R L斜行	ミガキ	4	瓶体回転。		
91	B区	ⅧF262	風削木	II	深鉢	拂走沈痕。	R L斜行	R L斜行	5				
92	B区	ⅧE263		I	深鉢	無文・I条横走沈痕。	R L斜走A斜走。	R L斜行	ミガキ	3	見L左上の右下。		
93	B区	ⅧG260	風削木	II	深鉢	無文内側にI Lテテ回転+斜窓	R L斜行	ナダ	3	L斜タテ回転			
94	B区	ⅧF262	風削木	II	深鉢	沈痕文・魂文	沈痕文・魂文	R L斜行	ミガキ	4	口輪内面ヒレ状突起		
95	B区	ⅧG262	I	深鉢	拂内A内にE L魂文	R L斜行	ミガキ	5	口輪内面ヒレ状突起				
96	B区	ⅧF262	I	深鉢	拂内A内にE L魂文	R L斜行	ミガキ	5					
97	B区	ⅧF263	I	深鉢	拂内A内にE L魂文	R L斜行	ミガキ	4					
98	B区	V K271		II	深鉢	ヒレ状突起・L R魂文・繕跡	R L斜行	ナダ	此物明瞭に付着				
99	B区	ⅧG262		II	深鉢	無文	無	ナダ	口輪内面ヒレ状突起				
100	B区	ⅧF263	I	深鉢	魂文	R L斜行	ナダ	口輪内面ヒレ状突起					
101	B区	V K272		II	深鉢	魂文	R L斜行	ナダ	口輪内面ヒレ状突起				
102	B区	V K272		I	深鉢	魂文・沈痕文	R L斜行	ナダ	3				
103	B区	V K262	風削木	II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	R L斜行				
104	B区	V K271		II	深鉢	R L斜行	R L	ミガキ					
105	B区	V J 272		II	深鉢	口縁部無文	魂文	R L斜行	ナダ	折返し口縁			
106	B区	V J 272	I	深鉢	口縁部無文	魂文	R L斜行	ナダ	折返し口縁				
107	B区	ⅧG262	II	深鉢	魂文	魂文	R L斜行	ミガキ	外縁美化付着				
108	B区	V K271		II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	30				
109	B区	V J 271		II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	30				
110	B区	V K271		II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	30				
111	B区	V K271		II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	30				
112	B区	V K271		II	深鉢	魂文	R L斜行	ミガキ	30				
113	B区	V K271		II	深鉢	魂文	R L L 複施	ナダ	内面側部底方舟の幅 2mmの彫刻工具痕				
114	B区	V K270		II	深鉢	口縁部無文	魂文	R L斜行	ナダ	複合口縁			
115	B区	V J 271		II	深鉢	後縁による破被文。 後縁上R L斜行・ミガキ	R L斜行	ミガキ	破被文左方に、他のモ チーフ有り				
116	B区	V M268	束縛	深鉢						117			
117	B区	V M268		II	深鉢	R L斜行が施された底・底 の段階・ミガキ	R L斜行	ミガキ			116		
118	B区	V Q266		II	深鉢	後縁上R L斜行(口縁痕)	後縁痕	R L斜行	ナダ	斜削痕と非常に多い 斜削痕と非常に多い			
119	B区	V R265		II	深鉢	後縁上R L斜行	R L斜行	ナダ					
120	B区	V M268		II	鉢	沿口沈痕	2条の弧状沈痕・底部附近に 1条の被走沈痕	無	ナダ	2	斜削痕・内面凹凸線		
121	B区	V E262	I	深鉢	無文	無文	無文	ナダ	外縁斜方舟・ 能形被土部				

米山(2)遺跡出土土器觀察表 4

年	地区	出土地	遺物	層	特徴	口 頭 部	頭 部	底面	内面調査	外側調査	備 考	同一
122	B区	W O 268		I	深鉢	渦巻状文・三角形状文		R L斜行	ナダ	5	口縁巴頬状	123-125 126
123	B区	W O 268		I	深鉢		渦巻状文	R L斜行	ナダ	5	原体腹回転	122-125 126
124	B区	W O 268		I	深鉢		渦巻状文・三角形状文	R L斜行	ナダ	5	原体腹回転	
125	B区	W O 268		II	深鉢	鉢底文		R L斜行	ナダ	6		122-125 126
126	B区	W J 271		I	深鉢	R L斜行施文後に沈底 2 条		R L斜行	ミガキ	3		
127	B区	W I 273		I	深鉢		渦巻状文	R L斜行	ナダ	4	原体腹回転	128
128	B区	W I 273		I	深鉢		渦巻状文	R L斜行	ナダ	4		127
129	B区	W F 262		II	深鉢	円形文	沈底文・縄文	R L斜行	ミガキ	5	原体左上に縄文	
130	B区	W K 271		II	深鉢		渦巻状文	R L斜行	ナダ	4		
131	B区	W K 271		II	深鉢		渦巻状文・ミガキ		無	ミガキ	4	
132	B区	W J ~ M 269-272		表裏	深鉢	頭部無文	平行沈底+L R 単脚羽状	R L斜行	ミガキ	4		
133	B区	W J 273		II	深鉢	沿口沈底・渦巻状文	渦巻状文	0多 L R	ミガキ	4	0多 L R 斜脚軸	
134	B区	W J 271		II	深鉢	作りの丁寧な山形突起・ 沿口沈底	渦巻状文	R L斜行	ミガキ	6		
135	B区	W J 272		I	深鉢		渦巻状文・三角形状文	0多 L R L R斜行	ミガキ	5	原体腹回転	
136	B区	W O 268		II	深鉢	縄文	渦巻状文	0多 L R	ナダ		口縁板若干肥厚	
137	B区	W D 269		II	深鉢	縄文	渦巻状文	L R斜行	ナダ			
138	B区	W O 268		II	深鉢	縄文	縄文	L R斜行	ナダ		L R左下→右上。口 縫孔	
139	B区	W G 261		II	深鉢	縄文	縄文	L R	ナダ		口縫孔肥厚。L R 線 凹曲	
140	B区	W J 274		II	深鉢	縄文		R L斜行	ミガキ		口縫孔肥厚	
141	B区	W O 268		II	深鉢	縄文		0多 L R	ナダ		口縫孔肥厚	
142	B区	W J 272		I	深鉢	縄文		R L斜行	ミガキ			
143	B区	W K 272		II	深鉢	複雑弦文縄	複雑弦文縄	—	ナダ			
144	B区	W D 263		II	深鉢	無文	無文		ナダ		粘土被接合部明瞭	
145	B区	W E 262		II	深鉢	無文・ミガキ	沈底文		ミガキ			
146	B区	W C 262		II	深鉢	縄文	縄文	R L斜行	ナダ		口縫孔肥厚	
147	B区	W J 273		II	深鉢	縄文	縄文	直底凹曲	ナダ			
148	B区	W P 267		II	深鉢	縄文	縄文	直底凹曲	ナダ			
149	B区	W J 273		I	鉢	突起上に円形刺突	無	ミガキ			口縫孔肥厚	150 - 151
150	B区	W J 273		I	鉢		無	ミガキ				149 - 150
151	B区	W K 271		II	鉢	大型波状口縫・ミガキ	無	ミガキ			口縫孔肥厚	149 - 150
152	B区	W P 267		II	鉢	丸く肥厚・無文	無		ナダ			
153	B区	W P 267		II	鉢	丸く肥厚・無文	無		ナダ			
154	B区	W G 262		II	鉢	無文	無文		ミガキ		口縫孔肥厚	
155	B区	W J 273		II	鉢	無文	無文	直底凹曲	ナダ		口縫孔下面窪底厚	
156	B区	W O 268		II	体	複回転・奥原羽状	横底沈底	直底凹曲	ミガキ	3	口縫孔内面肥厚	
157	B区	W D 263		II	深鉢	胎脂三叉文		R L斜行	ナダ	2	胎脂4 条に非常に多い。	
158	B区	W G 262		II	体		胎脂の粗底沈底で上下の平行 沈底を結ぶ	0多 L R	ミガキ	5		
159	B区	W O 268		I	深鉢	削目帯・ミガキ	削目帯	無	ミガキ	4		
160	B区	W O 267		I	鉢		削目帯	ミガキ	3		口縫孔肥厚	
161	B区	W O 267		I	体	2 条の削目帯・下のキザシは 先端の鋸い工具による	無	ナダ	3			
162	B区	W O 267		I	体		削目帯2条	無	ナダ	4		
163	B区	W O 268		I	体	口縫孔に縱方向のキザシ・ 沿口比縫	無	ミガキ	4		大型波状 口縫肥厚	
164	B区	W R ~道 A 254-266		II	体	大きな波状口縫・沿口比縫	異形底状・木目状底文	0多 L R	ミガキ	4	内面側に口縫肥厚	
165	B区	W C 262		I	体	口縫内側に肥厚、 頭部に削目帯3条	頭部に削目帯3条	無	ナダ	3	口縫部、内側に向かって 傾斜	
166	B区	W C 262		I	体		3本1 単位の縦横の波状・ 羽状底文	ナダ	3			
167	B区	W O 268		I	4	0多 L R 傾行	無文	R L斜行	ミガキ	3	口縫孔内面肥厚、僅か に波状らしい部分有	
168	B区	W O 268		I	4	0数多 L R L の同底体羽状。	無文・削目帯・区面内縄文	0多 L R	ミガキ	3		
169	B区	W J 273		II	4		R L斜行、区面内無文	R L斜行	ナダ	4		
170	B区	W K 270		II	蜜		鶴丸大輪文?	9多	ナダ	3		
171	B区	W E 262		II	4		底部下部押圧による 上げ傾斜	無	ナダ			
172	B区	W E 262		II	注口					3		173
173	B区	W E 262		II	注口	頭部縄文交替部に廢貼付	頭部縄文交替部に廢貼付	直底凹曲	ナダ	3	粘土被接合部水平に集中	172
174	B区	W O 268		I	4		頭部平行比縫間に廢貼付	0多 L R	ケズリ	5		
175	B区	W J 274		II	深鉢	縄文		R L斜行			原体腹回転	
176	B区	W I 273		I	深鉢	仰彎波状・底腹縫	底腹縫	ナダ	ミガキ			
177	B区	W C 262		II	深鉢	押圧成形口縫・無文	無文		ナダ			
178	B区	W B 263		I	鉢	平行比縫4条	縄文	R L斜行	ミガキ	4	内面に波状化物有	
179	B区	W M 266		II	深鉢	平行比縫	縄文	R L斜行	ミガキ	4		
180	B区	W E 263		I	深鉢		縄文	R L斜行	ナダ		頭部・外反	
181	B区	W O 268		II	深鉢	平行比縫	渦巻状文	無	ナダ	6		
182	B区	W J 273		II	深鉢	平行比縫3条	無	ナダ	5		183-184- 185	

糸山(2)遺跡出土土器觀察表 5

%	出土区	出土地	遺物	形	器種	口 罩 部	肩 部	腹 部	地文	内面開き	北緯幅	備 考	同一
183	B区	M J 275		I	深鉢	平行沈縁 3条	無文		無	ナデ	5		182-184-185
184	B区	M J 275		II	深鉢	沈縁 3条			無	ミガキ	5		182-183-185
185	B区	M J 275		I	深鉢	平行沈縁 3条	無文		無	ミガキ	5	口唇内側に頬縫	182-183-184
186	B区	M J ~ K 271-272		II	深鉢	メガネ状沈縁紋・平行沈縁	無文		無	ナデ	5		
187	B区	M L 271		II	深鉢	口厚 2 倍/cmのキザミ・3条の平行沈縁	織文		R L + L 滴赤	ケズリ	3		
188	B区	M K 271		II	鉢	向かひの合う突起・口縁～肩部に凹状沈縁	無文		無	ミガキ	4	外側に火焔物付着	
189	B区	M J 271		鉢	二叉の突起		無文		無	ナデ		口縁内側肥厚	
190	B区	M I 273		I	台付鉢	B突起・平行沈縁 1 倍/cmの刺焼	織文・台部無文	L R斜行	ナデ	4	突起上幅 4mmのキザミ		
191	B区	M L 270		II	台付鉢		織文・底部無文	L R斜行	ミガキ				
192	B区	M L 270		I	浅鉢	変形工字文	無文		無	ミガキ	3		
193	B区	M K 271		II	4	隆頭貼付	平行工字文・流水状工字文・入組文 4 単位		無	不明	4		
194	B区	M S 266		II	4	平行工字文・粘土粒貼付			無	ミガキ	5	内面沈縁	
195	B区	M J 272		I	4	隆頭貼付			無	ミガキ	3	内面沈縁 1 条	
196	B区	M J ~ K 271-272		4	粘土粒	作る平行工字文			無	ナデ	4	内面沈縁 1 条	
197	B区	M K 270		II	4	口彌形無文	織文		しと斜行	ミガキ		完形品	
198	B区	M M 268		II	鉢	通底型変形工字文	無文		しと斜行	ミガキ	4	内外面灰化物付着	
199	B区	M M 268		II	鉢	波状工字文	無文		しと斜行	ナデ	3		
M-1	A		1号土坑	台付鉢	覆土	底部下に笠状モチーフを配しその間を上下の弧状沈縁で埋める	織文		L R斜行	ミガキ	3	4 単位の三又底状口縁・土壁後期的・器形地質的	
M-1	A		1号土坑	覆土	深鉢	織文	織文		L R斜行	ナデ		有文台付鉢・共伴	
M-1	A		3号土坑	底	深鉢	織文	織文		L R斜行	ナデ		縦10個/cmの密な織文・土坑底に倒立理	

山下遺跡石器觀察表

図面番号	所土地	層	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号	
8-3	試験区	V E-174	I	Rフレイク	1.7	3.0	0.6	4.5	珪質頁岩	一部に急斜度調整	22
		III O-190	I	Rフレイク	3.0	1.4	0.7	3.7	珪質頁岩		21
		H-179	I	Rフレイク	2.2	3.4	1.7	11.9	珪質頁岩		28
		I S-186	I	Rフレイク	3.1	3.5	0.4	3.9	珪質頁岩		25
		K-190	I	Rフレイク	6.0	3.5	0.9	19.4	珪質頁岩		31
		II R-196	I	Rフレイク	4.2	5.3	1.2	33.4	珪質頁岩		33
		II N-185	I	Rフレイク	4.4	4.7	1.4	32.8	珪質頁岩		34
		II T-196	I	Rフレイク	5.3	4.2	1.3	26.5	珪質頁岩		36
		V E-174	I	Rフレイク	4.9	3.9	1.6	33.4	珪質頁岩		37
		II K-201	I	Rフレイク	8.0	5.0	1.3	47.0	珪質頁岩		39
		II P-195	I	Uフレイク	3.8	2.7	1.0	10.8	珪質頁岩	細?	26
		V A-H-VF -174・175	I	Uフレイク	4.6	2.6	1.5	14.4	珪質頁岩		28
		II T-196	I	Uフレイク	5.0	3.2	1.2	19.8	珪質頁岩		30
		III O-190	I	Uフレイク	3.8	4.2	1.0	13.5	珪質頁岩		40
		V A-H-VF -174・175	I	Uフレイク	3.0	2.9	0.8	7.3	珪質頁岩		43
		V H-190	II	Uフレイク	8.3	7.1	1.5	80.9	珪質頁岩		44
		V I-180	II	Uフレイク	7.8	3.0	1.0	25.4	珪質頁岩		41
8-10	試験区	III O-190	I	石皿	27.5	26.2	6.0	711.6	透紋岩		46
8-2	試験区	V C-175	I	石盤	4.8	2.2	1.5	16.4	3種類の質頁岩	両面加工。	10
8-5	試験区	N T-176	II	四石	(12.1)	6.1	2.6	(34.4)	砾灰岩		58
		V D-174	II	四石	(5.1)	4.6	3.3	(18.0)	砾灰岩		64
8-1	試験区	II K-201	I	石盤	(3.8)	2.0	0.8	(4.3)	珪質頁岩	凹溝。先端欠損。	1
8-5	試験区	N P-176	I	石盤	7.5	3.5	0.8	36.1	珪質頁岩	細?	5
8-11	試験区	V A-H-VF -174・175	I	台石	19.4	15.5	6.1	2972.2	砾灰岩		69
8-9	試験区	表探		板石	20.2	4.9	4.8	726.3	透紋岩		65
8-4	試験区	N V-175	II	スクレイバー	2.9	2.1	0.9	5.4	3種類の質頁岩	手削材	47
8-7	試験区	III O-194	I	スクレイバー	4.7	2.0	0.9	7.4	珪質頁岩		7
V-6	試験区	V O-176	II	スクレイバー	(3.4)	(2.5)	1.6	(11.8)	珪質頁岩	細?	11
		V A-H-VF -174・175	I	スクレイバー	6.8	2.6	1.4	37.5	珪質頁岩	全体に粗雑で大きな調整	13
		I N-186	I	スクレイバー	3.8	6.1	1.0	31.4	珪質頁岩		14
		III O-196	I	スクレイバー	4.6	4.4	1.4	28.4	珪質頁岩		15
		V G-177	I	スクレイバー	4.8	5.2	2.5	76.2	珪質頁岩		19
C区	V E-184	I	Uフレイク	2.2	2.4	0.7	2.5	3種類の質頁岩		39	
C区	V H-181	II	Uフレイク	4.4	5.8	1.3	28.5	珪質頁岩		42	
30-9	C区	V L-182	II	Uフレイク	6.9	3.7	1.4	30.8	珪質頁岩		36
	C区	V T-182	II	石皿	—	—	—	—	安山岩	破片	66
30-4	C区	V S-186	I	石盤	(3.8)	(2.6)	(1.0)	(14.1)	珪質頁岩	基部破片。両面加工。	6
32-8	C区	V G-184	I	その他の	(18.6)	7.5	7.1	(166.0)	透紋岩		67
31-5	C区	V I-181	II	四石	16.5	6.5	4.1	54.6	砾灰岩		61
31-6	C区	V I-181	II	四石	13.6	5.4	4.2	373.3	砾灰岩		62
C区	V I-181	II	四石	15.1	7.2	3.3	470.4	砾灰岩		57	
31-4	C区	V I-181	II	四石	13.6	6.4	5.2	692.9	安山岩		59
31-7	C区	V K-184	II	四石	11.8	6.5	4.0	359.1	砾灰岩		60
30-1	C区	V K-181	I	石盤	3.5	0.7	0.4	1.1	3種類の質頁岩	棒状	2
30-2	C区	V I-181	II	石盤	3.6	2.9	0.7	6.0	珪質頁岩	細?	3
31-8	C区	V I-180	II	台石	17.7	8.5	2.8	785.9	砾灰岩		68
30-7	C区	V I-186	II	スクレイバー	3.8	3.3	0.9	10.6	珪質頁岩	本当に急斜度調整	27
C区	V K-181	II	スクレイバー	2.8	3.5	0.7	5.9	珪質頁岩		6	
30-8	C区	V K-181	II	スクレイバー	3.7	3.6	1.0	18.5	珪質頁岩	末端部分に急斜度調整	9
30-3	C区	V K-181	II	スクレイバー	2.7	4.3	1.3	15.8	珪質頁岩	末端に急斜度調整	12
30-6	C区	V K-181	II	スクレイバー	4.9	6.1	1.6	44.5	珪質頁岩	縁辺部に凹型開口	16
C区	V K-181	II	スクレイバー	5.7	3.3	1.4	27.1	珪質頁岩		18	
30-5	C区	V L-184	II	スクレイバー	9.4	4.6	1.7	85.2	珪質頁岩	左側縫から丸太に調整	26
31-3	C区	V I-183	II	磨石	8.0	4.4	3.3	176.1	砾灰岩	磨石片の基部片を再利用。	48
C区	V I-181	II	磨石	15.5	10.3	4.7	785.6	砾灰岩		65	
31-2	C区	V I-184	II	磨石	10.5	7.9	5.0	657.1	凹型鉈		56
31-1	C区	V I-182	II	磨石斧	17.4	4.8	3.4	469.5	砂岩		72

このほかに割合 31点

図面番号	所土地	層	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号	
D区	V G-177	I	Rフレイク	3.4	1.7	0.5	2.0	珪質頁岩		24	
D区	V J-176	I	Rフレイク	4.0	4.7	0.5	8.5	珪質頁岩		32	
D区	V I-172	II	Uフレイク	3.8	6.6	1.1	19	珪質頁岩		29	
D区	S N-18	II	複土	Uフレイク	8.5	2.1	1.1	19.1	珪質頁岩		17
32-1	D区	V H-174	II	石盤	4.3	5.0	0.9	21.9	珪質頁岩	細?	4
D区	V W-175	II	台石	23.0	20.6	9.6	7779.6	安山岩		70	
D区	S N-16	II	複土	陶入縫	(10.1)	8.0	4.9	—	透紋岩		71
32-2	D区	V I-173	II	磨製石斧	(9.0)	5.0	(2.9)	(222)	緑色の堅い頁岩		45
32-5	D区	V I-175	II	磨石斧	(8.9)	7.0	3.0	(267)	安山岩		52

山下遺跡Ⅱ・米山の遺跡

団番号	出土場	出 土 品	層	部	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備	考	整理番号
32-3	D区	N I - 175	II	磨石		(7.5)	7.3	4.9	(322)	安山岩			53
32-4	D区	N I - 175	I	磨石		9.2	6.7	6.4	478	安山岩			55
32-6	D区	N H - 172	III	磨石		(9.4)	6.5	4.5	(420)	安山岩			51
32-7	D区	N J - 176	T	磨石		18.0	7.6	6.2	1272	安山岩			54
32-8	D区	N K - 175	I	磨石		14.6	7.4	4.6	737.7	安山岩			49

このほかに剥片 37点

米山(2)遺跡A区石器観察表

団番号	出 土 地	層	部	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備	考	整理番号
36-①	1号住居	2	台石		-	-	-	-	麻灰岩	破片		74
36-②	1号住居	2	スクレイパー		9.6	4.6	1.4	53.3	達賀頁岩			46
37-③	2号住居	床直	スクレイパー		3.5	2.2	0.7	3.4	達賀頁岩	S-10. 石削?		48
37-④	2号住居	1	Uフレイク		4.3	3.5	1.0	9.3	達賀頁岩	S-3		46
37-⑤	2号住居	1	Uフレイク		3.0	1.8	0.6	2.6	達賀頁岩	S-12		50
37-⑥	2号住居	1	石砲		4.7	2.6	0.9	5.4	達賀頁岩	S-2		47
37-⑦	2号住居	1	台石		(9.8)	4.3	2.8	499.7	安山岩	S-4		88
37-⑧	2号住居	覆土	Rフレイク		4.9	5.6	1.0	22.3	達賀頁岩			56
40-①	3号住居	床直	Uフレイク		3.6	4.9	1.3	23.1	達賀頁岩	S-7		52
40-②	3号住居	床直	Uフレイク		5.5	7.1	1.3	56.0	達賀頁岩	S-9		53
40-③	3号住居	覆土	Uフレイク		5.7	3.5	1.3	19.1	達賀頁岩			59
41-2	3号住居	床直	四石		14.0	4.9	3.8	367	麻灰岩	S-2。片面に浅凹孔。全体に丸みをもつて整形		76
41-1	3号住居	床直	四石		11.6	9.2	5.5	839	安山岩	S-3。両面はツルツルの磨痕。片面に凹孔。		77
40-⑦	3号住居	石鏡			2.7	1.8	0.4	0.7	達賀頁岩			54
40-⑧	3号住居	覆土	スクレイバー		5.7	3.4	1.0	18.4	達賀頁岩			55
40-⑨	3号住居	覆土	スクレイバー		4.6	2.7	0.8	6.5	玉鮎質達賀頁岩			56
40-⑩	3号住居	覆土	スクレイバー		6.7	4.3	1.4	41.6	達賀頁岩			57
40-⑪	3号住居	床直	スクレイバー		8.9	4.1	1.5	56.4	達賀頁岩	S-8		51
41-3	3号住居	床直	磨石		14.1	9.6	6.2	1334.4	内輪岩	S-6。全面磨痕。全面フジツルとしている。		78
40-⑫	3号住居	床直	磨石		12.3	9.4	5.8	937.9	安山岩	S-4		108
40-⑬	3号住居	床直	磨石		11.6	9.7	5.1	1021.4	安山岩	S-5。全面磨痕。		75
43-2	4号住居	床直	Rフレイク		9.4	3.8	1.4	40.3	達賀頁岩	S-8		61
43-5	4号住居	覆土	四石		10.5	8.1	5.0	589.3	安山岩	S-1。椭円状球根の片面に鋭打による凹孔。		79
43-3	4号住居	床直	四石		14.3	3.9	2.3	185.7	麻灰岩	S-9。両面に浅い凹孔。全体に丁寧に整形。		80
43-4	4号住居	床直	四石		14.9	5.3	4.2	455.4	安山岩	S-4。両面に凹孔。背面はスリ豊形。		81
43-6	4号住居	床直	台石		33.4	26.2	4.0	3685.6	安山岩	S-5+S-6。		82, 83
42-②	4号住居	覆土	スクレイバー		9.8	4.5	1.9	92.8	達賀頁岩	S-3		63
42-③	4号住居	床直	Uフレイク		5.3	2.7	1.0	8.5	達賀頁岩	S-7		62
42-④	4号住居	床直	Uフレイク		9.6	5.8	1.5	95	達賀頁岩	S-10		60
46-4	4号住居	床直	台石		30.5	17	3.2	1613	麻灰岩	S-1。無加工。		84
47-1	10号住居	I	石鏡		4.2	1.4	0.4	2.1	達賀頁岩	S-1		66
61-6	道I-229	V	Uフレイク		8.4	7.7	1.1	70.1	達賀頁岩			4
61-7	道I-236	I	磨製石斧	(4.9)	(4.4)	(2.4)	(24)	(84)	鶴見岩	刃部削		11
61-1	道I-228	II	石鏡	5.9	2.4	0.7	8.0	達賀頁岩			10	
道I-229	I	Rフレイク	3.0	2.8	1.0	9.6	達賀頁岩			5		
道I-222	I	スクレイバー	7.6	3.4	0.9	21.7	達賀頁岩			2		
道I-236	I	Uフレイク	4.5	4.0	0.7	15.2	達賀頁岩			9		
道I-231	II	Rフレイク	4.4	4.1	1.2	30.9	達賀頁岩			6		
道I-233	II	楕円石器	4.1	2.9	1.0	13.3	玉鮎質達賀頁岩			5		
道M-235	I	Uフレイク	5.5	6.0	1.7	39.4	達賀頁岩			8		
道M-235	II	コア	7.3	5.5	5.0	197.2	達賀頁岩			12		
道M-239	II	台石	29.7	19.3	6.0	3189.5	色地磁鐵礦安山岩			87		
道N-237	II	Rフレイク	5.5	5.2	1.2	27	達賀頁岩			7		
道O-246	II	四石	13.8	9.1	6.6	1284.7	安山岩			85		
道O-246	II	敲石	11.4	4.3	2.2	136.5	麻灰岩			86		
道I-3	道O-250	II	スクレイバー	8.3	4.6	1.2	41.6	達賀頁岩			1	

米山(2)遺跡B区石器観察表

団番号	出 土 地	層	部	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備	考	整理番号
44-3	5号住居	複土	Rフレイク		2.6	2.4	0.5	4.8	達賀頁岩			65
44-1	5号住居	底面	石鏡		30.7	35.7	7.0	12400	安山岩	S-8。無加工。中央部がややむく。		115
44-5	5号住居		砾石		25.1	8.5	6.2	2427.3	底波岩	S-28。表面全体に波状面、一部津波状の部分あり。		114
44-4	5号住居	脚	スクレイバー		3.7	3.8	0.9	10.1	達賀頁岩			64
44-2	5号住居	床直	磨製石斧		8.0	4.5	1.6	102.7	頁岩	S-19。		44
62-5	道E-262	II	石鏡	(2.5)	1.2	0.6	(1.6)	1.6	達賀頁岩	先端欠損。		18
62-6	道C-262	I	石鏡	3.1	1.4	0.5	2.1	玉鮎質達賀頁岩			13	
62-1	道K-270	I	石鏡	2.4	1.2	0.4	0.8	達賀頁岩			14	
62-4	表鉢	石鏡	-4.1	1.1	0.4	0.4	1.4	1.6	達賀頁岩			15
62-2	道N-268	II	石鏡	3.0	1.1	0.4	1.2	1.2	達賀頁岩			16
62-3	道N-268	II	石鏡	3.1	1.4	0.4	1.3	1.4	達賀頁岩			17
62-8	道O-267	I	石鏡	3.8	2.4	1.0	6.9	達賀頁岩			20	
62-7	道Q-267	I	石鏡	3.7	1.8	1.1	6.0	達賀頁岩			21	
62-10	道Q-267	II	石鏡	4.6	1.5	1.3	8.4	達賀頁岩			27	
62-9	道E-263	II	石鏡	3.4	1.6	0.8	3.7	3.5	玉鮎質達賀頁岩			19
62-11	道E-261	II	石鏡	4.6	3.8	0.9	13.5	達賀頁岩			23	

番号	出土地	層	部	類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
62-15	M D - 267	II	スクレイバー-		6.6	4.7	1.1	32.9	珪質頁岩		23
M J - 271	I	スクレイバー-			8.3	3.8	1.7	49.8	珪質頁岩		24
M J - 273	I	スクレイバー-			3.8	4.3	1.3	19.8	珪質頁岩		25
M J - 274 - 269 - 272	I	スクレイバー-			6.0	6.4	1.5	37.2	珪質頁岩		26
62-13	M J - 274 - 269 - 272	I	スクレイバー-		5.2	3.8	1.0	13.6	珪質頁岩		27
62-12	M J - 276	II	スクレイバー-		5.4	3.6	0.7	13.9	珪質頁岩		28
M J - 267	I	スクレイバー-			4.3	4.8	1.0	15.0	珪質頁岩		29
M J - 268	I	スクレイバー-			5.3	4.3	0.8	19.2	珪質頁岩		30
62-17	M J - 268	II	Uフレイク		2.1	5.5	0.4	5.1	珪質頁岩		31
62-14	M J - 268	I	スクレイバー-		7.2	4.5	1.2	40.8	珪質頁岩		32
M J - 268	I	スクレイバー-			4.4	7.8	0.9	26.9	珪質頁岩		33
62-16	M J - 261	II	スクレイバー-		4.3	1.7	0.6	4.8	珪質頁岩		34
M J - 267	I	Rフレイク			2.9	2.4	0.8	6.6	珪質頁岩		35
M J - 266	I	Rフレイク			4.5	2.5	1.1	9.2	玉髓質珪質頁岩		36
M J - 265	I	Rフレイク			3.2	5.1	0.8	11.3	珪質頁岩		38
M R - 駿A - 264 - 266	I	Rフレイク			3.6	3.0	0.5	7.4	珪質頁岩		40
M J - 271	I	Rフレイク			1.7	2.4	0.5	4.7	黑曜石		41
M J - 267	I	Uフレイク			4.8	3.3	1.2	19.2	珪質頁岩		73
M J - 271	B	Uフレイク			4.8	3.3	1.1	16.4	玉髓質珪質頁岩		39
M R - 駿A - 264 - 266	B	Uフレイク			2.6	3.9	0.7	6.0	珪質頁岩		42
M J - 268	I	Uフレイク			3.9	5.8	1.3	26.5	珪質頁岩		43
63-1	M J - 267	B	磨石	(13.5)	7.3	4.3	55.1	安山岩	輪平研石。上下側面に深い凹痕。端部に打痕。	99	
63-3	M J - 262	I	磨石		17.9	12.3	3.5	358.6	纖維凝灰岩	輪平研石。上下側面に浅い凹痕。端部に打痕。	104
63-5	M J - 263	I	磨石		10.5	7.2	5.7	634.8	安山岩	全面磨痕。	97
63-2	M J - 263	I	磨石		14.9	8.0	6.2	1021.4	安山岩	全体が滑らかだが、特に平面面が顯著。	96
63-5	M J - 265	B	磨石	(8.7)	7.5	6.0	574.7	安山岩	+両面に凹孔。左平面は滑らか。下側面に打痕。	107	
63-4	M J - 263	I	磨石		13.3	8.6	5.6	785.0	安山岩	+凹孔。平面面は平滑。下側面に浅い打痕。	95
M C - 264	B	磨石			9.3	7.1	4.7	484.4	安山岩		94
M G - 261	I	磨石			11.1	7.3	3.4	315.9	安山岩		109
64-2	M G - 262	B	敲石	(8.9)	4.3	2.0	11.4	埋縫岩	長輪底部と側面に一部に打痕	89	
64-7	V J - 271	I	敲石		7.9	7.4	7.4	587.6	凝灰岩	端部に打痕。	109
64-5	V J - 261	B	凹石	(8.6)	4.3	2.7	160.3	流紋岩	画面に敲打による浅い凹孔	91	
64-1	V J - 261	B	凹石		14.9	9.7	6.2	1099.9	安山岩	画面に敲打による浅い凹孔	98
64-3	V C - 264	B	凹石		16.5	4.8	4.3	438.4	安山岩	三角形状の面の三面に敲打による深い凹孔。1ヶ所はスリによる深い凹孔。	92
64-4	V C - 263	B	凹石		12.7	5.8	3.5	338.9	安山岩	片面にクリーニング。平面面は平滑。	101
64-6	駿A - 263	B	凹石		10.7	9.4	4.1	577.1	安山岩	石片剝離利用。片面には敲打による凹孔。裏面にはスリによる凹孔と溝状の凹孔。	103
M C - 264	B	凹石			13.8	5.3	3.8	469.2	流紋岩		93
M J - 263	B	台石	(11.0)	(6.1)	(8.0)	838.6	凝灰岩	壁面		102	
M J - 269	B	台石			20.6	16.3	4.8	262.2	凝灰岩		111
65-3	V K - 271	B	石頭		33.9	32.5	6.0	9370.6	安山岩	両面とも滑んでいい。	113
65-5	V J - 273	B	石頭		32.0	37.1	12.5	17200	流紋岩	両面とも滑んでいい。	116
65-4	M J - 269	B	石頭	(28.5)	34.7	6.4	9806	流紋岩	片面が複合。表面に擦んでいい。裏面は打削面のまま。	117	
65-2	M J - 263	B	石頭	(18.3)	(30.2)	2.8	2006.4	凝灰岩	高さ5.3cm。縁が付く。	106	
65-1	V K - 271	2	砾石		16.9	14.8	5.8	2338	安山岩	両面に錐状突起が見られるが、特に背面に顕著。一部落ちていても残る。	110
64-8	V P - 267	B	その他		19.3	14.4	10.0	178.6	流紋岩	表面は滑らかに整備。最高石?	90
64-9	V J - 272	I	その他		22.8	7.3	5.3	1687	流紋岩	動脈全体に研磨痕(擦痕)あり。	106
V J - 265	III	Uフレイク			6.3	3.6	1.2	21.3	珪質頁岩	97試掘8トレンチ	69
V T - 260	B	Uフレイク			3.0	3.7	0.6	5.2	珪質頁岩	97試掘8トレンチ	67
V D - 260	B	台石			18.8	11.7	8.5	2871.6	安山岩	97試掘8トレンチ	112
62-19	駿B - 260	B	磨製石斧		10.7	4.3	2.5	177.9	緑色細粒凝灰岩	97試掘8トレンチ	68
V L - 270	III	Rフレイク			3.0	2.6	1.2	10	珪質頁岩	97試掘10トレンチ	70
V L - 270	III	Rフレイク			5.3	4.5	0.5	14.5	珪質頁岩	97試掘10トレンチ	72
V K - 270	III	Uフレイク			9.1	4.6	1.8	63.1	珪質頁岩	97試掘10トレンチ	71

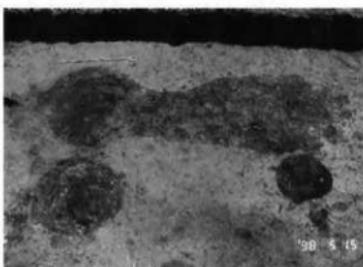




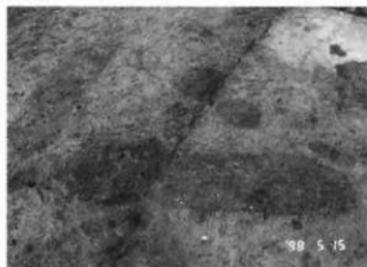
山下遺跡近景



カマド状遺構群検出状況（III R-194・195）



カマド状遺構検出状況（IV H・IV I-195）



カマド状遺構検出状況（III O-194）



小ピット群検出状況（IV F-193）

写真1 山下遺跡1（試掘調査）



C区調査風景



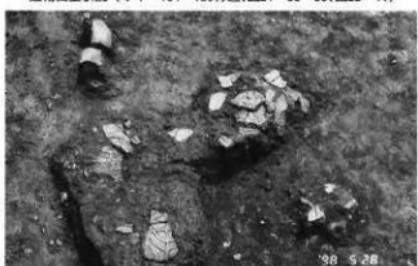
C区調査風景



遺物出土状況（V I - 184・185付近、図21-38・39、図22-41）



遺物出土状況（V I - 184・185付近、図22-42）



遺物出土状況（V I - 184・185付近、図21-40）



遺物出土状況（V I - 181）



三角形岩版出土状況

第6号土坑（南から）

写真2 山下遺跡2（発掘調査）

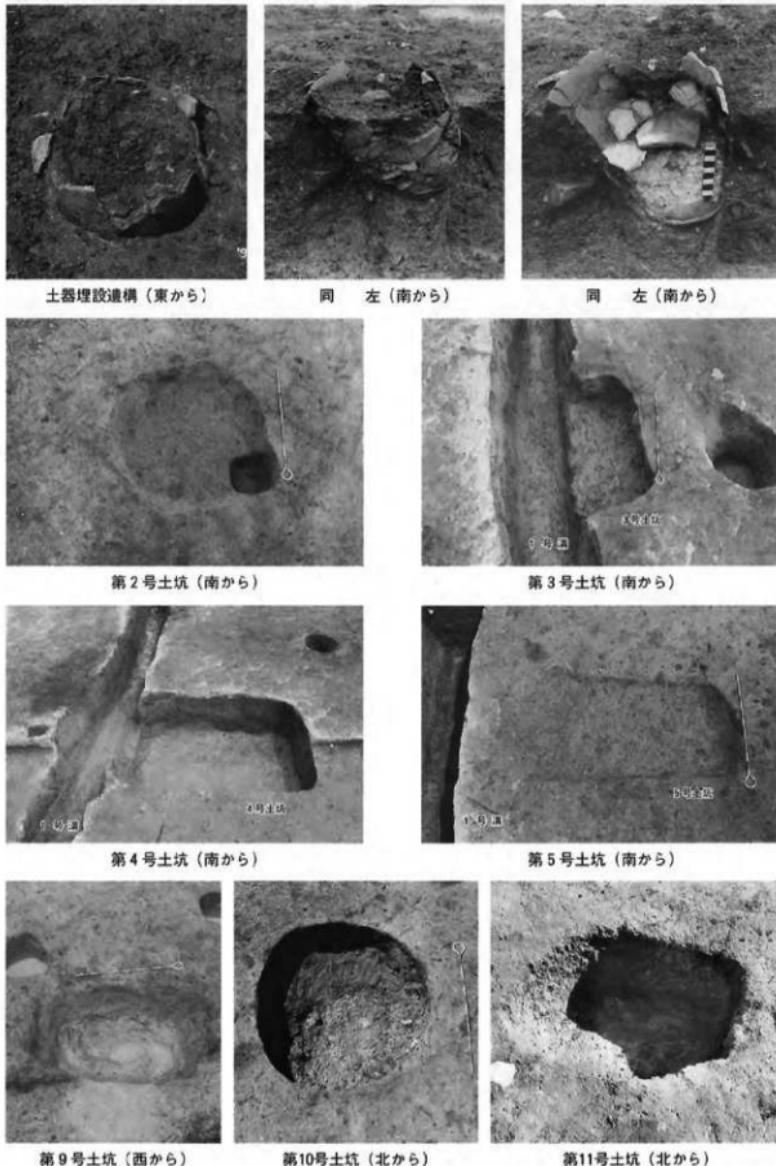
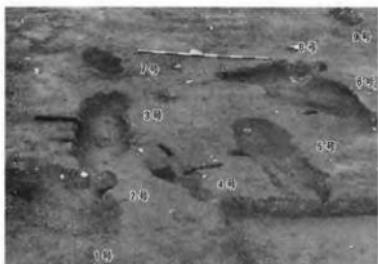
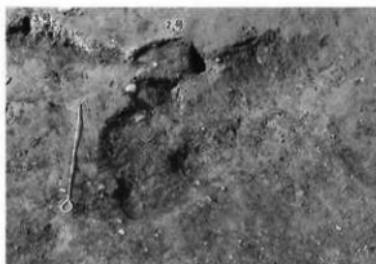


写真3 山下遺跡3（発掘調査）



第1号～第9号カマド状遺構（南東から）



第1号カマド状遺構（南から）



第3号カマド状遺構（南から）



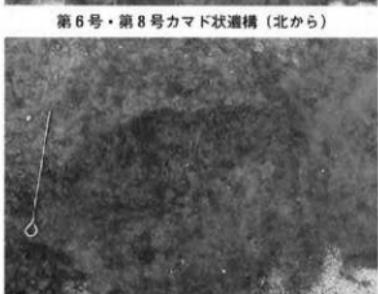
第4号カマド状遺構（中央・西から）



第6号・第8号カマド状遺構（北から）



第8号カマド状遺構（西から）



第7号カマド状遺構（南から）



第9号カマド状遺構（南から）

写真4 山下遺跡4（発掘調査）



第10号カマド状遺構（南から）



第11号カマド状遺構（南から）



第12号カマド状遺構（南東から）



第13号カマド状遺構（西から）



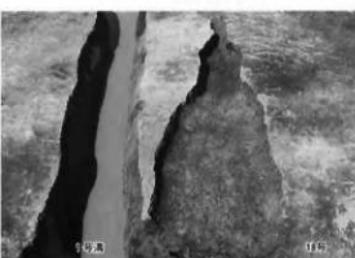
第15号カマド状遺構（南から）



第16号カマド状遺構（南から）

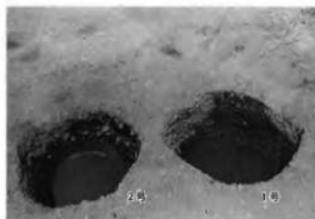


第17号カマド状遺構（南から）



第18号カマド状遺構（南から）

写真5 山下遺跡5（発掘調査）



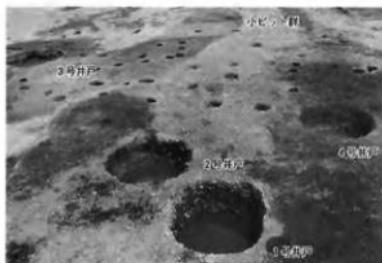
第1号・第2号井戸跡（南西から）



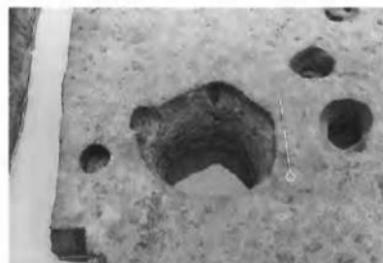
第3号井戸跡（南から）



第4号井戸跡（南から）



井戸跡と小ピット群（南から）



第5号井戸跡（南から）



第5号井戸跡（東から）



第5号井戸跡（東から）



第5号井戸跡井戸枠



D区西側の遺構検出状況（南から）

写真6 山下遺跡6（発掘調査）

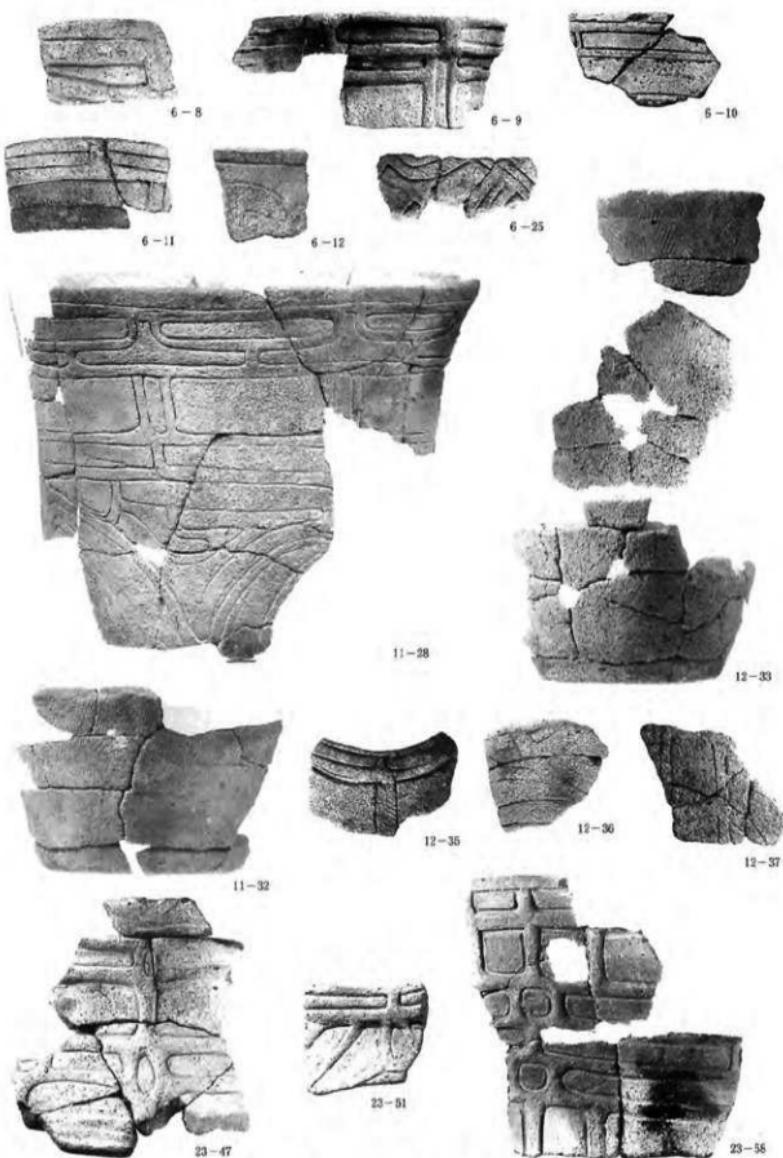


写真7 山下遺跡7（土器1）



21-38



21-40



21-39



22-43



22-44



22-43・44と同じ



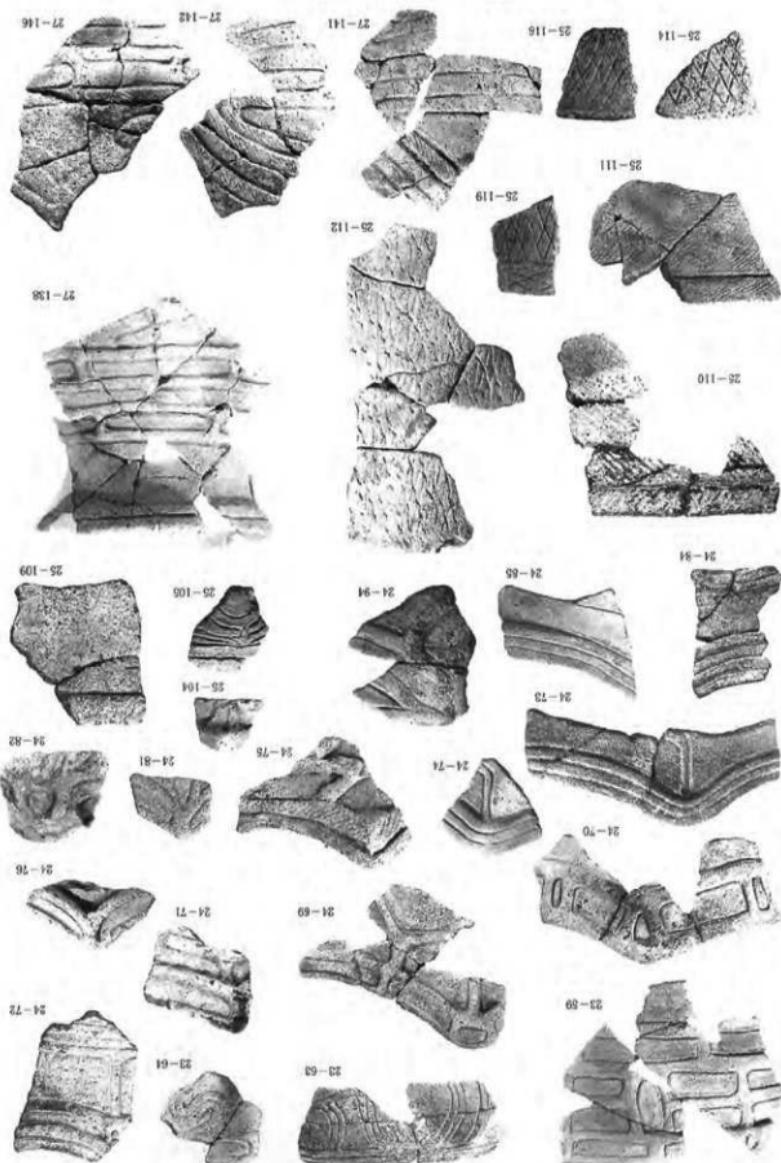
22-41



22-42

写真8 山下遺跡8(土器2)

牙具9 山下遺跡9 (工具3)



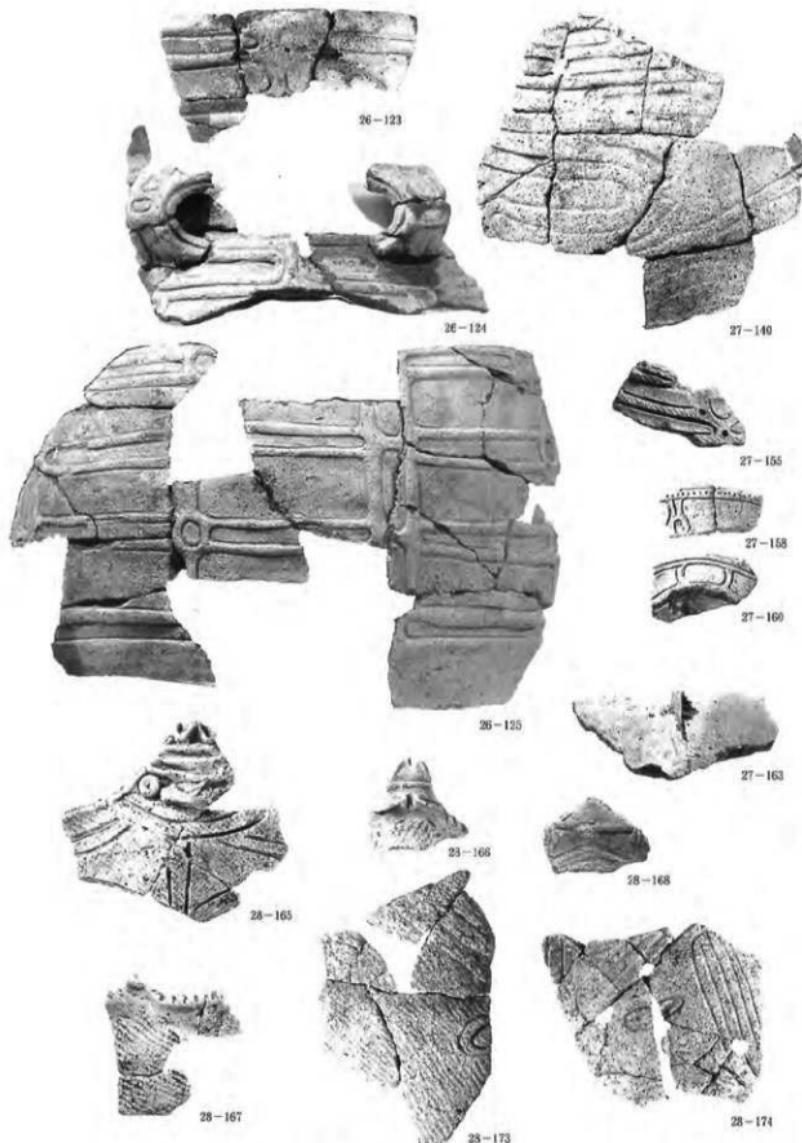
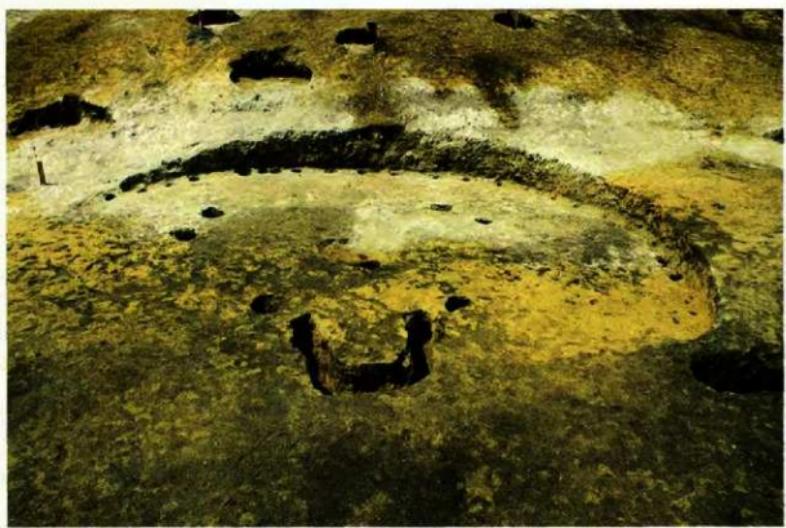


写真10 山下遺跡10（遺跡4）



米山(2)遺跡A区近景（南西から）



同上 第1号住居跡1（南から）

写真11 米山(2)遺跡（A区）



A区近景（南西から）



A区近景（南西から）



A区近景（北東から）

写真12 米山(2)遺跡2（A区）



第1号住居跡（西から）



第1号住居跡（南から）

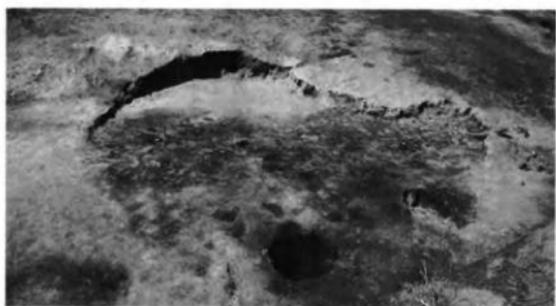


第1号住居跡 北東壁付近壁柱穴（西から）



第1号住居跡 出入口施設完掘状況（南から）

写真13 米山(2)遺跡3(A区)



第2号住居跡（南から）



第3号住居跡（西から）



同上（南から）



第3号住居跡 倒立設置土器（南から）  
(図39-9、図40-10)

写真14 米山(2)遺跡4(A区)



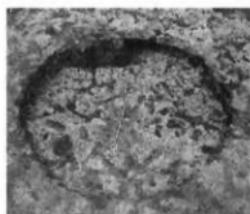
第4号住居跡（西から）



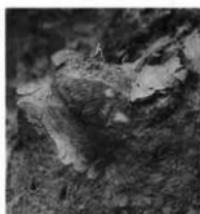
第4号住居跡（南から）



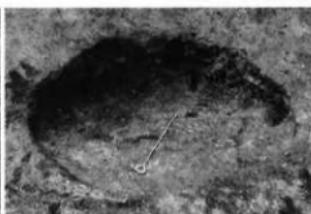
第4号住居跡 出入口施設完報状況（南から）



第1号土坑（南から）



同 左 土器出土状況

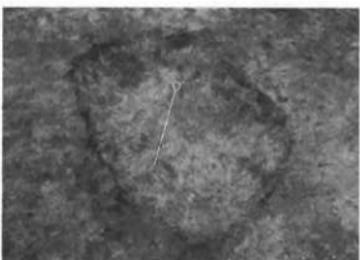


第2号土坑（南から）

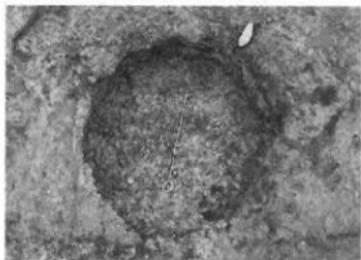
写真15 米山(2)遺跡5 (A区)



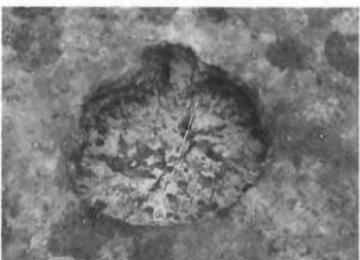
第3号土坑（西から）



第4号土坑（北から）



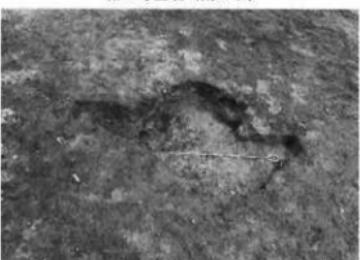
第5号土坑（南から）



第6号土坑（南から）



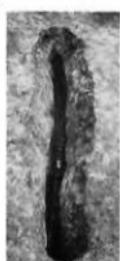
第8号土坑（南から）



第9号土坑（西から）



第10号土坑（東から）



第2号清状土坑(西から)



第1号清状土坑（北西から）

写真16 米山(2)遺跡 6 (A区)



B区作業状況



縄文時代晚期実形壺出土状況(図50-193)



第5号住居跡(南東から)



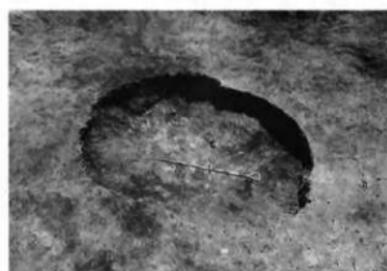
同左(南東から)



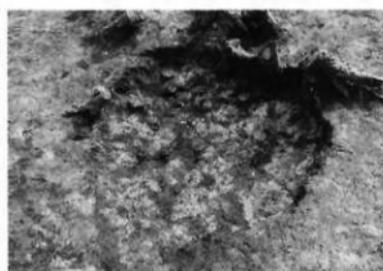
同上 石圓炉



同上 遺物出土状況(図45-14)



第12号土坑(西から)



第11号土坑(東から)

写真17 米山遺跡7(B区)

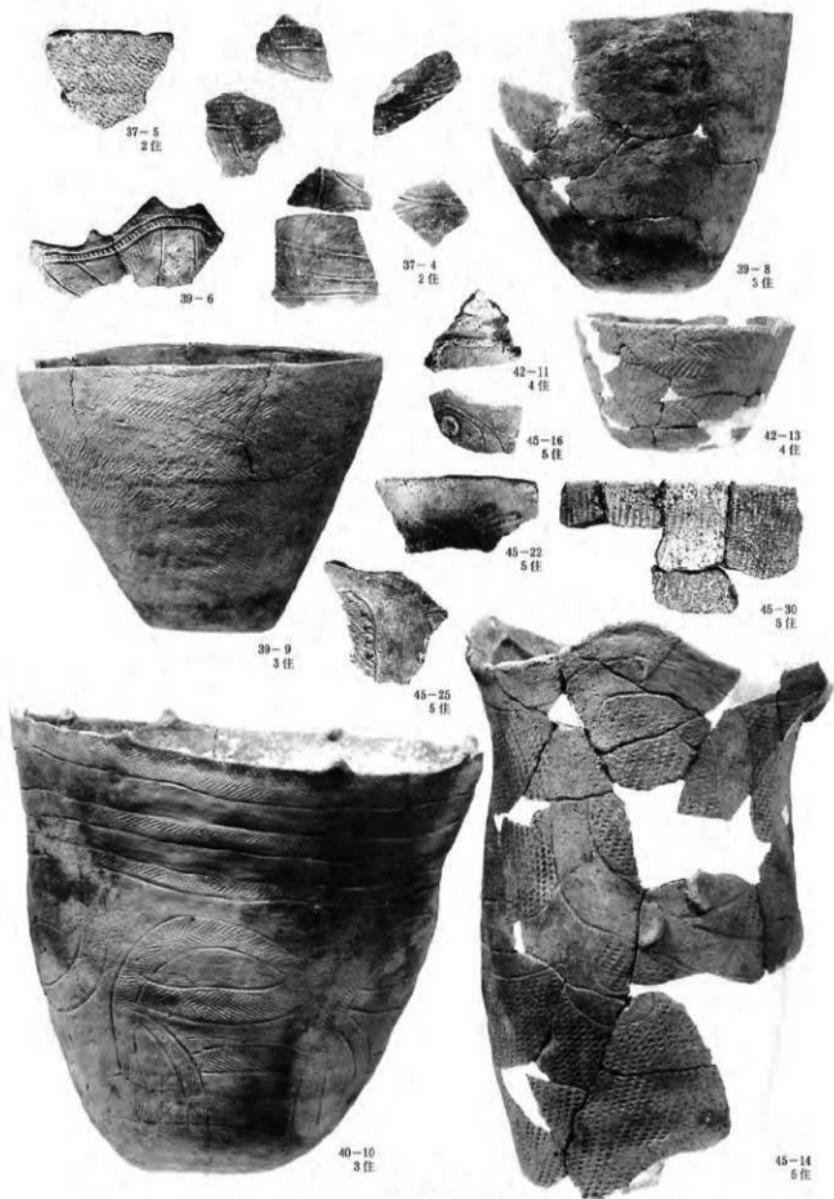


写真18 米山(2)遺跡8 (土器1)

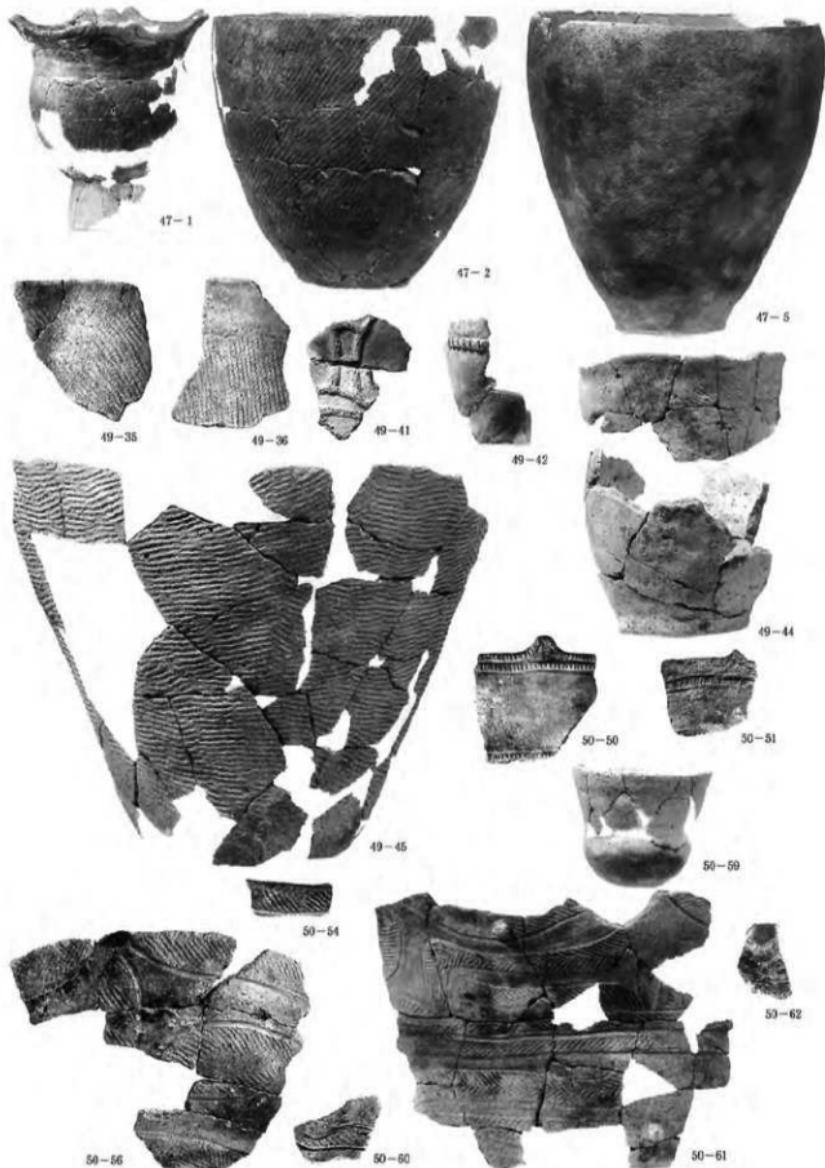


写真19 米山(2)遺跡9(土器2)

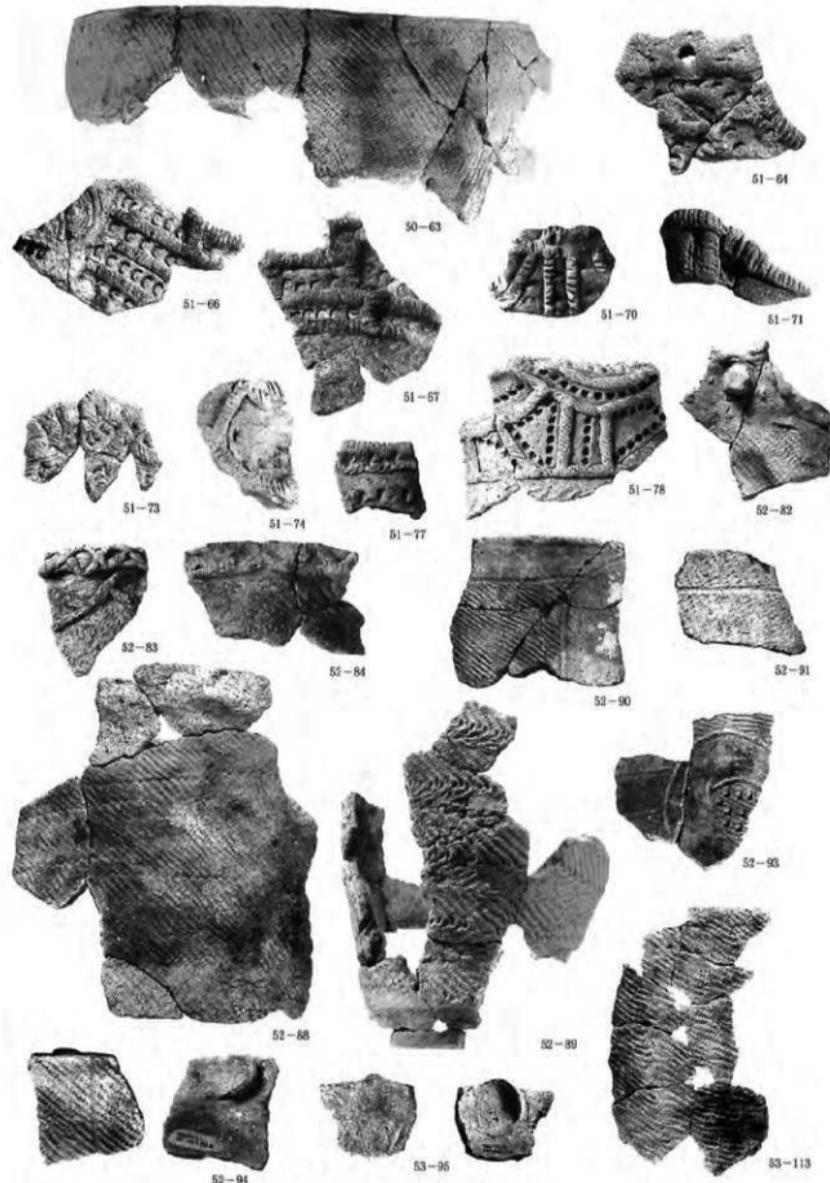


写真20 米山(2)遺跡10 (土器 3 )

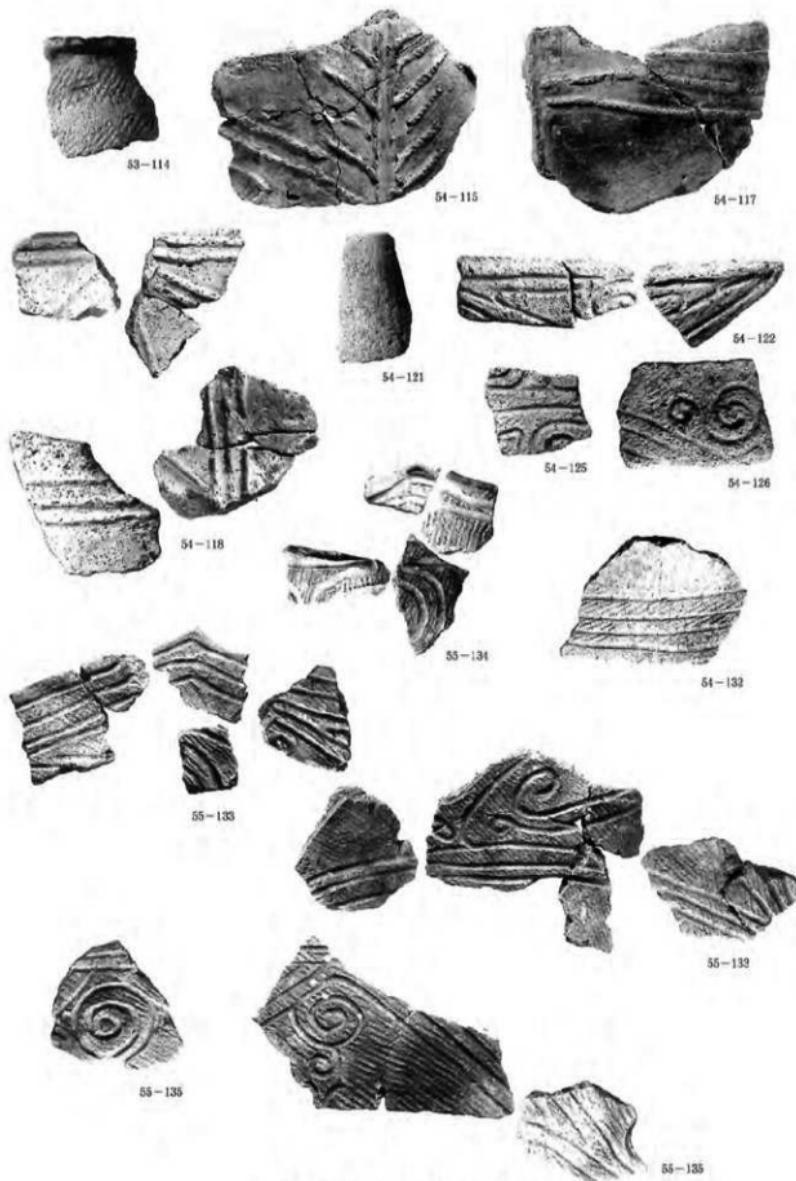


写真21 米山(2)遺跡11(土器4)

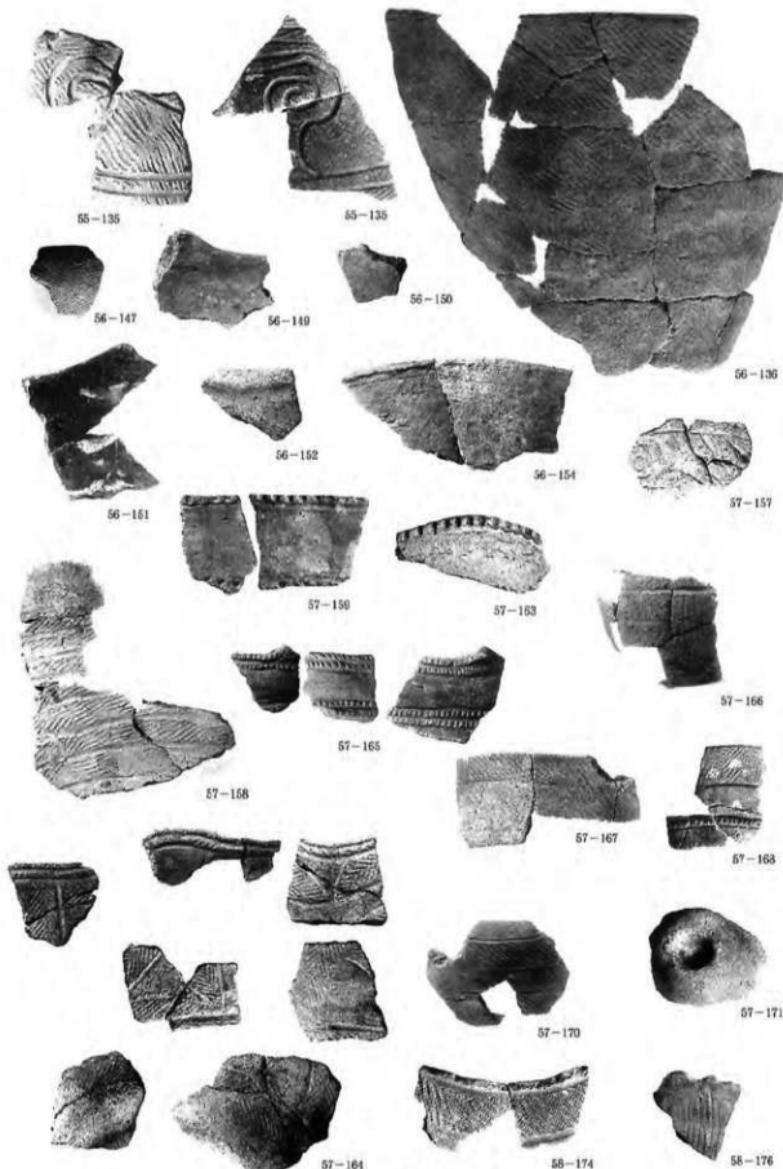


写真22 米山(2)遺跡12 (土器 5 )

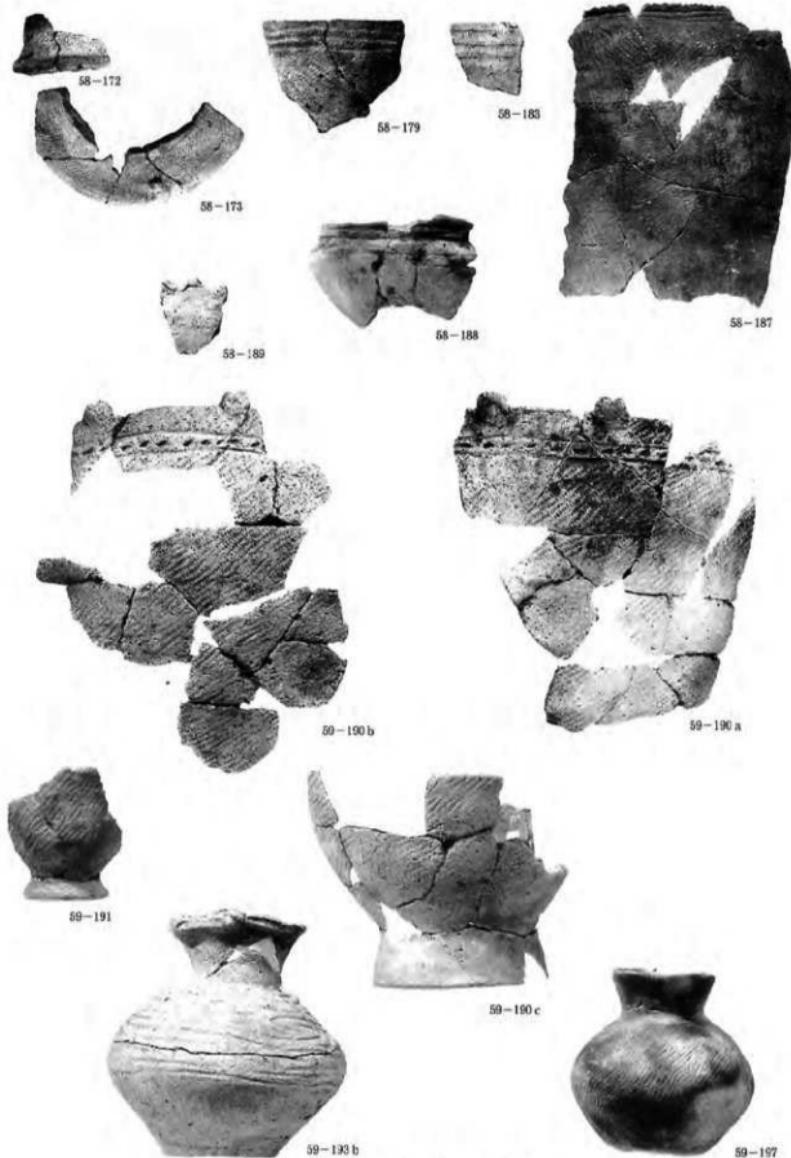


写真23 米山(2)遺跡13(土器 6)

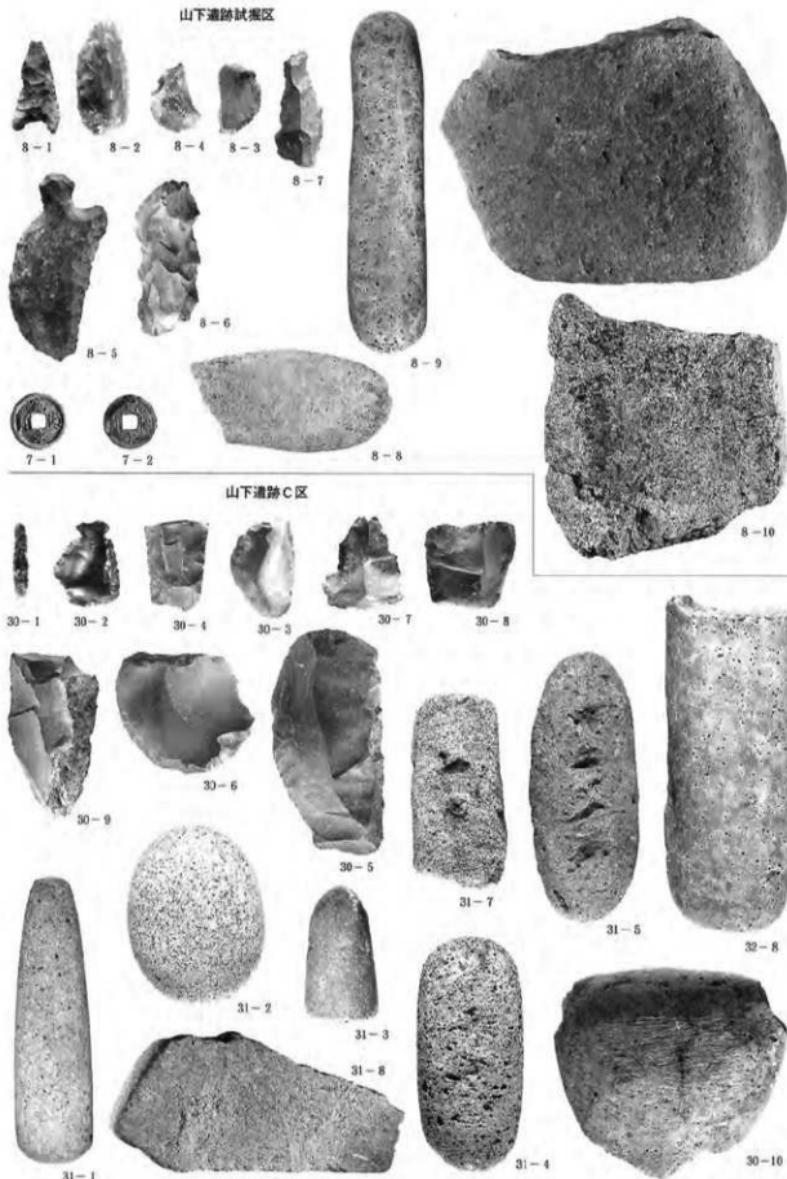


写真24 石器1（山下遺跡）

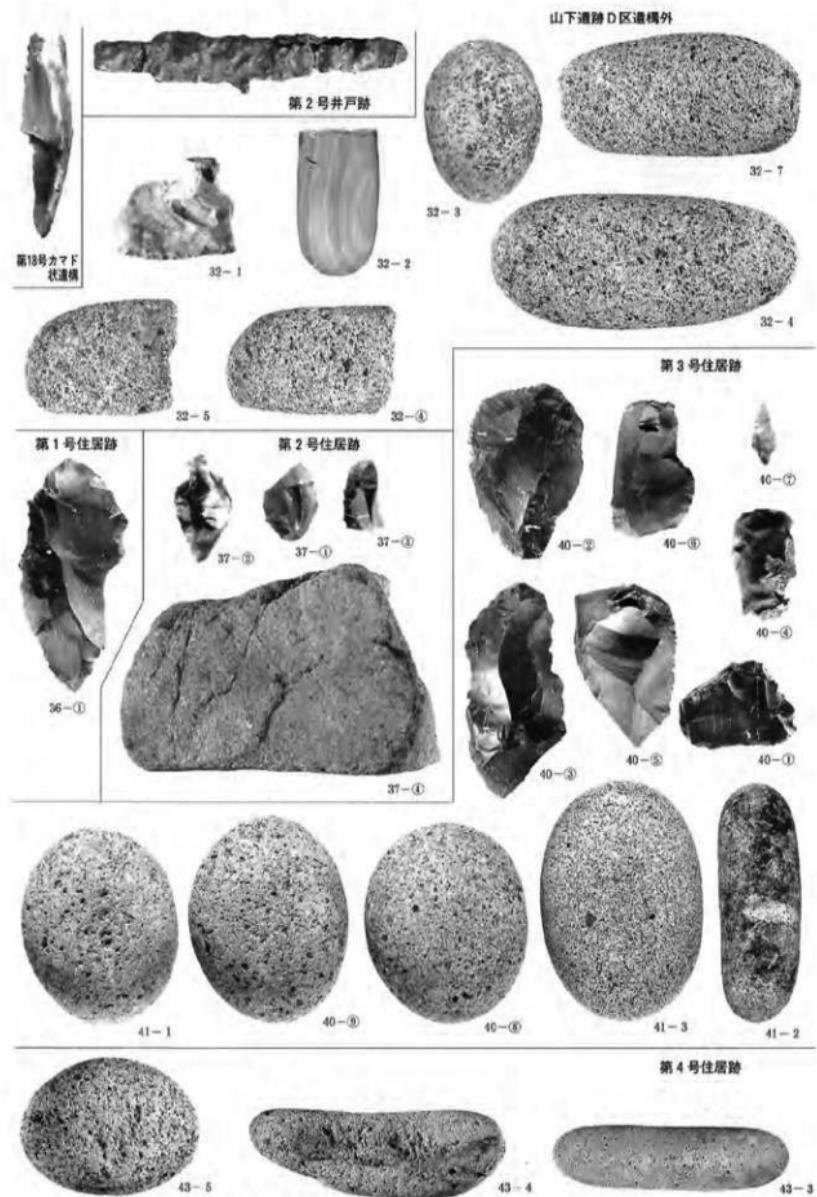


写真25 石器2 (山下遺跡D区、米山(2)遺跡)

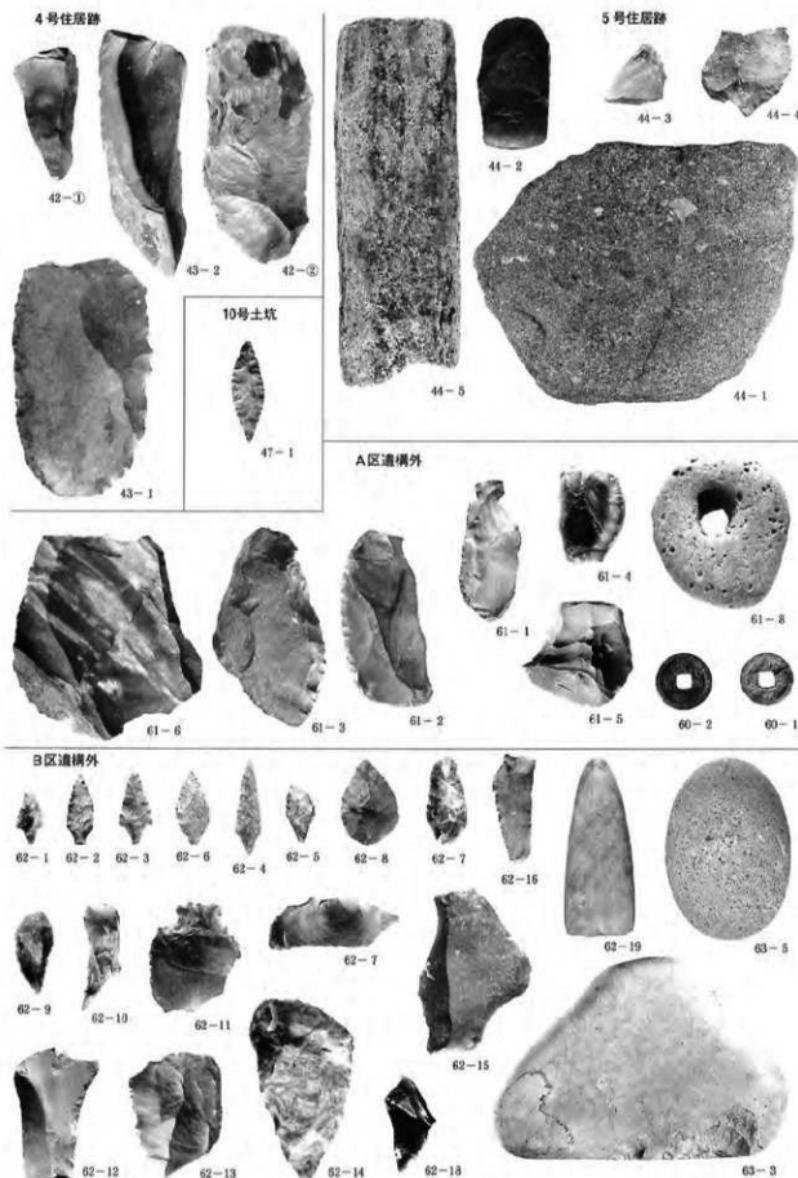


写真26 石器3（米山(2)遺跡）

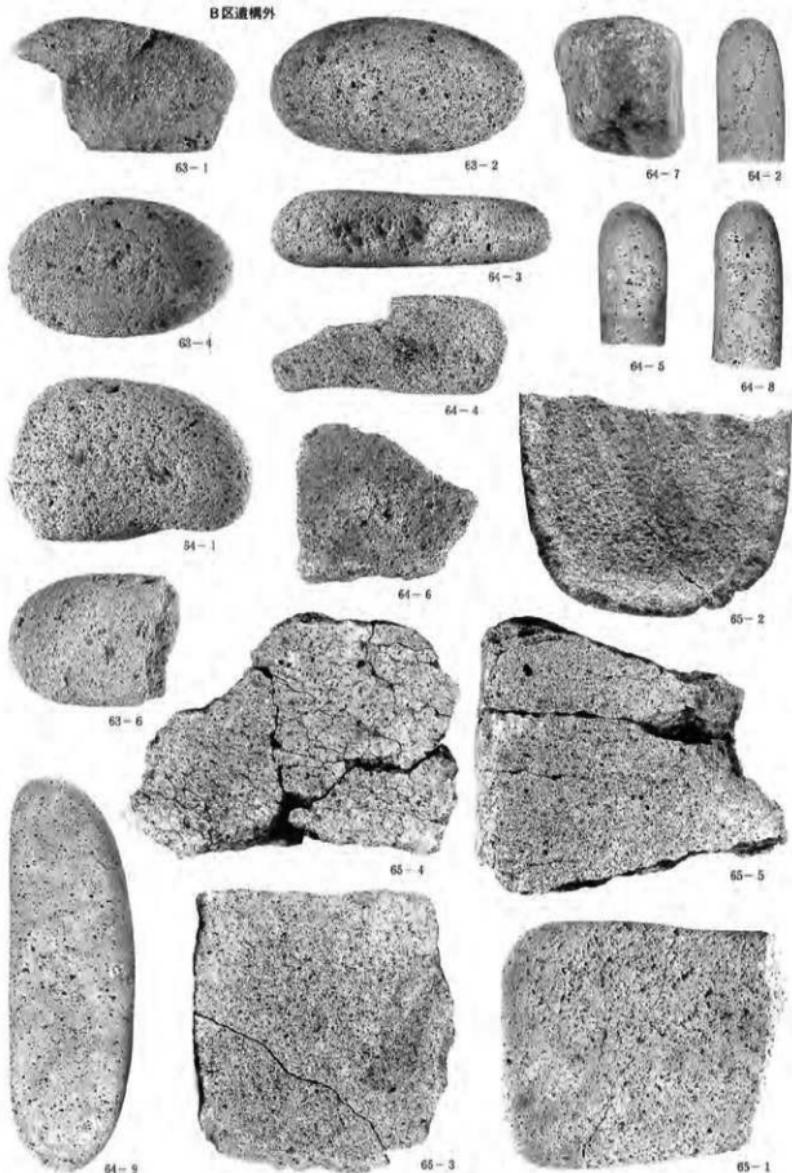


写真27 石器4（米山(2)遺跡）

## 報告書抄録

書名	山下遺跡II・米山(2)遺跡							
副書名	青森県新総合運動公園建設事業に伴う宮田地区埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第274集							
著者名	畠山昇・永嶋豊							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL017-788-5701							
発行年月日	西暦1998年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山下遺跡	青森県青森市 大字宮田字山下108・109外	02-201	01-277	40° 50° 3°	140° 50° 50°	19980423 19980731	試掘調査 対象面積 35,000m <sup>2</sup> 発掘調査 4,100m <sup>2</sup>	青森県新総合運動 公園建設事業に伴 う発掘調査
米山(2) 遺跡	青森県青森市 大字宮田字米山130外	02-201	01-276	40° 50° 24°	140° 51° 6°	19980423 19980731	発掘調査 1,800m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山下遺跡 試掘調査	集落跡?		カマド状遺構 土坑 溝跡 小ピット群	15基 2基 1条 1箇所	繩文時代前期・中期 ・後期の土器・石器 古銭(寛永通宝)	北東区域の約9,000m <sup>2</sup> を米山(2)遺跡に編入		
発掘調査	祭祀跡 (墓域?)	繩文時代	土器埋設遺構 上坑 土坑	1基 2基 7基	繩文時代中期・後期 の土器・石器・石製品			
	集落跡? (中世以降)		カマド状遺構 井戸跡 溝跡 小ピット群	19基 6基 2条 2箇所	珠洲焼	第5号井戸跡は <sup>14</sup> C年代測定では1040±60年 との結果がでている。		
米山(2) 遺跡	集落跡	繩文時代 (中期・後期) 弥生時代	住居跡 土坑 溝状土坑	5軒 12基 2基	繩文時代中期・後期 ・晩期の土器・石器 古銭(寛永通宝)	A区は繩文時代後期 後葉が主体。		

青森県埋蔵文化財調査報告書第274集

## 山下遺跡Ⅱ・米山(2)遺跡

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う青森市宮田地区の遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成12年 3月30日  
発 行 青森県教育委員会  
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1  
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 不二印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦一丁目10番16号  
電話 017-741-5439  
FAX 017-741-2541





活彩あおもり  
—輝くあおもり新時代—